

大分県文化財調査報告書 第一四八輯

大分の中世城館

第一集 文献史料編 1

大分県教育委員会

大分の中世城館

第一集 文献史料編 1

序 文

大分県は、古代以来の豊後国全域と豊前国の一部を含む地域によって成り立っております。この地に大友氏が守護職を得て以来、中世は大友氏の時代でありました。そこには有名な戦国代表大友宗麟が生まれ、九州六カ国に覇をとるほどに豊後は重要な地となりました。

現在、大分市内では大規模な開発事業により、はからずも大友氏の館跡やその周辺に展開した町の跡が、その生活遺物と共に再びその姿を現しつつあります。整備された道路、大規模な堀、礎石立ちの建物跡など、中世の府内の町が整備された都市であったことが確認されています。

しかし、そこで出土する貿易陶器などに示される南蛮交流都市としての華やかな一面とは裏腹に、一方では戦国時代の末期には府内の町が焦土と化すなど、中世という時代は戦乱の緊迫感に覆われた時代でもあったのです。

そのことを一番よく示すのが山城であります。しかし、それらの実態は必ずしも明らかではありませんでした。そこで、大分県教育委員会では、その保護と活用を図るための基礎資料づくりを行うこととし、平成七年度から九ヶ年計画で文化庁より国庫補助を得、県下五百六十箇所余の城館の調査を行ってまいりました。

本年度は、大分県の城館が文字として記された古文書に焦点を当て、集成を行っております。翌年度以降の刊行予定の現地調査資料と併せてご覧いただければ、より一層中世城館の姿が明確になってくるものと確信しております。

最後になりましたが、文書の集成はもとより、長い間の厳しい現地調査を支えてくださり、ようやく報告書の第一巻が刊行することができますのも、関係各位のご協力のたまものと感謝しております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成十四年三月三十一日

大分県教育委員会教育長

石川 公一

凡 例

1. この報告書は、国庫補助事業「大分県中世城館等発掘調査事業」の報告書第一集文献史料編1である。ここには大分県内の中世城館に関わるものと見られる古文書・記録類を取載したが、一部は報告書第二集文献史料編2に掲載する。

2. 本報告書の構成は、凡例・目次・古文書部・記録部からなるが、大友家文書録本文や同時代の日記等は、便宜上、古文書部に取載した。また、索引については、報告書第二集文献史料編2に一括して掲載する。

3. 史料の編年については、『増補訂正編年大友史料』を基本とし、『豊後国荘園公領史料集成』『大分県史料』で訂正が加えられたものについては、これに依拠した。

4. 史料の表記は以下の基準によっている。

(1) 文字は原則として常用漢字に改めたが、人名等で編年の参考となる場合は、常用漢字以外も使用した。

(2) 合字については分(より)はそのままとした。

(3) 本文には、適宜読点・並列点を付けた。

(4) 異筆・追筆・増裏書・裏書は「 」で表し、右肩に(異筆)・(追筆)・(増裏書)・(裏書)と傍注した。

(5) 虫損等で文字が判読できない場合は、 あるいは で表した。

(6) 本文のなかで、編者が用いた記号のうち、() は誤記・誤脱等に対する編者の案、(マ、) は文意が通じないものに付した。また、○は編者の説明にかかるとものである。

5. 本報告書の作成にあたっては、豊田寛三(大分大学教授)・飯沼賢司(別府大学教授)・吉木明弘・高陽一(以上別府大学大学院生)・野村智史・池田寛忠・宮崎出加(以上別府大学学生)の諸氏の御協力を得た。

6. 本報告書の編集は、三重野誠(大分県立先哲史料館)・櫻井成昭(大分県立歴史博物館)が行った。

目次

古文書部

一	建武三年	三月 三日	足利尊氏軍勢催促状与	一八	建武三年	七月 十六日	大神(都甲)惟世軍忠状
二	建武三年	三月 十三日	足利尊氏軍勢催促状	一九	建武三年	七月 十六日	大神(都甲)惟元軍忠状
三	建武三年	三月 十五日	足利直義軍勢催促状	二〇	(建武)三年	七月 廿七日	源(戶次)朝尚書下
四	建武三年	三月 十五日	足利高氏軍勢催促状	二一	建武三年	七月 廿八日	植田寂圓軍忠状
五	建武三年	三月 十六日	足利尊氏軍勢催促状	二二	建武三年	七月 廿九日	植田寂圓軍忠状
六	建武三年	三月 十七日	足利尊氏軍勢催促状	二三	延元 元年	八月 十五日	野上道圓軍忠状
七	建武三年	三月 十七日	足利尊氏軍勢催促状	二四	建武二年	九月 日	野上資賴代資氏軍忠状与
八	建武三年	三月 十七日	足利尊氏軍勢催促状	二五	建武二年	十月 十四日	清原(野上)資賴軍忠状
九	建武三年	三月 廿日	足利尊氏軍勢催促状	二六	建武三年	十一月 十日	深堀時廣軍忠状
一〇	建武三年	三月 廿一日	深堀明憲看到状案	二七	建武三年	十一月 廿日	深堀重通軍忠状
一一	建武三年	三月 廿一日	深堀時義看到状	二八	建武三年	十一月 日	野仲道棟軍忠状
一二	建武三年	三月 廿一日	深堀水守看到状	二九	建武三年	十一月 日	野形諸利軍忠状
一三	建武三年	三月 廿四日	津守(平林)親澄看到状案	三〇	建武三年	十一月 廿八日	藤原(近地)景能軍忠状
一四	建武三年	三月 廿四日	津守(平林)氏親看到状案	三一	建武三年	十二月 日	大神(都甲)惟世軍忠状
一五	建武三年	三月 廿四日	津守(平林)行本看到状案	三二	建武三年	十二月 廿日	清原(野上)顕直軍忠状
一六	建武三年	三月 廿四日	大神(都甲)惟世看到状	三三	建武四年	二月 日	深堀時廣軍忠状案
一七	建武三年	三月 廿七日	戶次頼重軍忠状案	三四	建武四年	二月 日	志賀頼房軍忠状
一八	建武三年	三月 日	足利直義軍勢催促状案	三五	建武四年	二月 日	志賀頼房軍忠状
一九	建武三年	四月 十三日	足利直義軍勢催促状与	三六	建武四年	二月 日	植田寂圓請文案
二〇	建武三年	四月 十三日	清原(親坦)政明看到状	三七	建武五年	二月 廿八日	質求成阿請文案
二一	建武三年	四月 十五日	津守(平林)行本軍忠状案	三八	建武五年	三月 廿八日	植田有快請文案
二二	建武三年	四月 十五日	大神(都甲)惟元看到状	三九	康永 元年	九月 日	志賀頼房軍忠状案
二三	建武三年	四月 廿五日	深堀明憲軍忠状	四〇	貞和 四年	二月 廿三日	八坂道圓請文案
二四	建武三年	四月 日	深堀時義軍忠状	四一	正平 四年	八月 日	深江種重軍忠状与
二五	建武三年	四月 日	深堀時義軍忠状	四二	正平 四年	八月 日	成徳種定軍忠状
二六	建武三年	六月 八日	植田寂圓軍忠状	四三	正平 六年	十二月 廿六日	上井種世軍忠状
二七	建武三年	六月 日	植田寂圓軍忠状	四四	正平 七年	正月 日	河依(久恒)範房軍忠状案
				四五	正平 七年	正月 日	一色道敏書状
				四六	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				四七	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				四八	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				四九	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				五〇	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				五一	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				五二	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				五三	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				五四	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				五五	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				五六	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				五七	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				五八	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				五九	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				六〇	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				六一	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				六二	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				六三	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				六四	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				六五	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				六六	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				六七	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				六八	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				六九	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				七〇	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				七一	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				七二	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				七三	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				七四	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				七五	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				七六	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				七七	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				七八	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				七九	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				八〇	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				八一	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				八二	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				八三	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				八四	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				八五	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				八六	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				八七	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				八八	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				八九	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				九〇	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				九一	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				九二	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				九三	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				九四	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				九五	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				九六	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				九七	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				九八	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				九九	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状
				一〇〇	正平 七年	正月 日	都甲惟元軍忠状

五九	正平 十年 十一月 日	於保胤宗軍忠狀	九〇	建徳 二年辛亥霜月 十日	近地玄心讓狀
六〇	正平 十年 十一月 日	橋蔭摩公忠軍忠狀	九一	応安 四年 十一月 十四日	今川義範軍勢催促狀案
六一	正平 十年 十二月 日	木麗行実軍忠狀	九二	応安 四年 十月 晦日	室町將軍家御教書案
六二	正和 五年 三月 日	田原貞忠賞宛行狀	九三	応安 四年 十月 晦日	室町將軍家御教書号
六三	文和 十一年 六月 日	忠貞准澄申状案	九四	応安 五年 正月 十三日	室町將軍家御教書
六四	正平十一年 十一月 十九日	大友氏時書下	九五	(応安 五年) 正月 廿日	貞直書狀
六五		大友家文書録綱文	九六	(応安 五年) 九月 十四日	吉弘一雲書狀
六六	正平十四年 五月 日	水尾行実軍忠狀	九七		大友家文書録綱文
六七	正平十四年 六月 日	草野水幸軍忠狀	九八	(応安 七年) 九月 廿二日	今川了俊感狀写
六八	延文 四年 十月 日	藤原(忠實)氏房軍忠狀	九九	(応安 七年) 十月 日	豊後同花所合戦手負泮文
六九		大友氏奈津造状案	一〇〇	応安 八年 二月 日	田原氏能軍忠狀
七〇	(貞治 元年)	大友家文書録綱文	一〇一	応安 八年 二月 日	田原氏能軍忠狀
七一		大友家文書録綱文	一〇二	卯月 五日	大友氏謙感狀案
七二	(康安 二年)	大友家文書録綱文	一〇三	水和 二年 二月 五日	今川了俊感狀
七三	(康安 二年)	斯波氏経書狀案	一〇四	水和 二年 三月 廿一日	室町將軍家御教書
七四	貞治 二年 卯月 日	志賀頼房軍忠狀案	一〇五	水和 二年 二月 廿一日	室町將軍家御教書
七五	貞治 二年 五月 二日	島津脚久訴陳狀案	一〇六	永徳 二年 七月 十日	今川了俊感狀
七六		大友家文書録綱文	一〇七	(元中 八年) 十一月 九日	五條頼治軍忠申状案
七七		征西將軍宮懐良親王旨書案	一〇八	二月 廿四日	今川了俊書狀
七八	正平十八年 九月 九日	斯波氏経書下	一〇九	三月 四日	今川了俊書狀
七九	貞治 三年 正月 十日	直尚書狀	一一〇	応永 三年 九月 二日	大内隆弘奉書案
八〇		大友氏時感狀	一一一	七月 十二日	大友親世書狀
八一	卯月 八日	頼直書狀	一一二	八月 五日	済川満朝書狀
八二	貞治 四年 十月 日	近地玄心旨安案	一一三	八月 廿二日	頼宗知行宛行状案
八三	おうあふ二年 七月 十二日	藤原(山原)氏能讓狀	一一四	応永十九年巳十一月 十五日	六郷満山難山家徒等申状案
八四	応安 三年庚戌七月 廿五日	近地玄心讓狀	一一五	(永享 三年) 六月 八日	満濟准后日記
八五	卯月 八日	田原氏奈因氏能請	一一六	十一月 廿五日	大内持世書狀
八六	卯月 八日	今川義範書狀案	一一七	(永享 七年) 七月 廿五日	石岡御記
八七	卯月 八日	今川義範書狀案	一一八	(永享 七年) 七月 廿七日	飯塚為棟、飯尾貞連選若奉書
八八	卯月 八日	室町將軍家御教書案	一一九	(永享 七年) 十二月 七日	大友親綱書狀案
八九	卯月 八日		一二〇	(永享 八年) 二月 九日	大内持世書狀案

一一一	(永享 八年)	五月 三日	大友親重知行預々状
一一二	永享 八年	五月 四日	室町將軍家御教書与
一一三	永享 八年	五月 四日	室町將軍家御教書与
一一四	(永享 八年) 閏五月 十四日		大友親綱書状案
一一五	(永享 八年) 正月 廿一日		弘忠書状
一一六	六月 九日		大友家文書録綱文
一一七	永享 八年	六月 九日	姫侍着到人名石
一一八	永享 八年	六月 廿五日	看聞御記
一一九	永享 八年	七月 五日	室町將軍家御教書
一二〇	(永享 八年) 七月 五日		足利義教御内書与
一二一	永享 八年	七月 五日	室町將軍家御教書
一二二	永享 八年	七月 五日	室町將軍家御教書
一二三	(永享 八年) 七月 八日		細川持之應状与
一二四	(永享 九年) 正月 廿三日		大友親重應状
一二五	(寛正 六年) 二月 三日		看聞御記
一二六			菊池乃邦書状
一二七			大友家文書録綱文
一二八	文明 三	三月 十七日	大内家奉行入道署奉書案
一二九	文明 三	三月 十七日	杉重隆書状与
一三〇	(文明 七年) 三月 廿七日		志賀親家申状
一三一	(文明 十年) 十二月 八日		少貳政(資書)状案
一三二	明応 四年乙卯八月		田原氏歴代勲功次第注文
一三三			大友親治書状与
一三四			大友親治應状与
一三五	明応 七年戊申八月 十五日		大友親治太刀等寄進状案
一三六			大友家文書録綱文
一三七	(明応 七年) 八月 十三日		大友親治應状
一三八	(明応 七年) 十月 十九日		大友親治書状
一三九	(明応 七年) 十一月 十八日		大友親治應状
一四〇	明応 八年	正月 廿五日	大内義興應状案
一四一			大内義興應状案
一四二	(明応 八年) 三月 廿四日		大内高弘書状案
一五二	(明応 八年)	八月 一日	大友親治書状案
一五三			三田升良武書状
一五四			大友家文書録綱文
一五五			大友親治應状
一五六	卯月 四日		大友親治知行預々状案
一五七	文龜 元年 八月 八日		大内義興應状案
一五八	文龜 元年 八月 十三日		大内義興下文案
一五九	文龜 元年 五月 廿三日		中尾道厚書状
一六〇	永正 元年 七月 十日		佐田泰景軍忠状
一六一	(永正 二年) 八月 十日		大友親長應状
一六二	(永正 十四年) 五月 廿五日		健是書状案
一六三	(永正 十四年) 二月 廿八日		大友家文書録綱文
一六四	(永正 十四年) 二月 廿八日		大友親安應状
一六五	(永正 十四年) 二月 廿八日		大友親安應状
一六六	(永正 十四年) 二月 廿九日		大友親安應状
一六七	(永正 十四年) 二月 廿九日		大友親安應状
一六八	(永正 十四年) 二月 廿九日		大友親安應状
一六九	(永正 十四年) 二月 廿九日		大友親安應状
一七〇	(永正 十四年) 二月 廿九日		大友親安應状
一七一	(永正 十四年) 二月 廿九日		大友親安應状
一七二	(永正 十四年) 二月 廿九日		大友親安應状
一七三	(永正 十四年) 二月 廿九日		大友親安應状
一七四	(永正 十四年) 二月 廿九日		大友親安應状
一七五	(永正 十四年) 二月 廿九日		大友親安應状
一七六	(永正 十四年) 三月 二日		大友親安應状与
一七七	(永正 十四年) 三月 二日		大友親安應状与
一七八	(永正 十五年) 二月 廿九日		大友親安應状
一七九	(永正 十六年) 正月 十九日		大友親安應状
一八〇	(永正 十六年) 正月 廿五日		大友親安應状
一八一	(永正 十六年) 正月 廿七日		大友親安應状
一八二	(永正 十六年) 正月 廿八日		大友親安應状

一八三	(永正十六年)	二月 六日	大友親教書状	二四四	(天文 元年)	十二月 十八日	大友義隆感状案
一八四	(永正十六年)	二月 六日	招然書状	二四五	(天文 元年)	十二月 十八日	八田親康書状案
一八五	(永正十六年)	二月 七日	大友親教感状	二四六	(天文 元年)	十二月 十八日	大友家加判來連誓書
一八六	(永正十六年)	二月 廿八日	大友親教感状	二四七	(天文 元年)	十二月 十九日	陶通親書状
一八七	(永正十六年)	二月 廿八日	大友親教感状	二四八	(天文 元年)	十二月 廿日	大友義隆感状案
一八八	大永二年	三月 日	宇佐宮作事方条々御法度授書案	二四九	(天文 元年)	十二月 廿日	大友義隆感状
一八九		十一月 十二日	大友親教感状	二五〇	(天文 元年)	十二月 廿日	大友義隆感状案
一九〇	(大永三年)	正月 廿一日	大友親教感状	二五一	(天文 元年)	十二月 廿一日	大友義隆感状案
一九一		七月 六日	大友親教感状	二五二	(天文 元年)	十二月 廿一日	大友義隆感状案
一九二		七月 六日	大友親教感状	二五三	(天文 元年)	十二月 廿一日	大友義隆感状案
一九三		七月 七日	大友親教感状	二五四	(天文 元年)	十二月 廿一日	大友義隆感状案
一九四	(大永七年)	十一月 十三日	大友義隆感状	二五五	(天文 元年)	十二月 廿二日	大友義隆感状案
一九五	(大永七年)	十一月 十六日	大友義隆感状	二五六	(天文 元年)	十二月 廿二日	大友義隆感状案
一九六	(大永七年)	十一月 二十五日	大友家文青録綱文	二五七	(天文 元年)	十二月 廿二日	大友義隆感状
一九七	(享祿二年)		大友家文青録綱文	二五八	(天文 元年)	十二月 廿五日	大友義隆感状
一九八	享祿第三	十二月 六日	大友義隆感状	二五九	(天文 元年)	十二月 廿六日	大友義隆感状案
一九九	(天文 元年)	去辰八月	大友家文青録綱文	二六〇	(天文 元年)	十二月 廿六日	大友義隆感状案
二〇〇	(天文 元年)	十月 九日	大友家文青録綱文	二六一	(天文 元年)	十二月 廿六日	大友義隆感状案
二〇一	(天文 元年)	十一月 二日	大友家文書録綱文	二六二	(天文 元年)	十二月 廿六日	大友義隆感状案
二〇二	(天文 元年)	十一月 一日	大内義隆軍勢催促状	二六三	(天文 元年)	十二月 十三日	大友義隆感状案
二〇三	(天文 元年)	十一月 二日	大友義隆感状	二六四	(天文 元年)	十二月 十三日	大友義隆感状
二〇四	(天文 元年)	十一月 二日	大友義隆感状	二六五	(天文 元年)	十二月 六日	大友義隆感状
二〇五	(天文 元年)	十一月 二日	大友義隆感状	二六六	(天文 元年)	二月 七日	田原親直感状案
二〇六	(天文 元年)	十一月 八日	吉岡長州率書案	二六七	(天文 元年)	三月 廿九日	大友義隆感状案
二〇七	(天文 元年)	十一月 十二日	赤宮代山崎后次軍出感状案	二六八	(天文 元年)	三月 廿九日	大友義隆感状案
二〇八	(天文 元年)	十一月 十四日	佐田朝雲感状	二六九	(天文 元年)	三月 廿九日	大友義隆感状案
二〇九	(天文 元年)	十一月 十四日	佐田朝雲合戦御注文	二七〇	(天文 元年)	三月 廿九日	大友義隆感状案
二一〇	(天文 元年)	十一月 十五日	佐田石馬允合戦御注文	二七一	(天文 元年)	三月 廿九日	大友義隆感状案
二一一	(天文 元年)	十一月 十五日	大友義隆感状	二七二	(天文 元年)	三月 廿九日	大友義隆感状案
二一二	(天文 元年)	十一月 十八日	大友義隆感状	二七三	(天文 元年)	三月 廿九日	大友義隆感状案
二一三	(天文 元年)	十一月 十八日	大友義隆感状案	二七四	(天文 元年)	三月 廿九日	大友義隆感状案

二四九	(天文二年)	卯月 二日	大友義隆感状	二七六	(天文二年)	四月 廿日	大友義隆感状
二四六	(天文二年)	卯月 二日	大友義隆感状	二七七	(天文三年)	四月 廿日	大友義隆感状
二四七	(天文二年)	卯月 二日	大友義隆感状	二七八	(天文三年)	四月 廿日	大友義隆感状
二四八	(天文二年)	卯月 二日	大友義隆感状	二七九	(天文三年)	四月 廿日	大友義隆感状
二四九	(天文二年)	卯月 二日	大友義隆感状	二八〇	(天文三年)	四月 廿一日	大友義隆感状
二五〇	(天文二年)	卯月 十二日	大友義隆感状	二八一	(天文三年)	四月 廿一日	大友義隆感状
二五一	(天文二年)	卯月 十六日	大友義隆感状	二八二	(天文三年)	四月 廿一日	大友義隆感状
二五二	(天文二年)	七月 十三日	杉原重吉状	二八三	(天文三年)	四月 廿一日	大友義隆感状
二五三	(天文二年)	十一月 廿八日	大友家加判來妻封条今事書	二八四	(天文二年)	四月 廿一日	大友よし鑑感状
二五四	(天文二年)	十一月 一日	大友義隆感状	二八五	(天文二年)	四月 廿一日	大友よし鑑感状
二五五	(天文二年)	十二月 八日	大友義隆感状	二八六	(天文三年)	四月 廿一日	大友義隆感状
二五六	(天文二年)	十二月 八日	大友義隆感状	二八七	(天文三年)	四月 廿一日	大友義隆感状
二五七	(天文三年)	二月 廿三日	田北親興再状	二八八	(天文三年)	四月 廿一日	大友義隆感状
二五八	(天文三年)	二月 廿三日	大内家奉行人連寄奉書	二八九	(天文三年)	四月 廿一日	大友よし鑑感状
二五九	(天文三年)	二月 廿九日	大友義隆感状	二九〇	(天文三年)	六月 三日	粟原重吉・庄田重満連寄奉書
二六〇	(天文三年)	二月 卅日	大友義隆感状	二九一	(天文二年)	六月 十四日	仁保隆綱再状案
二六一	(天文三年)	二月 卅日	大友義隆感状	二九二	(天文三年)	七月 十二日	大内義隆感状
二六二	(天文三年)	二月 卅日	大友義隆感状	二九三	(天文三年)	七月 十九日	杉重信再状
二六三	(天文三年)	二月 卅日	大友義隆感状	二九四	(天文三年)	七月 廿八日	大友義隆感状
二六四	(天文三年)	三月 十七日	田原親正感状案	二九五	(天文四年)	八月 五日	大友義隆感状
二六五	(天文三年)	三月 廿日	大友義隆感状	二九六	(天文四年)	八月 十三日	大内義隆補判下文案
二六六	(天文三年)	三月 廿日	大友義隆感状	二九七	(天文九年)	九月 三日	眞道敏再状
二六七	(天文三年)	三月 廿日	大友義隆感状	二九八	(天文十二年)	二月 十一日	大内家奉行人連寄奉書
二六八	(天文三年)	三月 廿日	大友義隆感状	二九九	(天文十二年)	二月 廿七日	石田興実奉書
二六九	(天文三年)	三月 廿日	大友義隆感状	三〇〇	(天文十四年)	十二月 廿日	大内家奉行人連寄奉書
二七〇	(天文三年)	三月 卅日	大友よし鑑感状	三〇一	(天文十六年)	壬七月 十七日	右田興実再状
二七一	(天文三年)	卯月 八日	大友義隆感状	三〇二	(天文十七年)	三月 廿一日	吉田親種・杉宗長連寄奉書
二七二	(天文三年)	卯月 十日	大友義隆感状	三〇三	(年未詳)	四月 十七日	大友義隆再状
二七三	(天文三年)	四月 十日	相良武任奉書	三〇四	(年未詳)	四月 十九日	大内家奉行人連寄奉書
二七四	(天文三年)	四月 十一日	大友義隆感状案	三〇五	(年未詳)	四月 廿四日	大内家奉行人連寄奉書
二七五	(天文三年)	四月 十七日	大内義隆感状	三〇六	(年未詳)	五月 十二日	萩原道昌今事書

三〇七	(年未詳)	八月 五日	某書狀写	三三八	(弘治三年)	七月 十一日	大友家文書録綱文
三〇八	(年未詳)	九月 七日	大友家加判衆連寄書狀案	三三九	弘治三年	七月 廿三日	大友義鎮感狀写
三〇九	(年未詳)	九月 廿一日	大内家奉行入連寄奉書	三四〇	弘治三年	七月 廿二日	田原親宏感狀
三一〇	(年未詳)	九月 廿一日	大友義鎮感狀写	三四一	(弘治三年)	七月 廿三日	田原親宏感狀案
三一〇	(年未詳)	十月 十九日	親榮・山下長就連寄書狀写	三四二	(弘治三年)	八月 廿三日	基乎日記
三一〇	(年未詳)	十月 廿五日	大友義鎮書狀写	三四三	弘治三年	八月 三日	田原親宏感狀
三一一	(年未詳)	十月 廿五日	右田興安書狀	三四四	弘治三年	八月 十三日	田原親宏感狀
三一二	(年未詳)	十一月 十五日	大内家奉行入連寄奉書案	三四五	(弘治四年)	五月 十六日	首座鑑秀・竹田津藤和連寄書狀
三一三	(年未詳)	十二月 四日	大友義鎮書狀	三四六	(弘治四年)	五月 十六日	大友家文書録綱文
三二六	(天文十九年)	二月 十九日	道中書狀	三四七	(永祿二年)	八月 七日	字佐宮一社中違寄申狀案
三二七	(天文十九年)	三月	大友家文書録綱文	三四八	(永祿二年)	八月 廿四日	田原親宏知行預行狀写
三二八	(天文十九年)	三月	大内家奉行入連寄書狀	三四九	(永祿二年)	八月 廿六日	大友義鎮再狀案
三二九	(天文廿二年)	卯月 二日	大内家奉行入連寄書狀案	三五〇	(永祿三年)	十月 十日	田原親賢知行預々狀
三三〇	(天文廿二年)	六月 一日	大友義鎮書狀	三五二	(永祿四年)	三月 二日	吉岡長増書狀
三三一	(天文廿二年)	七月 廿一日	大内家奉行入連寄書狀	三五三	(永祿四年)	九月 廿二日	吉岡長増書狀案
三三二	(弘治二年)	卯月 十三日	字佐郡三搭六人衆着到狀案	三五四	(永祿四年)	九月 廿六日	田原親宏書狀案
三三三	(弘治二年)	秋	大友家文書録綱文	三五五	(永祿四年)	十一月 十四日	大友義鎮再狀
三三四	(弘治二年)	二月 廿九日	大友義鎮書狀写	三五六	(永祿五年)	十一月 十五日	大友義鎮書狀
三三五	(弘治三年)	二月 廿九日	大友家加判衆連寄書狀	三五七	(永祿五年)	八月 九日	大友家文書録綱文
三三六	(弘治三年)	五月 廿五日	大友家加判衆連寄奉書	三五八	(永祿五年)	八月 十一日	大友家加判衆連寄奉書
三三七	(弘治三年)	五月 廿五日	田北鑑宗・山下鑑心連寄書狀	三五九	(永祿五年)	八月 十一日	田原親安書狀
三三八	(弘治三年)	六月 廿五日	大友家加判衆連寄奉書案	三六〇	(永祿五年)	八月 十六日	大友家加判衆連寄書狀案
三三九	(弘治三年)	六月 廿二日	大友家加判衆連寄奉書	三六一	(永祿六年)	八月 廿三日	大友宗驗書狀
三四〇	(弘治三年)	六月 廿二日	大友義鎮書狀	三六二	(永祿八年乙丑六月十二日)	六月 廿二日	大友宗驗書狀
三四一	(弘治三年)	六月 廿四日	大友家加判衆連寄奉書	三六三	(永祿八年)	六月 廿二日	大友宗驗合戦手負注文一見状
三四二	(弘治三年)	七月 七日	大友義鎮感狀	三六四	(永祿八年)	八月 十三日	大友宗驗合戦手負注文一見状案
三四三	(弘治三年)	七月 七日	大友義鎮感狀	三六五	(永祿八年)	八月 廿三日	大友宗驗合戦手負注文一見状案
三四四	(弘治三年)	七月 九日	大友家加判衆連寄奉書	三六六	(永祿八年)	八月 十九日	大友宗驗感狀
三四五	(弘治三年)	七月 九日	大友義鎮感狀	三六七	(永祿九年)	三月 廿四日	大友家加判衆連寄再狀
三四六	(弘治三年)	七月 九日	大友家加判衆連寄奉書	三六八	(永祿九年)	三月 廿四日	大友宗驗感狀

三六九 (水禄 九年) 二月 廿四日 大友宗麟感状
 二七〇 水禄 十年 某乎日記
 三七一 水禄十一年戊辰正月 十一日 刀兼先代帳
 三七二 「水禄十二」 六月 廿八日 田原親家感状
 三七三 (水禄十二年) 三月 十七日 安東鎮宗書状
 三七四 水禄十二年己巳二月 十八日 刀兼先代帳
 三七五 (水禄十二年) 七月 十三日 大友宗麟感状
 三七六 (水禄十二年) 九月 廿二日 大友宗麟書状案
 三七七 水禄十二年 某覚書
 三七八 (水禄十二年) 大友家文書録綱文
 三七八 七月 十六日 大友宗麟知行預々状
 三七八 九月 十日 大友宗麟感状
 三八〇 (元龜 二年) 大友家文書録綱文
 三八一 三月 十二日 大友宗麟書状写
 三八二 三月 十二日 大友宗麟書状写
 三八三 三月 十二日 大友宗麟書状
 三八四 六月 四日 鑑述・鑑忠速著書状
 三八五 九月 廿二日 大友宗麟書状案
 三八六 九月 廿四日 野仲頼兼書状案
 三八七 十月 廿四日 大友宗麟書状
 三八八 十一月 十一日 大友宗麟書状案
 三八九 (天正 元年) 十一月 大友家文書録綱文
 三九〇 (天正 元年) 十一月 二日 大友義統書状
 三九一 天正 三年 五月 廿八日 口次追書讀与立花城置物口數書
 三九二 大友家文書録綱文
 三九三 (天正 六年) 四月 廿四日 大友家文書録綱文
 三九四 (天正 六年) 五月 七日 大友義統書状案
 三九五 天正 六年 七月 三日 大友義統感状案
 三九六 (天正 六年) 十一月 廿四日 田原親家書状
 三九七 (天正 六年) 十二月 廿四日 田原紹忍書状
 三九八 (天正 七年乙卯正月) 十一日 大友家文書録綱文
 三九九 (天正 七年) 正月 廿九日 田原紹忍書状

四〇〇 (天正 七年) 二月 三日 安東某覚書
 四〇一 (天正 七年) 二月 四日 大友義統書状
 四〇二 (天正 七年) 二月 十一日 大友家文書録綱文
 四〇三 「天正七年己卯」 二月 十四日 田原紹忍書状
 四〇四 (天正 七年) 二月 廿二日 大友義統書状
 四〇五 (天正 七年) 三月 廿二日 大友義統感状
 四〇六 大友家文書録綱文
 四〇七 (天正 七年) 三月 廿七日 大友義統感状案
 四〇八 大友義統感状案
 四〇九 大友義統感状案
 四一〇 大友義統感状案
 四一一 大友義統感状案
 四一二 (天正 七年) 三月 廿七日 大友義統書状
 四一三 (天正 七年) 八月 十七日 大友家文書録綱文
 四一四 (天正 七年) 八月 十八日 大友義統感状案
 四一五 (天正 七年) 九月 十九日 大友義統感状
 四一六 「天正 七」 十月 廿六日 大友義統感状
 四一七 「天正 七」 十一月 一日 田原親家感状
 四一八 (天正 七年) 十一月 十日 大友義統書状
 四一九 (天正 七年) 十一月 十六日 大友家文書録綱文
 四二〇 大友義統感状案
 四二一 (天正 七年) 十一月 十七日 大友義統感状案
 四二二 (天正 七年) 十一月 廿三日 田原親家書状
 四二三 天正 七 十月 廿七日 田原親家書状
 四二四 (天正 七) 十月 廿七日 田原親家書状
 四二五 (天正 七年) 十一月 大友家文書録綱文
 四二六 (天正 八年) 正月 十日 大友義統感状
 四二七 (天正 八年) 正月 十一日 大友義統感状
 四二八 (天正 八年) 正月 十六日 大友義統書状
 四二九 (天正 八年) 正月 十六日 大友義統書状案
 四三〇 (天正 八) 正月 十六日 大友義統書状

四三一	(天正 八年)	正月 十六日	大友義統書狀	四六二	(天正 八年)	三月 廿三日	田原親家書狀
四三二	(天正 八年)	正月 二十日	大友義統書狀	四六三	(天正 八年)	三月 廿三日	田原親家書狀
四三三	(天正 八年)	正月 廿三日	大友義統書狀案	四六四			大友家文書録綱文
四三四		五月 廿三日	大友義統書狀	四六五	(天正 八年)	二月 廿四日	大友四斎・大友義統書狀案
四三五	(天正 八年)	二月 八日	大友義統書狀	四六六	(天正 八年)	三月 廿四日	大友四斎・大友義統書狀案
四三六	(天正 八年)	二月 八日	大友義統書狀案	四六七	(天正 八年)	三月 廿四日	田原親家書狀案
四三七	(天正 八年)	二月 八日	大友義統書狀	四六八	(天正 八年)	二月 廿五日	田原親家書狀
四三八	(天正 八年)	二月 廿日	田原親家書狀	四六九	(天正 八年)	二月 廿五日	田原親家書狀
四三九	(天正 八年)	二月 廿一日	大友義統書狀	四七〇		三月 廿六日	大友義統安堵書狀案
四四〇	(天正 八年)	二月 廿二日	大友義統書狀	四七一	(天正 八年)	閏二月 四日	田原親家書狀
四四一		二月 廿九日	大友義統書狀	四七二	(天正 八年)	閏二月 五日	田原親家書狀
四四二	(天正 八年)	二月 廿九日	大友義統書狀	四七三	(天正 八年)	三月 五日	大友四斎書狀
四四三	(天正 八年)	三月 二日	田原親家知行宛行狀	四七四	(天正 八年)	閏二月 十日	田原親家書狀
四四四	(天正 八年)	三月 二日	大友家文書録綱文	四七五	(天正 八年)	閏二月 十三日	大友義統書狀
四四五	(天正 八年)	三月 五日	大友義統書狀案	四七六	(天正 八年)	閏二月 十四日	田原親家書狀
四四六	(天正 八年)	三月 五日	大友義統書狀	四七七	(天正 八年)	三月 十四日	田原親家書狀
四四七	(天正 八年)	三月 十五日	志留追違書狀	四七八	(天正 八年)	閏二月 十六日	大友義統書狀
四四八	(天正 八年)	三月 十六日	大友四斎書狀	四七九	(天正 八年)	閏二月 十六日	大友義統書狀
四四九	(天正 八年)	三月 十七日	田原親家書狀	四八〇	(天正 八年)	閏二月 十九日	大友義統書狀
四五〇	(天正 八年)	三月 十七日	大友義統書狀案	四八一	(天正 八年)	三月 廿日	大友四斎書狀
四五一	(天正 八年)	三月 十九日	田原親家知行宛行狀	四八二	(天正 八年)	三月 廿六日	大友義統書狀
四五二	(天正 八年)	三月 廿二日	大友義統書狀	四八三	(天正 八年)	三月 二日	大友義統書狀
四五三	(天正 八年)	三月 廿二日	大友義統書狀	四八四	(天正 八年)	三月 二日	大友義統書狀
四五四	(天正 八年)	三月 廿二日	大友義統書狀	四八五	(天正 八年)	三月 九日	大友義統書狀
四五五	(天正 八年)	三月 廿二日	大友義統書狀	四八六	(天正 八年)	三月 十日	大友よし統書狀
四五六	(天正 八年)	三月 廿二日	大友義統書狀	四八七	(天正 八年)	三月 十日	大友義統書狀
四五七	(天正 八年)	三月 廿二日	大友義統書狀案	四八八	(天正 八年)	三月 十日	大友義統書狀
四五八	(天正 八年)	三月 廿二日	大友義統書狀案	四八九	(天正 八年)	三月 十日	大友よし統書狀
四五九	(天正 八年)	三月 廿二日	大友義統書狀案	四九〇	(天正 八年)	三月 十日	大友よし統書狀
四六〇	(天正 八年)	三月 廿二日	大友義統書狀案	四九一	(天正 八年)	三月 十日	大友よし統書狀
四六一	(天正 八年)	三月 廿二日	田原親家書狀	四九二	(天正 八年)	三月 十日	大友よし統書狀

四九三	(天正 八年)	卯月 十五日	田原親家書状	五二四	(天正 八年)	八月 廿日	田原親家感状
四九四	(天正 八年)	(四月)	田原親家書状案	五二五	(天正 八年)	八月 廿日	秋日備忘書状
四九五	(天正 八年)	五月 十二日	大友家文書録綱文	五二六	(天正 八年)	八月 廿一日	大友義統書状
四九六	(天正 八年)	五月 十四日	大友家文書録綱文	五二七	(天正 八年)	八月 日	大友家文書録綱文
四九七	(天正 八年)	五月 十四日	田原親家感状	五二八	(天正 八年)	八月 二十日	大友家文書録綱文
四九八	(天正 八年)	五月 十四日	大友義統感状案	五二九	(天正 八年)	八月 廿二日	大友義統感状
四九九	(天正 八年)	五月 廿日	大友義統書状	五三〇	(天正 八年)	八月 廿三日	田原親實忠貞行状案
五〇〇	(天正 八年)	五月 廿六日	田原親家忠貞行状	五三一	(天正 八年)	八月 廿三日	田原親實忠貞行状案
五〇一	(天正 八年)	六月 一日	大友義統書状	五三二	(天正 八年)	八月 廿八日	大友義統書状
五〇二	(天正 八年)	六月 一日	大友家文書録綱文	五三三	(天正 八年)	八月 廿八日	田原親實感状
五〇三	(天正 八年)	六月 十三日	大友義統感状案	五三四	(天正 八年)	八月 卅日	大友義統感状
五〇四	(天正 八年)	六月 廿二日	田原親忍書状	五三五	(天正 八年)	八月 卅日	大友義統感状
五〇五	(天正 八年)	六月 廿二日	大友義統合戦手白注文一見状	五三六	(天正 八年)	九月 三日	大友義統書状
五〇六	(天正 八年)	六月 廿四日	大友義統感状	五三七	(天正 八年)	九月 五日	大友義統書状
五〇七	(天正 八年)	七月 一日	田原親家感状	五三八	(天正 八年)	九月 五日	大友義統感状
五〇八	(天正 八年)	七月 六日	大友義統感状	五三九	(天正 八年)	九月 五日	大友義統知行頭書状
五〇九	(天正 八年)	七月 十日	大友義統書状	五四〇	(天正 八年)	九月 五日	大友義統知行頭書状
五一〇	(天正 八年)	七月 十日	田原親家書状	五四一	(天正 八年)	九月 五日	大友家文書録綱文
五一一	(天正 八年)	七月 十五日	大友義統書状	五四二	(天正 八年)	九月 七日	田原親家感状
五一二	(天正 八年)	七月 十八日	大友義統感状	五四三	(天正 八年)	九月 九日	大友義統書状
五一三	(天正 八年)	七月 十八日	大友家文書録綱文	五四四	(天正 八年)	九月 十日	大友義統書状
五一四	(天正 八年)	七月 十九日	田原親家感状案	五四五	(天正 八年)	九月 十五日	大友義統感状
五一五	(天正 八年)	七月 廿日	大友義統感状	五四六	(天正 八年)	九月 十五日	大友義統感状案
五一六	(天正 八年)	七月 廿四日	大友義統書状	五四七	(天正 八年)	九月 十五日	大友義統感状案
五一七	(天正 八年)	八月 三日	大友義統感状	五四八	(天正 八年)	九月 十八日	大友義統感状案
五一八	(天正 八年)	八月 五日	大友家文書録綱文	五四九	(天正 八年)	九月 廿日	四日市切書案中給地付案
五一九	(天正 八年)	八月 七日	田原親家感状	五五〇	(天正 八年)	九月 廿日	大友義統感状
五二〇	(天正 八年)	八月 七日	田原親家感状案	五五一	(天正 八年)	九月 廿日	大友義統感状
五二一	(天正 八年)	八月 十三日	大友義統書状案	五五二	(天正 八年)	九月 廿一日	大友義統書状案
五二二	(天正 八年)	八月 十六日	田原親家感状案	五五三	(天正 八年)	九月 廿一日	大友義統書状
五二三	(天正 八年)	八月 廿日	大友義統合戦頭手白注文一見状	五五四	(天正 八年)	九月 廿一日	大友義統感状

五五五	(天正 八年)	十月	安岐表御誓固日記	五八六	(天正 八年)	十一月 廿六日	大友義統請点授免許状案
五五六	(天正 八年)	十月 二日	大友家文書録綱文	五八七			大友家文書録綱文
五五七	(天正 八年)	十月	大友義統知行預々状	五八八			大友家文書録綱文
五五八	(天正 八年)	十月 七日	大友内宿書状	五八九	(天正 八年)	十一月 二日	大友内宿書状
五五九		十月 七日	田原親家書状	五九〇	(天正 八年)	十一月 九日	田原紹忠感状
五六〇		十月 七日	田原親家書状案	五九一	(天正 八年)	十一月 九日	大友義統感状案
五六一		十月 七日	田原親家書状案	五九二		十一月 廿三日	田原親貴感状
五六二	(天正 八年)	十月 八日	大友義統書状	五九三	天正 八年	十一月 廿七日	田原親貴感状案
五六三	(天正 八年)	十月 八日	大友内宿書状	五九四	(天正 八年)		田原親貴書状案
五六四	(天正 八年)	十月 九日	大友義統書状	五九五	(天正 八年)		大友内宿書状
五六五			大友家文書録綱文	五九六			林新九郎(田原親家)進退翁々覽
五六六	(天正 八年)	十月 十日	大友内宿・大友義統連署感状案	五九七	(天正 八年)		
五六七	(天正 八年)	十月 十一日	大友内宿書状	五九八	(天正 九年)	正月 廿三日	大友義統感状案
五六八	(天正 八年)	十月 十一日	大友義統書状	五九九	天正 九年	二月 五日	大友家文書録綱文
五六九	(天正 八年)	十月 十一日	大友義統感状	六〇〇	天正 九年	二月 五日	大友義統感状
五七〇		十月 十二日	大友義統感状案	六〇一	(天正 九年)	二月 八日	田原親家書状案
五七一	(天正 八年)	十月 十二日	大友義統感状案	六〇二	(天正 九年)	二月 八日	大友義統書状
五七二	(天正 八年)	十月 十四日	大友家加判衆進署書状案	六〇三			田原親家知行預々状
五七三	(天正 八年)	十月 十四日	大友義統書状	六〇四	(天正 九年)	卯月 九日	大友義統感状
五七四	(天正 八年)	十月 十四日	大友義統感状案	六〇五	(天正 九年)	卯月 廿九日	大友義統感状
五七五	天正	十月 十五日	野仲儀兼知行預々状	六〇六	(天正 九年)	卯月 廿九日	大友義統感状
五七六	(天正 八年)	十月 廿一日	田原親家感状	六〇七	(天正 九年)	五月 一日	大友家文書録綱文
五七七	(天正 八年)	十月 廿一日	田原親家感状	六〇八	(天正 九年)	五月 一日	大友義統書状案
五七八			大友家文書録綱文	六〇九	天正 九年	五月 三日	田原親家知行預行状
五七九	(天正 八年)	十月 廿六日	大友義統書状案	六一〇	天正 九年	五月 三日	田原親家知行預行状寫
五八〇	(天正 八年)	十月 廿七日	高橋栞連書状	六一一	(天正 九年)	五月 五日	大友義統感状
五八一	(天正 八年)	十月 廿七日	大友義統感状	六一二		五月 廿八日	田原紹忠感状
五八二	(天正 八年)	十一月 一日	大友義統感状	六一三	(天正 九年)	六月 八日	田原親忠感状案
五八三	(天正 八年)	十一月 一日	大友義統感状	六一四		七月 六日	田原紹忠感状
五八四		十一月 三日	吉弘親家書状	六一五			田原紹忠感状
五八五	(天正 八年)	十一月 二十六日	大友家文書録綱文	六一六	(天正 九年)	七月 六日	大友家文書録綱文

六一七	(天正 九年)	九月 十一日	浦上宗義書狀案	六四八	天正 十年	卯月 廿三日	大友義統合戰頭手負注文一見狀
六一八	(天正 九年)	九月 廿五日	大友門首書狀	六四九	天正 拾年	五月 二日	大友府蘭書狀案
六一九	(天正 九年)	十月 五日	大友義統感狀	六五〇	天正 拾年	五月 三日	田原親家感狀寫
六二〇	(天正 九年)	十月 五日	大友義統感狀	六五一	天正 拾年	五月 三日	田原親家感狀案
六二一	(天正 九年)	拾月 九日	田原紹忍書狀	六五二	(天正 十年)	五月 三日	田原親家感狀
六二二	(天正 九年)	十月 十日	大友府蘭書狀	六五三	(天正 十年)	五月 三日	田原親家感狀
六二三	(天正 九年)	十一月 十四日	大友義統書狀案	六五四	(天正 十年)	五月 五日	大友義統感狀
六二四	天正 九	十一月 十九日	字佐宮社僧大師供記書書	六五五	(天正 十年)	六月 廿八日	田原親家感狀案
六二五	(天正 九年)	十一月 二十日	大友家文書錄綱文	六五六	(天正 十年)	十月 十九日	大友家文書錄綱文
六二六	(天正 九年)	十一月 二十日	大友家文書錄綱文	六五七	(天正 十年)	十月 廿一日	大友義統感狀案
六二七	(天正 九年)	十一月 廿五日	大友府蘭書狀案	六五八	(天正 十年)	十月 廿四日	大友義統書狀
六二八	(天正 九年)	十一月 廿六日	大友府蘭書狀案	六五九	(天正 十年)	十月 廿五日	大友義統書狀
六二九	(天正 九年)	十二月 七日	大友府蘭書狀	六六〇	(天正 十年)	十月 廿五日	大友府蘭書狀
六三〇	(天正 九年)	十二月 十二日	大友義統感狀案	六六一	天正 十年	十月 廿六日	田原紹忍感狀
六三一	(天正 九年)	十二月 十三日	大友府蘭書狀	六六二	(天正 十年)	十一月 廿七日	田原紹忍書狀
六三二	(天正 九年)	十二月 十三日	大友義統知行預書狀	六六三	(天正 十年)	十一月 廿八日	大友義統感狀
六三三	(天正 九年)	十二月 十五日	田原紹忍書狀	六六四	(天正 十年)	十一月 廿八日	大友義統感狀案
六三四	(天正 九年)	十二月 十五日	大友家文書錄綱文	六六五	(天正 十年)	十一月 廿八日	大友家文書錄綱文
六三五	(天正 九年)	十二月 十七日	大友義統感狀	六六六	(天正 十年)	十二月 一日	大友家文書錄綱文
六三六	(天正 九年)	十二月 十七日	田原紹忍感狀	六六七	(天正 十年)	十二月 一日	大友義統合戰手負看到一見狀案
六三七	(天正 九年)	十二月 十七日	大友家文書錄綱文	六六八	(天正 十年)	十二月 三日	大友府蘭書狀案
六三八	(天正 九年)	十二月 十八日	大友義統感狀案	六六九	(天正 十年)	十二月 三日	田原親家感狀案
六三九	(天正 九年)	十二月 卅日	大友義統感狀案	六七〇	(天正 十年)	十二月 三日	大友義統感狀案
六四〇	(天正 九年)	十二月 卅日	大友義統感狀案	六七〇	(天正 十年)	十二月 十六日	大友義統感狀案
六四一	(天正 九年)	十二月 卅日	大友義統感狀案	六七一	(天正 十年)	十二月 十六日	大友義統感狀案
六四二	(天正 十年)	正月 廿四日	大友義統感狀案	六七二	(天正 十年)	十二月 廿七日	大友義統書狀
六四三	(天正 十年)	二月 十日	宇佐鎮常軍忠狀案	六七三	(天正 十年)	十二月 廿七日	大友義統書狀
六四四	(天正 十年)	卯月 六日	大友義統書狀	六七四	(天正 十一年)	正月 十六日	大友義統感狀
六四五	(天正 十年)	卯月 十日	大友義統感狀	六七五	(天正 十一年)	正月 十六日	大友義統感狀案
六四六	(天正 十年)	四月 廿二日	宗塲書狀	六七六	天正十一年癸未正月	廿八日	大友義統書狀
六四七	(天正 十年)	四月 廿二日	大友家文書錄綱文	六七七	天正十一年閏正月	廿四日	大友府蘭書狀
				六七八	(天正十一年)	閏正月 廿五日	田原紹忍書狀

六七九	(天正十一年)	二月 廿一日	大友義統感狀	七二〇	(天正十二年)	十一月 十一日	大友府蘭感狀写
六八〇	(天正十一年)	二月 廿一日	大友義統感狀	七一	(天正十一年)	十一月 廿八日	大友義統感狀
六八一	(天正十一年)	五月 七日	土師權專書狀	七二二		十二月 一日	田原紹忍感狀
六八二			大友家文書録綱文	七二三	(天正十一年)	十二月	大友家文書録綱文
六八三	(天正十一年)	九月 廿六日	大友義統書狀案	七二四	(天正十一年)	十二月 二日	大友義統感狀
六八四	(天正十一年)	九月 廿七日	大友府蘭書狀	七二五	(天正十一年)	十二月 三日	大友義統感狀案
六八五	(天正十一年)	十月 八日	大友義統感狀案	七二六	(天正十一年)	十二月 三日	大友義統感狀案
六八六	(天正十一年)	十月 八日	大友義統感狀	七二七	(天正十一年)	十二月 二日	大友義統感狀案
六八七	(天正十一年)	十月 八日	大友義統合戦手白洋文一見状案	七二八	(天正十一年)	十二月 十三日	大友義統感狀
六八八	(天正十一年)	十月 十日	大友義統感狀	七二九	(天正十一年)	十月 廿日	大友義統感狀
六八九		十月 十日	大友義統感狀	七二〇	(天正十二年)	正月 廿九日	大友義統感狀
六九〇	(天正十一年)	十月 十日	大友義統感狀案	七二一	(天正十二年)	正月	大友家文書録綱文
六九一	(天正十一年)	十月 十一日	大友義統感狀写	七二二	(天正十一年)	二月 廿八日	大友家文書録綱文
六九二	(天正十一年)	十月 十一日	大友義統感狀案	七二三	(天正十一年)	三月 廿八日	大友家文書録綱文
六九三	(天正十一年)	十月 十一日	大友義統感狀案	七二四	(天正十二年)	四月 三日	大友府蘭条数覚
六九四	(天正十一年)	十月 十五日	大友義統感狀案	七二五	(天正十二年)	六月 十六日	大友義統書狀案
六九五	(天正十一年)	十月 十五日	大友義統感狀案	七二六	(天正十二年)	六月 廿四日	田原親家書狀
六九六	(天正十一年)	十月 十五日	大友義統感狀案	七二七	(天正十二年)	六月 廿四日	田原親家書狀
六九七	(天正十一年)	十月 十六日	大友義統感狀	七二八			田原親家書狀写
六九八	(天正十一年)	十月 十六日	大友家文書録綱文	七二九	(天正十二年)	十一月 廿八日	大友家文書録綱文
六九九	(天正十一年)	十月 十六日	大友義統合戦手白洋文一見状	七三〇	(天正十二年)	十一月 三日	大友義統書狀案
七〇〇	(天正十一年)	十月 十九日	田原紹忍賞施行状案	七三一	(天正十二年)	十二月 廿四日	田原紹忍書狀
七〇一	(天正十一年)	十月 廿八日	大友義統感狀	七三二	(天正十二年)	乙酉正月 廿日	大友家文書録綱文
七〇二	(天正十一年)	十月 廿八日	大友義統感狀	七三三	(天正十二年)	正月 廿日	佐藤孫左衛門上書写
七〇三	(天正十一年)	十月 廿八日	大友義統感狀案	七三四			大友家文書録綱文
七〇四	(天正十一年)	十月 廿八日	大友義統感狀案	七三五	(天正十二年)	正月 十三日	大友府蘭書狀
七〇五	(天正十一年)	十月 廿八日	大友義統感狀案	七三六	(天正十二年)	閏八月 廿三日	大友義統書狀案
七〇六	(天正十一年)	十月 廿八日	大友義統感狀	七三七	(天正十二年)	九月 二日	大友義統感狀
七〇七	(天正十一年)	十月 廿八日	大友義統感狀	七三八	(天正十二年)	九月 十一日	上井覺書日記
七〇八	(天正十二年)	十月 廿八日	大友よし統感狀	七三九	(天正十二年)	九月 十九日	大友府蘭書狀
七〇九	(天正十二年)	十月 廿八日	大友よし統感狀	七四〇	(天正十二年)	九月 廿四日	上井覺書日記

七四一	(天正十四年)	十月	十四日	上井覺兼日記	七七二	(天正十四年)	十二月	九日	大友家文書録綱文
七四二	(天正十四年)	二月	五日	上井覺兼日記	七七三	(天正十四年)	十二月	三日	大友家文書録綱文
七四三	(天正十四年)	二月	十六日	上井覺兼日記	七七四	(天正十四年)	十二月	三日	大友家文書録綱文
七四四	(天正十四年)	二月	廿一日	大友家文書録綱文	七七五	(天正十四年)	十二月	七日	大友家文書録綱文
七四五	(天正十四年)	三月	廿一日	田原親盛感状	七七六	(天正十四年)	拾月	廿日	島津義久書状
七四六	(天正十四年)	四月	廿二日	上井覺兼日記	七七七	(天正十四年)	十月	廿四日	大友義統感状
七四七	(天正十四年)	五月	四日	上井覺兼日記	七七八	(天正十四年)	十月	廿四日	大友義統感状
七四八	(天正十四丙戌)	六月	八日	田原親盛感状	七七九	(天正十四年)	正月	廿四日	大友義統感状
七四九	(天正十四年)	六月	廿四日	上井覺兼日記	七八〇	(天正十四年)	十二月	廿七日	大友義統感状
七五〇	(天正十四年)	八月	十六日	上井覺兼日記	七八一	(天正十四年)	十月	廿二日	大友義統感状
七五一	(天正十四年)	八月	廿二日	上井覺兼日記	七八二	(天正十四年)	十二月	晦日	大友義統感状
七五二	(天正十四年)	十月	三日	豊臣秀吉御内書	七八三	(天正十四年)	十二月	晦日	大友義統感状
七五三	(天正十四年)	十月	六日	大友義統感状	七八四	(天正十五年)	正月	三日	大友義統感状
七五四	(天正十四年)	十月	八日	上井覺兼日記	七八五	(天正十五年)	正月	三日	大友義統感状
七五五	(天正十四年)	十月	十日	豊臣秀吉御内書	七八六	(天正十五年)	正月	三日	大友義統感状
七五六	(天正十四年)	十月	十一日	大友義統感状	七八七	(天正十五年)	正月	三日	大友義統感状
七五七	(天正十四年丙子)	十月	廿八日	田北統周知行預ヶ状	七八八	(天正十五年)	正月	三日	大友義統感状
七五八	(天正十四年)	十月	卅日	大友義統感状	七八九	(天正十五年)	正月	三日	大友義統感状
七五九	(天正十四年)	十月		大友家文書録綱文	七九〇	(天正十五年)	正月	十二日	大友義統感状
七六〇	(天正十四年)	十月		大友家文書録綱文	七九一	(天正十五年)	正月	十二日	大友義統感状
七六一	(天正十四年)	十月		大友家文書録綱文	七九二	(天正十五年)	正月	十四日	大友義統感状
七六二	(天正十四年)	十月		大友家文書録綱文	七九三	(天正十五年)	正月	十五日	大友義統感状
七六三	(天正十四年)	十一月	四日	大友義統感状	七九四	(天正十五年)	正月	十五日	大友義統感状
七六四	(天正十四年丙戌十一月)	七月		阿曾沼九秀感状	七九五	(天正十五年)	正月	十六日	大友義統感状
七六五	(天正十四年)	十一月	八日	大友義統感状	七九六	(天正十五年)	正月	十六日	大友義統感状
七六六	(天正十四年)	十一月	廿日	豊臣秀吉御内書案	七九七	(天正十五年)	正月	十七日	大友義統感状
七六七	(天正十四年)	十一月	廿日	豊臣秀吉書状	七九八	(天正十五年)	正月	廿二日	大友義統感状
七六八	(天正十四年)	十一月	廿一日	大友義統感状	七九九	(天正十五年)	正月	廿四日	大友義統感状
七六九	(天正十四年)	十一月	廿三日	豊臣秀吉書状	八〇〇	(天正十五年)	正月	廿八日	大友義統感状
七七〇	(天正十四年)	十二月		大友家文書録綱文	八〇一	(天正十五年)	正月	廿八日	大友義統感状
七七一	(天正十四年)	十二月	二日	大友家文書録綱文	八〇二	(天正十五年)	正月	廿八日	大友義統感状

八六五

某書扶案

八 天正十四年

北郷忠虎譜

八六六

(慶長 五年) 七月 廿一日

乃天宗勝・代懸伏陣所合戰場付立

九 天正十四年

北郷二久譜

八六八

(慶長 五年) 八月 六日

細川忠興白筆書狀

一〇 天正十四年

島津義久譜

八六九

(慶長 五年) 八月 十三日

太田一成書扶案

一一 天正十四年

島津義弘譜

八七〇

(慶長 五年) 八月 十八日

松井康之・有吉立行進書扶案

一二 天正十四年

島津中務大輔家久譜

八七一

(慶長 五年) 八月 廿八日

松井康之列書扶案

一四 天正十四年

樺山忠助譜

八七二

(慶長 五年) 九月

大友家文書録綱文

一五 天正十四年

樺山紹銀日記

八七三

(慶長 五年) 九月

大友家文書録綱文

一六 天正十四年

島津世孫記

八七四

(慶長 五年) 九月

大友家文書録綱文

一七 天正十四年

長谷場越前日記

八七五

(慶長 五年) 九月

大友家文書録綱文

一八 天正十四年

勝部兵右衛門開書

八七六

(慶長 五年) 九月 十九日

松井康之・有吉立行進書扶案

一九 天正十四年

日向記

八七七

(慶長 五年) 十月 七日

黒田如水覚書案

二〇 天正十四年

日向記

八七八

(慶長 五年) 十一月 二日

細川忠興書扶案

二一 天正十四年

天正拾四年豊後へ参向之事

八七九

(慶長 五年)

加藤清正覚書

二二 天正十四年

日向記

八八〇

(慶長 五年)

黒田如水書扶案

二三 天正十五年

島津中務大輔家久譜

八八一

(慶長 五年) 八月 四日

松井康之・有吉立行進書案

二四 天正十五年

島津山紹銀日記

八八二

(慶長 五年) 八月 四日

松井康之・有吉立行進書案

二五 天正十五年

島津義弘書狀

八八三

(慶長 六年) 二月 川日

魚住右衛門兵衛書狀

二六 天正十五年

殉国名録

八八四

(慶長 六年) 卯月 十日

細川忠興書狀

二七 天正十五年

島津義久譜

八八五

(慶長 六年) 七月 四日

水付・立石合戦高名石右衛門扶

二八 天正十五年

北郷忠虎譜

八八六

(慶長 六年) 七月 六日

立石(勲)時水付留守高名父交名案

二九 天正十五年

樺山忠助譜

記録部一 (鹿兒島県史料旧記雜録 後編二)

一

天正十二年

島津義弘譜

三一 天正十五年

内覧

二

天正十四年

新納忠元勲功記

三二 天正十五年

長谷場越前日記

三

天正十四年

新納忠元譜

三三 天正十五年

長谷場越前日記

四

天正十四年

殉国名録

三四 天正十五年

日向記

五

天正十四年

筑前岩屋城合戦従軍者父名

三五 天正十五年

島津義弘譜

六

天正十四年

大口土濱川西市系定書

三七 天正十五年

肥後口・日向合戦従軍者父名

七

天正十四年

島津義久譜

三八 天正十五年

島津義久譜

記録部二

- 三九 天正十五年
四〇 天正十五年
四一 天正十五年
四二 天正十五年
四三 天正十五年
四四 天正十五年

島津中務大輔家久譜

佐多久政譜

勝部兵右衛門尉書

勝部兵右衛門尉書

阿蘇玄與人道黒齋書出

新納忠元勳功記

宇日梓山寛書

豊後国古城蹟并海陸路程

玖珠城、令馳參候、仍着到如件、

建武三年三月廿一日

承了到 〔重式〕〔法司也〕

一 深堀時繼着到狀

○深堀時繼
南北御酒文九州御五〇一号

着到、

肥前國御家人深堀彌次郎時繼

右、今月廿一日爲相向玖珠城、令馳參候、仍着到如件、

建武三年三月廿一日

承了、〔花押〕

一 二 深堀政綱着到狀

○深堀政綱
南北御酒文九州御五〇一号

着到、

肥前國御家人深堀彌五郎政綱

右、今月廿一日爲相向玖珠城、令馳參候、仍着到如件、

建武三年三月廿一日

承了、〔花押〕

一 三 深堀永淨着到狀

○深堀永淨
南北御酒文九州御五〇一号

着到、

肥前國御家人深堀平二永淨

右、今月廿一日爲相向玖珠城、令馳參候、仍着到如件、

建武三年三月廿一日

承了、〔花押〕

一 四 津守〔平林〕親澄着到狀案

○親澄
大分御酒文九州御六〇一号

豊後國毛井社一分地頭平林彦次郎親澄、爲致軍忠、今廿

四日馳參御方、以此旨可有御披露候、恐々謹言、

建武三年三月廿四日

津守親澄

進上 御奉行所 承了在御到

一 五 津守〔平林〕氏親着到狀案

○氏親
大分御酒文九州御六〇一号

豊後國毛井社一分地頭平林彦次郎氏親、致忠、今月廿四

日馳參御方、以此旨可有御披露候、恐々謹言、

建武三年三月廿四日

津守氏親

進上 御奉行所 承了在御到

一 六 津守〔平林〕行本着到狀案

○行本
大分御酒文九州御六〇一号

豊後國毛井社地頭平林太郎人通行本、爲致軍忠、今月廿

四日馳參御方、以此旨可有御披露候、恐々謹言、

建武三年三月廿七日

津守行本

一 七 大神〔都甲〕惟世着到狀

○惟世
大分御酒文九州御六〇一号

豊後國都甲庄地頭四郎惟世、今月十六日付御教書、爲抽

軍忠、玖珠城體同候來、以此旨可有御披露候、恐々謹言、

建武三年三月廿七日

大神惟世上〔榮花押〕

進上 御奉行所 承了在御到

一 八 尸次頼尊軍忠狀案

○頼尊
南北御酒文九州御五〇一号

日安

大友尸次左近大夫頼尊軍忠事、預備一見狀、欲浴恩賞

施与御面日子細事、

一去年十一月十二日、於佐野山原前參御方致軍忠事、

一同十三日、於伊豆國府致致々合戦、令太刀打抽軍忠舉、

分取頭二、若免手負十四人、

一正月一日、近江國變向伊岐須城浪手、懸先致忠舉、分

頭取二、若免手負八人、

一同八日、追落八輪凶徒、

一同十六日、法勝寺南門合戦、及散々太刀打

一同廿日、於奈津致打出合戦、於御供下向鎮西、同

三月二日、抽筑前國多々良浜軍忠舉、親類若免手負、

討死百余人、分取頭五十四

以前案々如此、云海道、云京都合戦、拙所々軍忠、迄于
鎮西御供仕、於博多給御教書、罷回玖球城拙戦功之予細、
皆以存知候上者、給御一見状、且預御注進、浴恩賞、為
施弓前箇日、仍行上如件

建武二年三月 日
承俊是、御引

一九 足利直義軍勢催促状案

○大公文書
大日本書紀六ノ三

球珠城凶徒等謀伐事、相催一族、属今川四郎入道手、可
致軍忠之状、如件、

建武三年四月十二日
左馬頭御引

二〇 足利直義軍勢催促状

○大公文書
大日本書紀六ノ三

球珠城凶徒等謀伐事、相催一族、属今川四郎入道手、可
致軍忠之状、如件、

建武三年四月十二日
左馬頭御引

二二 清原(綾垣)政明着到状

○大公文書
大日本書紀六ノ三

豊後國御家人被垣孫八政明、預御教書、去月廿四日為致
軍忠、馳参球珠城候、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武二年四月十五日
清原政明(裏花押)

二二 津守(平林)行本軍忠状案

○大公文書
大日本書紀六ノ三

豊後國毛井社地頭平林右衛門太郎入道行内跡之輩等、以
去月廿一日馳参球珠城、同廿四日以米度々合戦上所致軍
忠也、仍將軍家御教書令拝領之間、弥抽忠勤欲仰其賞、
以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武二年卯月十九日
沙弥行本

二二 大神(都甲)惟元着到状

○大公文書
大日本書紀六ノ三

豊後國御家人都甲彦四郎惟元、為抽軍忠、今月廿日罷向
玖球城候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武二年卯月廿五日
大神惟元(裏花押)

二四 深堀明意軍忠状

○大公文書
大日本書紀六ノ三

肥前國深堀孫太郎入道明意謹言上、
欲早依合戦軍忠浴恩賞、備弓前將來電鏡四事、
右明意、去月十七日預御教書、属大將軍右馬助入道殿御
手、兼前押寄玖球城南大干彦先縣、明意入道親頼瀬山左
衛門大郎右殿、遠朝志渡原彦次郎被執筆、是等次第大將
軍被勅文、去月廿八日被注進畢、同口次豊前太郎、同奥三、
江浦六郎次郎入道知見畢、然早浴恩賞、備弓前將來電鏡、
亦力抽軍忠、言上如件、

建武二年四月 日

二五 深堀時廣軍忠状

○大公文書
大日本書紀六ノ三

肥前國深堀三郎五郎時廣謹言上、
欲早依合戦軍忠浴恩賞、備弓前將來電鏡四事、
右時廣、去月十七日預御教書、属大將軍右馬助入道殿御
手、兼前押寄玖球城南大干、致先縣合戦、時廣自身被執
筆、若克馬次郎被執筆、是等次第大將軍被勅文、
去月廿八日被注進畢、同口次豊前太郎、同四郎入道并朝
足清六左衛門入道見知畢、然早浴恩賞、備弓前將來電鏡、
亦為抽軍忠、言上如件、

建武二年四月 日

二六 植田寂園軍忠状

○大公文書
大日本書紀六ノ三

豊後國種田庄一分御家人寂圓子息孫兵衛尉能綱、自去二月四日、幕向于珠城候、同廿七日合戦之時、於櫓手方攻軍忠之刻、若克石馬五郎被射貫額候、中間小藤次被射貫頭候、又今月五日合戦ノ候、於大子能綱白小尾頭被射貫、被射止左玉懸君下候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年六月八日
沙弥寂圓 (花押)
進上 御奉行所
一承了、

二七 種田寂圓軍忠狀

○抄軍忠文書
大分縣史料九

自正月九日府中藥園仕候之刻、去六月十四日珠城凶徒等、分子乱入高岡府之中、風聞候之間、馳向路次宮瀬候之刻、凶徒等隔河付流下候之間、追上船岡、白米魁計終口合戦、敵三人射隊候畢、一人掃部助入道、一人伊香又次郎、一人不知名字、然間子息四郎被射折弓候、又若克侍徒伊全安、被射貫腰候、如此依抽軍忠候、追落候畢、夜除事候之間、引方不存候候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年六月 日
沙弥寂圓
進上 御奉行所
一承了、大神重能 (花押)

二八 大神 (部中) 惟世軍忠狀

○新年文書
大分縣史料九

豊後國都甲庄地頭四郎惟世、馳向山城、致軍忠候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年七月十六日
大神惟世上
進上 御奉行所
一承了、

○在厚原八世後孫源代ナリ、山口正正、市上朝期九州守義の請書、六九頁。

二九 大神 (部甲) 惟元軍忠狀

○部甲文書
大分縣史料九

一國御家人都甲彦四郎惟元、二向玖珠、致軍忠候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年七月十六日
大神惟元
進上 御奉行所
一承了、

藤原宗能 (花押)

三〇 源 (戶次) 朝直書下

○抄原八幡宮文書
大分縣史料九

豊後國玖珠城落人等、所々縁起之間、將軍家御祈禱事、任先例仰供僧等、可被致精誠候、仍執迷如件、

建武三年七月廿七日
源 (花押)
賀美社宮士御房

三一 種田寂圓軍忠狀

○早稲田大寺藏後文書
西北朝蓮文九枚通七〇四号

豊後國珠城高洞寺凶徒等内、敵戶孫次郎入道宮練、貫來弁阿蘭索、同舍弟孫五郎以下、忽出山城、觸龍岡國靈山寺、相踏山山衆徒等、今月廿五日、押寄種田大箱房有快之船、速弘致十字在家、令打取同伏弘大進房父子等、擬令乱入府中高岡府之間、翌日、辰時、出吹岡番左衛門入道子息九郎宗綱、觸擲于大將古庄宮内入道阿阿之下、白嵩山妙見之庵、至同水上山之下、為懸所之間、為步行、致先懸、片時之間、令責落彼凶賊等、令燒弘城郭候之案、大將大將軍筑前次郎殿、當國守護代以下、地頭御家人等、各所被見知也、然則預已細御注進、為治惡貫、言上如件、

建武三年七月廿八日
沙弥寂圓
進上 御奉行所
一承了、 (花押)

三二 掃部助入道等三名速寄軍忠狀

○早稲田大寺藏後文書
西北朝蓮文九枚通七〇五号

去日、廿廿四日、幕向于珠城候、同廿七日、合、
若完城内、幕次被射、
正田四郎利貞、同十郎利貞、同十郎利貞、
判於一代不可統、仍為後日、
建武三年七月廿九日

兄第二入 掃部助入道 (花押)
次 元水 (花押)

○文獻通考卷七十四

渡狀 華次

三二 野上道圓軍忠狀

○建武三年九月廿一日
大分縣史料卷六

彼敵人是利左衛門督高氏、同卓義以下凶徒謀伐事、自最前集御堂、稱說後園球部高勝寺僧都、去二月廿四日以後連々合戰、今度致軍忠候之條、御見知之上者、不可有脚不審候歟、以此旨可有御上落候、恐惶謹言、
延元々年八月十五日
沙弥道圓
〔承了、〔花押〕一

〔上〕 御奉行所

三四 野上資賴代齊氏軍忠狀寫

○此書在文獻通考卷七十四
北朝建武三年九月廿一日

豐後國御家人野上彦太郎清原資賴代平三、齊氏謹言上、
欲早任海邊、京都所々合戰忠、預御一見狀浴恩賞事、
去年十二月十二日、口馬于左近將監具敏手、於伊豆國佐野山參御方、致合戰之條、口次義前太郎被見知說、大回十三日、伊豆國府合戰之時、抽軍忠候、次今年正月二日、近江國伊豫須之城合戰火死、狹間四郎入道、小田原四郎左衛門入道以下令見知說、次同十日、渡人渡橋合戰之時、資賴射火箭、其後乘流落柱押渡敵陣、致軍忠之條、須賀五郎、村敵治部房、小藤太郎左衛門尉見知說、次同十一日、唐橋戶丸合戰之時、資賴打組大田判官一旗、佐七郎左衛門尉令分取、即被焚檢之上、守護被許進說、次同十六

於法勝寺致合戰之條、古庄孫四郎、同六郎見知說、加之、預御教書、令免向球部珠城、抽軍忠之間、大將所有御註進也、
然早預御一見狀、為浴恩賞、可上如件、
建武三年九月 日
水了、沙弥〔花押影〕

三五 清原〔野上〕資賴軍忠狀

○建武三年九月廿一日
大分縣史料卷六

豐後國球部珠城凶徒謀伐事、野上彦太郎資賴、自去二月廿四日、迄同十月十三日、抽軍忠候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、
建武三年十月十四 日
清原資賴
〔承了、〔花押〕一

〔上〕 御奉行所

三六 深堀時廣軍忠狀

○建武三年九月廿一日
大分縣史料卷六

肥前國高木村一分地頭深堀三郎五郎時廣申軍忠事、
今年二月下給 將軍家御教書、令免向球部珠城、於三月廿七日、戰抽合戰之忠候、時廣親身奉事、此等上細、御勤文為分明說、然早下給御判、備前前日、向後外抽軍忠、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、
建武三年十一月十日
〔承了、〔花押〕一

三七 清原重通軍忠狀

○建武三年九月廿一日
大分縣史料卷六

三郎等見知、凡八箇月之間、連々合戰、每度抽忠、自身被統之條、殊功之至、不可勝計、然早給御判、欲備後說、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、
建武三年十一月廿日 清原重通
〔承了、〔花押〕一

〔上〕 御奉行所

三八 野仲道棟軍忠狀

○建武三年十月八日
大分縣史料卷八

豐前國御家人野仲三郎太郎道棟申軍忠事、
去四月十九日、於豐後國球部珠城最初合戰之時、道棟惣領相共屬于大手、於日肥肥前次郎陣、勵軍忠之條、豐前國延入六郎、同國垂水次郎同時合戰之間、令見知說、
一 同六月九日、同所合戰之時、道棟進先陣控一命、抽軍忠之條、豐前國跡田三郎、同國竹井家四郎等令見知說、
一 同八月廿九日、城中凶徒等、攻下榜子〔安〕、隨歷及敵々合戰之間、道棟亦懸先追退彼賊徒等之條、安心院五郎、謙山弥三太等同時合戰、
一 同九月十二日、夜目榜子放奇城中之間、道棟亦懸領

日安

〔安〕 助忠之刻、子息九郎忠春被獲取小輪之條、豐前國安心院五郎、同國田中三郎五郎人道見知說、一 同十月十一日之夜、被攻落當城之賊徒等之間、道棟又

兼前攻入城中、終軍功之矣、回所合戰之傍、驚皆以見知

大友近江次郎・同兵應助入道以下凶徒等、相謀、城之間、可迫而後等之旨、奉被下將軍家御教書之間、發向山城、同十月十二日迄沒落之期、不相滿數箇度之合戰、道春被統之矣、証人等分明之者、預于御注○為浴恩賞、日安言上、如件、

建武三年十一月 日

承了、(花押) 仁木義長卜認

三九 尾形諸利軍忠狀

○源氏文書
東前田源家人尾形三郎入道崇智後家尼心妙代子息又五郎

講利、馳向豊後國玖珠城、度々致軍忠事、四月以來迄于凶徒等沒落期、致願・鹿田・矢倉以下意圖、度々合戰之時、抽軍忠之矣、野中仲則并津布佐五郎次郎等為同所合戰之間、令見知哉、然早浴恩賞、亦為成向後言前之矣、言上如件、

建武三年十一月 日

承了、(花押)

尾形三郎入道崇智後家尼心妙代五郎諸利所進

四〇 藤原(近地)景能軍忠狀

○源氏文書
東本莊宗朝中書

近地孫一郎景能豊後國玖珠城合戰軍忠事、建武三年三月廿七日合戰之時、命堂、朝廣討

死訖、同九月十四日合戰之時、自身被統、其外數々度逐、按身命抽軍忠候之矣、明日也、迄于十月十二日城沒落期、致願・回上、勅掃部助発起之間、大將那後御向之時、御共申令在津候、以此、可有御披露候、恭情謹言、

建武三年十一月廿八日 藤原景能上
御奉行所 承了、(花押)

四一 大神(都中)惟世軍忠狀

○源氏文書
大分縣史料九

依玖珠城凶徒沒落後、豊後國都中在地頭因部惟世、今年三月十六日賜將軍家御教書、白字府致御六、白御合戰之最初、迄于凶徒沒落之期、抽軍忠事、就中六月九日合戰、余弟又因部惟世被統、七月十一日若克官六入道被射張之矣、御助文為荷也、然早下賜御料、為候後証、謹言上如件、

建武三年十一月 日

承了、(花押)

四二 清原(野上)顯直軍忠狀

○源氏文書
大日本史料六之三

豊後國御家人野上次郎三郎顯直軍忠事、去三月十二日、下賜將軍家御教書、白太寄附、大將御共仕、同廿四日、相向球珠城、迄于十月十二日夜、八ヶ月之間、致屋夜不遺之軍、連々數々度合戰之時、每度抽軍忠事、

仍六月五日顯直被統訖、其上夜後題之時、生捕日田橋原兵衛次郎下人、次下十月十二日夜、城沒落之時、魚尾宰相房令生捕軍、彼寄相房者、小山三郎顯成一族也、為福人之間、城內兵糧乏、併為此、生捕之矣、大功何事如之、以此旨、可有御披露候、恭情謹言、

建武三年十二月廿日 清原顯直
御奉行所 承了、藤原宗能(花押)

四三 深堀時廣軍忠狀案

○源氏文書
依實朝史料五

前田源家人深堀三郎五郎時廣、欲謀依合戰軍忠、浴恩賞、備前前時來進、同、時廣、去○月十七日預御教書、個人持軍右馬助、殿御手、最前押寄玖珠城南大千、致先、時廣自身被統、若克馬太郎被統、是等次第、大將軍統助文、去月廿八日被注進、同、次豐前太郎・同四郎入道并帆足清六左衛門、人道見知事、○然早浴恩賞、備前前時代也、亦為抽忠勳、言上如件、次筆持日安之矣、紛失之間、重所令言上也、

建武三年四月 日

四四 志賀頼房軍忠狀

○源氏文書
關本莊宗朝中書

第一見狀、賜津兵部充為因徒、馳參河原、去建武二年十二月廿

日、行合美濃。〔御方軍勢等、各擬合退活之刻、生虜兵進。〕若克刑部左衛門尉亮定重、則白惣頼御方被召渡公方、

建武三年正月二日、於近江國伊岐代宮城、抽軍功、追落因徒衆、

同八日、追落八幡因徒、進大渡橋上、先陣軍勢踏落橋、流于河之時、頼房旗差後藤大郎実氏同落入河、

同九日、追落橋上、先陣頼房被射貫左股之条、當手皆存知之、將軍家執事并船津四郎左衛門尉見知、

同十一日、惣頼御名代近江左近將監、打組大田大夫判官親光之時、於京都府橋島丸、頼房分取頭

入細河柳屋見參之上、一萬出孫太郎・詫磨彦太郎・豊東彦六入道以下致致見知、

同十六日、家人中兼左衛門次郎貞幸、令分取之条、朽細次郎・首藤三郎次郎見知、

同廿七日、於四桑河原、頼房自身致太刀合戦、被切右頂上、家人岩戸六次郎政長被切右股之条、詫磨彦太郎・朽細三郎見知、

同晦日、於四桑河原、親類野津孫次郎能憲、被射貫右腰之条、詫磨彦太郎・朽細次郎見知、

經丹波路、到兵庫崎、二月十日、十一日撰津園打出、豊嶋・上山合戦、勳忠功、致鎮西御下向御共舉、

將軍家御座大宰府之時、二月十一日、因往近江次郎貞順・因轉兵庫助入道・被已下、攝關豊後國玖珠城、擬打入府中之刻、守護代以下各家一族御扶持人等、大略馳參幸府、因中無人之時、頼房長時同十一日馳越高

因府、依揚御旗、地頭御家人等有御方志之條、頼房之聞、令惣因府中、着到已下就令注進下宰府、預御教書畢、府中下今無為之条、奉為惣頼、為當因、頼房忠

功為拔許哉、隨而免向玖珠城、一色石馬助入道殿、

可追討因徒之由、三月廿日賜御教書、馳向彼之城、八月間抽昼夜攻戰、資落賊徒衆、至功之廣、委所帶一色御門一見狀也、

以前案々、軍忠如此、早日賜御、見狀、備未代武略之文、且預御注進、浴熱功之負、欲開行簡居日矣、仍日安如件、

建武四年二月一日
〔承徳聖、沙弥(花押)〕

四五 植田寂園請文案

○淡編文書
佐賀軍史料卷四

豊後國豐口赤次郎入道跡地頭職事、今季五月廿六日御教書、同七月廿八日到来、謹拜見仕候、抑任被御下之旨、

被彼所、欲沙汰付深進孫太郎入道明憲候處、如數口赤次郎入道壽延申者、於寿延御口、愚見又次郎致京都合戰、下

給將軍家御教書、抽領西球城書畢忠之条、大將軍御一見狀當口、依何事罪科、可被召放當付哉、明意不可依申

之聞、全不可去退之所詮參上、可明申云々、仍不及、渡候、此条傳申候者、日本國中依神二御將、可蒙罷候、

以此旨可有御披露候、恐惶謹言、
建武四年三月三日
沙弥寂園 請

進上 御奉行所

四六 賀来成阿請文案

○淡編文書
佐賀軍史料卷四

〔入〕入道明憲中、豊後國豐口〔入〕入道壽延跡地頭職事、去年十一月廿四日御教書、今年三月廿二日到来、

謹拜見仕候、任被御下之旨、今月廿四日、植田大輪房〔入〕被彼所、欲沙汰付深進孫太郎入道明憲候處、如寿延子息又次郎申者、為御方云京都合戰、西球城書畢、抽軍忠、將軍家御教書并大將御、見狀當口、明意不可依申之子相、先度御入部之時、令中候詮、全不可去退云々、仍不及打渡候、此条傳申候者、中候詮、可蒙罷候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武五年二月廿八日
沙弥成阿 請

四七 植田有快請文案

○淡編文書
佐賀軍史料卷四

〔入〕入道明憲中、豊後國豐口〔入〕入道壽延跡地頭職事、去年四月廿四日御教書、今年三月廿二日到来、〔入〕見仕候、任被御下之旨、今月廿四日、

賀来孫五郎入道相共被彼所、欲沙汰付深進孫太郎入道明憲候處、如寿延子息又次郎申者、為〔入〕云京都合戰、云領西球城書畢、抽將軍家御教書并大將軍御、見狀當口、明意不可依申

之聞、全不可去退云々、仍不及打渡候、若此条傳申候者、八輪大菩薩御討、可蒙罷候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武五年二月廿八日
植田有快 請

進上 御奉行所

四八 志賀頼房軍忠狀案

○淡編文書
佐賀軍史料卷二

志賀頼房大郎頼房請言上、欲早依海道・京都・鎮西御共、豊後國玖珠城、筑後、

肥後・日向因徒退治以下所々合戦、就自身兩度手負、
親類若党部從數戰討死・手負・分捕・生虜等功勳、預
御吹簫・言上于京都・申進不足分懸訴、爾末代弓留后、
頼房恩賞地後、後山・香月内船尾參町校少事、

副進

一通 御下文 建武三年四月七日

一通 惣領御方御一見狀 建武三年四月七日

石、頼房依有御方之志、去建武二年十二月懸參頼東之刻、

同廿一日於美濃因春木、行合因徒請院左衛門督家信、

大將千、嶋津兵部元、御方軍勢等各擬合退治之時、生

隨若党副部左衛門尉、參海濱宮宿、以來屬惣領御手、自滄

近江因伊岐代城、於大渡橋上并京都因桑河原、向度頼房

口身被執、一捕・生虜及數々度、家子若党以下討死千

約之系、亦以敢幸也、誦而浴中所々合戦、自身乍被執、

雖乃一箇度不相漏抽戰功、致丹波路并鎮西御下向之

御共、給御教書、免向卷後因球球城、通落賊徒、肥

後・榮後・日向以下合戰勳忠節、半功既拔許之矣、御教

書并諸人符一見狀、注進狀等明白也、而建武三年四月、

以船尾爲恩賞被送下御下於珠城之系、而日之先至以

護典存、彼地惟參町、所出亦式捨余貫文、冠制之至還而

似失弓禰之名望、頼房雖不自身、爲大友庶子一流之系、

率親類家僕等、叶每度御大事之上、如承及者、以自身手

負鎮西御共、殊被賞款款、頼房云分限、云軍忠、強不相

劣于傍輩哉、爰勸見諸人之抽賞、當家一族等之中、分限

至忠遊不專于頼房、蒙受太之恩候、始而立身與家之類

多頭在之、持又口田・佐伯・合志・河尻・松浦以下九州

四一等、各指過分賞賞附居、何況頼房爲大將軍、

一族、方極榮也、爭可被超越于傳人哉、而沿參町恩沢之

系、殆未代理理也、此等子細不遺于具証、且預京都御吹簫、

且被相調御雜業、尤被加撫有御扶持、可申進恩賞不足之

懸訴哉、就中今爲難敵這討、有免向于肥州縣、頼房亦
最前馳向可助戰功之上者、理亦爭無御情懸哉、尤感敬蒙
款馳略之勇矣、仍相言上如上件、
康永元年九月 日

四九 八坂道園請文案

○成程文書
大分縣史卷三

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

手剛・永正・末次名等事、去、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

筑前國深江大藏九條重軍忠事、
右、去年夏後御突向之時、御共以來、於所々御陣、致宿
直宿回候事、殊被懸・高平札・高崎等御退治、別抽忠節
之系、御見知上者、預御證判、爲權後代屯親、組言上如上件、
正平四年八月 日

五一 成恒種定軍忠狀

○成程文書
津浦訂正編年大分史料七

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

五〇 深江種重軍忠狀与

○成程文書
津浦訂正編年大分史料七

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

五一 七井種世軍忠狀

○成程文書
津浦訂正編年大分史料七

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

〔五代〕藤原朝臣、宇佐神領後後園田、

去年十二月廿三日大将御下著以来、最前馳、致宿直變固候畢、

一 同廿九日、屬大將御依御止忠手、馳向友枝、致忠勳畢、

一 今年正月八日、屬大將御召兵取助入返手馳向水湖、令

破却城郭、追敵御敵、

一 白字夜部赤尾、御敵等打出之間、今月十九日、屬守

部宮山三郎手、同部馳向原野致合戰、御敵追散候畢、

一 同廿一日、所々凶徒等打出下毛郡、燒払高瀬以下之

間、馳向酒千原、御敵追散畢、以此旨可有御披露候、

恐惶謹言、

親正二年正月 日

進上 御奉行所 「承丁(花押)」

五四 一色道齋書狀

○大友氏書

去廿九日合戰、不慮式之間、無力引退日出候了、於今者

任京都御意、自本郡も御伏候、山方合休候、一兩日

中、可罷出候、佐伯勢已昨日打付候了、又因轉守、京野、

佐志、高来勢、志摩郡者共、彼是千余騎同返候て、是ま

て打越候、合連々候者、此處等分務候間、念々可打引候

其陣事無心木、能々御談合候て、要旨宣候八人所二、可

有御引揚候、恐々謹言、

十一月 日

田原六郎藏人殿

五五 都甲惟元軍忠狀

○都甲文書

都甲彦四郎惟元申為真冬森伐御免向之間、最前馳參、至

于最前園糸口原合戰、抽忠勳候畢、以此旨可有御披露候、

恐惶謹言、

正平六年十二月廿六日

進上 御奉行所 「承丁(花押)」

五六 都甲惟元軍忠狀

○都甲文書

都甲彦四郎惟元申、為真冬森伐御免向之間、去年九月十

日、馳參高田以來、於所々御陣致忠勳畢、就中同年十二

月廿五日、大神筑前次郎・土岐藏人大部以下御敵、打出

于向園糸口原之間、為前懸之隨一、抽軍忠勳、加之、迄

于向園安心院、津布佐・深見以下凶徒没落之期、抽忠勳

候畢、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

五七 大友氏奉書下写

○大友氏書

豊後国球部郡野上村半分事、預借利根孫三郎頼貞之處、

口口口左衛門尉・同孫六・隼人佐等搦城郭、封守護使

致狼藉云々、事支若大拍罪科歟、所置、不日可去退之旨、

重頼聽之、若頼不承引者、頼田大權房相共破却却城、打

渡下地於頼貞、載起請之詞、可注申之狀、如何、

正平七年三月廿五日

式部丞(花押) 守護代

五八 河依(久恒)範房軍忠狀案

○河依文書

豊前河依小太郎範房甲軍忠事、

一 安業七郎、尻高次郎四郎、安九條二郎以下御敵、構土

毛郡原形村於城郭、搦籠之間、去月十日、依右御免向、

御供仕、致敵々合戰、凶徒等城郭、令破却候、

五三 河依(久恒)範房軍忠狀案

○河依文書

豊前河依小太郎範房甲軍忠事、

一 去年十二月廿三日、大将御下著當国以來、致信直寄同

院、

一 今年正月八日、區殿沼兵庫介入返手、馳向長瀬、搦城郭、

追放御敵畢、

一 同二十一日、親源水凶徒、打出下毛郡、燒払高瀬之間、

馳向被手院、追放御敵、令破却兩城、是等次第、野依

彈正忠貞誠、出口三郎同所合戰之間、見知也、然、賜

御判、備後代祖相言上如件

親正二年正月 日

判

判

判

判

判

一、今月廿三日、大隈小隈、中村河原合戰之時、散々致合戰之段、御前七、同所合戰住林七郎、太郎、白木治十郎、令見知被舉、然早御判、為後代統、恐々言上如件、

正平十年二月 日

判

五九 於保胤宗軍忠狀

肥前國於保弥五郎胤宗申軍忠事、

肥前國於保弥五郎胤宗申軍忠事、
一見了、(花押)
肥前國於保弥五郎胤宗申軍忠事、
右、為朝敵謀伐、去八月廿七日御出小城之陣、同十月二日御榮向豊州日川城、同府中之時、令致忠節候了、即豐前因字在井城其於所々、今致宿直豐固、迄于同博多津、令抽忠物候了、然早下賜御判、為後代統、恐々言上如件、

正平十年十一月 日

進上 御奉行所

六〇 橘薩摩公世軍忠狀

橘薩摩公世軍忠狀
一見了、(花押)

橘薩摩東福寺四郎太郎公世申軍忠事、

右、為 朝敵御退治、御榮向肥前小城郡之陣、被前驅參、其後致用、日田御降令參着候託、仍定于豊後、豊前、博多、原于御手、致忠勤候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

正平十年十一月 日

六一 木屋行実軍忠狀

一見了

筑後國木屋彌正左衛門尉行実申軍忠事、

右、去八月十八日、為討治肥前國因徒、御免向之間、白最前令御共、同九月一日、小城々攻合戰抽軍忠、為御討治是後因因徒、同十月二日、御免向日田之間、令御共、球、由布、狹間、國府、大神以下於所々御降致宿直、豐前因字佐、城井、至筑前國納小、博多、令御共候託、然早下賜御判、為備他統、言上如件、

正平十年十二月 日

六二 田原直貞恩賞宛行狀

田原直貞

田原直貞
恩賞可知行之狀、如件、

於香城城表數日致忠勤之間、當庄内上與格實文下地、為恩賞可知行之狀、如件、

文和九年三月 日

六三 惠良惟澄申狀案

阿蘇城守

十代

阿蘇城守字致忠謹言上、

欲早被許御沙汰任嚴重、給旨、令旨預御通行、筑前國下座郡、豊後國大佐井郡、同國日田庄、肥前國曾勢崎庄、肥後國守富庄以下条々子細事、

通 給旨案

二通 令旨案

一 筑前國下座郡、豊後國大佐井郡事、

右、田原者、前大官司惟時、以上元弘二年、可支配一區之由、至賜 給旨之節、下座郡二百余町者、令配分親類十余人、大佐井郡者、為小所之間、所允行于忠九郎惟成也、是則元弘之初初致軍忠事也、而去正平八年、惟時為致盛城退治、令在津之時、配分之一族等、如元知行無相侵之怨、惟時他界以後、上即豊前守惟基何惡歎之際、令掠領者也、但惟澄并光水、控監惟富知行分者除之間、任 給旨配分知行之条、構慮而惣政所分以下一族知行之由、惟基管領之案、敢不知其意、凡〇惟基者父子共二人被支配之間、於不知行之分者、非無其罪、至惟澄并一族知行之者、惟基争可成致望乎、而此三四六年之間、混亂知行之案、併無道之甚故也、惟基依掠中、若有被御下之旨者、任給旨欲家御成致、只其子嗣、白一族之中、鳥子彦六人冠補道令參之間、可言上同細事、次大佐井郡事、為 給旨、通之内、惟成知行託、其身通討死之上者、御沙汰不可有子孫者致矣、

一 豊後國日田庄地頭職事、

右、庄向者、去建武三年、山門 臨幸之刻、惟時依勅定、奉委懷内侍所、東坂本被厚所上卷入之間、勅賞上被行、下賜 給旨案、而去年十月〇日田出羽守水殿你參御方之由、令上落云々、幼稚之子息繁合濟、

六八 藤原(志賀)氏所領忠狀

○志賀文書
○大友家文書
○大友家文書

志賀勢太郎氏房軍忠事

一去年十一月廿九日、後宮御幸間、依為親父藏人太郎賴房當病、氏房自前而馳參赤松御陣處、官勢退散之間、迄于玖珠八町止、致忠節訖。

一今年三月就後宮、并菊池武光以下凶徒、當同打入之刻、賴房城郭寄來之間、既十餘日、日夜致合戰之處、彼逆徒引退、高崎城郭向之間、寓所々通路、迴方便、抽忠勳訖。

一御敵高崎陣引燔之時、於當回九五山、致敵々合戰、若竟中尾兵衛二郎氏平切、中間聯次被射死、

去六月廿七日肥後御免向之間、白坂初致御共、三船賊攻之時、若况中尾少三郎賴平台、并進平五見見右邊訖、回禦氏、并甲在御陣所々致忠節之旨、且預御注進、且賜御証判、欲備後証候、以此旨、可有御披露欲、恐惶謹言。

延文四年十月廿日
藤原氏房上 案在侍
進上 御奉行所
一承了、
(花押)

六九 大友氏案注進狀案

○大友家文書
○大友家文書
○大友家文書

一【大友式部丞注進狀案、案頭、宗雄小領事一】

一因被左衛門藏人奉頭本知行地事、

如被仰下者、奉頭知行分可注申之云々、如下給奉頭代御申事狀者、亡父兵庫助入道土段跡事、被召總領雄幸

可有奉御沙汰云々、此案土段跡所領者、後後因入田郷

半分、肥後國隈守田庄地頭方半分、筑前國香椎社頭隣

事等也、而後所々、出羽左近藏人入道土全拜領也、隨而、

建武三年於魯國地球城上被世界訖矣、
出羽勢太郎宗雄申本知行地事、
豐後國入田郷半分、同回地球部大隈村者、宗雄親父出

羽次郎季貞相伝之、先年他界遊、彼路同正宅短給之
歟矣、

七〇 大友家文書錄綱文

○大友家文書
○大友家文書
○大友家文書

○二月少貳賴尚、阿蘇人宮司内應於氏時、而相謀擊菊池、
武光未知之、○白羽七子余騎、先到於後、尸次船時、自乘

不戰而退豐後、武光欲進向豐後、而促少貳求會、賴尚斬
其使而應氏時、乃率大軍渡筑後河、陳高良山、欲進武光、

後阿蘇氏亦起兵、屯小田谷、○武光○戰而應氏時到
小田、攻保月寺地菊池、
○武光高崎陣、不利而退兵、賴房步于九五山、前勢多市尾氏兩二部氏

字開九所、中開津大町二所、武光幸小田、由原三處亦於氏時、有戰功、
武光利小田、

七一 大友家文書錄綱文

○大友家文書
○大友家文書
○大友家文書

八月志賀○負病來高崎城守之、使其子赤太郎氏房、往接

州大野莊島置城、○九月少貳余騎、宗像氏、松浦氏

應氏時、催惡米聚於豐後、總守一万余騎、勸進武光奉候、
良親子、率四方騎到筑後、分兵為三道、入豐後、筑前、

氏時與氏時誤而分、道拒之、氏時與氏時及少貳、松浦、

宗像合兵一万余騎、為其、道到筑前陣長者原、氏經于松

千九、氏時于松九管、千余騎、向其、道、氏徑、氏時

等與武光、武勝、武等戰於長者原、初勝後敗、而氏經、
氏時及諸將引兵、悉退豐後、氏時孫氏經守高崎城、冬資

入岡城、宗像、松浦提白作城、武光本據良居率府、自至
豐後、陣府内、分軍攻高崎、洞、白作、
宗像、宗像、
宗像、宗像、

七二 大友家文書錄綱文

○大友家文書
○大友家文書
○大友家文書

頃阿氏經赴兵集聚兵、然無來從者、僅以二百余騎、解還

而西、氏時招氏經於府内飯、而謀擊菊池

七三 斯波氏經狀案

○阿蘇家文書
○大友家文書

連公雖可進使者候、先度如申候、這路難儀之間、熊案内

令辨意、心中更非等閑候、其辺事一向懸存候、當城攻寄

候者、隨進退可有御計候、兼文科所取、自是雖可進候、
御望在所不知之間、不進候、注給候者、可寄進候、且

京都可被申子細候者、可承存候、身之一大事候、可注進候、
定不可有子細候、此間御辛責、返々懸申候、恐々謹言、
八月廿七日
左京大夫氏經先拜

謹上 阿蘇大宮司殿

七四 斯波氏経書状案

〔大分県史文書〕
〔大分県史文書〕

不審之矣、脱□了、囚徒既打入府中候、未攻当城候、
若寄米使者、一向悪申候、次通路事、土左次郎被談合、
御末候者、悦入候、恐々讀言、
九月九日
阿蘇人百司殿
御書

氏経書状

上三前
到集九月十日

七五 志賀頼房軍忠状

〔五原史文書〕
〔五原史文書〕

志賀藏人頼房出陣之間、雖不叶起居、自去年□□月八
月參伴高嶋城、私候人將御陣、致日夜懸闘之間、送遣子
息弥太郎氏房於豊後國大野庄馬鹿城、打寒因従式光木因
之通路、致不追合戦之間、連々軍忠雖不遍注進、
貞治元年十一月十日合戦之時、
武光一族奥屋左衛門次郎討取之上、氏房親相大將孫三
郎・若克中尾兵衛二郎・左近太郎被統率、

同十一日
分捕頭、不知事、若克又五郎・盗助次郎、中間後藤
次・六郎次郎・彦五郎・源内、被統率、
同廿九日
若克東石衛門太郎高清討死、若克古見孫二郎・中間六
郎次郎・源八・七郎次郎、被統率、

同二年正月廿五日
若克進平五郎討死、若克後藤太実房・中尾兵衛二郎
氏平、被統率、

以前奈々、大機如斯、此外不可勝計、合戦未落恩、刺務
之儀、日数相阻者、依可有公私不備、先祖所令注進也、
早御預証判、爲備後規、言上如上件、
貞治二年卯月 日
〔承丁、別部人稱〔花押〕〕

七六 島津師久訴陳状案

〔山田史文書〕
〔山田史文書〕

一 師久訴陳申状、
豊後合戦并薩州同乱事、度々注進言上仕候之處、依路次
往復建候、不令参看候矣、思歎不少候、御爲薩州御合力、
去々年九月廿六日、懸子肥後路、令発同候之處、於中途
当国凶徒和泉下司諸太郎、兵衛尉保榮、同一族牛屋近江
将監高元、同族薩州馬越藤四郎行家、同一族薩州戸北七
浦誠從等、依差塞通路候、討被兼致合戦候矣、及親類若
克并洗谷一族數十人討死手自被云々、其間子細、皆頼房
方言上仕候事、定御注進候哉、雖然重而可令発向候之處、
地頭取家人等、更不不随併候、因々凶徒、已余りて過半
終起之間、難聞候上、討政保并一族等之儀、致合戦以後、
從去々年于今在陣防戰間、御合力之事、不達其節候之案、
且者可足御高察候哉、凡者分同難儀之段、管領之御使長
刑部少輔見知候事、次若弟氏久、於薩州、自去年迄于今、
向合敵陣、致合戦矣、口禰之段、注進仕候哉、次豊州合
戦之儀、大内介弘世被渡海、帶池肥後守武光退散之間、
御方大慶此塚候之矣、無義釋弘世依備国鎮西亦及建儀、
管領已別防同府御間之儀、則進軍候事、隨而御上治之
由、預御返事候、驚存候、急進九州退治被経御沙汰、被
差下討手候者、所仰候、次建儀等候、兄弟相共踏兩國、

連日致合戦候之案、被下廉直御使、預御檢知候者、可然候、
次分国軍勢等、可成師久催候行、被成下御教書者、可成
因従退治御兼候、以此旨、可有御披落候、恐々謹言、
貞治二年五月二日
左衛門尉師久

七七 大友家文書録綱文

〔大友家文書録〕
〔大友家文書録〕

卯月足利氏経無軍利、出高崎城城卓、至前白河持之後、兵輪失
所、出高崎城被焚、不詳取事、日令通候事、因今年六
月兵將頼房頼房長等、故押馬場内事、頼房等、

七八 征西將軍宮懐良親土令旨案

〔征西大友家文書録〕
〔征西大友家文書録〕

豊後入田・小川退治事、所々城追落之次第、高名之至、
殊所惡思食也、亦訂被抽旨節候也、令旨如此、感之以状、
正平十八年九月九日
大藏卿 判
阿蘇人百司郎

入田・小川、豊後之何郡なるや、また考へず、北前氏経
より推むらへ之状、入田入浦り、あれハ、入田・小川の
者共、其頃ハ宮方□して、阿蘇の所領全となりてあり
しを、惟村引而て將軍方に誘入れたるなるへし、それ故
惟澄ミつから免向して、所々の城とも追落したりと見え
たり、惟村か所々構要番といへるも、入田・小川のあた
りに城郭を構へたるなるへし、大藏卿ハ、次の〔九十年
月の令旨の上包二、資世とあれとも、世系さたかならず、

七九 斯波氏経営下

○延山文書
源朝正正親平太左史科八

豊前國平田宮林合戦之時、致軍忠之由、尤以神妙、亦可
抽戦功、仍執速如件、

貞治二年正月十日

宇都宮大膳光嚴

修理大夫 (花押)

八〇 直尚書状

○福甲文書
太左史科九

於当城、忠節異于他候之衆、感悅存候、且其子細、可注
進申候、恐々謹言、

二月十八日

都甲彦四郎入道殿

直尚 (花押)

八一 大友氏時感状

○都甲文書
太左史科九

於紀四郎之城、被致忠節之衆、感悅無極候、恐々謹言、

卯月五日

都甲千代主殿

氏時 (花押)

八二 頼直書状

○都甲文書
太左史科九

於紀四郎城、被致忠節之衆、尤神妙候、可令注進候、恐々

謹言、

卯月八日

都甲彦四郎入道殿

頼直 (花押)

八三 近地玄心目安案

○近所文書
熊本半史科中世

目安、

近地次郎藏人入道沙弥玄心謹申、

右子細者、子息藏人、郎次房、去貞治元年十月十日島屋

城合戦之時、依打死仕候、度々雖申入候、未及恩賞之御

沙汰之候条、狀存候、然而、適近地名内地原方半分、

万田左衛門太郎宣元女子乃津台屋七郎次郎入道妻女所当

知行仕候也、然而、乍令彼所領知行、此間之合戦、惣領

志賀殿付手不致合戦上者、云由緒、申藏人二郎打死、彼

近地名半分七郎、郎入道妻女於知行分者、宛給藏人大次郎

打死恩賞、弥乃致軍陣之忠勤、恐々目安言上、如件、

貞治二年十月日

八四 藤原(田原)氏能讓状

○前田正徳田原氏文書
同前正徳年大友史科八

たうしやうおとむれにおいて、うちよしょうちしにをいた
すといふとも、によしよくわひにん候間、ゆつりをし
た、めおく物也、もしなんしの身二候ハ、氏能ちきよ
うの所々、ほんりやうしんをん、所ものささす、ちき
やうすへき也、のちのために、ゆつり状、くんのことし、

おうあん二年七月十一日

藤原氏能 (花押)

八五 近地玄心讓状

○志賀文書
熊本半史科中世二

近地玄心謹言、

玄心兼代相伝所領也、但子息藏人、郎、於島屋城令打死

之間、息女愛婿女納子儀為、孫子鬼二郎丸七、相副次第

証文、所讓與也、於御公事以下者、守惣領至配之旨、可

動仕也、仍讓状如件、

貞安二年七月廿五日

沙弥玄心 (花押)

このゆつり状一見了、沙弥 (花押)

八六 田原氏系図氏能譜

同前氏系圖氏能譜
同前正徳年大友史科八

田原氏能の譜、貞安四年六月廿六日、相傳子今川治部

少輔義範之御偏、白備後尾路津、令乗船、同七月二

日夜、取于豊後國高崎城之処、菊池肥後守武光之若党

平賀新左衛門尉、携于安善於氏能之分領同家郷之間、同

廿二日夜、恙遺於下勢、追落後城、平賀彦次郎以下凶徒

等三人討捕之説、礼部有御見知、同年十一月晦日、下賜

將軍御感之御教旨、細川相模守頼朝、被伝之矣、

八七 今川義範書状案

○同前氏能文書
太日本史科中世

鎮西討治事、時分可然候之間、先立能將高崎城候、就其候其刃入、御海東候、早速馳參候之様、御計沙汰候者、悅入候、向馮存候、白人道方進伏候、定其趣令申候、入道近日、白長門關可罷越候、伺候者、其内參候御計候者、殊喜入候、恐令進言、

七月四日
阿蘇大旨可殿

義範 花押

八八 今川義範書狀案

○同前案文書下
大目本末文書下

去月廿八日御狀、今日三日到来、悦承候了、仰荷池二郎、去月廿日、罷越候、雖然、城近木指寄候、用心事可得其意候、

一 渡海事、中務少輔先立赤間閣下着候、洞舟候之由、音信候也、隨而入道能若防州候之由、雖其間候、猶々、可被渡海之由、今日以舟中還候、不可有程候候、然者、其以前御書、被成一功候者、喜入候、当城之休、如御徒見候、無殊事候、定可申候、度々御言候、喜入候、恐令進言、

八月二日
阿蘇大旨可殿

義範 花押

志安 八月十日列奉

八九 室町將軍家御教書案

○同前案文書下
○同前案文書下

鎮西入道下向之後、被參入于己高崎城、殊木付城堅固出、九、用意兵船之事、令了了候、大友親世注進之趣、速令

聽之、御感不淺之状、依仰執達如件、
志安 四年十月二日
武藏守 判
木付大炊助殿

九〇 近地玄心讓状

○本質文書
○本質史料中書一

讓状、

豊後國大野庄志實村内近地名地頭職事、玄心重代相伝所領也、但子息職人二郎、於島原城令打死之間、息女愛器女嫡子依為、孫子鬼二郎九七、相副次第証文、限水代、所讓与也、於御公事以下者、守忠頑宛配之旨、可動仕也、仍讓状如件、
建徳 季文霜月十日 沙弥玄心(花押)

九一 今川義範軍勢催促状案

○日向朝野文書
○北朝朝野文書九二一

武光以下凶徒寄來当城之間、致合戰中、早馳越佐伯、蒲江辺、可被致忠節之状、如件、
志安 四年十一月十四日 治部少輔 判
十持八郎左衛門入道殿

○聖德太子御神ニモ同内等ノ文書アリ

九二 室町將軍家御教書案

○同前案文書
○同前案文書

於豊後國高崎城、致忠節由、大友左馬助親世所注進申也、尤神妙、向後亦可抽戰功之状、依仰如件、
志安 四年十一月晦日 武藏守 判
高田英作守殿

九三 室町將軍家御教書案

○大友家文書
○同前案文書

於豊後國高崎城、致忠節由、大友左馬助親世所注進申也、尤神妙、向後亦可抽戰功之状、依仰執達如件、
志安 四年十二月晦日 相保守(花押影)
田原下野棟守殿

九四 室町將軍家御教書

○早稻江次守所成後傳文書
○早稻江次守所成後傳文書

於豊後國高崎城、致忠節之由、大友左馬助親世所注進申也、尤神妙、向後亦可抽戰功之状、依仰執達如件、
志安 五年正月十三日 相保守(花押)
一後藤八郎二郎殿

九五 白直書状

○大江文書
○大分県史料一〇

旧冬十一月十六日歸札、正月十六日、委細拜見仕候了、仰高崎御要事、無相違御踏候之由承候、返々日出相存候、殊、於京都其披露候之間、身一人悦と相存候、

隨而度々御合戦、無別御事候之由承候、返々日出悦入存候、ふと罷下候て、雖不申差へ候、而々今度之御大事にて候之間、御用にも可立申候所存、朝夕金懸仕候へとも、私ならざる身に候間、無力事候、貞直も去年勢州罷下候て、不思義、無別事候、去冬極月廿五日上洛仕候、又因徒正月十七日打出候て、及難表候間、又近明日之間可罷下候、我等幸苦も可有御察候、勢州事候御静慮候者、難何事候、乞照候て、可罷下候、因事者一向憑入候、又京都御用者、可蒙御候、持又京都之式、無別表候間、不申候、今右詰方御敵等討治之様候間、公思日出悦、尚々因事者、一向奉憲候、被懸御意候者、恐惶候、事々期後信候、恐々謹言、

正月廿日 貞直 (花押)
川浦殿 謹言

九六 吉弘一景書状

○本説文書
大分県史料三

一日預御札候之間、則進御事候野、御田樂重安以下名々事、於下地名、任先規令知行、至御神事者、無返転可致沙汰之旨、度々申候上、而致放火狼藉、及刀傷打傷候之由、承候、驚入候、適今明高崎へ、以事書、条々申談于細候、左近藏入道殿事、可有尋御沙汰之間、可申注進候、松尾彦九郎事、直可相尋候、次内野尾名事、就此御状承候、同相尋之候て可申候、神人嗷訴之段、被看仰候之条、就公私悦入候、每事期後信之時候、恐々謹言、

九月十四日 一景 (花押)

九七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料二

氏白海米築豊後山香郷在、一、豐前路、親世襲攻之、日原所居之、城、彈正少助令出原氏能援親世、備会花、親世諸兵大攻、花城城拔之時、十三日氏能、

九八 今川了俊感状写

○了俊文書
大分県史料一〇

白坂前、於豊前被致御忠候、結句豊後花高合戦御高名、日出候、殊更不日三睡場豊前、又御在陣候、重々事候、とても其國被入功候上者、相構高烟事、口々御沙汰候者、可日出候、恐々謹言、

九月廿二日 了俊 (花押影)

此御感状虫喰中ニテ、異言被寄也
田原下野守殿

九九 豊後国花岳合戦手負注文

○了俊文書
大分県史料九

御感可有候歟、一、花岳合戦氏能手負其千負注文、木村六郎五郎左七、兼刀中務左七、加札河刑部左七

〔豊前六郎四郎ウチキス〕

〔豊門彦次郎左ウチ、同方カク〕

〔同彦二郎カシラ〕

〔元小次郎チノシラ〕

〔市丸弥次郎ウチシラ〕

〔各地弥二郎カシラ〕

〔成吉民部丞右ヒサ〕

〔同同孫太郎ウチシラ〕

〔松尾七郎ヒタリノカタ〕

〔秋吉三部五郎チノシラ〕

〔同三郎次郎ウチ〕

〔小垣原佐衛門次郎セトシシ〕

〔加札河弥五郎カシラウチキス〕

以上十六人

一見脱了、尤神妙也、

〔了俊御出候〕

一〇〇 田原氏能軍忠状

○了俊文書
大分県史料一〇

田原下野推子氏能軍忠事、依字都宮常陸入道謀叛、霜古御免向之間、急進可馳參之旨、依御下、不進時日、令參陣、自去一月廿三日、於豊前勝陣、令堪忍、連日野臥合戦之時、親親若受毎度被盡費、爰去八月廿八日夜、豊後国因徒、忍上同川浦邊花岳、構城殿、宗豊後、豊前国通路之間、事延引者、依可看

天下之御大率、自惣領大友方、就度々之注進、可懸向彼城之由、以備御意、不日罷回彼在所、去九月六日晚、押寄當城、散令致合戰、親類若致數千人、雖被統、同日討治代、不移時、令戰、親類若致數千人、雖被統、五日、没落高畑城之時間、致宿台御陣、馳參當御陣八町餘、所々御勢仕以下、致宿直之段、顯然之上者、領于京都都御陣注進、申賜御感御教書、為備後代龜鏡、粗言上如上件、

正安七年十月 日
承了、(花押)

一〇一 田原氏能軍忠狀

大分縣志列一〇

田原下野權守氏能申所々軍忠事
一去正安四年六月廿六日、致治部少輔殿御共、白備後國尾路津令乘船、同七月二日夜、最前取上巻後國高崎城之処、菊池武光之宮堂平賀新左衛門尉、構要言於氏能分領東郷之岡、同廿二日夜、差遣手物等、追落彼城、平賀彦次郎以下凶徒三人討捕之条、禮部御見知之上下、不可有御不善者哉、同八月六日、伊倉官若菊池武光以下凶徒等、寄來當城之岡、踏一役所申事、充于翌年正月二日、百余度合戰、每度親類若克以下數輩被獲、勳日夜軍忠、至于今、我置親類手物等於當城、抽隨分至功之次第、大將御見知之上者、不能巨細言上者也、同廿三日武光以下凶徒退散高崎陣、打上太宰府之間、同三月廿六日、馳參筑前國高宮御陣、同四月八日宰府御進免之時、令御共於佐野御陣、致忠節矣、
一 同廿二日、為肥前國樞大路敷城向家寄、中野野左近將監殿并惣領大友手輩相共、打廣同後部村、取誘向城、

同廿八日權參佐野御陣、至于同八月十二日宰府因徒洗落之間、於御手勳忠功、自當御陣移城山之時、致御共、其後為千分、屬右衛門左殿御手、於日限御陣、兩年奉畢、致忠節矣、
一 肥前國高米都因徒略取之間、山名少輔次郎殿為大將、被差遣御勢之時、依被仰下之旨、於分領同部山田庄内、取誘山田、野井兩城、苦惱無木村左近將監以下手物數輩、度々凶徒寄來之時、每度抽戰功、諸方御勢仕之時、無懈意致忠節、禮部御愛向之後者、屢被御手、抽忠忠之条、山名少輔次郎殿見知畢、

一 同六年二月十四日夜、菊池次郎武政、同肥前守武安以下凶徒、馳越筑後河上津浦、打寄肥前國本折城、及合戰之間、為後攻自高上御陣、右衛門佐殿御免向後部村之時、雖被仰下、諸軍勢等悉依令許退、任被仰出之旨、致金吾御共、其後於野老野御陣、抽忠節之刻、彼城既依及難儀、為兵根助成、御手人々并惣領大友手輩相共、差遣親類若覺等、廻種々計略、致殺米以下合力、勳至忠節、

一 菊池赤泉筑前入道以下凶徒等、構限同田中千守之間、同六月十日夜、筋一探、松一探人并差後勢相共、被致夜討之時、以手物等令合力、抽戰忠、若克三人被獲之条、御手人々見知畢、
一 肥前國千早因徒退散之後、於同宮守御陣致忠勳之処、為翌後同大野政城退治、惣領大友親世孝向一族若覺等、及合戰之間、氏能可馳越之由、親世就令申、同九月八日、馳越當國、於大野城致日抽戰忠、於進人以下所々、廻計策、致忠節之次第、惣領名代見知畢、

一 豐後國球珠郡小田田相守以下輩謀取之間、同十一月十三日、大友親世名代相共、馳回同郡高勝寺敵城、同十三日致敵々合戰、追籠因徒等於城內之時、親類若克致

十人被獲、手者一人令討死、其後于都宮如法寺若狹介氏后、并惣領大友手輩相共、取誘同部内古坂城路之間、以氏能親類手物等令合力、逞日致野伏合戰、進于入於郡内抽忠勳之次第、惣領注進之上者、不能巨細言上者也、
一 同七年正月廿三日、城并常陸前司人遺依謀叛、彈止少弼殿御免向之間、不廻時日馳參城并御陣、致夜夜忠勳、諸方御勢仕并連日野伏合戰以下、每度勳戰忠、親類若克致盡被統之次第、大將、若克、皆々預御注進者也、同八月廿七日、凶徒取上豐後國山香縣花岳、依及難儀、同九月二日馳越彼城、同六日攻上當城、致致強合戰、親類以下五十余人被獲、追落彼城、同十一月廿日馳參城并御陣、進于高畑城没落之間、致忠節之条、踏台御見知畢、
一 同十一月一日、致宿台御共、馳參筑後國八町御陣、於河橋渡瀬口要言以下、致日夜驚岡、同十一月十日夜、為御先勢、治部少輔殿御渡筑後河安成瀬之時、屢被御手、打入石垣城、同十二日追落同國皆尾山因徒、同十五日御手人々相共、打寄黒木北河内、同十六日至于黒木城來降服之間、勳忠節訖、

一 同廿五日、惣領大友親世名代參河大藏少輔兼保且磨因轉守、大村讓政入道相共、為御先勢、依打越肥後國小高村、翌日後敵城令没落之間、同十二月七日、打寄同國日野陣、進以千田、山本以下所々凶徒等、同十五日、金吾、禮部御等同國岩原之間、田馳參彼御陣、迄于今在陣、諸方御勢仕以下、勳至忠節、
以前、軍忠之次第、且須京都御注進、日賜御註判、為西後代龜鏡、粗言上如上件、
正安八年二月 日
承了、(花押)

一〇二 大友氏離感伏案

○部甲文書
大分縣史料九

去月十六日、豊前國高家城合戦之時、致忠節云、尤神妙也、亦可抽戦功之状、依仰執達如件、

水和二年二月廿一日

武藏守(花押)

部甲三郎四郎殿

一〇三 今川了俊感伏

○部甲文書
大分縣史料九

於豊前國高家要吉、被統云、尤以神妙也、向後亦可抽軍功之状、如件、

水和二年二月五日

沙弥(花押)

部甲三郎四郎殿

一〇四 室町將軍家御教書

○部甲文書
大分縣史料九

去月十六日、豊前國高家城合戦之時、致忠節云、尤神妙也、亦可抽戦功之状、依仰執達如件、

水和二年二月廿一日

武藏守(花押)

部甲三郎四郎殿

一〇五 室町將軍家御教書

○早稲田大學所藏校勘文書
長野研究會校勘文書F

去月十六日、豊前國高家城合戦之時、致忠節云、尤神妙也、亦可抽戦功之状、依仰執達如件、

水和二年二月廿一日

武藏守(花押)

「後藤五郎人道成」

一〇六 今川了俊感伏

○部甲文書
大分縣史料九

於豊後國竹濶城責、致忠節云、尤以神妙、亦可抽戦功之状、如件、

水徳一年七月十日

沙弥(花押)

部甲新左衛門尉殿

一〇七 五條頼治軍忠申状案

○五條文書
熊本縣史料中卷四

頼時畏言上、

抑当国、豊後大略難廣凶徒、頼治踏矢部、津江岡山、抽忠節候、当山者肥後、筑後、豊前、三ヶ国之堺、九州無及之要害候、仍度々大變凶徒、口入是之邊候、就中今年九月因徒引退八代之陣、已後、当国守護人大友修理大夫親世親類大友大郎親氏、守護代如法若狭守氏信等、率筑後、豊後兩國之勢、自方々可攻当山之由依其間候、致用意候之処、去十月七日入手、自筑後向打取口、取陣候樂、同八日、擲子、自津江口口勢打入津江大野候之間、差副頼治千右衛門等於津江聚、致防戦之間、不迫私候樂、同九日、筑後向之敵立牧口之陣、寄泉山、山山候之間、地下張手等

等相支、致防戦之最中、黒木四郎、定勢、以下当国御方蒙等同心令合力、及致令合戦、御方打勝候樂、凶徒數百人被戦、數十人討取候樂、因徒黒木城、筑後、近所引退、亦坂取陣候、同十一日、夜、白山中内通敵陣之輩、引大勢於山中許要之在所候之処、兇徒、族輩、而依上野伏候、不入合戦引退候樂、同十二日、自生葉向日出以下凶徒、打入湖山北河内候、頼治手定勢、族以下馳向、終日致合戦、迫私候之刻、凶徒多被討被戦候樂、頼治引退候樂、山中如野伏以臨弱之少勢、請方合戦、每度勝利、併取運候、於今度之節者、初頼時將軍御手之外、他手不相交候、如此之字據、以次可有御披露候哉、頼治感忠謹言

十一月九日

港下、頼川殿

一〇八 今川了俊書状

○志賀文書
熊本縣史料中卷二

御無言之間、幸中京都候也、可有御心得候、御方御參、返々日出候、凡御一家事、今度者随分取立中候分候之間、殊々日御事、御進參無元候樂、自去年取分被致忠節候之由、吉弘御門被押申候、日出候、向後者別御可惡申候也、悲願御方事、吉弘御門御同心、能々可被扶持申候也、更不可有私御儀哉、為公方候之間、相構不可有御等間候、一城御持候之由承候、御忠節之至言入候、是非取讀候者、一迺可申沙汰候、恐々謹言、

一月廿四日

志賀入部殿

了俊(花押)

一〇九 今川了俊書状

○了俊書状一〇九

其城事、度々水候間、随分いそぎ、一勞つかはし候へく候也。豊前路よりの合力の事ハ、大内家人等、聞の事をうたかひて候て、これよりの勢つかはし候ハ、やかて事を左右ニよせて、大友方をも合力し候へきやうなきへ候ほと。さやうニなり候てハ中へ後まてのわつらひ候へく候はと。このややを、まつ大内方ニ申つかわし候て、心やすく思候ハ、其後の勢仕の事ハ、豊前日よりも細候ましく候間、その左右を待たて候也。玖珠路の事ハ、今も煩あるましく候間、すてニハや、二郎殿三部殿も、若狭殿一所ニ御こゑ候也、陸奥守も、明日六日以後にまかりこゑ候間、あなたよりの合力勢仕、子細候ましく候、
- それの事、地下のこやおとすれ候て、つうろなんきのよし、うけ給候、たとひつうろ候ハすとも、その城の事、この月うちハかり、御ころへ候はとの兵根もし候ハ、それまで御ころへ候へく候、もし又、そのほと兵根もあるましく候ハ、中へ城をすて、
- なたニ御こゑ候歟、しからずハ、ひめ嶋まで御うつり候へく候、とても豊後の事ハ、たとひその城をすてられて候とも、かたたくし申候へとの御教書の下ニて候間、事を大ニ杜候て、しす申候へく候間、そこニ御心しの勢仕を、面々の御身をまたくせられ候て、豊前路よりの勢仕の時を、御まら候へく候、もし兵根候て、今月中ハかり御ころへあるへく候ハ、とてもそれまで合力を御まらつけ候へく候、相構へく心しかく、御された候ましく候、たとひその城候ハすとも、我らも

御教書と、上意のをもむきのま、に、合力申、さたし付申へく候上ハ、城すてられて候ニハ、よるましく候、
日本国大小の諸神八幡大菩薩天満大白衣大神も、御討候へ、面々の御あんとの事ハ、かたくさした付申へく候、今のま、にてハとても大友方の事、その身も聞の事も、するへく候上ハ、いかにも御申入んに候へく候、そのために、ハやかさねく、京にも申入、大内方にも申遣て候間、豊前路の勢仕事、子細あらしと存候、一城中の人々御知行分あんとの事、水候、めいへく二進候へハ、みちのほともわつらひにて候間、まつ一紙ニ御あんとを申へく候、追てめんく御名字ニて進候へく候、なニさまニも、御所御奉公の名字を御かけ候事をハ、始中終公方としても、御扶持候へきよし、かたしけなく御下され候ハ、御事も御心やすく候へく候、恐々謹言、

三月四日

了俊 (花押)

御返事

一一〇 大内隆弘奉書案

○隆弘奉書案

去八月十九日、豊州衣都佐伯松原之城落去之劍、陸退之振、久利方法進被聞召、神妙之由、御上意之趣、如件、
応永五年九月三日
隆弘

伊藤次郎左衛門とのへ

○隆弘奉書案

一一一 大友親世書状

○大友親世書状

くすのひきち事、けいやく仕へきよし申候、もしほんりやうふんに、如法守の物ともあしよわそのほか、此うちの物とも、もしハまんくにより候て、かくれい候事、いかにもあるへく候、さやうの事をハ、よくおはせつけ候て、一ミち御さたにあつかり候ハ、返々祝入候、恐々謹言、
七月十一日
親世 (花押)

はさま殿

ちか世

一一二 渋川満頼書状

○渋川満頼書状

字都宮佐田隆盛守事、於当手忠節之仁候、分領事案書等事、自然之時者、被致台力候者申入候、恐々謹言、
八月五日
満頼 (花押)

字佐部入中

一一三 頼宗知行宛行状案

○三田氏成宛行状案

別府城立花動之時、尽粉骨喪表忠實無比類候、依是長須百貫之地宛行果、全可令知行狀如何

応永拾二月廿二日

頼宗ノ料

正田又四郎殿

一四 六郷満山薩山衆徒等申状案

六郷山衆徒等
本公領内志

六郷山ノ衆徒等一同謹言

右、今度薩山之趣、非別子細、昨吾当寺務代仕職以來、

対衆分、往古旧代無其先蹤以非例、致奇首被充行不慮之

課役、御百姓一分之公役、令勤仕候事所以者何、今度御

所作並以下、為上意之趣、上者令致馳分奔走勤仕中之趣、

御傳造作以下之費及六十余貫之案、六郷平均役錢僅使、

事、満山之傷此事、候、仍付彼寺務代、雖指一同之訴状、

未達上聞、結句重而御壓作御供儀、是又雜用可為同前、

段錢又同前也、然者衆徒業以貧道無力之案、家計以難必

微分、依之、或先規旧例之法合神役等令陸次、或元來不

道之勤行修学令陸京事、是偏寺務代ノ苛政所致也、爰殊

以來徒等、懷恐鬱鬱至年月事、当山所々坊領并有限役出

以下、更無其罪科令神助、他郷他所地下人等、例大理由

袖之本不事、当寺務代之所為、以外無定也、如此之例、

仕山無其益之案、令薩山候者也、口為上說、且為無私曲、

糸通帳ノ堂社坊請ノ具数案々、注進明鏡也、忝奉仰上意

御資察之旨者歟、然任例、連累上成、昔、満山衆徒等

間多等之罪、亦可致御祈禱之精誠折状之旨、如何、
応永十九年己十一月十五日 満山大法師等各言上

一一五 滿濟准后日記

○徳勝寺正徳年大友史料一〇

(永享三年)六月八日晴(中略)、明日九日、九州下向向

長老無為和尚、隱西堂并奉行向大内御代守、大内雜掌可

參門跡出、可令下知給、内々上意應以経住法眼申遣赤松

播磨守方了、白鳥山方以遣佐河内守案々申旨存之、昨

日御案々申了、山名金吾權門案、九州へ上上使向長老被

下遣事、内々被御送旨等在之、其子、今日早上使上向事、

尤可被仰談候、大内、大友和勝事、細今早速可被仰遣

山、白探題方々申入、大内、大友同前之調、不及是非被下遣了、

今度又同前儀、雖然至上使上向事、於大内、無益不可被

下由頼歎中人、子細御尋媿、今度筑前國立花城以下大友

知行所々要害悉以迫落了、然者定此等要害度賜後、可和

睦仕出可申入候、其時名御沙汰様、又於身兼、難儀也、

平三可有御略旨申入也、於此一段者、重可為御成敗歟、

以前向又使未〇〇參洛間、旁大内、大友向入心中又〇〇

可和御旨被仰下也、可為何様哉云々、山名申入様、重上

使上向事、上意尤珍重者、早々可被下遣案、尚々可然御

沙汰云々、島山童兒又同前(以下略)

一一六 大内持世書状

○佐田支考
地補訂正徳年大友史料一〇

口邊へ可被打感之山度申候了、定在田參河守、飯田

越中守可申談候、今度、途御奔走候者尤可然候、其境事

一向憑存候、委細意案方より可申候、恐々謹言、
十一月廿五日 持世(花押)

佐田以輔守殿

一一七 看聞御記

○後朝書狀卷第拾遺

廿五日、晴(中略)抑御、此間大内注進、大友肥後國

落下聽候、仍大内、河野等大勢、彼國へ亮河、城共致々

所燒落、而大友以謀與へ引退、大内、河野等大勢所へ

引入、自後取巻テ貴戰之間、大内失利引退、河野勢若下

被討、河野も討死云々、大友又勝軍之出、飛脚到來云々、
(以下略)

一一八 飯尾為種、飯尾貞連密奏書

○津川支考
地補訂正徳年大友史料一〇

於立石城、被致御節之旨、大内修理大夫注進到来、尤神妙、

亦可被抽戰功之用、所被仰下也、仍執迷如何、
永享七年十月廿七日 大和守(花押)

吉川院河守殿 肥前守(花押)

一一九 大友親綱書状案

○大友家支考
大分縣史卷三二

御身上事申候候、懇示給候、本宮候哉、仍所懸美濃守所

まで承候間、口北在渡守跡、并破戸事不可有子細候、日

差事、迫而可申談候、尚々落居不可有幾候様歟、同〇者、

早速現形候者、悦入候。香細美濃守可申候間、省略候。恐々謹言。
一月七日
田北治部少輔殿
親綱 在判

二二〇 大内持世書状案

○大友家文書箱
大分県史料三

上使等退より被仰子細候。日出候。此間念願満足候。欲悦過御察候。於向後名、弥不可有等閑候。隨而就路火車。王子城衆方への状、認進之候。可得其重之由。白是も申付候。御出之時、愚状可被遺候。猶々路火車者、不可有相違候。早々以面可申承候。恐々謹言。
二月九日
田北治部少輔殿
持世 在判

二二二 大友親重知行預ケ状

○若林忠義
大分県史料五

朽網郡内朽網屋内少輔跡拍貫分事、乃姫城堀志忠貞、預候。可被知行候。恐々謹言。
九月三日
若林彈正忠義
親重（花押）

二二二 室町將軍家御教書

○毛利家文書箱
大日本古文書四

豊後國敵城東神野事、被追落之旨、大内修理大夫注進到来、尤以神妙、弥可被抽戦功出。所被陛下也。仍執達如件。
永享八年五月四日
毛利少輔次郎殿
石原大夫（花押）

二二三 室町將軍家御教書写

○小早川家文書
大日本古文書七

豊後國敵城東神野事、被追落之旨、大内修理大夫注進到来、尤以神妙、弥可被抽戦功出。所被陛下也。仍執達如件。
永享八年九月四日
竹原太郎四郎殿
石原大夫（花押影）

二二四 大友親綱書状案

○大友家文書箱
大分県史料二

其方時候、委細不給。悦喜仕候。就其、日差事、須藤治部所○代所立。去月初比社被地事、可有知行適合申候矣。須藤加賀所より、遊其段申候候。日差事、佐田・鹿越之中間と申、いかにも、可然候する仁、を被遺候。即地下をもしかくと、沙汰候する事肝要候。又、姫城之事、兵糧一束に留候由、其間候。落候不可有幾程候。御手洗・薬師寺者共五六人、此因五日以前、糧出候によりて、敵方之事おもひやられ候。恐々謹言。
剛五月十四日
田北治部少輔殿
親綱 在判

二二五 弘忠書状

○田北治部少輔
大分県史料五

其後、可啓案内候処、便宜不懶候て、無其儀候。一切非等閑儀候。御同心候者、本望候。兼又御故事、近々可落居候之間、日出候。

一先按当城へ敵さしよせ候時、御高名其承及候間、大橋方に物語候。是、事外ほうひ申候。我々まも抱寄仕候。因幡・伯耆・出雲の御勢、廿四・五日比は、可下若候間、いかにも、代をかたく御持候て、勝利を本に御沙汰あるへく候。其に御料候事に候間、万御心安存候。一当陣事、無托不家候間、不中候。
一波村・河本、符中へまかりつき候間、可心安候。毎平朝後儀候。恐々謹言。
壬午五月廿一日
田北殿
弘忠（花押）

○大友家文書箱
二毛取録文、一内八脚書二ヨリ出次。

二二六 大友家文書録綱文

○大友家文書箱
大分県史料三

六月九日親綱攻○姫城、十一日城陥時、有○軍士登到。

二二七 姫岳首到人名

○大友家文書箱
大分県史料三

永享八年六月九日

姫岳着到次第不同、(但大將分人持家)

袋新左衛門尉 袋左馬介

小浪彦二郎 兩太郎

江欸二郎 小原下野守

田原右馬介 山口跡二郎

衛藤大膳亮 田北佐渡守

廣川新左衛門尉 上津荒木圖書介

吉弘七郎 重吉太郎

大塚出泰守 御手洗駿河人道

森下次郎左衛門尉 志村三河守

田原備後守 木付右京亮

原尻大和守 佐藤勘解由丞

大家兵部丞 御手洗但馬守

富隆筑前入道 大和近江守

伊美大和守 伊美六郎三郎

市川伯耆守 御手洗土被亮

御手洗伊豆守 大塚兵門守

都中四郎次郎 船田但馬守

松武山城守 敏戶孫二郎

原彈正忠 針八郎右衛門尉

高山九郎 御木尾張守

佐保愛宕代 蒲木土計允

長小野丹後守 蒲木又五郎

龜山將監入道 堀淡路守

上尾伊豆守 忠貞大和守

利根氏部丞 都中治部丞

松本因幡守 下崎山城守

新根新右衛門尉 臼杵又二郎

岐部山城守 瓜米尾沙松丸

吉岡大和守 伊美孫二郎

笠良木義盛守

神木越後守

神山石見守

五部兵部丞

有田勢三

龍臺土佐守

朽網備後守

上尾孫三郎

渡部伊勢守

岡野前入道

神崎越前守

大江三河守

上野三郎

田原下総守

丹生彈正忠

生石右京亮

石垣紀伊守

岩屋彦次郎

芝原彦次郎

福田長門守

井門氏部丞

南家新右衛門入道

若林彈正忠

立石龜德丸

正田淡路守

御手洗三郎

御藤孫次郎

御手洗兵部丞

高崎若狹介

樋田伯耆守

下郡助五郎

二宮若狹介

朽網伊豆守

原尻左馬介

右田七郎

深柄三郎

藤井長門守

手負木佐上但馬守

立石氏部丞

權田大炊介

神崎撰津守

富米八郎二郎

上野威人佐

大津留三郎

生石宮内少輔

吉岡上總守代

松武氏部丞

能一小次郎

丹生大炊入道

樋田兵部丞

小佐井上佐藤代

關千代法師代

俣見孫二郎

御手洗兵庫助

小出佐渡守

武川大膳亮

市川上總介

高崎十郎右衛門尉

俣見肥前守

田口甲斐入道

山根六郎右衛門尉

林二郎

田北將監

河原右馬亮

廣川兵部丞

都中三郎

栗柳寺四郎二郎

都中加賀守

合成源若代

賀嶋雅乘助

水松將監

吉弘丹後守

津守筑前守

石垣二郎五郎

關石見守

幸野筑後守

龜門松徳丸

御諸六郎

山口土計丞

寒田八郎二郎

首藤伊豆守

野出自房亮

本莊宮鶴丸

ひろたけ城衆

平井上野守

荒倉越後守

敏戶孫三郎

藥師寺新五郎

山田長門守

丹生九郎

木田對馬守

豊饒彈正忠

長賀實代守○太学介

大和薪右衛門尉

都中丹波守

御手洗大膳亮

今村次郎四郎

行成六郎次郎

賀米次郎

紀帶刀

吉弘孫三郎

松岡山城守

若林丹後守

高山飛彈守

中村二郎

立石土計丞

忍留湯民部少輔

木付大炊介

宮野撰津守

宇野十郎

岡新左衛門尉

水庄千寿丸

上野新左衛門尉

巽十右衛門尉

熊谷河内守

津久見太郎

宇壽繁乘助

賀嶋新右衛門尉

林鶴一代

葉師身紀伊介

葉師寺下野介

伊賀上大和守

小田貞枝守

木付貞枝守

戸次高藏

死去人致

本庄新石衛門

石田主計丞

高九郎二郎

六月九日

一教紙衆

板井彈止入道

津久見一郎（代）ちうけん一人

「落居は十一日、是は九日着到也、中軍兩所的人数は、

不付之」

○「一」内ハ「増補訂正徳平大友史料」一〇所収ニ付也。

伊賀上遠江守

賀嶋越中守

津守又二郎

林美濃守

大津留一房丸

戸次保二郎

葉師寺石見守

久上智次郎

二二九 室町將軍家御教書

○小早川家文書

經岳事、攻落之由、大内修理大夫注進到來説、弥可被抽

戰功之由、所被仰下也、仍執達如件、

永享八年七月五日

右京大夫

小早川又太郎殿

二三〇 足利義教御内書付

○小早川家文書

經岳事、攻落之由、大内修理大夫注進到來、尤神妙、亦

可抽戰功也、

「永享八年」

七月九日

竹原太郎四郎殿

○花押影

二三一 室町將軍家御教書

○毛利家文書

經岳之事、大内修理大夫注進到來説、弥可被抽戰功之由、

所被仰下也、仍執達如件、

永享八年七月五日

毛利少輔次郎殿

○花押影

經岳事攻落之旨、大内修理大夫注進到來説、弥可被抽戰功之由、所被仰下也、仍執達如件、

永享八年七月五日

平賀尾張守殿

○京極義隆傳

二二、筆文ウレ也。

二三二 細川持之之感状写

○小早川家文書

經岳落去之次第、御注進之趣、則令披露候、殊粉骨之至、

尤以神妙之由、被仰出候、仍被下御内書候、御面日之至候、

自大内方、可注進候也、恐々謹言、

七月八日

竹原太郎四郎殿

持之（花押影）

二三四 大友親重感状

○長野宮家文書

去廿三日、於安心院合戦之時、粉骨之由承蒙人候、弥被

致忠節候者可然候、以面可賀申候、恐々謹言、

八月廿八日

長野宮内少輔殿

親重（花押）

二二八 看聞御記

○増補訂正徳平大友史料一〇

永享八年六月廿五日、晴、住心院參、先日御祈參意畏申、

探聞、去十一日、豊後国大友城責落、有逸謀焼云々、大

友五郎、大内成新、介子息被誅之由注進云々、公方御悦

敬、入々參賀、南御方被參、春日御共參、御大刀進、付

三条如例（以下略）

二三一 室町將軍家御教書

○小早川家文書

二三五 看聞御記

○経路書長徳進道四

廿三日、晴、九州落居之由注進、而々御親進之由、三条
被告、仍御太刀進出之由申、南御方御札被參、源宮相三
条へ參拜、九州敵敗後不知行之間、大内陣をはつして袖
落居之由注進申云々、年始天下泰平殊珍重也、(以下略)

一三六 菊池為邦書状

○五本支書
熊本史料中三四四

度々注進令悦書候、仍肥前為安、津江向為用心出陣候、
不審時ハ、可被中談候、此刻一人被抽御忠節寄、肝要候、
恐々謹言、

二月三日

為邦 (花押)

五條殿

一三七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分縣史料二一

○頃前酒西探道洩河教直叛表致、属大内政弘、筑前・筑
後・肥前・肥後・豊前州士多受之、於是政親率竹刺左馬
頭、

繁成・片山氏・富来氏等數十騎、到豊前因、屯龍上、州
士城井石衛門佐・長野定威守等從中津陣糸原口、政親先
鋒擊破之、城井戰死、政親又遣其族立花兵部大輔、將筑
後國兵向教直白牛城、教直不及防、逃、而赴肥後、菊池
十郎重朝為迎之、謀再學、而懼政親武備、不得果、既
而教直依政親請降義政、有政親執略而許之、
○立花兵部大
輔、左馬頭也、但去計其姓名也、

一三八 大内家奉行入連宮春書案

○水弘式部
熊本史料中三四四

貴方事より最前令渡海被能忠節候處、去年豊前中渡之時、
宇佐郡於島越合戦之時、太刀打高名之玉候、殊被蒙此候
衆、誠神妙之至候、
御體形様御下向之時、一段可申沙汰候、不可有如在無沙
汰旨孫可被致忠節候、恐々謹言、

三月十七日

水弘式部

弘讓

一三九 杉重隆書状写

○杉重隆書状
熊本史料中三四四

貴方事、口殿前令渡海、被致忠節候所、今年豊前中渡之時、
宇佐郡島越合戦之時、太刀打高名之玉候、殊被蒙此
候衆、誠神妙之至候、御體形様御下向之時、一段可
申沙汰候、不可有如在無沙汰旨、孫可被致忠節候、恐々
謹言、

文明三

三月十七日

重隆 (花押影)

影下候

矢立沼四郎左衛門尉殿

一四〇 志賀親家中状

○志賀親家
熊本史料中三四一

まんしゆ香より申され候事々、拜見
一なおりのかう商しよくの事々、
しゆつしおあ、まつもとかつせんおん、やう
として給おき候、就中まつもとふ九の専、同七年へ
ふ年より、まいわ四ねんちまへとし、五年
の間ハ、けだいなくりや、
候了、雖然、かうりやくくわん年つちのとのとし、
きむれの城をめされ候以後、けんだんしよくおハ、右
つ、
あつけおき候、それより両や人として、
回前に入そくをめしつかあ候、
おうまい六年つちのこの大内盛弘とき、ま
んしゆ香より、りんかんそと申そう、きやう都ひきや
くとしてのほりて候、御使をつけ候てくだり候、そ
のきよかん、いつれでも候へ、庄主をのそま候ハ、
寺家に被仰付可給出、上る候ける間、まつもと名をの
そま申候程、そのま、に庄主を給候、そのしふん前
入郷内寺家三ヶ所之取、まん御代んと申うけ候之間、
二十ヶ年候たんハ、すてに岩御代くわんしよくの事、
しはなされ候とゆう共、当郷りやうしよくの事、一所
けんめいの地にて候よし、あわの守なけき申候といえ
とも、上聞にたつせず候、つかあ田原筑前守むほんに
つゐて、彼内者山下又九郎・ミしろのすわつと申物、
あそ、
「ち名之内くちの城をとり、けんきやう仕候、
いよさか出のむら地下人守、城しゆに同意仕候、以外
之子細二候、被地下仁等、何もめしとりまいらせへき
よし、被仰出候といえとも、あわの守申候段ハ、まつ

もと名の事、りんかんそ^二寺家せいはいの事、おほせ
つけられ候^一やまむ、かれら^二彼御付候^一する事、かんよ
うたるへくばよ、申あけられ候ほどに、そのとき
きこひたされ候、せんく^一のこく^二上意をうち
うけ候、さか田の地下仁のこらすからめ、ち
うけんを申候の間、いっれおもさたをいたすへきよし、
彼御出候の間、まんしゆ寺より一回^二なけき申候とい
えども、御せうんなく、候^一よて、おのこてをうし
なみ、度々あわの守を^一え、たのむよし申候の間、そ
のととき申こいゆるしおかれ候、いまにかれらかしそん
ある事に候。

一、えいきよう十一年羽州上様御代より、又向しよくあい
も、せんきのこく成敗仕候、そのとき松本庄主けん
ようつうくわん時代より、りやうしよくふんとして、二
人つ、めしつかあ候ところに、嘉吉二年のあへ年、親
洲・羽州さま御内殿、小国よりくたミ山の城、御うち出候
当国の事いづれもき地事の事にて候、ことに入田、一方
田御てきの事二候之間、いつかたよりも人そくまいらす
候ほどに、まつもと名のふんを、羽州さまへ民部大輔か
所よりまいらせ候、それよりゆのいんた、かひ河の御降、
くすつむれの城ら^一庄主^二以降までも、めしつかい候
しよう、つうくわん^一とき^二時、れんく^一高山^二さまへ
わひ事申候間、民部大輔か所へ返給候間、いづれとも
めしつかあへきよし民部大夫申候、庄主しきり
わひ事申候間、一人の事お入返て候、自然^一五陣時着、
二人ともめしつかあへきよし、さいざん申さため候
了、同さか田の村、たけ田二分の事、これまたせん
く^一のこく^二せつ^一したかい候て、いまにめし
つかあ候了、

一、かい物の事、りやうやくふんとして、前々よりあきない

につけかわせ候へとも、御内殿御買物候之間、これさ
まきよ^一ねんより、一度のふんハ申つけす候、
一まつもと、さかた、たけ田二ヶ所、代くわんをさた
めおき候よし申され候、これ又ほう事候とき、さい
ゆのため、内者申付候、寺家りやうをまん所り
やうふんとして、おんふに不仕候、直入郷内いづれも
せんく^一あいかわり候て、不申付候、雖然、上意を
うけ候するま、可致成敗候、以此旨御取合、預御披
候候ハ、可日出候、恐性謹言、

久保大炊助殿
文明七年卯づしの申上候、
本庄伊賀守殿
三月廿七日
親家(花押)

四一 少貳政寄書状案

去年十一月十八日、至佐竹郡連発候、已後所々合戦数ヶ
度得勝利、敵数討捕候、本望候、然者神崎・三根郡、
基球・兼文・上座郡、五ヶ郡打明候、然後同日向申合、
日田界大山、陣取付候矣、該郡敵城落居不可有幾程候、
方々時節可然候、此時早々其方業渡海候者、勢筑可達本
望候、各城或恐入候外、無他候、恐々謹言、
十二月八日
政寄 御判
宗中務少輔殿

一四二 田原氏歴代勲功次第注文

○大友家系文書
○田原氏歴代勲功次第注文
○田原氏歴代勲功次第注文

田原先祖大友中務大輔泰成以来三代將軍とて、忠節之
譽、重吉披臣之分、少々注之、東寺台戦、打出浜合戦、
西坂本合戦、西宮々口合戦、南都合戦、唐橋合戦、室町
合戦、二条河原合戦、先懸云々、吉田亮向、先懸之時、
大田判官大夫親光一族、即左衛門尉於分捕、宮方時、雄
渡平礼城、同高崎城、天、天
武光、対治村、天合戦之(以下欠)

明応四年乙卯八月
二、以田原泰成、作中務大輔者、家伝之誤也、
泰成、以左近藏人卒、義、自家、追称其祖父而已

一四二 大友親治書状文

就鹿越城案、年来辛勞之段、悦喜申候、然者就出陣、近々
先陣可預馳走之由、承候といへ共、弥城審堅固之儀、憑
入候、何様以上、可申承候、恐々謹言、
八月十一日
親治(花押影)
田北治部少輔殿

一四四 大友親治感状文

就鹿越 辛勞之段、悦喜申候、然者就出陣、近々
先陣可預馳走之由、承候といへ共、弥城審堅固之儀、憑
入候、白足直、以賀状可申候、先以能々可被中間事、計
要候、勞々辛勞之段、以賀状可申候、恐々謹言、

十一月十七日

親治 (花押影)

田北

一四五 大友親治太刀等寄進狀案

大友親治書狀
大友親治書狀九

奉寄進紙之事 (花押)

右、任先例、幸小城并跡、出候之末、不可勝計口、益仰
折念、然者太刀一腰、馬一疋、令敬進候、依口狀如
件、

明応七年戊申八月十五日

備前守親治

賀來社

高師

一四六 大友家文書録綱文

大友家文書録
大友家史料二

○示、義子前州、○親土、父之者也、

○七口親治使佐伯推勝將兵攻坂門松城、郡土野上大和
守・帆足安美守・岐津口太郎、野上新左衛門・馬場彦
四郎、占候與一等有

○真敗走而帰回也、此時野上大和守・森伊勢、足
安美守等、被衝有功、親治作書慶勞之、

一四七 大友親治感狀

大友親治書狀
大友家史料二

去七口門松城合戦、雖乃無足、以清田右馬頭一味之正、
碎手被獲候、高名無比類候、弥被助粉存候者、肝要候、
辛方之通以面可申候、恐々謹言、

八月十二日

波津久新九郎殿

親治 (花押)

一四八 大友親治書狀

大友親治書狀
大友家史料二

去番於高山辛勞之候、丁今無忘却候、自然之時者、弥被
副意候者、可悦入候、何様以面可申候、恐々謹言、

十月十九日

工藤彌正忠殿

親治 (花押)

一四九 大友親治感狀

大友親治書狀
大友家史料二

去十六、佐田古城攻之時、辛勞感候、弥々懇入候、必
以面可申候、恐々謹言、

十一月十八日

佐上原兵衛助殿

親治 (花押)

一五〇 大内義興感狀案

大内義興書狀
大友家史料二

法泉寺殿御上洛之路次、於撰津国河辺郡難波水堂、応仁
元年八月十日合戦之時、舍見大夫・郎弘春討死罪、同御
在京留守三年正月一日、於長門阿武郡地福郡合戦
之時、親父左衛門大夫氏久・舍見孫・郎延忠、同弥五郎
幸氏西三人、於一所討死罪、就中乃白田郡・珠珠郡敵討
治業遺姓、去年十一月七日、於珠珠内山合戦之時、太
刀討高名、殊數ヶ所被衝、刀先斷、郎從、由三三落
合加防戦之方、扶身命云々、家人僕從等同被衝之案、神
妙方以勲功感復無極之案、如件、

明応八年正月廿五日

木武左衛門大夫殿

一五一 大内高弘書狀案

大内高弘書狀
大友家史料二

今度与風至佐賀岡金連与若津候之間令申候、仍先状如令
申候、安元乃欠之儀近々事候、各至登前因出狀候、大友
備前守同発足一兩日中候、然者此度被相談、要問事可預
懸先候、併遺存候之趣、委曲金連与令申候、恐々謹言、

三月廿四日

村上備中守殿

一五二 大友親治書狀案

大友親治書狀
大友家史料二

門松敵討治候者、則時致彼手仕度存候、我等事者、無
余儀相存候、雖然被調衆候、急度承、浦足來助、

白[○]審府[○]其[○]一[○]之可申談矣、其外請勢、

「[○]時[○]者[○]」[○]今可被申完候、五日以前可申越之由、

浦辺並、[○]天聖院渡海、大内立山口候、一定候、船索堀

船を懸[○]、持候て、浦辺を專に可動之由、注進候、其内我

等可[○]子細候共、於普代侍者、抛万事、可思節折節候之

「[○]一[○]」[○]定節候条、於家不可有忌却候、此由、先[○]回被

中聞候、白是懸[○]以候、別而可買申候、恐々謹言、

八月一日[○] 野上大和守殿 親治[○]告知

○(一)内[○]六[○]通[○]野上[○]大[○]和[○]守[○]殿[○]三[○]所[○]取[○]二[○]コ[○]リ[○]謹[○]言[○]。

○[○]野上[○]大[○]和[○]守[○]殿[○]増[○]補[○]訂[○]正[○]編[○]年[○]大[○]友[○]家[○]文[○]書[○]録[○]一[○]四

未細々不申通候、然者編にて候者、者妻大和守依頼法、

一味候、外聞家儀無曲候、雖然、当家之事者、代々島州

仍其方之軍、於城口御座候事候間、自然不審之者、能通

候する事、願存候、殊先年親にて候者、少給地一所遣候故、

其後違安候由承候、其趣定而年行其可申候、猶々其方之

一五四 大友家文書録綱文

大友家文書録 大分県史料二

頃年一二月二十三日州守江沖合戦、幸野右京亮有功、

四月大津留兵庫助攻田原親房様度幸礼城、有戦功、七月

二十四日豊前国仲津各諸嶋合戦、高木康右衛門尉刀戰、

被削、十一月十六日州佐田古城合戦、田北六郎義隆父子兩

被野上清[○]、幸野右京亮先弟從因轉守本番持[○]、有戦

功、共有親治感書[○]幸野、大津留、島本、田北五郎義隆等、

○[○]大津留[○]兵[○]庫[○]助[○]攻[○]田[○]原[○]親[○]房[○]様[○]度[○]幸[○]禮[○]城[○]、

今度統用原[○]二郎義房成敗、至康度幸礼城攻口、被碎手候、

檢存無比類候、殊無足懸走、追而一段可買申候、恐々謹言、

卯月四日[○] 大津留兵庫助殿 親治[○](花押)

○[○]大[○]友[○]家[○]文[○]書[○]録[○](大[○]分[○]県[○]史[○]料[○]二[○])[○]二[○]三[○]考[○]四[○]。

就向家執達之儀、近年軍忠不及申候、殊田原次郎謀叛之

刻、播磨雄雄率礼城、被抽忠節之条、權逐成敗候、感候候、

仍為賞賞、米浦六拾町分之事、預置候、可有知行候、恐々

謹言、 六月八日 富米彦三部殿 親治告知

一五七 大内義興感状家

去月廿三日於豊前国小高岳城驚、凶徒大友勢、阿少次勢

当口悉通討合戦之時、太刀討被親斬御并御從手、勝華人佐

被親討[○]、林太郎左衛門尉親義[○]、候共、人益統之由

杉小次郎與昇津連之旨、尤神妙感悅之至也、亦可抽戦功

之状候件、 文龜九年八月十三日 乃美備前守殿 親治

○[○]大[○]津[○]留[○]之[○]感[○]書[○]大[○]分[○]県[○]史[○]料[○]二[○]五

一五八 大内義興下文家

下 末武左衛門大夫長安、

可令早領、長門國阿武郡橋内智川津五百石野内親忠等、

前四上毛郡酒丸拾五石地、藤下石高門次等事、

右以人、所允行也者、早守先例、可令領知状如件、爰件

地事、上明治七年十一月七日、於豊後国玖珠郡曹内山合

戦之時、味方無利而、右田右馬助弘弘人等、討死之刻、

一所進出、太刀始敵圍所被攻、已身命危急之処、郎徒僕

一五九 中尾道厚吉状

古田文書 増補訂正編年大友史料一七

藍原三町分、妙見尾御城守、尚々不被動之由水候、先真分申談候、然若以後不可相違、恐々謹言、
文龜三年八月十日

中尾源兵衛尉
追厚(花押)

古庄右馬殿

一六〇 佐田泰景軍忠狀

佐田次郎泰景
軍忠

一見了(花押)

去明應七年十月十一日、豊後勢至佐田庄令乱人之間、

執權善提寺、彈正忠俊景二所權儀之処、同五日敵勢陣

於迫上、則当所善提寺相懸之条、砂手討抽頭、進上之、

敵毎日御手仕、從一日至八日支置大勢、侍申御合力畢、

九日加飯田馬守宅所、翌日十於彼構一米口、終日

矢陣仕、彼官等敵軍被執、粉骨之次第、重清人教育知事

同十三日御人休着都以後、飯田山、佐田山所々御陣等

泰景馳走之段、御前勢御回令衆存知上意、不及津中樂、

一明応八年七月廿五日、令渡城、於所々馳走制、幸下毛

郡來口、被官人討抽頭一弘國陣所逐走之、同十月上旬、

宇佐郡院內來同心化、致誘妙見尾、致在城之処、豊後

一因勢令出張之、飯山、陣取、城内計策状態之間、彼

畫狀飛脚共重清、武道正則令注進畢、然而敵之猛勢寄

陣於茂密、從方々難責上、味方御防敵之条、引退詰口、

於本陣、飯山為城手当、尸次、山原來、木付、大神以

詰書之間、安心院、飯田申合、一日遠慮之儀、以仲山
左馬允其旨上申、
一依後思案豊後罷退事、誠無念至也、然若非野心緩怠之
段、口豐後以難言上仕、執權參之不足於心中、偏輕
身命、明應九年正月七日夜、豊後勢家勢急於後山野
江河、十口夜半、善提寺罷退、晝夜不受食物、同十
八日、漸著聞之申間、一身辛勞、宜有 御高察耶、
一文龜元年正月五日當群衆渡城之儀、任御奉拜之旨申間、
十三日各乘船、為名代同名左衛門大夫、相聞人致、到
中津河著置之、廿九日、妙見尾伐取時、我世者質米神
兵衛尉太刀討、群衆所被存知也、
一右之渡海御前勢無人致之趣往進之時、重而神代紀伊守
方被相儀之条、奉實事、正月廿九日中津河渡候、船衆
中合、二月九日至城、其城派分馳走時、
同年七月廿三日馬場合戰時者、依為重治一所、後陣並
松在陣仕相動畢、然而中陣可變向之由家仰之則、不移
時口罷退之処、若郡以前敵散北之、乍去於所々敵人討
留畢、
右条々、粉骨之次第、達上聞、御感御書參過并御奉書
數通頂戴仕畢、同以此一巻申御詔証判、備後風龜鏡、
殊為抽忠懇、粗法進如件、
永正式年七月 日
進上 御奉行所
○義二是辨了可

一六一 建是書狀案

一猶々惡意之趣、誠可為御勢多候、以御用候、言上奉頼
候、委由重清可申入候、
就御手殿、意之儀、御御札候、具令拜見候、拘申候神樂、
御代々御免許之証文、治景へ披見申候、任長方違書、
以知人來、逐上聞候、就夫、於 八幡宮神前、御立願
之儀、御免許以御分別、被仰付之由、被成 御書候之条、
度々御奉書之簡文、役所為難令申候、不被成御分別之
由、候之間、以參古庄重清、問御所難役之節、御免被申、
殿殿被作候、任請取付、島日五十疋、長方へ渡進候之処、
被指退候、可有如何候故出、可申上様、折節示預候、
御立願御定齊、年内十二月十二日、以吉日良辰御初候、
神請御免許者、自余之衆、雖相似難候、今、往被渡 御
上聞、如今書 御手殿作、御威誘可動申之由、預被 仰
出候者、神慮難難測候、不可有無沙汰候、拘申候御神頭
士、町四十貫分候、御上喜被明致之由、承候間、中事候、
為御存知候、誓口是可申談候条、省時候、恐々、
五月廿五日 建是

野上新左衛門尉殿
義長(花押)
○小本文書
大分県史料五

一六一 大友義長感狀

就筑後國討治之儀、為無足、從最前、於津江口夜辛勞、

○續出書地野(文野)
堀田正親(堀田正親)大友實(一四)

百藤二郎左衛門尉殿
竹田津六郎左衛門尉殿
御報

一六三 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分縣上卷三二

殘党出於州玖珠郡、於是親安遣小應、同尉右並討之、野上兵責・中村兵部少輔、一軍平時、長資遣其男孫太郎於府内、○彰表志、夜戰党一於高勝寺、中嶋清通被創、二十一日戰於松、於木村退之中村、

一六四 大友親安感狀

○中村文書
大分縣史料二五

去廿六、於玖珠郡松木遂合戰、勝利之次第、各被碎手故候、殊内者一人、被獲之由候、忠節之至候、必取靜一段可嘉申候、恐々謹言、
一月廿八日
中村兵部少輔殿
親安(花押)

一六五 大友親安感狀

○百部文書
大分縣史料三三

去廿六、於玖珠郡松木合戰、勝利之次第、併碎手被獲候、故候、軍忠無比類候、必取靜一段可買申候、恐々謹言、
一月廿八日
親安(花押)

一六六 大友親安感狀案

○近國通判・松尾長兵衛尉家伝
地所同前・大友史料一四

去廿六、玖珠郡於松木遂合戰、勝利之次第、被抽粉骨、感愧之至候、取靜一段買申候、恐々謹言、
一月廿八日
忠員藤右衛門丞殿
親安
○マシ紙書ナラザル所アリ

一六七 大友親安感狀

○鹿ノ文書
増補訂正編年大友史料一四

去廿六、於玖珠郡松木殘党懸合、遂合戰被候、同郎等一人手負、分節高名無比類候、此時敗北之因徒、水代対治覚悟懸入候、猶軍忠追而一段可買申候、恐々謹言、
一月廿九日
能七郎殿
親安(花押)

一六八 大友親安感狀

○近江兼光卿上文案
地所訂正編年大友史料一四

去廿六、於松木表合戰被碎手、敵六人打捕候、誠忠儀無比類候、弥散北之名、可被逐追治覚悟懸入候、必追而可買申候、恐々謹言、
一月廿九日
野上対馬守殿
親安(花押)

一六九 大友親安感狀

○近江兼光卿上文案
地所訂正編年大友史料一四

去廿六、於松木表合戰、被碎手、敵六人打捕候、誠忠儀無比類候、弥散北之名、可被逐追治覚悟懸入候、必追而可買申候、恐々謹言、
一月廿九日
野上対馬守殿
親安(花押)

一七〇 大友親安感狀案

○近江兼光卿上文案
地所訂正編年大友史料一四

去廿六、於玖珠郡松木、殘党拵合、遂合戰分捕、同郎等一人手負候、誠高名無比類候、此時敗北之因徒、水代対治覚悟懸入候、猶軍忠追而一段可買申候、恐々謹言、
一月廿九日
後藤新兵衛殿
親安(花押)

一七一 大友親安感狀案

○大友家文書録
大分縣史料二四

去廿六、於玖珠郡松木、殘党拵合、遂合戰分捕、同郎等一人手負候、誠高名無比類候、此時敗北之因徒、水代対治覚悟懸入候、猶軍忠追而一段可買申候、恐々謹言、
一月廿九日
後藤新兵衛殿
親安(花押)

一七二 野上長齊書狀案

○大友家文書箱
大分縣史料三一

去廿六、於珠郡松本殘空、部少輔、此外
無兄孫類共難多々候、先以無金、茶、以着到申
上候、彼者共御扶持候様、

長資、在判

小原殿

參

○日付7次々、増補訂正御年太友史料、一四二日附テ。

一七三 大友親安感狀

○佐田文書
増補訂正御年太友史料、四

今度至原口現形之殘党、逐退治候刻、敗北之凶徒、於大
洲村數十人被討抽頭注文到米候、喜悅之至候、亦被添御
心、因中隱伴之平人、堅固可預成敗之事憑在候、委細猶
年寄共可申候、恐々謹言、

二月廿九日

親安(花押)

佐田大膳亮殿

一七四 大友親安書狀案

○大友家文書箱
増補訂正御年太友史料、一四

至原口殘党等可現形之由、預註進候、「□□□□」減令悅
喜候、儲難不可有指儀候、自身以「□□□□」退治候、一段
可被添心事、祝若候、併憑、

○候次ナリ

一七五 大友親安感狀案

○大友家文書箱
大分縣史料三一

去十六夜、於岩野、被它召共被成候、
野上左馬助殿

親安、在判

一七六 大友義長感狀写

○右田文書
熊本縣史料中世四

從今度兼前、小原四郎左衛門尉以同陣、辛勞之段承候、
就中去月廿六、於松木衣合戰、被疵粉骨之至感悅候、必追
而一段可買申候、仍為疵養性、掃宅候難、可然候、何様
以面可申候、恐々謹言、

二月廿一日

義長(花押影)

右田左兵衛殿

一七七 大友親安感狀写

○右田文書
熊本縣史料中世四

就親党好治、小原四郎左衛門尉指遣候處、自坂面以同陣
辛勞之段承候、就中去月廿六、於松木衣合戰、被疵粉骨之
至誠感悅候、必追而一段可買申候、仍為疵養性、掃宅候難、
可然候、何様以面可申候、恐々謹言、

三月二日

親安(花押影)

右田右兵衛殿

一七八 大友親敦感狀写

○右田文書
熊本縣史料中世四

於今度高崎城攻口、被疵辛勞之段、無兄孫類、弥々忌節
頓存候、必追而一段可買申候、恐々謹言、
十二月廿九日

右田左兵衛殿

親敦(花押影)

一七九 大友親敦感狀

○右田文書
大分縣史料三一

於今度高崎攻口、毎日防戰辛勞肝心候、亦戰功頼人候、
必事忠進而一段可買候、恐々謹言、
正月十九日

首藤清右衛門尉殿

親敦(花押)

一八〇 大友親敦感狀

○中村文書
大分縣史料三五

今度高崎城於攻口、中間、人被疵、忠儀無比類候、必追
而一段可買申候、恐々謹言、
正月廿五日

中村兵部少輔殿

親敦(花押)

一八一 大友親敦感狀写

○同地所文書
大分縣文化庁書庫書庫七

去々於高崎攻、御被官數人斃死矣、忠義肝心候、必道一段可賀申候、恐々謹言、
正月廿七日

渡辺紀伊守殿
親教(花押影)

○藤田敏行支書、大友宗元化世書、
○藤田敏行支書、大友宗元化世書、
○藤田敏行支書、大友宗元化世書、

一八二 大友親敦感状写

○石田支書
熊本原史河申建氏

去々於高崎城攻口、被官被執之衆、忠儀感候、必道而可賀申候、恐々謹言、
正月廿八日

石田三川守殿
親教(花押影)

一八三 大友親敦書状

○佐田支書
熊本原史河申建氏

就今度高崎之儀、為御合方、神代式御前之御馳走、祝著候、此等之趣為可申、田北陣解申可進之候、恐々謹言、
一月六日

佐田兩輔守殿
親教(花押)

一八四 招然書状

○石田支書
熊本原史河申建氏

今度弓矢如此被成候、乍案中候、親満身過不使申計候哉、拙名事在城以來毎々請、上意候了細候へ共、此御ま

て在城候時、彼身過水代御赦免有開申候條、上意候申、順次之儀候間、掃參仕候、以先口出度候、多年御芳志之辻、向後不可有忘御候、擬開之儀候共、細々御御意可申承事、可為不望候、仍尾弱事、以先、堺口まで召越度候、爰元本不如意候間、迎馬不遣候條、被仰付送給候者、可畏入候、定留守より可令申候、可御御意候、恐々謹言、
二月六日
番兵大藏
御宿所
招然(花押)

一八五 大友親敦感状

○御津水城高野上支書
○同式土田宮原史河申建氏

今度於高崎城攻口、毎日口仕、辛勞之至候、殊無足重忠感候、必道而一段可賀申候、恐々謹言、
一月七日

野上对馬守殿
親教(花押)

一八六 大友親敦感状

○藤田支書
大友宗元化世書

就今度高崎城籠籠朽網以下之因徒成敗、遂在陣、日々防戰、軍勞感候、何様追可賀申候、恐々謹言、
二月廿八日

業師与中務少輔殿
親教(花押)

一八七 大友親敦感状

○石田支書
大友宗元化世書

就今度高崎城籠籠朽網以下之因徒成敗、遂在陣、日々防戰被執之衆、粉骨無比類候、何様追可賀申候、恐々謹言、
二月廿八日
若林大炊助殿
親教(花押)

一八八 宇佐宮作事方条々御法度掟書案

○小山支書
熊本原史河申建氏

天永二年三月御作事方御法度掟書案
就宇佐宮御作事方、条々御法度掟書案
去々水軍中、國濟寺殿、様御再興の時之支証をもて可被守之、其以前の印記不可有取用事、
一諸役物等因進致を以、員數にをひてハ先底のことく可下行事、
一惣奉行人本屋并進方奉行人不在官事、
一大小工事、右邊陣以前主本屋日參せしめ、奉行人相共番匠方可裁判事、
一番匠衆或下手或年寄等、不堪の仁にをひて、半作看たるべき事、
一惣大工材木立寸尺等、毎度相連之衆、云仕納云木作手間、御公損なきに非ず、至以後、その用木參差せしめハ、大小可弁事、
一内封四郡政務、御地、普請夫定役在之、この外社官衆頼

事、先年妙見尾御城番おほせ付らる、時、彼儀御免ニ
をひて、社用大事可致馳走之由、難被申、いまに社
用をも無沙汰候、於已後者、都使裁判に任て、可被逐
其節、若猶其実なきにをひて、別段之儀を可被仰付
事、

一 木原定大四人^内、御開竹^竹くき、かく繩、茶立、同茶
の具等事、当職名代を以、可被逐其節、此余依無沙汰、
當日作事懈怠せしめ、當職百分之可爲了簡事、

一 宇佐郡中武領就社用之人大以下、在々所々無沙汰を
ひて、一段可被仰付、殊院内衆御在京御留守以來、
御 社用延大難治之段、無其詞、既際子同御城所勤の
所を、近年、社用に被付之上、向後社用大事可申付也、
若猶難治にをひて、加元御城番可被仰付事、

一 漆工事、道具以下相調、本職相談せしめ、可有沙汰事、
絵師^并際子以下細工人等、奉行入申談、可有調法事、
一 当 社御材木事、不謂寺社人給御免之地、任先例採用
有へし、難治在所にをひて、就注進一段被仰付へし、
但社用と爲、自用の事あらは、奉行人各越度たるへき
事、

一 日々記事、奉行向人充被定下番帳の旨に任て、注調可
注進也、材木採用之時者、非番衆至抽出可奉行事、
以上

右御法度、衆々堅固致相定訖、守此旨、云社家公武家、
可導造営之功、若於造営之仁者、就注進一途可被成御下
知之由、所仰如件、

大永二年三月 日 左衛門尉

一八九 大友親敦感状

○附北六六文書
大分県史料一五

至鹿越登城之由、水候、尤肝要候、此時以堅固之儀、忠
節併憑存候、事々、必以而買可申候、恐々謹言、
七月十二日 親敦(花押)

鹿越城衆各中

一九〇 大友親敦感状

○附北六六文書
大分県史料一五

就今度落人現形、至鹿越在城、忠儀之奉候、必迫而買可
申候、恐々謹言、
正月廿一日 親敦(花押)

口北左京進殿

一九一 大友親敦感状

○附北六六文書
大分県史料一五

去月廿七、於瀬田尾攻口被搦手、自身・同小者、被統之
由候、忠儀感候、弥軍忠肝要候、必迫而買可申候、恐々
謹言、
七月六日 親敦(花押)

佐十原右京亮殿

一九二 大友親敦感状

○附北六六文書
大分県史料一五

去月廿七、於瀬田尾攻口、被搦手、小者被統之由候、忠儀
感候、弥軍忠肝要候、心迫而買可申候、恐々謹言、
七月六日 親敦(花押)

若林掃部助殿

一九三 大友親敦感状

○附津手之文書
福井県史料一三

去月廿七、於瀬田尾攻口、被搦手、數ヶ所被統之由候、
感候、心迫而買可申候、恐々謹言、
七月七日 親敦(花押)

野上中務丞殿

一九四 大友義繁感状

○久安文書
大分県史料一三

佐伯備治成敗之刻、於被城攻口、被搦忠節感候、心迫
而、段、可買申候、恐々謹言、
十一月十二日 義繁(花押)

久保中務丞殿

一九五 大友義繁書状

○上原文書
大分県史料一三

佐伯備治成敗之刻、早速到、城切所、被詰寄之由候、
軍芳合致候、弥各申合、物肝要候、麴平井和泉守可申候、
恐々謹言、

一九九 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
堀河訂正編年大友史卷一六

天文元五年^{以皇等}壬辰八月、先是、豐前州^{正史}一六
大内義隆、擡州妙見山城、母後以孫郡士忠良四郎左衛
門尉盛禮等、竟之在其城

二〇〇 杉興重奉書

○杉田文書
堀河訂正編年大友史卷一六

去五日注進狀、同九日午時到來、具令披見候、仍蒙後案
母令功戰、同名隨岐守候從二人討死、其外手自注文、粉
骨之次第、被成、御心得候、日名、軍忠狀可披讀候へ共、
爰元余御勢多候間、重而御感之通可披仰出候、御供事則
登城之由候、尤可然候、尚々城之儀無由斷馳走肝要之由
可申旨披仰出候、恐々謹言、

十月九日

佐田大膳亮候

興重(花押)

二〇一 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
大分縣史料三

□一月、義隆使齋藤兵部少輔長左等諸士、向豐前路、陣
白桃^{未詳時}、敵兵來候、豐前守、珠山^三、助^防、防戰、
而御被官二人○十四日我兵開^三、見岳城、木付、馬助氏兵
頼田宮内丞進滿^等、兵部少輔^{名和}、上野
神兵衛尉、太郎、徳丸四郎三郎等、白羽平井親、
神九郎等被官、負御、中嶋内藏助出、^天

森哲左衛門尉祐貞、野上藤七、丹^{正史}、具余敵軍有破功、
攻守踰越其難、勞其軍功書、山下長就等寄、頼田惟実書^被
珠山、乃牛氏

二〇二 大内義隆軍勢催促狀

○堀河文書
堀河訂正編年大友史卷一六

近日無音之矣、衆輩候、妙見情事万事可懸念之矣肝要候、
自然於敵襲來者、頼令亮向可被勸戰功候、猶願中守可
申候、謹言、

十一月一日

宇佐郡而々中

義隆(花押)

二〇三 大友義隆感狀

○大友文書
大分縣史料三

先月晦日、於豊前國妙見岳攻口、終日防戰、殊被致々
所由候、忠儀感候、必追而一段、可買申候、恐々謹言、

十一月二日

三代九郎殿

義隆(花押)

二〇四 大友義隆感狀

○大友家文書錄
赤補司三續年大友史卷一六

先月晦日於豊前國妙見岳攻口、終日防戰粉骨、殊被統之
由候、忠儀無比頓候、何様追而一段可買申候、恐々謹言、

十一月二日

義隆(花押)

田尻右衛門尉殿

二〇五 大友義隆感狀

○堀河文書
堀河訂正編年大友史卷一六

先月晦日於豊前國妙見岳攻口、終日防戰粉骨、殊被統之
由候、忠儀感候、必追而一段可買申候、恐々謹言、

十一月二日

曾孫時助二郎殿

義隆(花押)

二〇六 吉岡長増奉書

○大友文書
堀河訂正編年大友史卷一六

就御陣夫之儀示預候之趣、具令披讀候之趣、御社酒分
事、任前々行被成、御有免之由被仰出候矣、珍重候、然
若御回家恰可被勸御安全之御丹誠事、肝要候、猶願未善
寄略候、恐々謹言、

十一月八日

田樂阪大宮司殿

長増

二〇七 赤富代山副信次軍忠狀

○赤富文書
堀河訂正編年大友史卷一六

去十四日至豊前國宇佐郡妙見岳御城、大友勢取懸防戰之
時、被此人敵注文、
備從左衛門五郎亮殿、同太郎五郎亮殿、
十一月十二日、赤富代山副五郎左衛門尉次

十一月十二日

赤富代山副五郎左衛門尉次

村上三郎右衛門尉殿

同 河内宮内丞

神云分捕之

杉因輸入（注）殿

二〇八 佐田朝景感状

○佐田文書
增補正傳年大友史料一六

同 河内宮内丞

同 石馬充（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

二〇九 佐田朝景合戰頭注文

○佐田文書
增補正傳年大友史料一六

一見了（花押）

去下四口、至豊前国宇佐郡妙見所御城、大友勢取懸防戦之時、太刀討分捕、并被衆人散注文

同 一吉岡彦九郎

同 岐部木工允

同 一名字不知

同 一吉岡善左衛門

同 一名字不知

同 一吉弘

同 一名字不知

同 一古弘宮内丞

同 一名字不知

同 一矢野与三左衛門尉

同 一岐部右京進

同 一岐部右京進

同 一岐部右京進

同 一岐部右京進

同 河内宮内丞

同 石馬充（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

同 名外記進（失使、分所）

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

杉因輸入（注）殿

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

○佐田文書
大分縣史料三五

今度豊前國空向之刻、於妙見岳攻口、親父大郎兵衛討殺
手、被逐防戦、刺討死候、忠儀迄無比類候、何様追而、
一段可賀申候、恐々謹言、
十一月十八日
平林宮若殿

義隆 (花押)

二二三 大友義隆感状案

○大友文書
昭和十一年大友史料一六
昭和十一年大友史料一六

今度豊前國空向之刻、於妙見岳攻口、親父左衛門尉討殺
被逐防戦、刺討死候、忠儀迄無比類候、何様追而、一段
可賀申候、恐々謹言、
十一月十八日
久保陣女

義隆 (花押)

二二四 大友義隆感状案

○大友文書
大友史料三三

同
十四、於豊前國妙見岳攻口、防戦被討、數人被
逐之由、忠儀迄感候、軍、可賀申候、恐々謹言、
十一月十八日
平井兵部少輔殿

義隆 (花押)

二二五 人田親廉書状案

○大友家文書
大友史料四三

御音聞奉細令被聞候、仍於妙見岳攻口、親父宮、至方被
立御申候、忠節迄無比類候、此等之請、御方可被成御
感候、旨趣猶更可令申候、
十一月十八日
二二五新五郎殿
親廉 (花押)

二二六 大友家加判來連署奉告

○大友文書
昭和十一年大友史料一五

御状奉細令被聞候、然者去、十四、於豊前國妙見岳攻口、
御親父宮内承方討死之由、無是非、則逐被露候、御
忠儀御感之旨、必可被成、御賀者之出候、其取合不可有
無沙汰候、御本意、今申、御力落之殺存候、万賀、
尚重々可申承候、恐々謹言、
十一月十八日
植田新五郎殿
御報
親忠 (花押)
長統 (花押)

○大友家文書
大友史料一六、二二、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

二二七 陶通顯書状

○大友文書
昭和十一年大友史料一六

去十四日、於攻口御勤之趣、具承候、殊被討捕願注文注
給候、感之申候、御忠節此事候、対山田興成御状令披見候、
進々不可有御等陣候、御飛脚御座所、小部被逐候、十五
日、御進発之趣、御勝利別面白出候、各可亮奇候案、弥

可申候、恐々謹言、
十一月十九日
道隆 (花押)

佐田大膳亮殿
義隆

二二八 大友義隆感状案

○大友家文書
大友史料三三

前十四、豊前國於妙見岳攻口、親父宮内承方討死、
比類候、必追而、一段可賀申候、恐々謹言、
十一月廿日
植田新五郎殿
義隆 (花押)

二二九 大友義隆感状

○大友文書
大友史料三三

前十四、豊前國於妙見岳攻口、防戦被討、殊被官數人被
逐之由、忠儀感候、必追而、一段可賀申候、恐々謹言、
十一月廿日
久保中務丞殿
義隆 (花押)

二二〇 大友義隆感状案

○大友家文書
昭和十一年大友史料一六

前十四、豊前國於妙見岳攻口、防戦被討、被逐之由、誠
忠儀感候、必追而、一段可賀申候、恐々謹言、
十一月廿日
義隆 (花押)

齊藤左衛門尉殿

二二二 大友義隆感狀案

○大友家文書錄

增補訂正編年大友史料 一六

前十四日、豊前國於妙見岳攻口、防戦粉骨、被統之由、忠儀誠感悦候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

十二月廿一日

大津留次郎太郎殿

義隆 在拜

二二三 大友義隆感狀案

○大友家文書錄

增補訂正編年大友史料 一六

前十四日、豊前國於妙見岳攻口、防戦粉骨□□□□、被統之由、忠儀誠感悦候、必追而一段□□□□謹言、

十二月廿一日

上野神兵衛尉殿

義隆 在拜

二二三 大友義隆感狀案

○江藤文書

增補訂正編年大友史料 一六

前十四日、豊前國於妙見岳攻口、防戦粉骨、被統之由、忠儀誠感悦候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

十二月廿一日

田吹與三郎殿

義隆 (花押)

二二四 大内義隆感狀案

○宇藤家文書

增補訂正編年大友史料 一六

去十四日、半当城敵取懸、終日防戦、侍数多討捕頭□到来、一見候、從城内、各切懸、粉骨誠無比類者也、

天文九年十一月廿一日

深見忠帳守殿

義隆 拜

齋藤駿河守殿
妙見岳城衆中

二二五 杉興重書狀

○作田文書

增補訂正編年大友史料 一六

去十四日、半当城切岸、敵責合候之處、被遠防戦、剩御人数多々分捕之次第、銘々注文御注進状、至厚候到来、

御免足御首途刻、御気色不斜候、御商名誠無比類候、

昨日、至防府罷者宿候、日出候、弥御城之儀可公座

因候、珍重候、

御感之趣猶討同名因轉入道被仰出候間、不及申候、御吉事猶重々可申承候、恐々謹言、

十一月廿二日

佐田大貳光殿

興重 (花押)

御報

二二六 大友義隆感狀案

○大友家文書錄

增補訂正編年大友史料 一六

前十四日、於豊前國妙見岳攻口、粉骨、殊被官數□□統之由、忠儀誠感悦候、何様追而一段可賀申候、恐々謹言、

十二月廿一日

義隆 在拜

二二七 大友義隆感狀案

○大友家文書錄

增補訂正編年大友史料 一六

前十四日、於豊前國妙見岳之攻口、遂防戦粉骨、殊被統之由、忠儀誠感悦候、亦可被勸忠貞肝要候、必追而可賀申候、恐々謹言、

十二月廿二日

梅九四郎三郎殿

義隆 (花押)

二二八 大友義隆感狀案

○大友家文書錄

增補訂正編年大友史料 一六

前十四日、豊前國於妙見岳攻口、防戦粉骨、殊被官人候統之由、忠儀誠感悦候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

十二月廿五日

中村彈正忠殿

義隆 (花押)

二二九 大友義隆感狀案

○大友家文書錄

增補訂正編年大友史料 一六

前十四日、於豊前國妙見岳攻口、為備足、防戦粉骨、殊被統之由、忠儀誠感悦候、追而一段可賀申候、恐々謹言、

十二月廿一日

義隆 在拜

十一月廿六日
久保又太郎殿

義鑿 在判

十二月廿六日
富米民部少輔殿

義鑿 (花押)

賀巾候、恐々謹言、
二月六日

義鑿 (花押)

長野主水助殿

二三〇 大友義鑿感狀

○延正文書
増補訂正編年大友史料一六

前廿五日、於豊前國高田之行仕之刻、被官被統之由、
忠儀感悅候、弥可被助事以旨、要候、必追而可買巾候、
恐々謹言、

十二月二日

義鑿 (花押)

○須名々欠欠、増補訂正編年大友史料一六字八、前田氏と比定文

二三二 大友義鑿感狀案

○大友家文書
増補訂正編年大友史料一六

就今度豊前國宛向、至白桃陣所、敢取懸候、
二人、被統之由、忠儀感悅候、何様□□□可買之矣、恐々
謹言、

正月十三日

義鑿 在判

宝珠山主祝助殿

二三六 田原親重感狀案

○片山文書
増補訂正編年大友史料一六

於今度山鹿衣、各通好湯候、僅徒相共々之故、小者被
統之由云々、單忠太樓候、益々勤勞此節、候、恐々謹言、
二月七日

片山仁兵衛殿

二三一 大友よし嚟感狀

○延正文書
増補訂正編年大友史料一六

今度、豊前國宛向に付、白以前に出陣所々仕軍旁、殊
去上月四日、佐田入船先安寄よりくすし候、被統よし、
忠儀感悅候、かならず追而一段可買也、穴賢、
十二月十一日

よし嚟 (花押)

○須名々欠欠、

二三四 大友義鑿感狀

○片山文書
増補訂正編年大友史料一六

就今度豊前國宛向之儀、至白桃陣所敢取懸之刻、別
々殊被統之由、忠儀感悅候、何様追而一段可買巾候、恐々
謹言、

正月十三日

義鑿 (花押)

平井平左衛門尉殿

二三七 大友義鑿書狀

○同左延正文書
増補訂正編年大友史料一六

至鹿越城、空人捕露候之処、則時出来之矣、被殘突等散
北候、先以肝要候、今度別而馳走之段、視着候、恐々謹言、
三月廿九日

田上次郎二部殿

義鑿 (花押)

二三八 大友義鑿感狀案

○大友家文書
大分縣史第三區

至今度鹿越、軍人形形之刻、不日馳走之矣、彼忠克復時
之散北、先以肝要候、何様追而可買巾候、恐々謹言、
四月一日

久保保兵衛殿

義鑿 判

二三二 大友義鑿書狀

○高家文書
増補訂正編年大友史料一六

至鹿越與、敵舟少々押渡候故、無心許候之間、為可承、
定林院並之候、於事実者、木付私伊守申談、可勵忠貞事、
肝要候、已細猶平高共可申候、恐々謹言、

二三五 大友義鑿感狀

○藤原忠八文書
増補訂正編年大友史料一六

前二日、於山香口敢現形之刻、則時懸云、被遺漏之由候、
忠儀感悅候、弥申談可被助忠貞事肝要候、必取鎖一段可

二三九 大友義鑿感狀

○院一文書
瑞正五郎平大友史料一六

至今度鹿越、中人現形之刻、以吉岡左衛門大夫同陣、不日馳走之矣、彼惡党即時敗北、先以肝要候、必追而實可申候、恐々謹言、

卯月二日

義鑿(花押)

能二續殿助殿

二四〇 大友義鑿感狀

○中村文書
大分県史料五

至今度鹿越、中人現形之刻、以吉岡左衛門大夫同陣、不日馳走之矣、彼惡党即時敗北、先以肝要候、必追而實可申候、恐々謹言、

卯月二日

義鑿(花押)

中村藤十郎殿

二四一 大友義鑿感狀

○平林某文書
大分県史料五

至今度鹿越、中人現形之刻、以吉岡左衛門大夫同陣、不日馳走之矣、彼惡党即時敗北、先以肝要候、必追而實可申候、恐々謹言、

卯月二日

義鑿(花押)

平林太郎兵衛殿

二四二 大友義鑑感狀案

○大友文書
大分県史料三

至今度鹿越、中人現形之刻、以吉岡左衛門大夫同陣、不日馳走之矣、彼惡党即時敗北、先以肝口口口追而實可申候、恐々謹言、

卯月二日

義鑑(花押)

徳丸右衛門尉殿

○義鑑八、義鑑一ノ部ナク

二四三 大友義鑑感狀案

○福岡藩書所蔵同口口書
福岡藩史料大友史料六

至今度鹿越、中人現形之刻、以山口掃部助同陣、不日馳走之矣、彼惡党、即時敗北候、先以肝要候、必追而實可申候、恐々謹言、

卯月二日

義鑑

勾石馬允殿

○義鑑八、義鑑一ノ部ナク

二四四 大友義鑿感狀

○福岡藩書所蔵
大分県史料二

至今度鹿越、中人現形之刻、以津久見左衛門助同陣、不日馳走之矣、彼惡党敗北、先以肝要候、何様追而、實可申候、恐々謹言、

卯月二日

義鑿(花押)

葉師寺右馬允殿

二四五 大友義鑿感狀

○福岡藩書所蔵
大分県史料二

至今度鹿越、中人現形之刻、以津久見左衛門助同陣、無足之軍旁感候、何様追而、實可申候、恐々謹言、

卯月二日

義鑿(花押)

葉師寺與一殿

二四六 大友義鑿感狀

○熊本左付文書
熊本藩史料大友史料二六

至今度鹿越、中人現形之刻、以山下和泉守同陣、不日馳走之矣、彼惡党敗北、先以肝要候、何様追而、實可申候、恐々謹言、

卯月二日

義鑿(花押)

荒木右衛門尉殿

二四七 大友義鑿感狀

○義鑿久文書
大分県史料三

至今度鹿越、中人現形之刻、以清田兵衛頭同陣、不日馳走之矣、彼惡党即時敗北、先以肝要候、何様追而實可申候、恐々謹言、

卯月二日

義鑿(花押)

波津久弥三郎殿

二四八 大友義鑿感状

○右原文書
大分県史料一三

至今度鹿越城平人形現之刻、以清田兵庫頭同陣、不口馳走之条、彼忠党等即時敗北、先以肝要候、何様追而賀可申候、恐々謹言、

卯月一日

佐土原満足殿

義鑿(花押)

二四九 大友義鑿感状案

○右原文書
熊本県史料中野原

今度至鹿越、船籠候平人敗北之刻、粉骨之次第感悦候、必追而、可賀申候、恐々謹言、

卯月一日

右田三河守殿

義鑿(花押)

二五〇 大友義鑿感状写

○右原文書
熊本県史料中野原

今度至鹿越、船籠候平人敗北之刻、粉骨之段感悦候、必追而、可賀申候、恐々謹言、

四月十三日

右田次郎殿

義鑿(花押影)

二五一 大友義鑑感状

○平井文書
大分県史料一三

為角半礼勤番、長々在城、無足之辛勞不及申候、當時至堺日、敵毎日相駈候之条、一入擊回之才覚懸存候、何様追而、一段可賀申候、恐々謹言、

卯月十六日

平井左衛門尉殿

義鑑(花押)

二五二 杉興重書状

○今原文書
熊本県史料中野原大友史料一六

去年元々大友勢出張之時、為妙見所[○]在城之功、受領之事、御吹幸候、尤面日之至候、恐々謹言、

七月十三日

讀上 今仁伊豆守殿

一河守興重(花押)

二五三 大友家加判聚裏封条々事書

○上出頭廣々野々文書
大分県史料一三

古後領地二付浮免分一
条々(一)文

一同陣兼平小田出張之事

角半礼御城之事

一面口兩之事

一尋所立柄之事

裏花押

裏花押

裏花押

一速判來之事、以上

義鑑(花押)

二五四 大友義鑑感状案

○大友家文書
熊本県史料中野原大友史料一六

就角半礼城番、夜白辛勞不及申候、殊城誘奪之事、別而馳走之由候、案中候、亦油断才覚、懸入候、必追而、一段可賀申候、恐々謹言、

十一月一日

森宅岐守殿

義鑑(花押)

二五五 大友義鑑感状

○平井文書
大分県史料一三

就角半礼城番、夜白辛勞不及申候、殊城誘奪行等之事、別而馳走之由候、案中候、亦無油断、才覚懸入候、必追而、一段可賀申候、恐々謹言、

十一月八日

平井左衛門尉殿

義鑑(花押)

二五六 大友義鑑感状案

○大友家文書
熊本県史料中野原

就角半礼城番、夜白辛勞不及申候、誘奪之事、別而馳走之由候、案中候、亦油断才覚懸入候、必追而、

段可賀申候、恐々謹言、

十二月八日

藤宅崎守殿

義鑑 (花押)

二五七 田北親興書状

○田北親興文書補遺
大分縣史料一六

好便之奏用一書候、今程在府候哉、雖無申迄候、無油斷
祇候事一族、仍去廿日落野と申在所御手仕候、口々より
出合敵取合矢軍候、退口人衆岐部・野上・森・帆足之衆
大手負に候、併一人も無越度候、日出度候、くりは之敵
つけ登候、森・帆足衆おつくし申候、敵一人衆衆にて
討掃候、御大利千秋万歳候、我等分事、ささ来なく、此
候間、一段心懸、可抽忠儀覚悟に候、無油斷候、猶重々
可申候間、聞掌候、恐々謹言、

二月廿三日
城後次郎殿

親興 (花押)

二五八 大内家奉行人連岩奉書

○佐田文書
岡補訂正福平大友史料一六

去廿日、至朝早七所、敵取難候之処、終日防戦、殊被得
勝利、討掃頭十四退走之通、以杉園輔入退吹卷之状、
遂披露候、乃敵猛勢之処、以小勢被得勝利之衆、粉骨無
比頼被思召候、從昨日廿一宮御參罷候、此御日出迄進
御人度候、必重而可被成御感候者、得其心能々可申之旨
候、恐々謹言、

二月廿三日

武助 (花押)

作田因輔守殿

興成 (花押)

二五九 大友義鑑感状

○自伝文書
大分縣史料一三

去廿日、豊前國津野河内手仕之刻、別而粉骨之次第、忠
儀感悦候、殊親父兼右衛門尉、至角牟礼在城之由候、重々
軍勢無様候、必取領、一段可賀申候、恐々謹言、

二月廿九日
古後清次郎殿

義鑑 (花押)

二六〇 大友義鑑感状

○長野康八文書
岡補訂正福平大友史料一六

前日、於佐出口手仕之刻、粉骨之由、誠感悦候、弥忠
儀應入候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

二月廿日
長野又兵衛尉殿

義鑑 (花押)

二六一 大友義鑑感状

○藤野正輝文書
岡補訂正福平大友史料一六

前日、於佐出口、手仕之刻、津久見左馬助以同陣、粉
骨之由誠感悦候、弥忠儀應入候、必追而一段可賀申候、
恐々謹言、

二月廿日
栗師寺右京允殿

義鑑 (花押)

二六一 大友義鑑感状

○野添城文書
岡補訂正福平大友史料一六

前日、於佐出口手仕之刻、津久見左馬助以同陣、為無
足粉骨之由誠感悦候、弥忠儀應入候、必追而一段可賀申候、
恐々謹言、

二月廿日
曾林崎助二郎殿

義鑑 (花押)

二六二 大友義鑑感状

○堀内忠一書
岡補訂正福平大友史料一六

前日、於佐出口手仕之刻、粉骨之由、誠感悦候、弥忠
儀應入候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

二月廿日
廣瀬雄九郎殿

義鑑 (花押)

二六四 田原親重感状案

○田原史書
大分縣史料一〇

就今度高田夜懸、一段辛勞無比類候、其他として本意之
御、安岐郷之内、而も、拾五貫分、可賀扶助候、以此旨、
弥忠儀下業三候、恐々謹言、

二月十七日
親重

片山仁兵衛殿まいる

二六五 大友義鑑感状

○能文書
増補石川編年大友史料一六

今度以吉岡左衛門大夫同陣、於玖珠郡、長々在陣之賜、至筑後不図出張、旁以軍勞感悅無極候、以其辻、筑後之事、過半區案中之由候、亦忠儀頼入候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

二月廿日

義鑑(花押)

能一縫殿助殿

二六六 大友義鑑感状

○中村文書
大分縣史料一五

今度以吉岡左衛門大夫同陣、於玖珠郡長々在陣之賜、至筑後不図出張、旁以軍勞感悅候、以其辻筑後之軍、過半區案中之由候、亦忠儀頼入候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

三月廿日

義鑑(花押)

中村彌正忠殿

二六七 大友義鑑感状

○平林文書
大分縣史料一五

今度名代以吉岡左衛門大夫同陣、於玖珠郡長々在陣之賜、至筑後不図出張、旁以軍勞感悅候、亦忠儀頼入候、必取頭、

一段可賀申候、恐々謹言、

三月廿日

義鑑(花押)

平林宮若殿

二六八 大友義鑑感状

○卯丸文書
大分縣史料九

今度以吉岡左衛門大夫同陣、於玖珠郡長々在陣之賜、不圖至筑後出張、旁以軍勞感悅無極候、以其辻筑後之事、過半區案中之由候、亦忠儀頼入候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

三月廿日

義鑑(花押)

徳丸右衛門尉殿

二六九 大友義鑑感状

○卯丸文書
大分縣史料九

今度以吉岡左衛門大夫同陣、為軍足、於玖珠郡長々在陣之賜、至筑後不図出張、旁以軍勞感悅候、以其辻筑後之事、過半區案中之由候、亦忠儀頼入候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

二月廿日

義鑑(花押)

徳丸新三郎殿

二七〇 大友よし鑑感状

○松原文書
増補石川編年大友史料一六

前廿日、於佐田口手仕之刻、粉谷之山懸入候、忠儀頼入候、必取頭一段可賀申候、恐々謹言、

二月卅日

よし鑑(花押)

松尾彦右衛門尉殿

二七一 大友義鑑感状

○古後文書
増補石川編年大友史料一六

前々、至豐前國取入、所々免向之刻、別而辛勞之由、忠儀感悅候、亦忠儀頼入候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

卯月八日

義鑑(花押)

古後清次郎殿

二七二 大友義鑑感状

○野原文書
増補石川編年大友史料一六

去六、山香郷合戦之刻、別而碎去、被疵之山、忠儀無比類之業、必追而可賀之候、恐々謹言、

卯月十日

義鑑(花押)

野原村馬守殿

二七三 相良武任奉書

○生田文書
増補石川編年大友史料一六

去六日、於豊後回山香郷合戦之時討捕頭七、被送進之由、

以杉七郎注進狀違披書畢、御感狀事軍忠到來之時可被
成下之由候、恐々謹言、

四月十日

佐田因幡守殿

武任 (花押)

一七四 大友義鑑感狀案

○諸氏文書
增補正德年大友史料 六

去六、至山香郷敵取懸候之刻、終日邊防戰、一見守附
死、無是非候、然者、在氏直一所、粉骨□□之由候、

忠貞誠感候、必至鐵直一段可買申候、恐々謹言、

四月十一日

蒲田主殿助殿

義鑑 在判

一七五 大内義隆感狀

○本佐藤正徳年編公記所収中山文書
增補正德年大友史料 一六

去六日、於豊後国山香郷大半礼出、合戦之時、敵一人討
捕之由、猶七郎重信注進、并軍忠狀、同願到來、強可
勳功之状、如件、

天文三年四月十七日

○宛名等欠々、中上人勝左衛門助殿等々

天文三年四月十七日

○宛名等欠々、中上人勝左衛門助殿等々

○宛名等欠々、中上人勝左衛門助殿等々

一七六 大友義鑑感狀

○續大友義隆文書
增補正德年大友史料 一六

去六、於山香郷大群野、敵取懸之刻、味方仕口慮外之趣、

既及遺備申候歟、父善右衛門口尽骨相備、敵數集討捕、
戦死之由、忠貞毫無比類候、仍邊路有相違聞候、必迄
一段可買之趣、高田原常陸介可申候、恐々謹言、

四月廿日

植木次郎殿

義鑑 (花押)

二七七 大友義鑑感狀

○諸氏文書
大分県史料 二五

去六、至山香口、敵取懸候之刻、味方仕立慮外之故、既
及遺備之趣、以堅固之地体、鹿越城無異候、被逐勤番候、

忠貞毫無比類候、弥無油断才覚、憑人候、必追而一段
可買申候、恐々謹言、

四月廿日

波辺左京亮殿

義鑑 (花押)

二七八 大友義鑑感狀

○諸氏文書
大分県史料 二五

去六、至山香口、敵取懸之刻、味方仕立慮外之故、既及
遺備之趣、以堅固之地体、鹿越城被逐勤番候、忠貞毫無
比類候、弥無油断才覚、憑人候、必追而一段可買申候、
恐々謹言、

四月廿日

波辺遠江守殿

義鑑 (花押)

去六、至山香郷、敵取懸候之刻、別而被砕手之由候、忠貞
誠無比類候、弥忠貞憑存候、必取領一段可買申候、恐々
謹言、

四月廿一日

長野主水助殿

義鑑 (花押)

二七九 大友義鑑感狀

○長野守氏文書
增補正德年大友史料 一六

去六、至山香郷、敵取懸候之刻、別而被砕手之由候、忠貞
誠無比類候、弥忠貞憑存候、必追而一段可買申候、恐々
謹言、

四月廿一日

長野七郎殿

義鑑 (花押)

二八〇 大友義鑑感狀

○長野守氏文書
增補正德年大友史料 一六

去六、至山香郷、敵取懸候之刻、別而被砕手之由候、忠貞
誠無比類候、弥忠貞憑存候、必追而一段可買申候、恐々
謹言、

四月廿一日

長野主水助殿

義鑑 (花押)

二八一 大友義鑑感狀

○長野守氏文書
增補正德年大友史料 一六

去六、至山香郷、敵取懸候之刻、別而被砕手之由候、忠貞
誠無比類候、弥忠貞憑存候、必取領一段可買申候、恐々
謹言、

四月廿一日

長野次郎殿

義鑑 (花押)

二八二 大友義鑑感状

○長野原實氏文書
増補訂正編年大友史料一六

去六 至山香驛、敵取懸候之刻、別而被幹手之由、忠儀
空無比類候、弥忠貞憑存候、必追而一段可買申候、恐々
謹言、

四月廿一日

長野又兵衛尉殿

二八三 大友義鑑感状

○長野原實氏文書
増補訂正編年大友史料一六

去六 至山香驛、敵取懸候之刻、別而被幹手之由、忠儀
空無比類候、弥忠貞憑存候、必追而一段可買申候、恐々
謹言、

四月廿一日

長野兵衛助殿

二八五 大友よし鑑感状

○小野文書
増補訂正編年大友史料一六

去六 至山香驛、敵取懸候之刻、連合戦、別而粉骨之由、
忠儀空感候、弥忠貞かんように候、必取鎖一段可買之
也、

四月廿一日

小野尾二郎兵衛とのへ

二八六 大友義鑑感状

○小野文書
増補訂正編年大友史料一六

去六 至山香驛、敵取懸候之刻、別而被幹手之由候、忠儀
空無比類候、弥忠貞憑存候、必追而一段可買申候、恐々
謹言、

四月廿一日

宇野宮内丞殿

二八八 大友義鑑感状

○長野原實氏文書
増補訂正編年大友史料一六

於今度山香驛、以津久見兵衛助同陣、長々在陣軍旁、殊
去六、敵取懸候之刻、別而粉骨之由、忠儀感候、必追
而一段可買申候、恐々謹言、

四月廿一日

栗師守右馬助殿

二八九 大友よし鑑感状

○同律文書
増補訂正編年大友史料一八

去六、至山香口敵取懸候刻、連合戦、へつして粉骨、殊
小者二人被統之由、忠儀感候、弥忠貞かんように候、
必追而一段可買之也、

四月廿一日

大河内右京とのへ

二八四 大友よし鑑感状

○小野文書
増補訂正編年大友史料一六

去六 至山香驛、敵取懸候之刻、連合戦、へつして粉骨、
殊小者一人被統之由、忠儀感候、弥可抽忠節事かんよ
うに候、必追而一段可買之也、

四月廿一日

小野尾二郎左衛門とのへ

二八七 大友義鑑感状

○上野文書
増補訂正編年大友史料一六

去六 至山香驛、敵取懸候之刻、別而被幹手候之由、忠儀
誠無比類候、弥忠貞憑存候、必追而一段可買申候、恐々
謹言、

四月廿一日

廣瀬藤九郎殿

二九〇 栗屋重吉・庄山重満連習事書

○大津御所氏文書
増補訂正編年大友史料一六

去月十八日、至豊後高田御勤之時、任仁保罪部丞殿仰相
備、殊に人数等分過馳走之通令披差候、神妙之至御感候
之由候、亦可被抽忠節之旨候、恐々謹言、

六月三日

栗屋治部丞重吉右衛門
庄山助左衛門好重満右衛門

加米新左衛門尉殿

二九八 大内家奉行人連署書狀

○新編文書
增補訂正編年大友史料一八

就麻生支筆說候、隨實備後守道敷候、不日登城之由、右田下野守注進、謹被知及候、每事無油断、弥馳走可為肝要之旨候、恐々謹言、
二月十一日
降仲(花押)
重矩(花押)

萩原孫三郎殿

一九九 右田興実奉書

○萩原文書
增補訂正編年大友史料一八

御陣中御城番雜所勤候、依御陣陣、無足采之事、被遣御候之趣、今度麻生方就雜說之儀、聞懸登城之趣、遂注滿候、別而被懸心之段、神妙之通、以奉書被仰出候、弥可有馳走之由候、恐々謹言、
二月廿七日
興実(花押)

萩原十佐守殿

三〇〇 大内家奉行人連署奉書

○新編文書
增補訂正編年大友史料一八

妙見岳各城之儀、任實備後守道敷申旨、今度御陣中在城之通、道敷注進儀被、知行候、先以令下城、自然於有雜說等者、則時馳走、可抽忠節之由候、仰出候、弥馳走肝要候、恐々謹言、
二月廿二日
降仲(花押)

元重次郎右衛門尉殿

重矩(花押)

三〇一 右田興実書狀

○新編文書
增補訂正編年大友史料一八

就御城檢見下向之儀、普請名事申候之趣、以人數馳走儀、祝書之奉候、何様從是申候、口細日麻生可被申候、恐々謹言、
壬七月十七日
興実(花押)

廣崎掃部丞殿

三〇二 吉田興種・杉宗長連署書狀

○新編文書
增補訂正編年大友史料一八

萩原兵部丞事、至当御城被差遣候、每事可被申談之由候、恐々謹言、
三月廿一日
宗長(花押)
興種(花押)

右田下野守殿

三〇三 大友義隆書狀

○新編文書
大友史料一三

長々在城守安、不及申候、然若結果在座之候、早々備回肝要、爰以而可申候、恐々謹言、
四月十七日
義隆(花押影)

森五郎兵衛尉殿
野上人和守殿

三〇四 大内家奉行人連署奉書

○新編文書
增補訂正編年大友史料一八

尚賢事、妙見岳合在城、可逐馳走之由、右田下野守興実、申伏進披露、被成御心得候、每事任興実裁判、可被逐其節之旨候、恐々謹言、
即月十九日
降仲(花押)
重矩(花押)

今仁藤右衛門尉殿

三〇五 大内家奉行人連署奉書

○萩原文書
增補訂正編年大友史料一八

道昌事、雖為無尾、數年、盡前妙見岳御城番逐其節候、殊苦而以下別而抽馳走候、雖然於今者、及斷固之條、可被成御扶助之由言上之通、遂披露、隨被、知食候、便宜地等聞立、追而可有言上之由候、被得其意、弥馳走肝要候、恐々謹言、
四月廿四日
降景(花押)
重矩(花押)

萩原兵部丞殿

三〇六 萩原道昌条々奉書

○萩原文書
增補訂正編年大友史料一八

我々事、宇在郡敷田庄之内、神代若岐守安綱分領下作職、親候者以來相拘、諸遺物無未進取納候之趣、如何休子納候之故、去秋当毛一円被押置、田品七町余悉被取取、至下地以下、被取放候、不致無沙汰候、如此之儀不及是非候之条、雖々雖決言仕候、無承伏候之間、右右起致言上、乃可奉謝、參上仕候事、

一至雲州被成、御進免之条、御留守申事、妙見岳御城番仕、御開陣之時、似合秘濟等可申上通、被討責備候守、以御奉書之上、取被申催候之条、存其旨、從去天文八年、至同十二年、無油断逐御城番、普請等所勤仕候、殊就度々風雨、御城及人破候時者、別而分過之難走仕、御奉書致進給置候、如此辛苦、何分二も口然領分に非分之儀、被申懸候する時、乃可奉謝御下知、以口勸忍數年在城仕置候、雖然、号私作毛被御取候間、於今今者迷惑相願之条、安綱二被成御草、下作職事、如前々安堵仕候様、御御披露候者可忝候事、

一去年十一月十四日、其牛はなれ候て、安綱用作に入り候、作物少分損候とて、牛を被取候間、相当人立を待遣、彼牛之儀所望候へ共、色々被申延、不被御候之間、両度以並伏草届、違書有之、如此非道儀難被申懸、勸忍仕候事、右旨趣具為可申上、迨呂儀進參上候、以御分別、可然様御披露候者、可忝候、恐々謹言、

五月十一日 迨呂 (花押)
杉伯耆守殿 人々御中

三〇七 某書状写

○水原文書
増補訂正編年大友史料二〇

弘中下野 〔波多野对馬守〕 〔杉三河守被御候〕

就妙只岳御城誘不勤之儀、御奉書令拜見候、某物分、上毛郡之内、料田為参訂式反出候て、志町不勤出被御候、某者参町相拘候、又段分不相拘候、参町令有知候、被入候式町式反分此間所勤候出申候、七反者杉伯耆御城官辛多申仁相拘候、七反之内四反河成之由申候、参反可所勤申申候、他郡之儀候間、然と不有知候条、明々可被成御尋候、於此方聊非無沙汰候、此出可得御意候、恐々謹言、
八月五日

三〇八 大友家加判衆進書状案

○水原文書
大友史料五

田衆少官司方拘御神領之事、諸点役御免除之趣、被仰出候之處、御城誘人足催促之由、少官司方被申候、不可然候、可被止催促候、恐々謹言、
九月七日

松田山城守殿

大御 照
高親 萬
木庄 右 述

三〇九 大内家奉行人連書奉書

○河内本流家改文書
増補訂正編年大友史料一八

妙見岳失矢倉三間事、去七月大雨之時少々損損之趣、以人夫五十人、芝以露城納繫結之由、實備後守注進、遂披露候、神妙之通被仰出候、馳馳走肝安候、恐々謹言、
九月廿一日
隆伸 (花押)
重直 (花押)

元重次郎右衛門尉殿

三一〇 大友義鑑感状写

○真修文書
大友史料三

辨長今在城辛勞、加新察候、申談強固固、勤奮懇入候、猶田北大和守可申候、恐々謹言、
九月廿一日
義鑑 (花押影)

長野伯耆守殿

三一 親宋・山下長就連書書状写

○真修文書
大友史料三

長々御在城辛勞之儀、細々難可申入候、且者遠方、且者公私依勢多、午在罷過候、脚非心疎候、御城内跡堅固之由、可日出候、技衆之儀被仰出候、其方近日可有登城候哉、御大慶方存候、猶野上播部助方、可被申候間、省略候、恐々謹言、
十月十九日
長就 (花押影)
親宋 (花押影)

森殿

野上 御宿所

惠良石男允殿

三二〇 大内家奉行人連岩書状案

○京都文書
○原訂正御年大友書料一五

当御城業内萩原兵部丞知昌事、數年以無足、御城番馳走之段、去年、遂披露以可御城米内五石、被成御扶助之宛、御城番相尋之由にて、未自行候之由、短已注進到来、令披露候之宛、右五石事、对御米奉行人、被申渡、右勘渡、扶請取状、可被擔後動之行候、恐々謹言、

六月一日

備米 在拜
備種 同
五石 同

杉因幡守殿

○原訂正御年大友書料一五

三二一 大友義鎮書状

○備米文書
○原訂正御年大友書料一三

以百次々郎左衛門尉一所、至榎平礼、然亦在城之由、視者候、此御到而於被勸功功者、必追而一段言可申候、恐々謹言、

又之文書
七月廿一日

義鎮 (花押)

首藤右衛門尉殿

三二二 大内家奉行人連岩書状

○京都文書
○原訂正御年大友書料一〇

就今度家許字刺之儀、以雜字言上之起、遂披露候、隨因事、可有參上難覚悟候、堀日仁並地下、櫻輪、狼懸候之衆、為可被相尋無參上之由、被成御心得候、仍以手日記言上条々達上聞、何々村雜掌相合候、有手日記之内、隨居屋敷事、渡邊寺殿詣御下知、取誘以来、度々披露候儀、無其隱候、近年諸儀無付候条、降階分頭、段錢御城誘於被成御聞者、棉申付、至于時致馳走度之由、懸訴之次第、是又遂披露、被成御心得候、然者当都内陸田給地田數、对雜掌亦松宮内丞、被成御尋候之宛、玖町式段田拾五代並半并分七段敷之由、推押書申之条、段錢御城誘共以、從当年並置式被成御免候、被傳其心、降居居屋敷取誘、自然之時者、可被抽忠節事肝要巨候、若右押書前田致達日於在之者、不可然候、堅固之儀專一候、恐々謹言、

卯月十二日

陸田 (花押)
陸田 (花押)
陸田 (花押)
陸田 (花押)
陸田 (花押)

佐田彌正忠殿

三二三 宇佐郡三拾六人衆着到状案

○各下文書
○原訂正御年大友書料一〇

大友宗麟公豊前國隄上山城御在陣中宇佐郡三拾六人衆者到

弘治一歲秋

大友宗麟公豊前國隄上山城御在陣中宇佐郡三拾六人衆者到

安心院 五郎
松本主膳

深見宅岐守
斎藤職河守
原田次郎
飯田主計正
高兼主膳助
津房次郎
佐田彌正
副但馬守
矢部伊勢守
大園監物
渡邊和泉守
上田因幡守
是恒備前守
吉田弥六左衛門
都留右近
橋津次郎左衛門
直加江六郎
相良主水
麻生摂津守
木内帯刀左衛門
元重安芸守
赤尾式部少輔
佐野源右衛門
萩原四郎兵衛
時枝平太夫
柳野輝正
荒木三河守
紀井二郎兵衛
津々見源五良

照山雅樂之助

中島伊予守

賀米次郎

三二四 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大友家史科三

是年、佐伯惟教有恨義酒之事、率男惟實等氏戚家人、去
御平礼城（佐伯傳）、赴伊予國、

三二五 大友義鎮書狀寫

○義鎮之書
陸奥正備年大友家書 ○

今度現形之惡竟近日中豈前迄相戀之段、其間候之矣、
勢无違、可加森伐之念其情候、諸勢者陳之間、其間各被申談、
無油斷才覺肝要候、猶年寄共可申候、恐々謹言、
二月廿九日
麻方掃部助殿

義鎮 (花押影)

三二六 大友家加判衆連書狀

○五田文書
增補五田文書大友家書科三

野仲上郎以現形、魯山右馬守合生事、乃代城乘執之段、
御洋池之趣則令披露候、時宜無御心元被存、幸防州急度
被遙飛御候、彼依御返事、諸事日之候、取可加下制之由候、
御向家御一休之儀候矣、爰許願不被存被候、可御心安候

様体節々承、可得其意候、恐々謹言、

二月廿九日

佐田彈正忠殿

御報

三二七 大友家加判衆連書奉書

○佐田文書
大友家史科中世一

就殿中火事、早速上之趣、則令披露候、被添心候之次第、
御祝者之段、以御書被仰出候、尤珍重候、然若山出、
中八段以下之若共、幸城井宅所取懸之由候之矣、彼惡况
等、違之候、可被成御下知之由候、杉因暗守、城井右馬
助、其外一意之衆被申談、山田已下之惡人、可被討果事
肝要之由、能々相心得可申旨候、被得其意、願不可有御
油斷候、恐々謹言、
五月廿九日
佐田彈正忠殿

治景 (花押)
親守 (花押)

三二八 田北鑑宋・山下鑑心連書書狀

○田北文書
鑑宋傳史料中世一

就殿中火事、飛御進上之段、令披露候之趣、被添御心、
早々御申候、乍案中御祝者之由候、火事令外毛願無異候
候、可御心安候、殊御内作之事、以奉行被仰付候、為御
存知候、將又其表取同意之衆、難無指事候、謹居以才實、
可被討果之由、被仰出候、委細從在申中可被申入候

次兩人安元不遺是惡仕候、每事相恋之儀、不可有疎略候、
御同所仰候、猶期來昔之時候、恐々謹言、

九月廿五日

佐田彈正忠殿

御報

三二九 大友家加判衆連書奉書

○佐田文書
增補五田文書大友家書科三

去朝日、至妙見所、無異候登城之用、注意之趣、則令披
露候、無様次第、御祝者之段、以御書被仰出候、尤珍
重候、殊杉因暗守、佐田、安心院、橋津、其外下佐郡衆中、
別而馳走之由候、至彼衆中、急度以彼僧可被仰違之由
候、亦被申談於國中敵心之儀候否、可被討果事肝要之由
候、能々可申旨候、被得其意、願不可有御油斷之儀候、恐々
謹言、
六月六日
木付三郎右衛門尉
田原民部太輔殿

治景 (花押)
親守 (花押)

三三〇 大友家加判衆連書奉書

○佐田文書
增補五田文書大友家書科三

出郡衆之事、前々下毛郡埋日迄著陣候哉、別而可被

抽軍忠之由言上之趣、令披露候、御祝者之旨、以御書委細被仰進候矣、尤珍重候、被得其意、弥被申合、此節御忠儀簡要候、恐々謹言、

六月廿一日

親守(花押)
治景(花押)

佐田彈正忠殿
失部宮内、丞殿
副兵部、丞殿
惡良美濃守殿
橋津掃部助殿
安心院中務太補殿

三三二 大友義鎮書狀

○田原文書
運轉訂正御年大友史料 〇

一 到

前十八、於廣津治部太補宅所、山田、仲八屋已下之若共取懸候之刻、遂防儀、敵數多討捕下山、早速往運到米候、感悅無極候、殊徒暮日、至廣津宅所、降居人数被左罷候哉、今度種初分捕高名之山候、連々原因之御才宜放候、祝者、弥其衣之儀、田原常陸介被申談、彼惡党等、急度可討果事頼存候、委細猶志賀安房守、雄城若狹守、可申候、恐々謹言、

六月廿一日

義鎮(花押)

三三三 大友家加判衆連啓奉書

○田原文書
運轉訂正御年大友史料 〇

一 到

前十八、至廣津治部太補宅所、山田、仲八屋已下之旗取懸候刻、当郡表被申進、即時懸付、敵數多被討捕之由注進之趣、則令披露候、乍來中、御惡深重之段、委細以御書被仰進候、珍重候、弥其衣之儀被申合、可被助忠貞事肝要之由候、猶期來信候、恐々謹言、

六月廿一日

親守(花押)
治景(花押)

三三三 大友義鎮書狀

○田原文書
運轉訂正御年大友史料 〇

前十八、至廣津治部太補宅所、山田安芸守取懸防取之刻、杉因輔守、佐田彈正忠野中兵庫頭、福島公云守、親宏被官、以加勢餘手、分捕高名之山、以著到承候、御忠貞感悅無極候、弥被業中被申談、山田、仲八屋已下之惡党等、不拔足候、急度可被討果事、頼存候、猶志賀安房守、雄城若狹守、可申候、恐々謹言、

六月廿二日

義鎮(花押)

三三四 大友家加判衆連啓奉書

○田原文書
運轉訂正御年大友史料 〇

去十八、至廣津宅所、山田以下無遊人申談、取懸候刻、為始隨居、宇佐郡衆、張杉因輔守、安心院、野仲、其外

御味方衆被懸付、則時被打崩候旨注進、得其意候、御勝利之段珍重候、殊陸居家中賣米中務丞種初任、分捕被注候由承候、高名之至候、同水松民部丞是又分捕粉骨成忠儀肝心候、定御從、御座所可被成御感候、田原親宏等陣之由候矣、於今者、其國惡可被御案中候、然者以衆評十手裏江被惡奇候者、出陣衆中談、而向水々御治世之可為首尾候、重々示給、白足度可申候、今度從最前降居忠貞之御覺悟無極候、殊足次郎方被逐出頭候、尤日出度候、隨御下知可有堪念之旨承候、旁以御忠心中及候、別而可被成御褒美候、各取合不可有疎略候、猶期後音不能重言候、恐々謹言、

六月廿四日

義鎮(花押)
長塚(花押)
養生(花押)

三三五 大友家加判衆連啓奉書

○田原文書
運轉訂正御年大友史料 〇

去廿、至山田宅所同要書、諸勢被取懸候之度、不能一戰落行候之由注進之趣、令披露候、降居軍、別而馳走、御祝者之段、相心得可申之由候、殊仲八屋可被打崩儀定候、被惡党不拔足之様、各被申談、忠儀肝要之由被仰出候、可被得其意候、恐々謹言、

六月廿四日

親守(花押)
治景(花押)

三三四 大友家加判衆連啓奉書

○田原文書
運轉訂正御年大友史料 〇

去十八、至廣津宅所、山田以下無遊人申談、取懸候刻、為始隨居、宇佐郡衆、張杉因輔守、安心院、野仲、其外

佐田彈正忠殿

三三六 大友義鎮感狀

○在學連二部文書
大分縣史料一〇

今度山田安雲守要誓、前代未聞之矣、謂宏志度以出罪、彼一類可被打果之由、申候之趣、不移時日、被逐出陣、前十一山田城被切所、自身粉骨之矣、親類被官、或者分捕虜、或者被燒、又斃死之人數、名々以着到承候、感視無極候、殊親宏被勸調略、故山田一子方千代、被打取候一段高名之儀、無比類候、弥無油斷御才覚、頼存候、此節御辛勞之儀、必近日、以便節可申候、恐々謹言、

七月七日

日原常陸介殿

義鎮(花押)

三三七 大友家加判柴速岩書

○在學連二部文書
大分縣史料一〇

去月七、至山田安雲守要誓、被取懸、則時彼一類悉被
打果候、御感深重候之趣、同今月四日、馬岳城之事、被
切崩、彼敵督頭進上之矣、忠儀之火弟、無比類之段、先々
以御書、被仰付候、就中親去も、自身被碎手之段、几
達上聞候、旁以今度大患之儀、水々不可有御志却之趣、
近日以上使可被仰書之矣、相心得可申候、恐々謹言、

七月九日

治景(花押)
親守(花押)

出原常陸介殿

三三八 大友家文書録簡文

○大友家文書録
大分縣史料二

○七月十一日、筑前國上秋月〇長門守文種〇誠、初文種
開元親族義長、而振兵衛、叛義鎮、通志於元統、搦占所城、
筑紫九馬頭惟門〇亮之、筑前肥前〇藩前〇藩亂、義鎮
遂請討取占所城、文種收而自斃、乃是日也、文種子種等
是役忠義者、
○前送所加賀守等、義鎮、義鎮實行、
前中書省、
文種子種宗嫡功、從上林之、前到局勸國元氣、筑紫
行、
氏乞降、其餘遂從政伏誅、或乞降、辛酉冬三州平服、義
鎮兵勢振〇九州、或謂曰、今在十月、義鎮前出十部軍勢、
辛酉春前、
按漢高祖大領部下感奮、則未免其口出、且為其秋月之、
一、肥二兩息、義志謀謀元統、并討不其之、
一、
一、

三三九 大友義鎮感狀序

日讀親宏感狀文書
日讀親宏感狀文書

今度豊前國出張之類、遂供奉、至去六月廿日、山田安雲守
降朝要誓、抽軍勢、同七月四日於馬岳城攻口、粉骨之次第、
顯然候、就中郎徒新五郎、被斃、別而忠貞之主候、弥可
被勸戰功事、肝要候、恐々謹言、

七月廿二日

義鎮(花押影)

渡辺左京亮殿

三四〇 田原親宏感狀

○在學連二部文書
大分縣史料三

今度豊前國免向之餉、遂供奉、去六月廿日、至山田安雲
守降朝要誓、軍勢抽之、同七月四日、於馬岳城攻口、
最前斃登、令矢入、抽粉骨、要被矢斃、馳尤云、忠
節云、誠感極至極候、必通而可賀之状、如件、
弘治參年七月廿三日
親宏(花押)
善木上助殿

三四一 田原親宏感狀家

○在山山文書
大分縣史料一〇

今度豊前國出張之類、從最前辛勞候、殊六月廿日、至山
田安雲守降朝要誓事、同七月四日、於馬岳城攻口、粉
骨之趣、誠神妙候、弥忠儀下要候、追而可顯志候、恐々
謹言、

七月廿三日

片山市允殿

親宏

三四二 某手日記

○在學連二部文書
大分縣史料六

吉弘左近殿其外雨部衆、何も或珠部へ御立候、
一同廿一日癸酉、大友殿御座、人ウスキ候失候、女中方
斗残也、上様無相違候、
同十八日庚午、令百方之登水内、山香島地所務論有、

令官内新石衛門幽死候、女一人、又六手負候、山香親子失候、

一回 城井・八屋・山田衆取かけ、放火候て引候處、城井侍候八屋防戦仕候、中八屋衆・山田衆之頭十三、城井打取、珠珠へ遺候、八屋衆七十八斗手負候、

六月一日、武藏田原民部大輔、至妙見登城、昨日此日木付登城候、杉因轡殿下城、田原衆木付二斗手也、

十一日甲申、当郡衆陣立也、

一回十八日庚子、山田至廣津三取懸候、防戦杉因轡守衆・宇佐郡衆・野中衆、當時打留頭六十七、明幸十九日、以上百人打死、手負二百斗也、都合三百斗損候、山田八其マ、打負引揚候、

一回、為山田・仲八屋・如法寺中閉退治、田原常陸介○茶調部三立、河向花藏寺付物数手計也、其外富米・真下・都中・北浦辺衆三手計也、

一回十九日辛丑、花藏寺立ツイ地付、

一回廿日壬寅、上毛郡悉ク放火候、

一回廿一日癸卯、辰退、山田城落居候、彼一綱衆行方不知成也、爰アハレナル事有、山田安芸守降朝子親下代丸、正年一歳成を、秣刑部生書候て、頭を至親など、現形候、仍安芸守降朝行方不知落行候、上毛郡内者山田山二入候者、頭八百余諸軍取也、女数人方々トラレ候、上毛郡四分一男女失候、

一仲八屋備前守英信、同六月廿七日己酉、至親宏現形也、

一回七月三日甲寅、至中津郡陣贊也、同四月乙卯、馬岳落居也、城トクヨシカイ、同ミナキ中塞守、其外秋月衆百計打取候、又山原方同衆松木・甲斐・富島ナト云々、打死也、

三四三 田原親宏感状

○大分県史書

今度豊前因免向之刻、從最前令供奉、去六月廿日、山田安芸守降朝要害落去之刻、同七月四日馬折崩之折節、別而粉骨神妙之至候、追而不可有忘神候、猶以、弥誠功可勿勿論之状、如件、

弘治二年八月三日

親宏(花押)

粟嶋源右衛門尉殿

三四四 田原親宏感状

○大分県史書

今度豊前因免向之刻、任節日申付候、無異候令馳走候、去六月廿日、山田安芸守最前要害、潤十月^乙於馬折辛勞、誠神妙候、必追而可賣申候之矣、弥忠節肝要候、恐々謹言、

八月十三日

親宏(花押)

鶴田神五郎殿

三四五 秋吉昌綱書状

○大分県史書

就曰杵御主殿、今度水政新さ衛門尉、すかも田^三付候て、いろく無沙汰申二よて、下地を御あらためられ候、無念儀候、然者我ら、剛度わひ事をいたし候間、新左衛門三二筆を仕候ハ、無子細候之由、承候間、御意のま、一筆させ進入候、以後無沙汰之時者、我らとして、重而

いろ、下申ましく候、如何様、以面^三可申承候、恐々謹言、

二月、日

秋吉殿(花押)

昌綱

三四六 首藤鑑秀・竹田津鑑和進書状

○大分県史書

急度令落候、仍至田染庄^三被仰付候御主殿上真、山香那役所分者、相調候之矣、御馳走之分、明置申不申候之矣、以外御殿立候、竊難為御免許之在所、上御代々如此御主殿作、又者御城誘之時、早々御馳走候事、不珍之由、度々以御口能、被仰出候之矣、于今御無馳走、如何候哉、重々可達上聞候、為御存知候、恐々謹言、

五月十六日

鑑和(花押)

鑑秀(花押)

出染少宮司殿 御祈所

三四七 大友家文書録綱文

○大友家文書録

義統者、從四位下左衛門督義鎮入道宗國嫡男、母家臣奈多太^三司露房之女也、幼名長壽丸、及加吉服、虎五郎、賜大朝奏諱字、曰名義統、叙從五位下、任左兵衛督、又任持從受父之讓、為第二十一代家督、管國、後、

勅忠儀事申一候、委細先書申候、乃存知候、恐々謹言、
十一月十五日
佐田 彈正 忠殿
安心中務大輔殿
其外 郡 衆 中

〔表紙〕(花押)

飯田 但馬守殿
矢部宮内少輔殿
深見中務少輔殿
惠良美濃守殿
時枝兵部少輔殿
安心中務少輔殿

二五八 大友家文書録綱文

〔大友家文書録
大分縣史料二〕

是年、宗麟相牧海部郡白杵村牛島新築城、白上原領移使焉、初出家世々博館於府内居之、築城於高崎山為不虞之守、至義鎮治岡、遷領於上原、而今及此矣、使嫡男長壽丸居上原館、長壽丸、兼行高崎

二五九 大友家加判衆運習書本宮

〔大友家文書録
大分縣史料二〕

母々之在陣字安、雖無辰朔候、至農前表請勢被差出候之矣、別而馳走可為御悅喜之由、披 仰出候、披得其意、聊不可有疑之儀候、恐々謹言、

〔到八月十三日〕 八月九日

宗麟 (花押)
露連 (花押)
鑑理 (花押)
鑑連 (花押)

佐田 彈正 忠殿
安心中務大輔殿
其外 郡 衆 中

二六〇 田原親宏書狀

〔田原文書
增補正保年大友史料二〕

各至下毛郡出張之儀申談候、親宏事、明日十日、彼表江可令着陣候、郡衆放仰談、急度御來降肝要候、請事可被申談候、定從一老可被申候、令啓候、恐々謹言、
八月十三日
親宏 (花押)

佐田 彈正 忠殿
飯田 但馬守殿
橋津 掃部助殿
惠良美濃守殿
時枝兵部少輔殿
安心中務少輔殿
各申

御宿所

二六一 大友家加判衆運習書狀案

〔此白文書
熊本縣史料中世二〕

今度郡衆出張之儀、上意之旨、征收赤表以違新申候、請勢於下毛郡還在陣候、各陣陣如何候談、明日十七、若陣肝要候、岡中之儀候之矣、此節可被勸重勤事、無余儀矣、兼日被仰出候首尾、不可有疑候、恐々謹言、

八月十六日

安心中務大輔殿
時枝兵部少輔殿
惠良美濃守殿
副 越 中 守殿
飯田 但馬守殿
橋津 掃部助殿
佐田 彈正 忠殿
各申

鑑理 兼清
露連 同
親宏 同

二六一 大友家宗麟書狀

〔任王文書
增補正保年大友史料二〕

就所勞矣、為要平、下城之中、尤無余儀候、然若為名代息須嗣被差候、人数等別而馳走之由、肝要候、弥城内衆被申談、無清助勤奮候入候、猶古岡越即人追可申候、恐々謹言、
八月廿二日
宗麟 (花押)

佐田 彈正 忠殿

二六二 大友家文書録綱文

〔大友家文書録
大分縣史料三〕

八年之丑六月十二日、田原常陸介親宏奉宗麟命、攻豐前州上野野筑後守里城、我兵被劔所討、原主計允・伊

貞・江島之刑部公綱・宮内卿其外○一類名曰放火乘舟
焚燒、依風波公建ハ江嶋逆討候、則曰高山、社奉行堀
宮サセラレ候、翌日ハ宮成繁十方曰鑑某家未悉被押取
候、又風聞ハ、公早後家ニ鑑基有同心度之儀、被申飯
ヨリ、後家ハ八屋ヘ被行候、公建ハ光隆寺越年候、
正月止二日夜、又公建ハ如田河郡領地被行候、領内悉
白社奉行入部候、

浦邊鑑基・親宏・親賢・木付・大神○下下毛郡在陣
候、

一五月二日、長野後守江島忍入牛書候、是ハ到津被旨
者仕候由候、又曰毛利家、三國等堂寺通路ニ宮尾城取
候、畿後守ハ被打候ヘ共、同名兵部左京後三國を待
等覺字をも同名ニ河持コタヘ、至豊州進上候、同六月
廿日、白豊州宮尾せメ被落候、中國衆五十余被打御候、
其後ツイキノ郡別府宿陣候、又都郡大坂山ヲ、杉因幡
守西郷兩人面取請候、是又せメ被落、杉領も西郷毛向
參候、又各ハ至別府宿陣候、豊州之御勝利日出候處ニ、
一九月三日至貫越打廻候、又安委衆去八月十六日ヨリ渡
海仕候、又宮尾取長野候、二國取恣候、同三日酉時
せメ候、同四日二小二岡ハ落候、同五日大二岡落、同
夜等覺寺落居候、長野兵部左京ハ被打候、其外城内男
女數千人生書候、敵ニ多損候風聞候、二河守ハ豊州ヘ
參候、又至二岡當方七人ヨリ、人数四十三人遣候、同
親宏被官京藤原部下二人、以上彼二人計陣者候、四
十人死候、

三七二 刀衆先代帳

○香山縣内名帳
依日編年史別名代中世編

一水禄十二年戊辰正月十日
於藤原二保岳ニ陣取、日出來、以衆也、彦山衆阿も
山領之衆取懸候、則落城也、豊後州之陣、吉木浦彼
陣ニ保落城候故、馳而陣降也、

三七三 田原親宏感状

○感動文書
大分県文書二〇

今度至西・大野・高山、云州衆致懸捕籠之衆、去五月
廿日取懸之儀、可懸抽之、刺、城落去之刻、夜中馳奪敵前、
心懸之次第、感悦之次第、同於杉、西郷河城等、累日防
戰之段、令承知候、必追而可令智守候、亦忠貞ノ業候、恐々
謹言、
六月廿八日
親宏(花押)

三七四 安東鎮景書状

○安東文書
大分県文書二〇

三月一日 御書同十六卷參拜、雖以頂戴仕候、如被 仰下
候、去年以來至筑前表、御三老御在陣、然者郡衆之事、
區處違御手、相忘馳走不存候、殊有聖・森越前守・古
後因轉守・堤次郎兵衛尉申談、福井・宝珠山・河内内之
儀、任御下知悉會先向、於其上ニ城取付、下今勸奮至勞
仕候、亦郡衆申談、可逐馳走之由、被 仰下候、衆中存
其旨候、此而御行之御、郡衆老若中罷、可令馳走覚悟候、
此之由、官預稱被落候、恐慮謹言、

二月十七日
安東河内名帳
鎮景(花押)

口次伯耆守殿
進上 白杵越中守殿
吉弘左近大夫殿

三七四 刀衆先代帳

○香山縣内名帳
依日編年史別名代中世編

一水禄十二年己卯三月十八日、座下惠忠、至豊州敵被召候、
以此故於佐田岳、繼後來、日田衆被取懸候也、座下、
種曹御在陣、彦山衆も出陣也、津野殿、乙石殿其一
族悉誅戮也、

三七五 大友宗麟感状

○和光文書
大分県文書三三

去五月十八日長尾於切岸、被跨手候故、被執之由、碧舟之
次第感入候、亦可動馳走事許致候、必追而一段可買之候、
恐々謹言、
七月十三日
宗麟(花押)

板井民部少輔殿

三七六 大友宗麟書状

○大友家文書
大友宗麟書状大友宗麟三

先告知申候、急度出張之覚悟候、然者任先例、至松木、

要候、大神弥七郎事、或追加候之案、每事可申談事、專一候、
猶吉弘左近大夫可申候、恐々謹言、
三月十二日

宗麟(花押影)

渡邊六郎殿
新邊新五郎殿
河内加賀守殿

三八二 大友宗麟書狀

○大友宗麟書
日田縣史卷四四四

賀來中務少輔・谷川三郎兵衛尉事、急度可出張之候、申
付候、同三人事、乍辛勞、至鹿越有登城、無浦斷動番、
肝要候、大神弥七郎事、兼加候之案、每事可申談事、
專一候、猶吉弘左近大夫可申候、恐々謹言、
二月十一日

宗麟(花押)

渡邊源江守殿
渡邊左京亮殿
渡邊村尾守殿

三八四 鑑述・鎮忠連啓書狀

○鑑述
大分縣史料二

尚々其御留守御番、一人之御辛勞、自是申斗候、
預御狀異人存候、此表無程相測、上日出候、宗天御事、
依上意、爰元被成御城番候、普請之色々、尽辛勞候事、
可有御察候、每事以上可申承候、恐々謹言、
六月四日

鎮忠(花押)
鑑述(花押)

栗師寺土水助殿

三八五 大友宗麟書狀

○大友宗麟書
大分縣史料三

上井廻屏之儀、至諸郷申付候、仍桶出庄之内、
地諸点没免許之段、雖令存知候、此度之事者、為所累、
直馳走、可為悦喜候、猶奉行中可申候、恐々謹言、
九月十二日

宗麟 書判

三八六 野仲鎮兼書狀案

○内任文書
增補町正編年大友史卷六

今度最前以來、至長濱被取退、別而忠儀之次第、無比類候、
然者此節被山上之趣、憶承知候、至親賢一廉申渡候案、
定而不可有余候候、向後之儀、各々安堵候様、可為才覚
候間、聊不及御式仕候、口細之儀、申尾孫次郎中合
候、恐々謹言、
九月廿四日

鎮兼

内尾助助殿
伊藤五次郎殿

三八七 大友宗麟書狀

○普林文書
大分縣史料三五

上兩廻屏之儀、至諸郷庄申付候、仍安岐郷之内、其方領
地分諸点没免許之段、雖令存知候、此度之事者為所累、
直馳走肝要候、猶奉行中可申候、恐々謹言、
十月廿四日

宗麟(花押)

若林弥正忠殿

三八八 大友宗麟書狀案

○大友宗麟書
大分縣史料三二

上井廻屏之儀、至諸郷庄申付候、仍往隈郷之内、
地免許之段、雖令存知候、此度之事、
可為悦喜候、猶奉行中可申候、恐々謹言、
十一月十一日

宗麟 書判

齋藤八郎殿

三八九 大友家文書録綱文

○大友家文書
大分縣史料三三

一月、義統因上兩廻屏事、授青子山北大炊助、

三九〇 大友義統書狀

○日北文書
熊本縣史料中數四

十固廻屏之儀、至諸郷庄申付候、仍直人郷之内、其方領
地分之事、諸点没免許之段、雖令存知候、此度之事、馳走
肝要候、猶奉行中可申候、恐々謹言、
十二月一日

義統(花押)

北北大吹助殿
○日本書紀三傳支卷(大分縣史料) 二二二(三)字アリ

三九一 戸次道守讓与立花城置物員教書

○立花家文書
地籍訂正並年次表卷之二

依無男子至間千代女讓与口數事、

立花東西松尾白岳御城督御城領等、(下略)

(中略)

一打刀一振加賀

右、永禄十二年二月、至肥前國被向御人數詢、筑紫衆後卷簡、從日向郡、御陣所、御先急放出衆、為御感、宗麟様御手次令拝讓之說、仍号重代、同翌日於筑後、御口能之御加書致取取事、

(中略)

一長刀 壹枝兼光

右、愚老一代、於在々所々令隨身之、就中吉川・小早川頭入防長而備云石雲他、其外數ヶ所之諸勢引率、至當御城付詰陣、為後卷、宗麟様日向郡迄依被成、御進發、御分國中諸勢不残有出張、敵味方及二上箇國諸勢出食、登之内付陣、于時永禄十二年五月十八日、敵陣長尾切懸、自身降手権高名、同親類密探被官、或分捕被責、或懸々令殺死向、別而御口能之御加書致取取、而日名番探家之可為重害者也、同軍忠扶補御有之、因茲被一枝号五代、

(中略)

右此状之外、太刀刀物長等、金銀根具外半家財、聊不可成納者也、但欠糧下高、何も三百人鉄根也、御城置物加之說、

天正三年五月廿八日 口次伯耆守人進
道齋

○大友家文書
大分縣史料三

三九二 大友家文書録編文

○大友家文書
大分縣史料三

諸軍免上原館、向日州、有授於中堂

三九三 大友義統書狀案

○大友家文書
大分縣史料三

就國中行之儀、田原近江入道・朽綱二河入道行寄、以相談中旨候、被得其意、今程当城堅固之格護、可為祝者候、既到佐伯紀伊入道差添人數、聚在陣之上者、弥諸方相調、初秋之時分令出勢、可圖案中事指掌候、仍服懸一領御糸毛進候、頭寸志計候、於縁体者、委細年寄共可申候、恐々謹言、

四月廿四日

米良四郎右衛門殿

義統

三九四 大友よし統感状

○小野原文書
大分縣史料一

今度從最前在陣、感入候、然者雄城弥十郎、上算之裏登置城之儀申付候、重々辛勞ながら、同陣專一候、かならず追而、可賀之候、かしく、

五月廿七日 よし統(花押)
をの尾張正志忠への

○大友家文書
大分縣史料二

三九五 大友義統感状案

○大友家文書
大分縣史料二

長々在城、別而辛勞候察入候、爰計出勢之儀、聊非油斷候之衆、其間之事各申合、亦堅固之覚悟、肝要候、仍帶二つ并寄進候、猶野上市右衛門尉可申候、恐々謹言、

七月二日

山香郷西分衆中

義統

山口表目智(分城)

三九六 田原紹忠書状

○長谷川文書
大分縣史料一

今度最前(米良)然認城、恣無比頑候、弥可被抽忠貞事、憑入候、於靜謐者、一應可令扶助候、聊不可有相違候、尚年寄共可申候、恐々謹言、

十一月廿四日

水谷越中守殿

紹忠(花押)

三九七 田原紹忠書状

○田原文書
地籍訂正並年次表卷之二

今度最前以來院在城、空御感敷候、相互之外支候衆、他御馳走再一候、於靜謐者、拾可可預進之候、聊不可有相

邊之儀候、恐々謹言、

十二月廿四日

七郎殿 御宿所

紹忍(花押)

三九八 大友家文書録綱文

大友家文書録
大分縣史料二

七年乙卯正月十一日、宗麟謀家督於嫡男五郎義統、白致
仕、○然因勢平人添伯聞、其後宗麟改名宗濟、其後宗濟
乃敏王後孫也、為今皇統也、

三九九 田原紹忍書狀

仁豐子氏
堀河司生壽共女史目 四

今度最前以來、身然籠城定無比類候、情忠儀肝要候、於
靜攝候、何様一應可令扶助候、御不可有相違候、恐々謹言、

正月廿九日

今仁播磨助殿

紹忍(花押)

四〇〇 安東某覚書

安東文書
堀河司生壽共女史目 四

後代之覚形見也、生年廿五、丸山民部少輔、

天正七年從正月、印原復賀御代被懸之盛、御内之如
法寺式部少輔之御子親武、殿有在城、攝中之人御盛盛不
斜、然延明八年二月十八日、於虎越勢刻、家中引割、同
十九日、如同來、詫磨、喜嶋被打人、其刻比所懸有破却、

御先祖始之家、我等々七代目、燒捨、此門親並就宿所、
荒物一ツ不執、敢出渡多、如要書罷退、小屋懸送日、明
九年正月晦日、被居屋敷如野原建候、所々十枚敷之借屋
作、我ニ無親乱以來之身苦辛勞如須弥山、漸回同仕、相
絞門踏明居者也、從夫以親家御代五年、又家乱、一毛
分御公頼、其後占庄一聞被召目御知行取平、其後占庄右
馬助殿御存知、如此代甚多、氣不浅、雖尺草も、然者、
為境目御、防加山取談、麓之山嶽、御盛敬切披、家作等、
尺氣根事無限者也、

四〇一 大友義統書狀

青弘治文書
堀河司生壽共女史目 四

先口手火欠進之儀之處、白受之中承候、祝者候、然者原
山要書誘之儀、無御油断懸、示給致、專一候、雖無申志候、
每事無親覺悟、簡要候、殊方々為加下知、出張之内意候、
時分柄之儀、重而可令人魂候、委續猶補上、左京入道可申
候、恐々謹言、

一月三日

吉弘太郎殿

義統(花押)

四〇二 大友家文書録綱文

大友家文書録
大分縣史料三

二月四日、白府内界町出火、高時城難災、
○約約ノ出火ニ由ル、高時城難災ニ八段同多シ、

四〇三 田原紹忍書狀

長野文書
大分縣史料一〇

巧つてほ之事、雖累年託言候、歷々之儀候之矣、不令分
別候、然處、今度籠城無之覚悟感入候、為其實令宥免候、
為存知候、恐々謹言、

正月十一日

永松越中守殿

紹忍(花押)

四〇四 大友義統書狀

大友文書
大分縣史料一〇

職就懸要書之儀、承候之趣、得其意候、任指率被城番之事、
堅固可申付候、委細重々以使節、可申候、

二月廿二日

田原常陸人追殿

義統(花押)

四〇五 大友義統感狀

長野文書
大分縣史料一三

今度秋月、身懸取之者共、惡逆之企不及是非候、然者毛利
兵部少輔以同城、別而軍旁之山、盛入候、亦馳走簡要候、
必取鎮可買之候、恐々謹言、

三月廿二日

羽野勘七郎殿

義統(花押)

四〇六 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
大分縣史料三三

文同右四
惠良常刀兵衛尉殿

義統 在冊

四一三 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
大分縣史料三三

〔下三十八頁〕

一、秋月兵到入鹿庄田郡、阿南要兼力戦、負

一、浦上彈正忠長門入道、登材木岳城、附申

投書於統之、又作書、賞阿南要兼戰

○浦上彈正忠長門入道、一應所取卜候、傍注云。

義統使田原紹忍、附上野左介續久、惠良常刀兵衛尉、香志田統信、三久保鎮量、波多源内允等諸士、守豊前國龍王・妙見城、以備不虞、右授於上野・惠良・香志田・波多義統書、

四〇七 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大分縣史料三三

田原近江入道事、至明兒所差延能候之處、以在城普請以下、別而辛芳之由感入候、弥馳走可令悦喜趣、猶紹忍可申候、恐々謹言、

二月廿七日

波多源内允殿

義統 在冊

四一一 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大分縣史料三三

文同右四
來之下付可為難定、恐々謹言、

久保今入仕殿

義統 在冊

四一二 大友義統書狀

○香子委氏文書
澤博司正編年大友史料二五

田原近江入道事、至妙見所差延能候之處、以在城普請以下、別而辛芳之由感入候、弥馳走肝要之趣、猶紹忍申候、恐々謹言、

二月廿七日

香志田兵部丞殿

義統 (花押)

四一四 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大分縣史料三三

彈正忠登城之儀、申付候處、

心懸之次第、感悅候、

必以時分、可領其志候、猶

八月十八日

中島十藏助殿

義統 在冊

四一五 大友義統感狀

○阿文書
大分縣史料九

於今度日州高城表、父中務尉殿二人討捕、先年祖父河内入道、於玖珠郡松木峠手戰死、旁以忠儀無比類次第、感入候、必追而一獲可加之候、踏日之事、任謂之旨、猶

九月十九日

向清城殿

義統 (花押)

四〇九 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大分縣史料三三

同文右四
上野左介殿

義統 在冊

四〇八 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大分縣史料三三

四一六 大友義統感狀

大友義統文書
增補訂正編年大友文書四一六

前廿、於下毛郡表、惡克和馳候之刻、別而粉骨之山、其間候、感入候、殊服以在城、折々軍旁心懸之次第、必取鎮、可賀之候、猶田原新九郎可申候、恐々謹言、
十月廿六日
義統(花押)

成信越中守殿

四一七 山原親家感狀

大友義統文書
增補訂正編年大友文書四一七

就便宜染筆候、仍去冬以來全乱不及是非候、從最前、至賀米安云守切番至候、別而被勸筆忠之通、無比類候、然者另元御衆評半松間、弥無油断御心懸肝要候、御行之様子追々可申遺候、委細口上三相合候、恐々謹言、
十一月一日
親家(花押)

成信越中守殿

進之候

四一八 大友義統書狀

大友義統文書
成信越中守中目五

今度^御本表行^御之儀申談候半、表陣之衆打入候、就大浦池志摩守改心底之由候、無余儀存候、鑑^御於忠儀者、不可有忘却候、然者其母鼓及氣仕候哉、出山之儀者、從前々無^二之覚悟不振他事候之衆、弥以可被勸御粉竹事頓有候、仍刀一慶進之候、委細成寺申合候、恐々謹言、

十一月十一日

五條殿

義統(花押)

四一九 大友家文書録編文

大友家文書
增補訂正編年大友文書四一九

頃^御田原親貫、取義統、応秋月、龍蓋寺、幸盛所々、口在豊後、國東郡浦辺、別備被^御警備、以俟降旨、種実、授兵、鑑^御其家士津崎善兵衛人道於秋月、秋月亦使上野四郎兵衛、江利内藏助修浦部、共約其助、^御討候^御思不^御成^御不^御成^御、及于此、^御田原親貫、令其族如法守藤五郎親武、守鞍懸^御、以寄拜、

四二〇 大友義統感狀案

大友家文書
增補訂正編年大友文書四二〇

其方事、至妙見所、駿遠在城、別而、忠懸之心懸、不淺之由、銘々、令承知、感入候、弥前々被^御任下知、可預馳走事、可為悦意候、何様、其境靜謐之刻、一被、可頭其志候、為存知候、恐々謹言、
十一月十六日
義統(花押)

飯田但馬入道殿

四二二 大友義統感狀

大友家文書
大分縣文書四二〇

至波多要屯、鼓部左近大夫在城之儀、申付候處、從最前

以同心、別而幸芳之段、感入候、弥可被勸馳走事、肝要候、必道而一段可賀之候、恐々謹言、
十一月十七日
義統(花押)

鼓部龜久佐殿

四二二 山原親家書狀

大友家文書
增補訂正編年大友文書四二二

今度、被^御討候儀、為忤家、前後名以熟談、加下知候、就夫別而親武才骨故、一城普濟等成立候、大慶此事候、於然者、彼安否之儀、可預察候間、基子等以隨身、在城肝要候、自然誰人申助仁候共、為親貫不可許容候、必靜謐之刻者、可申談候、為御存知候、恐々謹言、
十一月廿二日
親貫(花押)

如法寺藤五郎殿

四二二 山原親家書狀

大友家文書
增補訂正編年大友文書四二二

雖今度惡况形候、其方事以順儀之當情、切番取誘、堅固被^御支候、誠忠負無比之趣、別而御感之段、被成遣御書候、尤珍重候、然者到抄見出、不日御加勢衆被^御指立候矣、弥以親類中被申談、可被勸御粉竹事肝要候、何様一被可被或御扶助之通、能々相心得可申旨候、為御存知候、恐々謹言、
十一月廿七日
親家(花押)

賀米安云守殿

四二四 田原統家書狀

○成親文書
增補訂正編年大友史料 一五

今度其表做現形候之刻、至百末安去守切宮被差候、別而被尽粉骨之役承及候、豈御忠貞之次第、不及申候、爰而御出勢之儀、火急之御儀定候之条、其間之儀無級様、同陣衆可被申談事專一候、殊御感深重之趣、進々以御書可被仰出之由三條間、御被傳其意、可被助貞心事肝要候、何様一棧取合不可有念儀候、恐々謹言、

十二月廿七日
親家(花押)
成恒穩中守殿

四二五 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
大友家文書錄三

十二月 義統誦討秋月種夫、遺志買安房入道遺願、田

北大和入道紹智行朝二河入道宗康、戸次伯耆守鎮連、一万田民部入道宗康、於豐前中津、志賀道易等會之、兵士稱二万余人、請將移陣於高和、攻長野氏、其森然、汝之、而陣猪股、議攻否森城、種安奔古所山城在矣、到豐前仙津、乘其南、夜襲猪股陣之不意、大擊之、豊軍死傷若干、敗逃而入中津城、於是義統欲附春進亮口田部、以討秋月勃興○義統、授書于飯田但馬入道頼成、旁其在妙見城、

四二六 大友義統感狀

○遠史文書
增補訂正編年大友史料 一五

前々、平田打廻之刻、逢合戰、勝利之由候、就中其方手之者分捕高名之由、忠覺無比類候、必取領、迫而可賀之候、亦可抽陣走事肝要候、實大陣中務少補、小田原左京亮可申候、恐々謹言、

正月十一日
義統(花押)
渡辺石見守殿

四二七 大友義統感狀家

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料 一四

前々、平田衣、打廻之刻、惡党浮合、防戦之嗣、鎮釋被碎子、依被助粉骨、打捕頭、以注文承候、年市之旨迄、

案中存候、必取領、可顯其志候之趣、猶宗復推右衛門尉可申候、恐々謹言、
正月十一日
義統(花押)
小田原左京亮殿

四二八 大友義統書狀

○平太文書
增補訂正編年大友史料 一四

田原近江入道被申談、駭以登城、貞心之覚悟深重之由、紹忠預入魂候、乍案中感悅候、加勢之儀急度相催候間、

亦紹忠遂熟談、此節別而可抽忠貞事專一候、必取領、可賀之候趣、猶田原親九郎可申候、恐々謹言、
正月十六日
義統(花押)

永水右京亮殿

四二九 大友義統書狀家

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料 一五

田原近江入道被申談、駭以登城、貞心之覚悟深重之由、紹忠預入魂候、乍案中感悅候、加勢之儀急度相催候間、亦紹忠遂熟談、此節別而可抽忠貞事專一候、必取領可賀之趣、猶田原親九郎可申候、恐々謹言、
正月十六日
義統(花押)
飯田但馬入道殿

四三〇 大友義統書狀

○成親文書
增補訂正編年大友史料 一四

田原近江入道被申談、駭以登城、貞心之覚悟深重之由、紹忠預入魂候、乍案中感悅候、加勢之儀急度相催候間、亦紹忠遂熟談、此節別而可抽忠貞事專一候、必取領、可賀之趣、猶田原親九郎可申候、恐々謹言、
正月十六日
義統(花押)
成恒次郎殿

四三一 大友義統書狀

○成親文書
增補訂正編年大友史料 一五

田原近江入道被申談、駭以登城、貞心之覚悟深重之由、紹忠預入魂候、乍案中感悅候、加勢之儀急度相催候之節、

四四〇 大友四齋書狀

○五口文書
原本忠利中書一

春日祖申候、内略之儀、令百尾、親實家中、此方江申組
候者共、頭願路之心成候矣、満足此申候、定則、至取難
可罷罷候歟、於下今者、雖可為落去候、万一親實、如法
寺以下、形基候者、至花野衣被懸付、此節可被助中書儀事、
肝要候、然實示也、一節日為再興、家米之名申合、想至之矣、
家骨之儀、至親家申出、一向申可為入部之矣、其舉來被
中淺、初事取固之字、其、寺一候、迄方候歟、早令敷預注進候、
御心懸之次第、案中候、難免今日是申候、恐々謹言、
二月廿一日
佐田彈正忠殿

佐田彈正忠殿

○萬日文書
原通訂正編年大友史料一四

四四一 大友義統書狀

○萬日文書
原通訂正編年大友史料一四

宇日村之内、其方諸地十五貫分、諸吉役之申水々令免許、
孫可為殘斷不人候、併於屋作城誘等者、一向申付之矣、
可達其節事肝要候、為存知候、恐々謹言、
二月廿九日
義統(花押)

二月廿九日

義統(花押)

四四二 大友義統書狀

○吉史文書
原通訂正編年大友史料一四

其表弥無事之中、珍重候、方角家被申談、鞍懸之儀、急
度被推肝要候、然者就浦部表、案中懸前之策、多分門通

之子細候、隨而小倉營之儀、近日到來共候歟、自然通用
之申成候者、從被運有内略、彼家中之者共、向後之存付失、
以思慮此節忠儀候之儀、被申達專一候、為存知候、恐々
謹言、
二月廿九日
義統(花押)

吉原太郎殿

四四二 田原親實知行宛行狀

○地持家文書
大分縣史料三〇

就今度被懸備城、忠儀之次第、神妙候、仍五拾貫文分、
押付之前、加袖判充行候、縱雖有先判、面々事、無足之屈誠
感候候之矣、聊不可有相違候、以此旨、弥忠勸肝要候、恐々
謹言、
二月一日
如法寺右史元殿
親實(花押)

四四四 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分縣史料三三

田原親實出浦部城、守被懸儀、親家人安岐親、津崎備前
入道、津崎兵衛助等統之二月、義統出被懸事於宇佐上
久保令人依領、勵其志、日命所降江間村之京藤紀伊入
道令理、田村統綱、林左京亮、一萬田民部少輔統實、上
野兵部少輔、安相寺、平井兵部少輔、野上彈正忠、齋藤
市正、白井刑部少輔、上野華人在、白井左近大夫、胡麻
津留左衛進、田尻太郎、朝原八郎、山吹左馬助、上野益

部助、宗儀權右衛門入道、寒田藤紀兵衛尉、越都甲、得
親家指商、以可同被懸表、共有書、

四四五 大友義統書狀

○大友家文書録
大分縣史料三三

於其取、打廻等無油斷、被運馳走之中、感入候、鞍懸于
今相支候之矣、弥方角家申談、可助粉骨之事、簡要候、
猶古仕進充可申候、恐々謹言、
三月五日
久保宗人佐殿
義統(花押)

四四六 大友義統書狀

○地持家文書
大分縣史料三三

近日其元立柄無到來之矣、染筆候、堺口無替儀候歟、示
給度候、豊筑表、今度珍子細無之之由被問、專一候、誠而
田原右馬頭逆心顯然之矣、爰可加謀伐、前廿一勢立等候歟、
不得付人数退散、案中存候、然者、至輪懸要事備候候之矣、
不取足候、堅如下知候、遠聞雖有正儀之矣、被是為可申、
以西伯寺申候、其衣之儀、弥各被申談、無油斷御才寬簡
要候、委細志安房人通、可卓候、恐々謹言、
二月九日
義統(花押)

鹿子木三河入道殿

四四七 志賀道輝書狀

○地持家文書
大分縣史料三三

近日者、其表御瑪來依無之、以御香被仰出候、珍重候、然者、田原石馬頭運逆顯候之案、被加御誅伐候、結句、不待付御人數退散候、誠人迫之場所、案中存候、親實事、僅之以人數、要書上備置候之案、不拔足謀、被成、御下知候之間、落去不可移時日候、猶西伯十五被御合候、恐々謹言、

三月十五日

鹿子木二河人道殿御書

道輝(花押)

四四八 大友田齋書狀

○田原近江守文書
大分県史料一〇

如存知、古庄遊允事、義統近江守雖合與忍候、貴父跡目依進候在宅候、被懸近方付而、夜口無油断之出候、弟大宇助事、難委許上召仕候矣、旁以遊允事、別而可被添御心事肝要候、可被得其意候、恐々謹言、

三月十六日

田原新九郎殿

田齋(朱印)

四四九 田原親家感狀

○田原近江守文書
大分県史料一〇

去人至候懸敵相輔之刻、懸合手火矢任、粉合之次第其間候、神妙候、一城落上之御、可成其感候、弥辛肝要候、恐々謹言、

三月十七日

安東宮内丞殿

親家(花押)

丸山外記充殿

四五〇 大友義統書狀案

○大友義統文書
大分県史料三

於上兩村、在陣之出候、旁勞懸存候、然者至被懸表、可被打出時分柄之儀、親家以内談、同口越山肝要候、亦無油断、熱誠專一候、雖熱、先以都甲境日迄、被懸存寄、可被申談候哉、殊以余々申旨候、被得其意、每事堅固之才、可為祝着候、猶兼田石京入迫、田北治部少輔、可申候、恐々謹言、

三月十七日

鹿藤紀伊入道殿

義統(在表)

幸田藤記兵衛尉殿

田村作進殿

右上包田村作進殿

義統

四五一 田原親家知行宛行狀

○直傳文書
大分県史料一〇

今般意城供奉之儀、一段神妙之至候、為忠實、其方小領不足分之儀、令城附候、弥守此旨、忠誠願入候、恐々謹言、
二月十九日
親家(花押)

豐崎美濃守殿

四五一 大友義統感狀

○藤田清六文書
大分県史料一〇

今度其表亂空之刻、田原近江入道至妙見居在城之処、從嚴刺駁令罷城、動軍旁之由候、感入候、當可抽馳走事、肝要候、恐々謹言、
三月十二日
義統(花押)

植田因幡守殿

四五二 大友義統感狀

○赤木文書
藤田清六文書
大分県史料一〇

今度其表亂空之刻、田原近江入道到妙見居在城之処、從嚴刺駁令罷城、動軍旁之由候、感入候、當可抽馳走事、肝要候、恐々謹言、

二月廿三日

承永右京亮殿

義統 (花押)

四五四 大友義統感狀

○成徳文書
增補訂正編年大友史料 一五

今度買米安否守・備鶴左馬助申談、聆令亂城、勸軍忠之由候、感入候、既其損傷案中候之案、亦取鎖可加扶持候、猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

二月廿三日

義統 (花押)

成恒越中守殿

四五五 大友義統感狀

○河原備助氏文書
增補訂正編年大友史料 一六

今度豊前亂事之刻、田原近江入道至妙見所居在城候之処、別而彼勸軍勞之由候、祝賀候、既其場所案中候之候、亦取鎖、可顯其志候、委細紹介可申候、恐々謹言、

二月廿三日

義統 (花押)

田原七郎殿

四五六 大友義統感狀

○長谷雄徳三郎氏文書
增補訂正編年大友史料 一六

今度其表乱事之刻、田原近江入道至妙見所居在城候之処、從最前駈令能城、勸軍勞之由候、感入候、倍可拙馳走事肝要候、恐々謹言、

二月廿三日

市丸長門入道殿

義統 (花押)

四五七 大友義統感狀

○大友家文書
增補訂正編年大友史料 一六

今度豊前日乱事之刻、田原近江入道至妙見所居在城候之処、從最前別而被勸軍勞候、既其損傷案中候之案、亦取鎖必可顯其志候、委細紹介可申候、恐々謹言、

三月廿三日

義統 (花押)

竹田津式部少輔殿

四五八 大友義統感狀

○大友家文書
增補訂正編年大友史料 一六

今度豊前日乱事之刻、田原近江入道至妙見所居在城候之処、從最前令亂城、別而被勸軍勞之由候、祝賀候、其損傷案中候之案、亦取鎖可顯其志候、 紹介可申候、恐々謹言、

三月廿三日

義統 (花押)

源七兵衛尉殿

四五九 大友義統感狀

○大友家文書
增補訂正編年大友史料 一六

同文

二月廿三日

安東宮内承殿

義統 (花押)

四六〇 大友義統感狀

○大友家文書
增補訂正編年大友史料 一六

從松懸難計策候、寄合中最初以來、以無別心、首尾一途到來候、乍案中頼敷候、至御座所、則遂注進候之案、直可被成、御感候、乍勿論、於親家一應可令賀候、亦馳走頼入候、恐々謹言、

二月廿三日

義統 (花押)

安東宮内承殿

四六一 田原親家書狀

○安東文書
大分縣史料 一〇

從松懸難計策候、寄合中最初以來、以無別心、首尾一途到來候、乍案中頼敷候、至御座所、則遂注進候之案、直可被成、御感候、乍勿論、於親家一應可令賀候、亦馳走頼入候、恐々謹言、

二月廿三日

義統 (花押)

安東宮内承殿

四六二 田原親家書狀

○河野正一文書
大分縣文化財調査報告書 七

從松懸難計策候、寄合中最初以來、以無別心、首尾一途到來候、乍案中頼敷候、至御座所、則遂注進候之間、直可被成、御感候、乍勿論、於親家一應可令賀事、不可有余儀候、亦馳走頼入候、恐々謹言、

二月廿三日

義統 (花押)

大高長左衛門尉殿

大高宮内丞殿

四六二 田原親家書狀

○内廷文書
大分縣史料一〇

從檢藤藤計兼候、寄合中殿前以來、無別心、以首尾無同
意之由、乍候中頓數候、至御座所則邊注進候之矣、直可
被成、御感候、乍勿論、於親家一様可令留候之事、不可
有介儀候之間、亦馳走頓人候、恐々謹言、

三月廿三日

親家(花押)

内田孫四郎殿
内田彈正忠殿

四六四 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分縣史料三

安岐浦部親實覺上、構置於赤松村、親家師士卒討之、津
崎兵庫□□百級、親家作感願、先是、親家發難度平
礼城、指置諸兵、因齊、義統授進者書於田村統願、使其
同隊士赴木付、讓軍事于木付新介、

四六五 大友田斎・大友義統進習書狀案

○大友家文書録
大分縣史料三

於其表在陣、辛勞察仕候、然後名、安岐郷之者親手替、
事于權渡奉礼、登城之山、到來候之矣、若陣衆之儀、木
付迄差着、木付新介被中談、右郷於差着者、可為因東表

之加勢候、俄之氣城、氣仕候間、彼伏到來候者、即時殿
易肝要候、被得其意、聊不可有御油断之儀候、恐々謹言、

三月廿四日

義統 在判
田斎 朱印

田村作進殿

四六六 大友田斎・大友義統進習書狀

○大友家文書録
大分縣史料三

就安岐郷之者手替、因東表無定所候歟、親家事、乍難渡
幸礼登城之出候、寔無心元存候、惡覺行、雖不可有差儀候、
鞍懸表願因被相願、肝要候、免許勢衆、急度可為若陣之矣、
其間之儀、權渡幸礼上、別而可被添御心事、可為祝着候、
聊不可有油断之儀候、恐々謹言、

三月廿四日

義統(花押)
田斎(朱印)

吉弘太郎殿

四六七 田原親家感狀案

○大友家文書録
大分縣史料三

今度兩郷宗徒之誦上構未練、重々逆乱之体、不足是非候、
就夫到赤松村、切奇取誘、惡克權候之矣、可討果之通、
加下知候之処、被前懸合、頭一分抽之次第、忠貞無比類候、
何様、候、可謝其志之間、弥可被助軍勞事、肝要候、恐々
謹言、

三月廿四日

親家 在判
田斎 朱印

津崎兵庫助殿

四六八 田原親家感狀

○大友家文書録
大分縣史料一〇

今度兩郷宗徒之者共構未練、惡覺等令同意、至赤松之村、
切奇取誘簡説之矣、可討果之通、加下知候之処、則落去
之刻、強它分抽之次第、忠貞無比類候、何様一様可顯其
志之間、弥可被抽軍勞之事、可為祝着候、恐々謹言、

三月廿五日

親家(花押)

當崎兵庫助殿

四六九 田原紹忍感狀

○大友家文書録
大分縣史料三

昨日廿八日、西郡衆於其表相結候刻、頭、討捕、松骨之次
第無比類候、必一段可賈之候、恐々謹言、

三月廿五日

紹忍(花押)

鯉瀬新五兵衛尉殿

四七〇 大友義統安堵書狀案

○大友家文書録
大分縣史料三

見所、被令罷城、真心之當治感入候、仍來□□□□大道
寺寄進之地、社家分別之事、任□□□□寺務簡要候、
聊不可有相違候、猶親家、紹忍可申候、恐々謹言、

三月廿六日

義統 在判

波多玄内允殿

四七 田原親家感状

○成徳長片文書
○大分縣史料二〇

今度出郷宗徒之語搦未練、安般惡党令一致、諸乱之体不及是非候、然恐其方事、從取前別而以貞心之實情、於所々被勸軍勞候次第、感説無極候、因茲從公儀、被成下御書候之矣、亦可被抽懇忠事、專一候、何様辭説之刻、慙忘却、一棧可顯其志候、乃御存知候、恐々謹言、

閏二月四日

親家(花押)

善明美濃人道殿

四七 田原親家感状

○成徳長片文書
○大分縣史料二〇

今度、自他因宗徒之若共、纏拂未練候、從取前無變化、到賀來安堂字切寄書説、軍勞之趣、無比類候、殊上月廿八、西日惡党現形之刻、於仲津河衣、別而被併手之通案中候、何様稍忍申談、一棧可顯其志候矣、此節亦可被抽大忠事、肝要候、恐々謹言、

閏三月五日

親家(花押)

成垣總中守殿

四七二 大友出書状

○成徳長片文書
○大分縣史料二〇

就同東表之儀、先日者中々敷小給候、被添心候次第、案中候、先書如申候、爰許出勢之儀、愚老以出府、義統申談候之矣、米十日、十一日之間可為著陣候、連々水候百尾此節候矣、別而可被勸忠候事肝要候、年中、南郡來、馳走不可有餘儀之由候矣、被得其意、無消斷心懸帶一候、仍為音信探候、送給候、願志之趣被著候、則宜候此事候、猶重々可申候、恐々謹言、

壬子月九日

田原(朱印)

佐田彈正忠殿

四七四 田原紹忍書状

○成徳長片文書
○大分縣史料二〇

就今度郡内動乱、諸人宜情難無実所候、其方事、依勢別候、被前已米忠長帯刀兵兩尉申談、勤勞之刻、馳走之由神妙候、然上若、早々應敷可下居事肝要候、自然風説之儀候共、聊不可有怠遣候、仍中詰一折到來、祝書候、恐々謹言、

閏三月十日

紹忍(花押)

南藤弥三郎殿

四七五 大友義統書状

○成徳長片文書
○大分縣史料二〇

希刀安云人通事、去年中至高田要書、馳在城、初春以來若、標山岳、合卷城、統運別而申談由候、然延孫宮德母、对宗雲不孝之由、不及是非候、宮徳幼穉之間、領地被官以下令裁判、隱察之奉公不可有被之段、宗雲以以状申候、心中之儀候間、何事可被添御心事、肝要候、為仔細候、恐々

邊信

閏三月十二日

田原親九郎殿

義統(花押)

四七六 山原親家感状

○成徳長片文書
○大分縣史料二〇

昨日上、鞍懸表防戰之節、被馳之由、軍忠状到來、被見感人候、今度能前以來之忠儀、非忠却候之間、必於向後可賀候、恐々謹言、

閏二月十四日

親家(花押)

安東宮内允殿

四七七 山原紹忍感状

○成徳長片文書
○大分縣史料二〇

其表動之様体、預注進候、先々鞍懸矢入勝利之趣、尤珍重候、殊宮内承被馳之由、粉骨之次第、無比類候、然若到此方度、名代遣候、是又被馳候、彼是忠意之至候、必一段可賀之候、恐々謹言、

壬子月十四日

紹忍(花押)

安藤大膳亮殿

四七八 大友義統書状案

○成徳長片文書
○大分縣史料二〇

親家谷城已來、別而馳走之由、其間候、午案中悅人候、

可被得其意候矣、

一昨日、朔再伏、昨日午起着附候、則遊事雖可申候、用物從曰伴依召越、命遅々候、其元入用儀候哉、任承銀子參

貫目、御進之候、寢殿事ニ候、不限彼儀、何處用所等、不披心懸承、可得其意候、然者旧北紹鉄成收入組之趣、此四五日前、帶刀宮内承へ申合差遣候之趣、此書面ニ無其沙汰候、如何ニ候哉、然者紹鉄事、職事札と申山ほとりへ、俄取あかり、か、ミ居候て、百詰道斷淺間歌体候、平生之口ニはたと替たる由、只今も到来候、南陽衆之事、一昨日、狭間村ヲ打立、昨日至々差寄候山候間、今明日中可落去候歟、宇佐郡其外惡心之族、紹鉄殊夜付而、色立候哉、案中候、紹鉄可討果事者、指掌候之条、吉左右不圖可申違候、其間之候者、当城用所第一候之条、夜目不可有油断之候哉、猶本強正・立川主水中合候、恐々謹言、

卯月二日
出原新九郎殿
四八五 大友義統感状
○頼田實史所収頼田實史文書
○頼田實史所収頼田實史文書
○頼田實史所収頼田實史文書

四八五 大友義統感状

今度玉浦部表、在城之儀申付候処、從殿前馳走、殊度々勤之刻、別而軍勞之次第、感入候、亦可勵勤付事、肝要候、必取眞、一棧可賀之候、恐々謹言、

卯月九日
義統(花押)
帆足九郎殿

四八六 大友よし統感状

今度出原右馬頭依連心、其堺令錯乱候処、無別儀覚悟、殊就鞍懸近方、夜目無油断よし、軍勞感入候、必追而一段可賀之もの也、

卯月十日

よし統(花押影)

大河内右京とのへ
ふんこはやミノくん

四八七 大友義統感状

今度出原右馬頭依連心、其堺及錯乱候処、無別儀覚悟、殊就鞍懸近方付而、夜目無油断軍勞之由、感入候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

卯月十日

義統(花押)

(後欠)

四八九 大友義統感状

今度依田原□□依連心、其堺令錯乱候処、無一之覚悟、殊就鞍懸近方、夜目無油断、軍勞之次第、感入候、亦可勵忠儀事、肝要候、必追而可賀之候、恐々謹言、

卯月十日

義統(花押)

長野中務入道殿

四九〇 大友よし統感状

今度出原右馬頭依連心、其堺錯乱候之趣、無別儀覚悟、殊就鞍懸近方、夜目無油断軍勞のよし、感入候、必追而一段可賀もの也、かしく、

卯月十日

よし統(花押)

小野尾次郎二郎とのへ

四八八 大友義統感状

今度出原右馬頭依連心、其堺令錯乱候処、無一之覚悟、殊就鞍懸近方、夜目無油断、軍勞之次第感入候、亦可勵忠儀事、肝要候、必追而一段、可賀之候、恐々謹言、

卯月十日

義統(花押)

長野因幡守殿

四九一 大友よし統感状

今度出原右馬頭依連心、その堺さくらん候処、無別儀覚悟、ことに就鞍懸近方、夜目無油断軍勞の由、感入候、必追而一段可賀之もの也、かしく、

卯月十日

よし統(花押)

長田總右とのへ

田原近江人追到妙見山、在城之儀申候處、從最前同城、別而辛方之由、今悅齊候、每午船忍被得指所、弥可勵馳志事肝要候、御田原新九郎可申候、恐々謹言、

五月廿日

香志田兵部丞殿

五〇〇 山原親家恩賞預ケ状

〇山原親家
大分縣史料三〇

今度親買金逆黨、海陸以行動、自他同、既吉家及破滅之儀、一味申談後、來繩郡引別合島陣、剩同口以猛勢、鹿越表、且難相衝、到同東打人候之案、令敗北、區勝勝利候、別而忠儀之至、不異他候、為其儀、去月佐渡人追先船所々在之、不成段步、并保口役職之事、預遣之候、下地々十員、守此旨、余知行肝要之状、如件、

天正八年五月廿六日

津崎大和人道殿

親家(花押)

五〇一 大友義統書状

〇佐田文書
熊本縣史料中世三

度々如申候、至較翻天、諸軍可差寄之役、加下知候、然者部衆之事、可被申談、此節以乘陣、可被助忠貞事、肝要候、自然未断之人於右之者、從衆中茂以交名水、可得其意候、委細猶山原近江人追可申候、恐々謹言、

六月一日

佐田彈正忠殿

義統(花押)

五〇二 大友家文書録綱文

〇大友家文書録
大分縣史料三三

六月、被懸改候、志津利治部少輔有戰功、二十一日、宇佐部合戦、大津留民部少輔・怒留湯中務丞・厚石近承有軍功、義統授感願於志津利・怒留湯・以、

五〇三 大友義統感状案

〇大友家文書録
大分縣史料三三

今度於被懸表合戦之期、別而軍功、就中以〇刀打、被助粉骨之由候、感候候、弥馳走可為喜悅候、必取鎖、一樓可賀之候、恐々謹言、

六月十二日

志津利治部少輔殿

義統 青羽

五〇四 田原紹忍書状

〇河野重信文書
大分縣史料三六

就鞍懸表行儀、先日被助粉骨之由、案中候、重々刃等之儀、於馳走者、一跡可請御口、〇〇懸專一候、御用口上候、恐々謹言、

六月廿二日

河野彈正忠殿

紹忍(花押)

五〇五 大友義統合戦手負注文・見状

〇佐田文書
御田原新九郎大友史新五

天正八年六月廿二日、於宇佐部上田表防戦之期、佐田彈正忠綱親類家中之人、依助粉骨被疵之衆、爲爲令披見託、

佐田宮内丞殿

賀來次郎左衛門尉 平火矢兼

松木備中守 平火矢兼

仲岡惣三郎 兵衛

賀來平次 兵衛

已上

五〇六 大友義統感状

〇河野重信文書
大分縣史料三七

今度山原石馬頭、以連心、被懸痛使候處、其方事、從取願、古庄進尤以同心、度々助軍功之由、感候候、必取鎖、可賀之候、恐々謹言、

六月廿四日

渡邊加賀守殿

義統(花押)

五〇七 田原親家感状

〇大友家文書
大分縣史料三〇

節々被懸忠義等輕合、被助軍功候處、被神妙之至候、靜謹之期、何様可賀之候、仍遺儲十斤・玉百五十、遣之候、猶託摩佐渡人追可申候、恐々謹言、

安東宮内丞殿
七月一日

親家 (花押)

有安番刀允殿
丸山外記允殿
其外郷内一揆中

荒木伝兵衛尉殿

五二〇 田原親家書狀

○白土忠明文書
大分縣史料一三

恐々謹言

七月十八日

義統 (花押)

一 浪田左吉人追殿

五〇八 大友義統感狀

○國法若者文書
○國法若者文書
○國法若者文書
大友史行 五

就日田郡表之儀早速小給候、祝右候、昨日如到來者、觸
尾事打崩放火之由候、先以簡要候、弥堅固加下知候之案、
案中不可有程候、然者、今度於岩城被逐防戦、被得勝
利之由候、不始忠意令感悦無極候、殊保坂藤兵衛尉戦死
之由候、不便之儀候、別而可被賀
之候、忝度下口行之儀可相催之間、情可被抽馳走事、可
為喜悅候、猶朽綱三河入道可申候、恐々謹言、
七月六日
義統 (花押)

同洋所削部少輔殿

五〇九 大友山齋書狀

○尾本六郎文書
尾本訂正御年天友史行 五

度々如申候、親家入郷以來、于今別而馳走之由、從親家
切々依人魂、令承知、乍案中感悦候、然者、諸軍平安殿
御切寄、取懸候之案、各申合、弥勵軍忠、親家於作外聞者、
愚老満足不可過之候、委細猶、岐部大膳人追山中合候、
恐々謹言、
七月十日
山齋 (朱印)

推渡卒礼配城以來、別而御辛勞之儀、雖非忘却候、于今
一棧不願志候事、本意之外候、必脚地次第、拾五貫足可
令合力候、恐々謹言、
七月十日
樋本海内允殿
親家 (花押)

五一二 大友義統書狀

○山田又次所寫評定文書
大分縣史同書殿

昨日于西平安殿切寄、被取懸、終日被逐防戦、依被碎手、
家中之人等被疵、粉骨之由候、案中感悦之覺悟、真心感悦
無極候、殊口被申談以該陣可被取崩滅意之由候、案中候、
雖無申込候、手堅有禮言、可為御高名事肝要候、猶浦上
長門入道可申候、恐々謹言、
七月十五日
義統 (花押影)

清田新五右衛門尉殿

五二二 大友義統感狀

○万田文書
大分縣史料九

前十四、平安殿切寄、取懸防戦之刻、其方依碎手、被疵
之由候、忠貞之次第感悦候、必取鎖可賀申候、為存知候、

五二二 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分縣史料三

〔一〕〔二〕〔三〕〔四〕〔五〕〔六〕〔七〕〔八〕〔九〕〔十〕〔十一〕〔十二〕〔十三〕〔十四〕〔十五〕〔十六〕〔十七〕〔十八〕〔十九〕〔二十〕〔二十一〕〔二十二〕〔二十三〕〔二十四〕〔二十五〕〔二十六〕〔二十七〕〔二十八〕〔二十九〕〔三十〕〔三十一〕〔三十二〕〔三十三〕〔三十四〕〔三十五〕〔三十六〕〔三十七〕〔三十八〕〔三十九〕〔四十〕〔四十一〕〔四十二〕〔四十三〕〔四十四〕〔四十五〕〔四十六〕〔四十七〕〔四十八〕〔四十九〕〔五十〕〔五十一〕〔五十二〕〔五十三〕〔五十四〕〔五十五〕〔五十六〕〔五十七〕〔五十八〕〔五十九〕〔六十〕〔六十一〕〔六十二〕〔六十三〕〔六十四〕〔六十五〕〔六十六〕〔六十七〕〔六十八〕〔六十九〕〔七十〕〔七十一〕〔七十二〕〔七十三〕〔七十四〕〔七十五〕〔七十六〕〔七十七〕〔七十八〕〔七十九〕〔八十〕〔八十一〕〔八十二〕〔八十三〕〔八十四〕〔八十五〕〔八十六〕〔八十七〕〔八十八〕〔八十九〕〔九十〕〔九十一〕〔九十二〕〔九十三〕〔九十四〕〔九十五〕〔九十六〕〔九十七〕〔九十八〕〔九十九〕〔一百〕

五一四 田原親家感狀

○大友家文書録
大分縣史料三

〔一〕於切寄槽口、頭一分拍之次第、忠意〔二〕候、
何様勝讞之刻、一棧可賀之候案、弥可被助〔三〕事、可為
祝寄候、恐々謹言、
七月十九日
親家 信

津崎兵衛助殿

五二五 大友山齋感狀

○大友家文書録
大分縣史料三

於其表長々在陳、殊近日者、至安殿切寄、諸勢依結寄、
夜白重芳之申承候、心懸之次第、感悦候、就中從最前馳
走之案、別而御辛勞察存候、弥可被助忠意事、而為祝寄候、
猶重々可申候、恐々謹言、
七月廿日
山齋 (朱印)

田村行進殿

五一六 大友義統書狀

○調注所文書
○調注所文書
○調注所文書

前七 毛當城、秋月以下之惡党取懸候之刻、被逐防戰、惡運之族、數多被討果強到末、勝利之次第感見□□□候、統虎、統宗粉合無比類候、亦可被助忠貞事、頼仔候、殊浦部表為閉口、朝見行立寄陳追逐、論以吉左右示給、祝着深重候、猶志賀安房入迫可申候、恐々謹言、
七月廿四日
義統 (花押)

問注所用郡太補殿

五一七 大友義統感狀

○一万田文書
大分縣史料九

前十段、於安岐郡切寄、戰之刻、依時手被統之由、粉骨之次第感入候、亦可助馳走事、需要候、必取鎮、一段可賀申候、恐々謹言、
八月二日
萬田左吉人通殿
義統 (花押)

五一八 大友家文書録綱文

○子孫傳傳影寫本
大分縣史料三二

八月五日、親世克其出陣、雲親家陣、津崎兵庫助力戰○十三日、被縣政戰相懸口攻戰、大津留大膳亮被創、有功

○義統、使向海正忠、名統英○十九日、親世克又出陣○津崎兵庫助擊之、從上被創、親家向回作感懸、義統○投書厚氏○大津留氏、使由親世克手、
十四日、義統、名統、萬田左吉人通、親世克、又出陣○津崎兵庫助擊之、從上被創、親家向回作感懸、義統○投書厚氏○大津留氏、使由親世克手、

五一九 田原親家感狀書

○知田書史津崎文書
大分縣史料一〇

去、切寄惡党取出候處、最前懸合、別而被滿粉竹之通、被滿軍旁之懸、案中候、其表之儀、近々可感勝利之上者、何様銘々、可成其感候之由、亦可被助忠貞事、肝要候、恐々謹言、
八月七日
親家 (花押影)

津崎善兵衛尉殿

五二〇 田原親家感狀

○大友家文書録
大分縣史料三三

去、切寄惡党取出候處、被前懸合、別而被滿粉竹之通、空心懸之次第案中候、亦此節可被助忠貞事、可為祝若候、何様靜謐之刻、一様可顯其志候、恐々謹言、
八月七日
親家 在判
津崎兵庫助殿

五二一 大友出陣書狀

○子孫傳傳影寫本
大分縣史料三二

八月五日、親世克其出陣、雲親家陣、津崎兵庫助力戰○十三日、被縣政戰相懸口攻戰、大津留大膳亮被創、有功

至武吉、以飛脚申候之案、榮崇候、今度其許上因之刻、始申終如申候、浦部表為閉口、一勢逐道候、就中安岐切寄之儀、海上之通路、於不相留者、荒垣儀、可有之案、從其表往反之船、堅可被加制止事、進々、武吉可為入魂之旨尾之申申候、然候、二三日以前、粮船安岐之邊江、雖可權入儀候、此方榮國依取出、其儘推道候案、口出津越付送相究候之儀、至右切寄通用ノ証據等、顯候、因茲、船頭舟子以下、則一切申付之段、口表就隨所、雖申越候、武吉家中之上、上乘之由、其間候之間、先以惡延候、乍勿論、至上下之船、上乘之儀者、更不珍候案、不及口能候、當時取詰候於敵城、機運過之給々、為武吉家米、馳走無是非存候、雖然不能一屆、可討果事、累年武吉忠影申談候統、相遊之儀候案、至義統者、強而令助言、以早船申候、武吉内存之旨、急度承、可得其意候、聊不可有通斷之儀候、恐々謹言、
八月十二日
田原 判
賜越中守殿

至武吉、以飛脚申候之案、榮崇候、今度其許上因之刻、始申終如申候、浦部表為閉口、一勢逐道候、就中安岐切寄之儀、海上之通路、於不相留者、荒垣儀、可有之案、從其表往反之船、堅可被加制止事、進々、武吉可為入魂之旨尾之申申候、然候、二三日以前、粮船安岐之邊江、雖可權入儀候、此方榮國依取出、其儘推道候案、口出津越付送相究候之儀、至右切寄通用ノ証據等、顯候、因茲、船頭舟子以下、則一切申付之段、口表就隨所、雖申越候、武吉家中之上、上乘之由、其間候之間、先以惡延候、乍勿論、至上下之船、上乘之儀者、更不珍候案、不及口能候、當時取詰候於敵城、機運過之給々、為武吉家米、馳走無是非存候、雖然不能一屆、可討果事、累年武吉忠影申談候統、相遊之儀候案、至義統者、強而令助言、以早船申候、武吉内存之旨、急度承、可得其意候、聊不可有通斷之儀候、恐々謹言、
八月十二日
田原 判
賜越中守殿

至武吉、以飛脚申候之案、榮崇候、今度其許上因之刻、始申終如申候、浦部表為閉口、一勢逐道候、就中安岐切寄之儀、海上之通路、於不相留者、荒垣儀、可有之案、從其表往反之船、堅可被加制止事、進々、武吉可為入魂之旨尾之申申候、然候、二三日以前、粮船安岐之邊江、雖可權入儀候、此方榮國依取出、其儘推道候案、口出津越付送相究候之儀、至右切寄通用ノ証據等、顯候、因茲、船頭舟子以下、則一切申付之段、口表就隨所、雖申越候、武吉家中之上、上乘之由、其間候之間、先以惡延候、乍勿論、至上下之船、上乘之儀者、更不珍候案、不及口能候、當時取詰候於敵城、機運過之給々、為武吉家米、馳走無是非存候、雖然不能一屆、可討果事、累年武吉忠影申談候統、相遊之儀候案、至義統者、強而令助言、以早船申候、武吉内存之旨、急度承、可得其意候、聊不可有通斷之儀候、恐々謹言、
八月十二日
田原 判
賜越中守殿

至武吉、以飛脚申候之案、榮崇候、今度其許上因之刻、始申終如申候、浦部表為閉口、一勢逐道候、就中安岐切寄之儀、海上之通路、於不相留者、荒垣儀、可有之案、從其表往反之船、堅可被加制止事、進々、武吉可為入魂之旨尾之申申候、然候、二三日以前、粮船安岐之邊江、雖可權入儀候、此方榮國依取出、其儘推道候案、口出津越付送相究候之儀、至右切寄通用ノ証據等、顯候、因茲、船頭舟子以下、則一切申付之段、口表就隨所、雖申越候、武吉家中之上、上乘之由、其間候之間、先以惡延候、乍勿論、至上下之船、上乘之儀者、更不珍候案、不及口能候、當時取詰候於敵城、機運過之給々、為武吉家米、馳走無是非存候、雖然不能一屆、可討果事、累年武吉忠影申談候統、相遊之儀候案、至義統者、強而令助言、以早船申候、武吉内存之旨、急度承、可得其意候、聊不可有通斷之儀候、恐々謹言、
八月十二日
田原 判
賜越中守殿

至武吉、以飛脚申候之案、榮崇候、今度其許上因之刻、始申終如申候、浦部表為閉口、一勢逐道候、就中安岐切寄之儀、海上之通路、於不相留者、荒垣儀、可有之案、從其表往反之船、堅可被加制止事、進々、武吉可為入魂之旨尾之申申候、然候、二三日以前、粮船安岐之邊江、雖可權入儀候、此方榮國依取出、其儘推道候案、口出津越付送相究候之儀、至右切寄通用ノ証據等、顯候、因茲、船頭舟子以下、則一切申付之段、口表就隨所、雖申越候、武吉家中之上、上乘之由、其間候之間、先以惡延候、乍勿論、至上下之船、上乘之儀者、更不珍候案、不及口能候、當時取詰候於敵城、機運過之給々、為武吉家米、馳走無是非存候、雖然不能一屆、可討果事、累年武吉忠影申談候統、相遊之儀候案、至義統者、強而令助言、以早船申候、武吉内存之旨、急度承、可得其意候、聊不可有通斷之儀候、恐々謹言、
八月十二日
田原 判
賜越中守殿

至武吉、以飛脚申候之案、榮崇候、今度其許上因之刻、始申終如申候、浦部表為閉口、一勢逐道候、就中安岐切寄之儀、海上之通路、於不相留者、荒垣儀、可有之案、從其表往反之船、堅可被加制止事、進々、武吉可為入魂之旨尾之申申候、然候、二三日以前、粮船安岐之邊江、雖可權入儀候、此方榮國依取出、其儘推道候案、口出津越付送相究候之儀、至右切寄通用ノ証據等、顯候、因茲、船頭舟子以下、則一切申付之段、口表就隨所、雖申越候、武吉家中之上、上乘之由、其間候之間、先以惡延候、乍勿論、至上下之船、上乘之儀者、更不珍候案、不及口能候、當時取詰候於敵城、機運過之給々、為武吉家米、馳走無是非存候、雖然不能一屆、可討果事、累年武吉忠影申談候統、相遊之儀候案、至義統者、強而令助言、以早船申候、武吉内存之旨、急度承、可得其意候、聊不可有通斷之儀候、恐々謹言、
八月十二日
田原 判
賜越中守殿

至武吉、以飛脚申候之案、榮崇候、今度其許上因之刻、始申終如申候、浦部表為閉口、一勢逐道候、就中安岐切寄之儀、海上之通路、於不相留者、荒垣儀、可有之案、從其表往反之船、堅可被加制止事、進々、武吉可為入魂之旨尾之申申候、然候、二三日以前、粮船安岐之邊江、雖可權入儀候、此方榮國依取出、其儘推道候案、口出津越付送相究候之儀、至右切寄通用ノ証據等、顯候、因茲、船頭舟子以下、則一切申付之段、口表就隨所、雖申越候、武吉家中之上、上乘之由、其間候之間、先以惡延候、乍勿論、至上下之船、上乘之儀者、更不珍候案、不及口能候、當時取詰候於敵城、機運過之給々、為武吉家米、馳走無是非存候、雖然不能一屆、可討果事、累年武吉忠影申談候統、相遊之儀候案、至義統者、強而令助言、以早船申候、武吉内存之旨、急度承、可得其意候、聊不可有通斷之儀候、恐々謹言、
八月十二日
田原 判
賜越中守殿

至武吉、以飛脚申候之案、榮崇候、今度其許上因之刻、始申終如申候、浦部表為閉口、一勢逐道候、就中安岐切寄之儀、海上之通路、於不相留者、荒垣儀、可有之案、從其表往反之船、堅可被加制止事、進々、武吉可為入魂之旨尾之申申候、然候、二三日以前、粮船安岐之邊江、雖可權入儀候、此方榮國依取出、其儘推道候案、口出津越付送相究候之儀、至右切寄通用ノ証據等、顯候、因茲、船頭舟子以下、則一切申付之段、口表就隨所、雖申越候、武吉家中之上、上乘之由、其間候之間、先以惡延候、乍勿論、至上下之船、上乘之儀者、更不珍候案、不及口能候、當時取詰候於敵城、機運過之給々、為武吉家米、馳走無是非存候、雖然不能一屆、可討果事、累年武吉忠影申談候統、相遊之儀候案、至義統者、強而令助言、以早船申候、武吉内存之旨、急度承、可得其意候、聊不可有通斷之儀候、恐々謹言、
八月十二日
田原 判
賜越中守殿

至武吉、以飛脚申候之案、榮崇候、今度其許上因之刻、始申終如申候、浦部表為閉口、一勢逐道候、就中安岐切寄之儀、海上之通路、於不相留者、荒垣儀、可有之案、從其表往反之船、堅可被加制止事、進々、武吉可為入魂之旨尾之申申候、然候、二三日以前、粮船安岐之邊江、雖可權入儀候、此方榮國依取出、其儘推道候案、口出津越付送相究候之儀、至右切寄通用ノ証據等、顯候、因茲、船頭舟子以下、則一切申付之段、口表就隨所、雖申越候、武吉家中之上、上乘之由、其間候之間、先以惡延候、乍勿論、至上下之船、上乘之儀者、更不珍候案、不及口能候、當時取詰候於敵城、機運過之給々、為武吉家米、馳走無是非存候、雖然不能一屆、可討果事、累年武吉忠影申談候統、相遊之儀候案、至義統者、強而令助言、以早船申候、武吉内存之旨、急度承、可得其意候、聊不可有通斷之儀候、恐々謹言、
八月十二日
田原 判
賜越中守殿

至武吉、以飛脚申候之案、榮崇候、今度其許上因之刻、始申終如申候、浦部表為閉口、一勢逐道候、就中安岐切寄之儀、海上之通路、於不相留者、荒垣儀、可有之案、從其表往反之船、堅可被加制止事、進々、武吉可為入魂之旨尾之申申候、然候、二三日以前、粮船安岐之邊江、雖可權入儀候、此方榮國依取出、其儘推道候案、口出津越付送相究候之儀、至右切寄通用ノ証據等、顯候、因茲、船頭舟子以下、則一切申付之段、口表就隨所、雖申越候、武吉家中之上、上乘之由、其間候之間、先以惡延候、乍勿論、至上下之船、上乘之儀者、更不珍候案、不及口能候、當時取詰候於敵城、機運過之給々、為武吉家米、馳走無是非存候、雖然不能一屆、可討果事、累年武吉忠影申談候統、相遊之儀候案、至義統者、強而令助言、以早船申候、武吉内存之旨、急度承、可得其意候、聊不可有通斷之儀候、恐々謹言、
八月十二日
田原 判
賜越中守殿

五二二 大友義統合戰頭手負注文一見狀

(花押)

○文化庁藏古文書
大分県史料二五

天正八年八月廿日從上表、兵船立下、於安被切寄表懸合

防戰、依被許手、退散之刻、向地宮口口送付送、諸將圍

船佛津之御、同廿二若林中務少輔做船一艘切取、鎮典自

身分捕高名、其外親類被口討捕頭宛到、路々加被見訖、

頭一 若林中務少輔 討之

頭一 若林因幡守 討之

頭一 若林九郎兵衛尉 討之

頭一 幸野勘介 討之

頭一 丸尾新五兵衛尉 討之

頭一 合澤市介 討之

被燒衆

首藤源介

二郎右衛門

五郎兵衛

太郎左衛門

已上、

五二四 田原親家感狀

○大友家文書
大分県史料一〇

前上、切番忠徒等取出候之趣、別而許手則進談、誠以

軍忠之次第、感入候、何種傍議之類、一棧可賀之候、恐々

謹言、

八月廿日

壹嶋新五兵衛尉殿

親家 (花押)

五二五 秋月種実書狀

○秋原充光書
福岡正統元年大友史料一五

总度令啓候、仍去上、口樂衣造親家出陣之由候、雖不可

有慈悲候、其表無油断事分覺候、口出口之儀、要令歴々

取請、無親兼口中付候間、擬於被口少人数難被差遣候、

心安候間、一味申談、於其境可取出事、聊不可有被候、

殊更罷造寺方、今程手前心安候間、是又相成之儀、不可

有余儀候、尚敵衣之休、被開合可預御之左右候、恐々謹言、

八月廿日

萩原山城入道殿御書

種実 (花押)

五二六 大友義統書狀

○西岡文書
福岡正統元年大友史料一五

今度、兼前以來、寄合中切寄取請、折々分捕高名之段、

感入候、然者漆頭之儀悔其意候、一棧可申付之趣、蓋田

原近江入道可申候、謹言、

八月廿一日

西岡氏

渡邊宗分合中

義統 (花押)

五二七 大友家文書録綱文

○大友家文書
大分県史料一三

口口、毛利輝元、小早川隆景、遠兵衛船數十艘於豊、

浦、授田原親實、若林鎮興進儀、口口、口口、口口、口口、

五二八 大友家文書録綱文

○大友家文書
福岡正統元年大友史料一五

口口、毛利輝元、小早川隆景、遠兵衛船數十艘於豊、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

浦、授田原親實、若林鎮興、遠兵衛、定安、安岐、下、口口、口口、

五二九 大友義統感狀

○大津留大原亮殿
大分県史料一五

去上、於被懸表相懸口、防戰之刻被燒、粉骨之由感人

候、弥馳走肝要候、恐々謹言、

八月廿一日

大津留大原亮殿

義統 (花押)

五三〇 田原親實恩賞宛行状案

○大友家文書
大分県史料一三

今度不慮之成立、至較懸合管城之段、彼一城事、親

武以父子謀合、城被納付置、此節、家再興之儀、偏運々

堅慮之格謹故候、殊至云州荒上候之趣、良々令在園、加

勢之趣、因舟被申調、如此遂本意候事、恰云、恰云、忠意

之趣、無比類候、仍為加恩、永松給田原之内拾司地、山

普郷之内平二町地、令歲寄樂、全領知肝要之状、如件、

天正八年八月廿二日

田原左近大夫殿

親實 (花押)

五二二 田原親貫恩賞宛行狀案

○大友史料三

就今度不慮之成立、至極感、令益感、云云以加勢、遂本
意候段、紹謝依連々堅感之旨出、彼一城被執付置候故、
此節一家再興之儀、無比願候、拾云、拾六、御辛勞之統、
何様生中不可有忘却候、為加恩、俵田五拾貫分事、令段
許候、金可有領知候、柳不可有相違之狀、如件、
天正八年八月廿三日
田原式部人遣殿

○實末八人始支書
○增訂正編年大友史料二五

五三二 大友義統感狀

○實末八人始支書
○增訂正編年大友史料二五

賀米安守、福嶋佐渡守書狀具加披見候、然者、野中兵
庫頭至兩切寄達乱深重之段、折々注進到來之条、鎮方江
度々雖申道候、無其失之由候間、重々恣遣候儘可申理覚
候候、可被得其意候、誣謬行之儀、近々可加下知候之条
其間之儀堅固之以地体、弥可勵進走粉付事要安之由、能々
可被申聞候、近年佐渡守、安守忠貞之次第、争可有御
忘却候故之条、寄々御入魂簡要候、委細用口上候之趣、
御前上長門入道可申候、恐々謹言、
八月廿八日
義統(花押)

田原近江人遣殿

五三三 田原親貫感狀

○長野支書
○增訂正編年大友史料二五

去廿三、於安心院合戦之時、粉骨條出、悦喜候、亦被
拔忠節候、太可然候、一段可賀申候、恐々謹言、
八月廿八日
親貫(花押)

長野宮内少輔殿

五三四 大友義統感狀

○成徳支書
○增訂正編年大友史料二五

今度、西表之惡交令現形候之趣、其方事、切寄取候、別
面抽單忠之段、田原近江人道注進到來候、藏入候、雖無
申迄候、弥可勵粉骨事、可為喜悅候、必取領、一棧可申
與候趣、猶紹忍可申候、恐々謹言、
八月卅日
成恒越中守殿
義統(花押)

成恒越中守殿

五三五 大友義統感狀

○長野支書
○增訂正編年大友史料二五

今度、西表之惡交令現形、其方至切寄取懸防戦之刻、每
度得勝利之由、田原近江人道注進到來候、從最前忠貞之
覚悟、今以無變化候之由、向後水々不可有忘却候、殊掃
部助左介戦死之由、忠誠無比類候、併不便之儀候、必取領、
至彼跡日、一棧可申與候、仍手火矢一挺并玉藥池之候、
弥可抽粉骨事可為喜悅候、委細簡略忠可申候、恐々謹言、
八月卅日
元重安守殿
義統(花押)

元重安守殿

五三六 大友凶齋書狀

○東員支書
○大分縣書料八

義統殿所為見與、此二而日以前、令越山候趣、早々示給候、
祝候候、於其衣長々在陣、御辛勞難容存候、今少之儀候条、
別而堅固之才竟、不及申候、鞍轡之儀、近々相違可
違寄之由、加下知候間、落去不可有相候、愚老事度、今
程者、以滞在母事、義統可令熱談覚悟候条、節々令人魂
可得其意候、猶重々可申候、恐々謹言、
九月二日
一萬田、河人遣殿
凶齋(朱印)

一萬田、河人遣殿

五三七 鎮方書狀

○河野野好支書
○大分縣書料六

今度候懸可取崩之由、各心懸之段、結々達言上候之趣、
至鎮方番、御書致困戴候、然者、今夜之、行於相調者、
其方均尾藤名之由、為被首給、可令扶持候、理分可抽忠
貞事、肝要候、恐々謹言、
九月五日
河野彌正忠殿
鎮方(花押)

河野彌正忠殿

五三八 大友義統感狀

○田原親貫支書
○增訂正編年大友史料二五

追々預注進候、殊於四日市切寄、惡党取懸候趣、得勝利、
惡逆之儀數十人討捕之由到来、感悅無極候、先再如申候、
今度渡邊寄合中懸忠之次第、至于今令百回候事、誠無比

頗候、為忠實通判形候、從前忠能々相心得可被申聞候、

隨前、所々切寄信堅固之御才覺肝要候、明日以口付左近

大夫可申之矣、先以聞進候、恐々謹言、

九月五日 義統(花押)

田原入道近江殿

五三九 大友義統知行預ヶ状

○高田文書
增補訂正徳年大友史料一五

(前文)

猛勢懸合、剛切崩、數千人討捕、高名之次第、無比類候、

然者、為其賞、至寄合中、百町分之半、預進候、知行之所、

委由田原近江入道可申候、恐々謹言、

九月五日 義統(花押)

四口市切寄

渡邊寄合中

五四〇 大友義統知行預ヶ状

○大友家文書録
増補訂正徳年大友史料一五

〔一〕合則切崩、數千人討捕、高名之次第、

其賞、至寄合中、百町分之半、預進候、

田原近江入道可申候、恐々謹言、

九月五日 義統(花押)

四口市切寄渡邊寄合中

五四一 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大友家史料三

〔一〕、義統命親家、謀攻駿懸、安岐書與、七門、被懸攻

〔二〕、惠立從之、十一日、乘夜古庄氏被官潛入鞍懸、伏

尾放火、十二日、安岐軍高槽、合戰、出村統順自被被討、

〔三〕、備佐孫二郎亦負傷、〔四〕、山口合戰、以統英、得首級、義

統授感贈於山村統順、古庄氏、亦得門首懸書、其年月日詳

五四二 山原親家感状

○安岐文書
大友家史料一〇

昨日、六、前表無從等、為被懸加勢、取出之候処、早々

懸合、別而被擄首級、不移時、被追崩之通、軍忠無比類候、

何様御禮之御、一獲可成其感候、恐々謹言、

九月七日 親家(花押)

安東宮内丞殿

五四三 大友田齋書状

○高田文書
増補訂正徳年大友史料一五

村葛西宗安、通之趣、只令披見候、昨日八日、城共、長

野以下之悪党、赤尾、河内、道等、江取懸、村中令放火、

於切寄諸寄候、以堅固之格、敵數多仕付、分捕勇名

之段、案中存候、網好之由候矣、亦助順路之患儀候之様、

入魂肝要候、殊野侍事無心、元様印散候哉、不及是非候、

違聞無失所候矣、野侍候者、重々承、可得其意候、当郡

中之儀、於今令、懇忍、頼綱被申合、才覺可人御候之調、

別面懇忠之御心懸專一候、恐々事、先月口未安元五福在

候、節々不示給候、如何候之由相存候、但不可有軍取之段、

令校軍候旨、猶重器可申候、恐々謹言、

九月九日 佐田彈正忠政

佐田彈正忠政

五四四 大友田齋書状

○佐田文書
増補訂正徳年大友史料一五

主殿助遊越、其表草柄申候處、只令承知候、当郡事、亦

無失所之由候、不及是非候、雖然、頼綱江申合、其

擄取因被差擄候者、敵不可有差儀候、至秋月、俾目

日田郡一動申付候調、西口之悪党、敗北可為必定候、連々

申談候旨、此儀候、恐々事、愛元、諸留之矣、每事預

入魂、義統以熟談、可加下知候、於委細者、主殿助申候、

乃御存知候、恐々謹言、

九月十日 田齋(朱印)

佐田彈正忠政

佐田彈正忠政

五四五 大友義統感状

○長尾寺文書
増補訂正徳年大友史料一五

前十三、於安岐切寄高槽口防懸、依幹手、被寄赤須三九

被取之由、粉骨之次第懸人候、必取願、可買之候、恐々

謹言、

九月十五日 義統(花押)

恒馬車人佐殿

五四六 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大友傳史料三三

前十三、於安岐切寄高槽口防戰、依被碎手、自身被疵之由、
粉骨之次第、忠儀無比類候、殊儀從孫二郎負手之由、亦
以感悅無深候、亦可預圖馳走事、肝要候、必取領、可買
申候、恐々謹言、

九月十五日

義統 在拜

田村作進殿

五四七 大友義統感狀案

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料 五

今度最前已來、至高家切寄蓋儀、以期義之骨格粉骨之由、
誠感入候、亦可勵貞心中事一候、必取領、一核可買之候趣、
猶口原近江入道可申候、恐々謹言、

九月十五日

義統

中島伊子守殿

五四八 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大友傳史料三三

為無足長々在陣、殊前十五、於高州表千部口、合戰之刻、
別而粉骨之由、感悅候、亦可勵忠貞事、肝要候、必追而
可買之候、恐々謹言、

九月十八日

義統 在拜

都甲二河入道殿

五四九 四日市切寄衆中給地坪付案

○大友家文書錄
大友傳史料三三

王直儀
抽判

坪付

字佐部之内

一所四町

同郡之内

一所拾五町

同郡之内

一所貳町五反

已上、

天正八年九月廿日

四日市切寄衆中

五五〇 大友義統感狀

○通達文書
增補訂正編年大友史料 五

去年以來於切寄、別抽粉骨、于今無變化事、連々之
心懸骨顯然候、感入候、然否其衣再破之様、其歸候之条、
大神中務少輔・林嘉右衛門尉蓋儀候、信可勵馳走事、可
為喜祝候、必取領一段可買之趣、猶口原近江入道可申候、
恐々謹言、

九月廿日

義統 (花押)

波邊石見守殿

波邊加賀守殿

波邊二郎右衛門尉殿

波邊兵庫助殿

波邊市左衛門尉殿

波邊宅岐守殿

五五一 大友義統感狀

○三村城大文書
增補訂正編年大友史料 五

今度於平岡村新取取誘、抽馳走之由、痛感入候、亦可勵
粉骨事、可為喜祝候、必取領一段可買之候、猶大神中務
少輔・林嘉右衛門尉可申候、恐々謹言、

九月廿日

義統 (花押)

吉村伊馬守殿

五五二 大友義統書狀案

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料 六

河底取誘、人數被差罷之由、無油斷慮、祝著候、亦堅固
之覚儀、肝要候、願不可有緩之儀候、猶重々可申候、恐々
謹言、

九月廿二日

義統 在拜

太田右京亮殿

五五三 大友義統書狀

○三野文書
大友傳史料二

於松輪表、自最前遠在陣、東芳之段、感入候、殊非前懸
陣付之儀、本庄中務少輔五中付儀、乍幸芳、以同心可被
遂其御事、肝要候、猶鎮述可申候、恐々謹言、

九月廿二日

義統 (花押)

宇野宮内承殿

五五四 大友義統感状

○宇野文書
大分県史料一

今度、最前以来軍勞之由候、就中此節、木庄中務少輔以
同心辛勞之段、分承知候、然者、前廿至彼懸、通用之憲
竟以夜待討果、分捕萬名、忠儀無比類候、必取鎮、一様
可賀之趣、猶願速可申候、恐々謹言、
九月廿一日

宇野宮内承殿

義統(花押)

五五五 安岐表御誓固日記

○安岐御誓固日記
南入郡久住町可白杖御田高義成

天正八年七月從七日、同十六日迄、米壹石二升、ちん
の銀子七拾式匁、一匁、廿四人の(意)、「かて・ちん請
取申候、
一 七月十七日より、同廿六日迄、一日、廿四人之覚悟、
かて斗米壹石三斗、請取申候、ちんハ請取不申候、ち
ん之銀子七十九匁、御未進、
一 七月廿七日、九月二日迄、一日、人数廿四人、ちん・
かて我等取かへ申候、米二石七斗一升、「伊和市四升
米之さん用、銀子百八十五匁五分、ちんの銀子、百五
十九匁二分、
此兩合銀子五百拾六匁七分、
升まい舟日記

一 九月六日より、同十五日迄、人数一日、十八人之覚
悟にて候、かて・ちん十日の分、請取申候、

五五六 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料一

十月、義統授書于湖津所結景、鹽袋料、且御高位祈城市、
高松所、未審其詞、
及御、御、再考、
○天正九年十月十日、忠ハルモ、八分、銀廿三匁ノ比、此定ニ應フコト取、

五五七 大友義統知行預ケ状

○成興文書
増訂天保年大友史料二五

今度、凶惡悪党現形之刻、以順儀之覚悟、至負未安守
切寄差能、毎日防戦粉骨之由、感入候、然者トモ郡之内
拾町分、加伏持候、可有知行之趣、猶願近江入道可申候、
恐々謹言、
十月二日

成恒越中守殿

義統(花押)

五五八 大友凶齋書状

○阿部所文書
東大史資料所影写本

浦部表勝利之趣、其間候或、早々敷小給候、祝者候、安岐
切寄之事、昨日馳令一着候、以此彼懸懸落去、不可有程
候条、請舉口可任存分事、指掌候、至中(意)前、前二一
行申付、敵領數多打崩候、然者(意)調・立花中務官候、殊

從其方、節々入魂之条、愚老事、急度日川郡迄可宛足
當措候、於于今者、当城可被逐不意事、無疑候条、珍重候、
何様於其衣可申談候、仍加力之儀付而、先日從忍留湯主
殿入道、日川郡來、申付候間、得其意之由申候、只
今被申越候、彼使加存知、鞍懸表為可加下知、彼方角迄
越山候、落去次第、日押へ可帰正候、必其刻日川迄可申
還之趣、猶願四圍防入道可申候、恐々謹言、
十月七日

問津所刑部少輔殿

門前(朱印)

五五九 山原親家書状

○五代文書
大分県史料一〇

今度当初寄來中之候、逆意不徳便候之条、一途之御下知、
雖深事候、改先非想翌年之間、失令分別候、亦於抽忠儀者、
一様可扶助候、恐々謹言、
十月七日

田代出雲守殿

親家(花押)

五六〇 田原親家書状

○片山文書
大分県史料一〇

今度当初寄來中之候、逆意雖前代未聞之儀候、改先悲可
馳走之由、付二若願察候間、失令分別候、亦餘干、於抽
忠儀者、一様可扶助候、倍守此旨、可被勸勵功事、十
要候、恐々謹言、
十月七日

片山越後守殿まい

親家

五六七 大友山齋書狀

○佐田文書
○大友山齋書中世一

眞被懸落去、早々示給候、祝者候、此方悦可有推察候、
雖然親自討淺候事、不及是非候、落所等於有之者、別而
可被勸忠儀事、肝要候、每事乃可加下知、于今在付候、
委細口上申候、恐々謹言、

十月十一日

佐田彌正忠殿

門前(朱印)

五六八 大友義統書狀

○佐田文書
○大友義統書中世一

前九條懸落去候、先以祝者候、雖然、視實不討留候事、
不及是非候、定而落所可有之之矣、亦可加下知覚悟不淺
候、然者、山原近江人追被申談、此節被勸馳走、視實可
討果才實、頼存候、委細細、小田原左近亮申合候、恐々
謹言、

十月十一日

佐田彌正忠殿

義統(花押)

五六九 大友義統感狀

○大友家文書
○大友義統感狀書中世一

今度、四日市切寄為奉行差遣候處、以在城辛勞感候、
然者、渡邊寄合中之儀、就中紹忍家中之人、軍勞粉骨之

段誠感入候、弥被申遣、此節別願馳走專一之由可被申聞
候、必取願、至紹忍可申談候、可得其意候、恐々謹言、

十月十一日

小田原左京亮殿

義統(花押)

五七〇 大友義統感狀案

○大友家文書
○大友義統感狀案書中世一

生下代
上田樺内所持
去月十五、於未繩懸大門口、豊前口々忠覺懸合、一戰遂
高名、父右衛門戰死、忠儀無比類候、必取願、一棧可買
与候、

十月十一日

上田松若殿

義統書判

○大友家文書
○大友義統感狀案書中世一

五七一 大友義統感狀案

○大友家文書
○大友義統感狀案書中世一

今度、從嚴前、高橋十勝人追任申旨、軍勞、就中不若座
要苦勤番之由候、如此大篇之刻、貞心之覚悟偏好因家、
忠節之矣、感入候、何様取銷紹運申談、可加扶持候間、
弥馳走、肝要候、恐々謹言、

十月十一日

堀山二介殿

義統(在判)

五七二 大友家加判來連誓誓書案

○大友家文書
○大友家加判來連誓誓書案書中世一

歎度如被仰出候、田原右馬頭依忠池、誅伐之儀、既被加
御下知候之故、鞍懸、安岐同城、令落去候之矣、於于
今者、彼等無残所、被攝、御案裏、千秋方成候、然者其
表之儀、無通斷、以御才覚、行之固儀、可為此節之由候、
委細以末相坊案書法師、被運御人魂之趣、猶右寺可有演
說矣、不能一紙候、恐々謹言、

十月十四日

阿蘇殿 御宿所

○大友家文書
○大友家加判來連誓誓書案書中世一

五七三 大友義統書狀

○大友家文書
○大友義統書中世一

急度衆集候、數度如申候、山原右馬頭依忠池、加澤伐之
下加頭、鞍懸、安岐同城令落去、於于今者、彼等無残所
願案裏、本取候、然者其表之儀、視為被申談、行之節
謂候、可為此節之趣、猶志實安房人泊、打網三河人追、
可申候、恐々謹言、

十月十四日

鹿子木三河人追殿

義統(花押)

五七四 大友義統感狀案

○大友家文書
○大友義統感狀案書中世一

去月、到被懸取懸候之刻、方角之衆申談、別而勸馳走

之由候、感入候、何様取直、一段可賀之候、恐々謹言、
十月十四日
義統 直御
田榮惠立

五七五 野仲鎖兼知行預ケ状

○内尾文書
○重訂手鑑年大友史料 五

今日十五、至田口表、築地内切寄之者共、相絶候之候、
城前懸合、分捕高名之次第、定無比類候、然若一町押候
之預進之候、余有知行、亦可被脇助功状、如件、
十月十五日
義統 (花押)
内尾藤太郎殿

五七六 山原親家感状

○大友文書
○大友史料 一〇

去春堺日乱入之候、寄合之者共、以順路之覚悟、致馳走
之段、騎草依巾儘存知候、殊鞍懸堅固之刻、折々懇忠之
次第、間及候、神妙候、追而可成其感之通、洗摩佐渡人
道可申候、恐々謹言、
十月廿一日
義統 (花押)
案座宮内允殿

五七七 田原親家感状

○安藝文書
義統直御年大友史料 九

去春堺日乱入之候、寄合之者共、以順路之覚悟、致馳走

之段、騎草依巾、儘存知候、殊鞍懸堅固之刻、折々懇忠
之次第、間及候、神妙候、追而可成其感之通、謹言住渡
入道可申候、恐々謹言、
十月廿一日
義統 (花押)
丸山外記連とのへ

五七八 大友家文書録細文

○大友文書録
大友史料 三三

頃間、田原親家御浦退、而帰豊後、使津時兵衛助守尾長
居作取具、使飯田麟清守築地村退、
○義統授ケ書于飯田麟清、

五七九 大友義統書状案

○大友文書録
○重訂手鑑年大友史料 一五

至築地村切寄、以名代勅書之由、幸芳感悅候、亦可被脇
馳走事肝要候、田原新九郎可申候、恐々謹言、
十月廿六日
義統 直御
飯田但馬入追殿

五八〇 高橋紹運書状

○五本文書
○重訂手鑑年大友史料 二五

追而、羅左少之至候、為中途計略、概一免地候候、
殊生鮎一疋、令進入候、於安、尤者、珍物候、御貞玩
可口出候、

徳用辰脚候、早晚御孫被成、心外之至候、
一肥後表并御方之立構、銘々示度度由、如風更者、近々
日田郡退、御着陣之由候、誠不勝方勞候、於事末宣、
堺日之標休、無御慶誠被成御申、又被請御下知、亦御
馳走此時候、申渡候、

一鞍御阿岐藩切寄落方之由承、尤日出存候、貴國中も
耽御守護候之由、此上者、御一雖有御池斯存候間、三ヶ
年之粉骨、不弱無難、才不存候候、
一豊前衣通半、時洩可然申候、於御着郡者、何様其
手廻、可為御然候、

一御息統軍、當時津内へはやり申候中、御望之由候故、
忍富へ心懸之由承候間、乍爾御差進申候、雖難相御氣
象候と、調査候案、進候候、ためしにては、無御座候間、
爵附深東候へ共、方向之はやり物に候之間、如此候、
さてく在因以來、相互不通相過、無念千萬候、此
節御回來之御玉玉、殊御内意之趣、當加入折々物談承、
御懇敷存候、何様互々無御隔心中申渡候、於御同意者
可為御足候、

一豊州へ被達言上、約取合之方人心之段、辛度伝承候、
就夫追鳴致内談、同人覚悟之趣、以前紙申入候、若輩
種々推察之申事、却而御人慮察計候、向後、無二三可
申談内存之案、如此候、万賀、恐々謹言、
十月廿七日
紹運 (花押)
鎮定公 参人々御中

五八一 大友義統感状

○成徳文書
○重訂手鑑年大友史料 二五

賀采安云守同前、長々軍勞忠意之次第、無比類候、殊重々

西日之懸空浮出之刻、合被碎手之故、其方郎從曹五郎被
疵之由、忠儀感入候、必追而可買之趣、猶山原近江人道
可申候、恐々謹言、

成領越中守殿

義統(花押)

五八二 大友義統感狀

○大友家文書
大分縣史料六

今度從嚴前、馳以在城重安、殊折々、粉骨深重之山、感
入候、難申迄候、弥緒忠任指所、可助馳走事、肝要候、
必可買之趣、猶小山原左京亮、可申候、恐々謹言、

十月一日

市丸長門入道殿

義統(花押)

五八三 大友義統感狀

○大友家文書
大分縣史料六

為無尾、今度從嚴前馳以在城、折々軍旁之次第、感悅候、
弥原近江入道被指所、一應助馳走事而安候、於忠實
者、必可買之趣、委細猶緒忠可申候、恐々謹言、

十一月一日

田原左馬助殿

義統(花押)

五八四 古弘親家書狀

○大友家文書
大分縣史料六

いづれもしやけちなことを、か、へ候かたも候へハ、にあ
わせにしやまいを、我等あきらめ申中、とかくに近日、
くらかけの城に可罷越候間、其時宜可申承候、次つ、ら
給候、悦喜申事候、恐々謹言、

十一月三日

田染弥五郎殿御書

親家(花押)

五八五 大友家文書録綱文

○大友家文書
大分縣史料三

二十六日、小田原左京亮攻神門巽、被劔、有功、甲斐長
門入道及田代士金須右近將監、福水四郎三郎等亦為小田
原授兵隊修事、○義統官厚統兵隊修事功、命領中免役事、
有吉、

五八六 大友義統諸点役免許状案

○大友家文書
大分縣史料三

○今度被懸表、在陣辛苦、殊千部口合戦之刻、分捕高名
忠儀、無比類候、仍当院貞和名之内、若可免之事、万難
諸点役令免許候、弥可被助馳走事、肝要候、恐々謹言、

十一月廿六日

厚彈止忠殿

義統(花押)

五八七 大友家文書録綱文

○大友家文書
大分縣史料三

四、旁小田原左京亮、神門戰旁、使甲斐・奈須等、勸
其隨軍事、有授小山原感狀、

五八八 大友田齋書狀

○大友家文書
大分縣史料三

去廿六、到神門取懸、被逐防戦、櫓等難打崩候、依無統
眾不善上之由候、不及是非候、殊自身碎手、被疵候事、
別而心懸忠儀之次第感悅候、次其方被官之者、自手之着
到、加披候、旁粉骨不及申候、然若今、甲斐長門入
道馳走深重之段、令水知感心候、田代兼宗須右近將
監、福水四郎三郎以下、軍、得共衆、路々以感狀申候、
樹付道、弥被申渡、高度事行架様、兩儀等一候、
此度被賜、申談、何様一様、可買之候、猶近々、
可

田齋(魚印)

五八九 田原紹忍感狀

○大友家文書
大分縣史料三

今朝於其表、時被田原之忠告等懸出候故、即被被懸合、
粉骨之趣無比類候、然者僕從被被之由、忠實之至感悅候、
何様同候、様可買之候、弥無浦斷心懸下安候、恐々謹言、

十一月一日

元重氏部丞殿

紹忍(花押)

五九七 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大分県史料二二

〔被懸表出陣之儀、申付候処、遵其節、于今長々、辛勞之儀候、殊可申、大津留民部少輔被申〕予佐郡働之刻、別而辛勞之由、感人候、亦可勉、肝要候、恐々謹言、

長野因幡守殿
務承殿

義統 在拜

五九八 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

是○冬、嶋津表入意兵、略日向、州土風俗後名與之戰挑、又義久築城於日向、肥後境花山、啓兵、以備甲斐宗運、九年辛巳正月、○旁飯田麟清、波多源七兵衛、上野銀久、在妙見城、且備其授兵、作書、論之、

五九九 大友義統感狀

○長野末夫文書
大分県史料一

至龍々鼻二ヶ年之在城、為不誑辛勞之儀、一段令感候、何様以時分、別而可賀之候趣、猶出北十郎可申候、恐々謹言、

正月廿三日

義統 (花押)

長野因幡守殿

六〇〇 田原親家知行預ヶ状

○瀨部文書
御所大文字子部日本史新編

連々々無足之上、辛勞之儀候之間、瀨部半因郎先給分、雖申付候、切寄任願形、口籠中間候之処、連上表之儀、神妙候之条、則安岐郡内松木清兵衛尉先給草場名七貫分、并須賀之元三貫分之事、不致段歩預違候、云々下地、上買少云、全有知行、亦可被助奉公之状、如件、

天正九年二月五日

瀨部孫左衛門尉殿

親家

六〇一 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料二二

二月、田原親家寄書於飯田内記允、此時内記允在惣助、以勸發妙見城、

六〇二 田原親家書状案

○大友家文書録
大分県史料二二

就便宜一筆令申候、其表動乱之次第、不及是非候、然者其方事、從最前無別儀以心懸、今更惣助切寄、被差罷候間、案中候、爰元御評議相調候間、御出勢火急候、可御心安候、殊可清、今度之忠實無比類候申、親家駐在府之儀と申、何様一被取入、不可有余儀候、追而以拜付、可小給候、其元路次第何と、如妙見處、御答專一候、

猶五ヶ可申候、恐々謹言、

二月八日

飯田内記允殿 御宿所 上田用新

親家 在拜

六〇三 大友義統書状

○長野末夫文書
大分県史料二

罷ヶ鼻被審之儀、至都甲山城人追申付候、被申談、勤番肝要候、願不可有油断之儀候、猶田北十郎可申候、恐々謹言、

卯月二日

長野勘七郎殿

義統 (花押)

六〇四 山原紹忠感狀

○成親文書
増補正徳年大友史料一五

去七日、至統直切寄、勤業衆成行候刻、聯合、終日速訪我、被得勝利候、尤珍重候、殊于火矢高少之次第承及候、乍案中、指骨無比類候、何様於向後不可有忘却、信御心懸憑存候、恐々謹言、

卯月九日

成親次郎殿

紹忠 (花押)

六〇五 大友義統感狀

○成親文書
増補正徳年大友史料一五

今度、從最前、製半空空守、福船佐渡守申談、竣令龍城、

折々軍勞粉骨之次第、今以馳走無油斷之由候、感入候、必取領、追而可買之候、恐々謹言、

五月十九日

成恒越中守殿

義統(花押)

六〇六 大友義統感狀

○編年文書
增補訂正編年大友史料 五

今度從坂前賀來安奈守、福島佐渡守中談、馳令訛城、折々軍勞粉骨之次第、今以馳走無油斷之由候、感入候、必取領、追而可買之候、恐々謹言、

五月廿九日

櫻瀬次郎殿

義統(花押)

六〇七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分縣史料 三三

○五月、義統(實)口斷續入久比原平次、免其領地諸役、以授書、出原紹忍亦寄書、諭之、

六〇八 大友義統書狀案

○大友家文書録
大分縣史料 三三

其方事、以出原近江入迫同心、至妙見岳長々在城、辛勞感入候、仍為其實、田樂庄之内知行分之事、方種請直役令免許、殊々々可為檢斷不候、此方用所之御者、直可申付候、為存知案、恐々謹言、

五月一日
上野左介殿

義統(花押)

六〇九 田原親家知行宛行狀

○岩崎文書
石原親家知行大書上巻

於藤渡奉札、任判形之旨、成安藤九郎殿、加扶助候、給分不有之、全令領知、弥奉公肝要候、恐々謹言、

五月三日

佐藤有京九殿

親家(花押)

六一〇 田原親家知行宛行狀寫

○岩崎文書
大分縣史料 三五

於藤渡奉札、任判形之旨、成安藤九郎殿、加扶助候、給分不有之、全令領知、弥奉公肝要候、恐々謹言、

五月二日

溝部右近九殿

親家(花押)

六一一 大友義統感狀

○平水文書
增補訂正編年大友史料 二五

為妙見岳殿在番、為無足辛勞之儀、感入候、弥可馳馳走事、肝要候、必追而可買之趣、猶出原近江入迫可申候、恐々謹言、

五月五日

赤水石原亮殿

義統(花押)

六一二 田原紹忍感狀

○編年文書
增補訂正編年大友史料 三五

昨日於葛原表、高森之石其懸合、被疵粉骨之次第、誠感悅無備候、弥以寄合申被中談、可被拙忠節事、肝要候、何様一踏實可申候、恐々謹言、

五月廿八日

渡邊市左衛門尉殿

紹忍(花押)

六一三 山原親盛感狀案

○佐藤文書
增補訂正編年大友史料 二五

時杖表因徒等、節々現形之由候間、寄々之案、被相訛別而被勵軍勞肝要之段令中候、然氣思弘村中之仁、無礙馳走之通感悅候、何様一被可買之趣、先々從續道御心得專一候、恐々謹言、

六月八日

中山左近助殿

親盛

六一四 田原紹忍感狀

○遠江文書
增補訂正編年大友史料 二五

今朝於小物表、時校悪党伏兵和催候處、各懸合、令防戰、其方候從源七分抽之趣、高名無比類候、何様向後可買合之旨、彼者申合候、恐々謹言、

七月六日

渡邊三郎右衛門尉殿

紹忍(花押)

六一五 田原紹忍感狀

○成貞文書
增訂正徳年大友史料五

今朝於小善表、時枝惡克伏兵相備候、各懸令防戰、其方備從善即分捕之趣、高名無比頓候、何様向後可買中之旨、彼者江申合候、恐々謹言、

七月六日

渡邊市左衛門尉殿

紹忍(花押)

六一六 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大友史料三

九月、浦上彈正忠下村木岡城、難後、其父長門入道九月、浦上彈正忠下村木岡城、難後、其父長門入道九月、浦上彈正忠下村木岡城、難後、其父長門入道

六一七 浦上宗鐵書狀案

○大友家文書録
大友史料三

猶々、彈正忠輝陣之詞、示切老へ邊參上、別而御懇志之次第、外聞之中、至有候、此出能々、御心得可被成候、乍憚、御袋様へも奉憑候、將又御料人、さそ御成人候八人と、申屆計候、内々申事も、無沙汰申候由にて候、万々々々申入、可得御意候、以上、

預御懇札候、令被聞候、殊々度彈正忠、至村木岡令登候之氣、貴所以御在城、別被添御心之由、誠御頼敷過分至極候、彼御志、生中、難致忘却候、先口、濃々遣上聞候趣、被成、御書候、珍重候、倍向後無御隔意、可申候條、御所御仰候、自是申後無而日候、非拜願者、難申述候間、先以聞充軍候、恐々謹言、

九月十一日

統之 參 御返人々御中

宗鐵 直拜

六一八 大友田齋書狀

○内所被成文書
大友家文書録

去廿二、至田齋藩野中務以結構、惡克取出候之趣、統行行故、為始星野神五郎、敬掌討捕、軍出狀加披見候、毎々粉骨忠儀之次第、感愧無極候、然者、至津江信濃守宅所、阿蘇小國之者其取懸、親信離城之奈、為加勢、

昨日小國天懸令放火候條、北中下城申、買入差出、依佗言深重、召置候、於下人者、彼方尚無所屬下知候、珍重候、仍前日田江越山之覺悟候趣、行動付而差延候、急度出勢之儀、聊非浦斷候間、半城以擊囚之才竟、皆可被動馳走事、肝要候、得又就訴訟之儀、毎々口能之趣、令承知候、於球体名義被可申出候條、不及書候候、為此方、何様不可有疎意候、恐々謹言、

九月廿九日

因注所刑部少輔殿

田齋(宋印)

度々如申候、於賢果安芸守切寄邊澤城、折々軍旁之次第、感入候、弥可被抽忠意事、此節候、何様取銷、一様可買之儀、恐々謹言、

十月五日

成恒感中守殿

義統(花押)

六一〇 大友義統感狀

○成貞文書
增訂正徳年大友史料五

度々如申候、於賢果安芸守切寄邊澤城、折々軍旁之次第、感入候、弥可被抽忠意事、此節候、何様取銷、一様可買之儀、恐々謹言、

十月九日

幡漸次郎殿

義統(花押)

六一一 田原紹忍書狀

○成貞文書
增訂正徳年大友史料五

就里再亂之儀、到中山左近助切寄罷登、並請以下別而馳走之由、令視着候、弥此節於助幸勞者、必勝論之刻、可領其志候、恐々謹言、

拾月九日

廣崎中務承殿

紹忍(花押)

廣崎兵庫人道殿

六一九 大友義統感狀

○成貞文書
增訂正徳年大友史料五

六二二 大友府隨書狀

○西法所文書
東大史河邊實地考

前八於小樺尾河内、惡克少々現形候之趣、城京堅固才宜故、即時被追跡之由候、殊右河内正町野紀伊介以在村、遂防敵粉骨之期、手負魂死之否有之由候、忠儀無比制候、母々無御油断被抽馳走事、祝者深重候、先書如申候、至行并要書、人数蓋置候之条、節々被逐相談肝要候、就中大肥衣之儀、是又堅固下知候、雖無申迄候、其境之儀、被閉合、不云夜白小節可得其意候、為存知候、恐々謹言、

十月十日

附蘭(朱印)

六二二 大友義統書狀案

○大友家文書
增補訂正御年及史料 六

畿前西郡之惡克、至下毛表令現形、所々狼藉不穩便之由、從方々注進到來候、就大野伸兵應須加勢之儀申候、追々可差立意悟候、然者各事辛勞雖無尽期候、文度等以心懸、左右次第、不日可被打出申、肝要候、先々為愉快、帆足右衛門大夫・森左馬助、急度差遣候条、自然之時若可被添心事可為祝著候、恐不可有油断之趣、猶著難札伊人迫可申候、恐々謹言、

十一月十四日

義統 春

- 岐阜山城人追殿
- 小田部少輔少種殿
- 平井河内入道殿
- 惠良左近大夫殿
- 魚返伊豆入道殿

太田宮 熊殿

惠良孫三郎殿

松本相右衛門尉殿

占後主計 允殿

野上治部少輔殿

其外 郡衆中

六二四 宇佐宮社僧大師供記裏書

○水口寺の文書
東大史河邊實地考

去年天光九十一月十九日、大友殿義統代官宗正御・御・男田原親家為大將、同近江入道相必、吉弘太郎統運以下幾後御一勢、當郡院内里郷諸村安心院中務入道麟生・佐田彈正忠領綱、其外諸軍七千余、至宮中取懸、親家陣者向ノ尾、吉弘同所、浦部・府中衆皆親家同陣、親家陣者山口・安心院ハ籠原、佐田ハ第宮、橋津ハ北面高森ヲ相拘、荒寄ニ当山悉燒失矣、因茲大師供令怠慢、今年大衆寺上心乘坊、時ノ住門柘ノ於飯屋執行、

當家衆之求、大宮司宮成公塞ハ大衆寺上ノ要否取請攝職、宮中神人、御供所、厨家、宮傘、御伏所、花掘、其外宮外之水守以下迄茶籠之、宮佐古一山・同所懸候校給永統世ハ都瑞泉寺ノ上要否取請、令官以下部村中心、差儀之、親大去其ハ本宅ニ播置之、(以下略)

六二五 大友家文書録綱文

○大友家文書
大分縣史料三

二十日、宇佐部合戦、田原親家上津崎兵庫助有戦功、被賞被領、

六二六 大友家文書録綱文

○大友家文書
大分縣史料三

○附蘭開散月、龍造寺克兵利于針日山、使我兵陣于彦山者分向之、命柴山札能、守彦山高石屋、○二十日、發生宗雲・早野鶴虎及小佐井三郎・徳九賀右衛門尉等、擊肥・挽兵於針日山、殺敵十八、是日大肥忠亦為秋月兵饑、久多良木伴人佐○擊之、此間久多良木氏與狭間刑部大輔・小佐井三郎・徳九賀右衛門尉等、或守林木岡城、或守大肥屋、而有功、○二十三日、豊軍解彦山陣、舜有兵遣之、田村統幸・森治部少輔・森宮内少輔・志津利勘解山允・肘津久右衛門尉○等力戰、自朝、○惠良備中入道亦○戰功

六二七 大友府蘭感狀案

○大友家文書
大分縣史料三

○廿、肥兵之惡克、至針日山、雖取出候、以擊、行敵十八討果候、其以來若差行無之候處、門今如到来者、敬散北必定之由、先以珍重候、然上若、急度一可加下、知覚悟候条、旗虎被申談、睡光之心懸肝要候、樂吉左右重々可申候、恐々謹言、

十一月十五日

府蘭 朱印

- 斐生民部入道殿

出勢近々之儀候条、御許証不可有程候、其境之儀統虎被
仰談、御事堅固之御才宜好宴候、細碎自給速可被仰遣候
条、書面不詳候、恐々謹言、
正月廿四日
屋山中務少輔殿
御石

六四三 宇佐鎮常軍忠状家

加披見説、
内尾三郎宇佐宿弥彌常、諱曰上、
欲卑賜、御證判、備方代電鑑軍忠之事
去年十月廿七日、於人銀川防戦之刻、僕從善五郎、
被獲、同十一月五日、右於所所、防戦時、郎從後田善左
衛門尉、同神五郎、同鶴六、同清次郎、僕從與三太郎、
討死之、同忠二郎、被執、同十一月廿四日深見寺住人遣
到宅所、敵取懸防戦之刻、矢高名、鎮常兩人、同善清因
郎宅人、僕從源十郎宅人、忠儀記、
天正十年一月十日
田原近江人遣殿
鎮常 在判

六四四 大友義統書状

急皮染筆候、仍西日之忠覚、於下毛表、于今相繼之由候、
如此浮出候事、幸之儀候之条、野仲兵庫頭中談、為可討
果、玖珠郡布院院衆、不日坐守候、定面可為著陣候、然

者各事、軍方雖無尺期候、忍忍親處、被請指由、即刻
被打出、一行可有馳走事、頼入候、於様体者、委細見足
民部少輔合口上候、恐々謹言、
卯月六日
飯田二石衛門尉殿
彌富村馬守殿
下野次郎殿
中野次郎殿
中山左近助殿
蕭藤彌二郎殿
中山彈正入道殿
忠良勤解由允殿
副兵部少輔殿
佐田彈正忠殿

六四五 大友義統感状

為無足近年毎陣之重勞、殊去去年彦表、長々在陣、同高石
城番馳走之次第、勞感入候、必取願、可賀之候、恐々謹言、
卯月十日
平井内藏助殿
義統(花押)

六四六 宗勇書状

符又見之來候條、鑑覽卷・十綱、進覧候、
少不及中候、尚々其衣御左右、幸便之時、示

六四七 大友家文書録綱文

給度候、
今年之御高殿、於下令者、雖事由候、尚更珍重々々、此等
之儀、早々可申入候之儀、依成路無言罷過候、心外之至候、
然者、紹忠公江改めて致無沙汰候之条、排愚札候、可預
御取合候、老休も、去年令申候御契約之儀位面、登成申
度存候へ共、貴殿おなかいの切者、御滞在之山承候間、
無其儀候、何比御番前可申中候哉、夏中、そと參上申度
候、御内々示給候、可得其意候、未おなかいに於御思
留者、被一進費所御うら方より、御參進給候へし令申候、
自然預師返書候者、能々する儀にさへ頼所迄、被遣可有
候、又名人慮小者、かうしたに隨仕候をも、可被仰付候、
奉角御分別、過問敷候事
一其教御付立、柄、如何に御座候哉、蒙御度候、早々被
動御案判候條、無御油斷御才宜、不及申候、爰元之儀、
當時者無事候、可御心安候、
一竹六兵之事、忍公以御取合、被召出之由、年々十町
分、可有安堵と申候、先々日出度候、併御弓矢之習
外は乍中、積水被立御用候、于今不及是非候、同願茶へ
ハ為代地、旧野田分持御被申候、自然六兵於無御參者、
彼、町をも相加可被下之由、被仰出之由申候、此時者、
定面忍公御忠業之儀も、可有御座候哉、貴所別而大慮為
被仰合之由、承及候間、今以無替日、何處積水跡口之事、
奉悉外無他候、必軍々可申承候之条、省略候、恐々謹言、
四月廿二日
宗勇(花押)
清成式部少輔殿
郵陣所

六四七 大友家文書録綱文

大友家文書録綱文
大友家文書録綱文
大友家文書録綱文

四月廿三日、二十四日、義統使田原親忠、出兵、戰於時枝、
紹翁從士渡邊有守、統忠、照山雅樂助、渡邊玄岐守、渡
邊新右衛門尉、渡邊二郎右衛門尉、各得百戰、相良主水
助及忠右衛門尉、渡邊正助七人、共爲、渡邊玄允、一、飯州
麟清、津崎兵衛助、亦有功。○十六日、時枝、忠兵、進
□□□□、柴田親能與力、被官、刀戰、被創、或戰死、

六四八 大友義統合戰頭手白注文一見狀

○渡邊文書
○津崎正備手本友史料云

天正十年卯月廿三日、同廿四日、於時枝、田原近江入
道親忠等、乃家中之人、或分捕萬名、或被衆人殺者、銘々
加披見訖、

頭一 毛末正 渡邊石見守尉之

頭二 照山雅樂助尉之

頭三 渡邊玄岐守尉之

頭四 渡邊新右衛門尉之

頭五 渡邊二郎右衛門尉之

被能衆

相良主水助 幸能

忠右衛門 同

助 七 同

藤岡玄允 同

以上

六四九 大友府蘭書狀案

○大友家文書
○津崎正備手本友史料云

□□度時枝表、一動之儀高勢打出候之趣、前日、到世
金口取懸候、其方與力、被官、或被能、或戰死、忠儀
粉骨之次第者、到銘々加披見候、進々之心懸、守百地、軍方
之段、乍案中感候、定、可我統別、可買之之、不及口能候、
殊儀、兼無別儀馳走之由承候、能越山之下、如申候、
世上如何、休中妨候共、鎮兼心成於無變化者、憲法之用指、
何様不可有、余儀覺悟候、自今以後、邪說寺可有之時者、
何々度、示給、可申談之旨、能々入魂肝安候、猶五々可
申候、恐々謹言、

五月二日

柴田親前入道殿

府蘭 章押

六五〇 田原親家感狀序

○續田原親家感狀文書
○大友家史料一〇

去年十一月廿日、於宇佐表各勳粉骨、忠貞之次第、無比
類候、殊今度時枝切奇題、兩日相勳、刺被官被能、手之趣、
究漏底候、乍案中、至兩陣心懸之段、感人候、必追而、
可顯其志候之間、信馳走十安候、恐々謹言、

五月二日

津崎左近助殿

親家(花押)

六五一 田原親家感狀案

○并注文書
○大友家史料一〇

去年十一月廿日於宇佐表、勳粉骨、殊今度時枝切奇題、
兩日相勳、手之趣、究漏底候、進々以無足之上、至兩

陣心掛之段、神妙候、必追而、可顯其志候間、信馳走肝
要三候、恐々謹言、

天正十 五月三日

親家

片山源六兵衛殿

六五二 田原親家感狀

○續文書
○大友家史料三五

去年十一月廿日、於宇佐表勳粉骨、忠貞之次第、無比類候、
殊今度、時枝切奇題、兩日相勳、手之趣、究漏底候、
乍案中、到兩陣心懸之段、神妙候、必追而、可顯其志候
之間、信馳走十安候、恐々謹言、

五月三日

親家(花押)

森伊賀入道殿

六五三 田原親家感狀

○並轉文書
○大友家史料一〇

去年十一月廿日、於宇佐表、各勳粉骨、忠貞之次第、無
比類候、殊今度時枝切奇題、兩日相勳、手之趣、究漏
底候、乍案中、到兩陣心懸之段、感候、必追而、可顯
其志候之間、信馳走肝安候、恐々謹言、

五月三日

親家(花押)

岡崎美濃守殿

六五四 大友義統感狀

○在正文書
○津崎正備手本友史料云

今度至時表一勢差運候之趣、鎮綱別而馳走故、家中之者共被馳之由、粉骨之次第感候、弥可被助忠意事、可為祝著候、必追而一段可賀申之趣、猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

五月九日

義統(花押)

佐田彈正忠敏

六五五 山原親家恩賞宛行狀

○松原文書
大分縣史料一〇

為海辺覚悟、兩切富取付候間、別而馳走、可為祝著候、然若於馬郷中、二段地加扶助候、恰於粉骨之心懸者、亦可賀之候之趣、壹賜天作守可申候、恐々謹言、

六月廿八日

親家(花押)

奈原紀右衛門殿

六五六 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分縣史料二二

十九日、義統使以珠郡上、免向于野仲氏領地、此時田原紹忍亦率于佐郡上、向雀尾營、久保統景放火、有功、義統作感揚於統景、

六五七 大友義統感狀案

○大友家文書録
大分縣史料三三

前十九、野仲兵庫頭領内免向之儀、至玖珠郡案中、申付候處、為御手合、田原近江入道被中談、雀尾切富放走至可、

小原放火之由、重勞粉骨之次第、感人候、弥不可有浦斷之儀候、恐々謹言、

五月廿一日

義統(花押)

久保舍人殿

六五八 大友義統書狀

○松原文書
增補正編年大友史料六

安心院中務入道切奇、于今相支之由、預注進候、被添心候之次第、祝著候、共衣之儀、御事田原近江入道被中談、急度落去候之様、御才覚願存候、其堪立柄、節々示給、可得其意候、委細猶志賀安房入道可申候、恐々謹言、

十月廿四日

義統(花押)

佐田彈正忠敏

六五九 大友義統書狀

○松原文書
增補正編年大友史料三

先再如申候、神樂要者于今依相支、相城被取付、鎮綱登城之由候、今度別而被助馳走候事、生案中祝著候、亦各被中談、有才覚、被城早速可落去調候願存候、委細猶志賀肥前入道、小田原左京亮可申候、恐々謹言、

十月廿九日

義統(花押)

佐田彈正忠敏

六六〇 大友附隨書狀

○佐田文書
增補正編年大友史料二六

安心院中務入道雲者神樂、于今依相支、田原紹忍被中談、前廿一、取調、被添在陣中、預注進候、御心掛之次第、案中候、累日履候之案、早々落去候之様、此節別而可被助忠願存候、於種種者、義統切々可加下知之案、不及口能候、恐々謹言、

十月廿五日

附隨(花押)

佐田彈正忠敏

六六一 田原紹忍感狀

○松原文書
增補正編年大友史料六

神樂共調、白被前別而馳走之由候、感候、猶中山左近助可申候、恐々謹言、

天正十年十月廿六日

紹忍(花押)

院殿兵庫入道殿

院殿正忠殿

院殿式部丞殿

其外來中

六六一 田原紹忍書狀

○松原文書
增補正編年大友史料六

到于佐表、時枝家中之者共往遊之由候之間、丹手之口遊待之義申候之趣、別而馳走之由令祝著候、弥無浦斷可被相心願存一候、猶中山道可被申候、恐々謹言、

十一月廿七日

廣崎式部丞殿
廣崎彈正忠殿
廣崎兵衛入道殿

朝忍(花押)

六六二 大友義統感狀

○大友家文書錄
大友家文書錄三

從去年至好士岳邊亂城、忠貞之覚悟、殊去冬以來於立
花合在城、折々軍勞之由、旁以感入候、追至、雖實申談、
弥可被助馳走事肝要候、必追一段可賀之候、恐々謹言、

十一月廿八日

田原龜壽殿

義統(花押)

六六四 大友義統感狀

○大友家文書錄
大友家文書錄三

於今度安心院表候、在陣之由候、為無足馳走之段一人感
悅候、弥可被助軍勞事肝要候、必其擧取鎧、一稜可賀之候、
恐々謹言、

十一月廿八日

飯田權介殿

義統(在判)

六六五 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
大友家文書錄三

丁高位岳城兵提勢方等追至、切、堤、右衛門尉

儀方・内威助見候、
「丁高位岳城兵提勢方等追至、切、堤、右衛門尉」

六六六 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
大友家文書錄三

義統、實是儀方等高功、加補判子其軍忠狀、且授感
書于文字、

六六七 大友義統合戰手負着到一見狀案

○大友家文書錄
大友家文書錄三

天正十年十一月一日、到高位岳殿行仕候之桑、衆中懸六、
遂防被候刻、被疵着到、

加被見草(在判)

堤、右衛門尉手負着
内藏助手負着
以上、

六六八 大友府蘭感狀案

○大友家文書錄
大友家文書錄三

「府津津岐入道所宿務之儀、申付候刻、別面」走之由、
令承知候、殊禮則以同儀、軍勞之良、感入候、弥以申談、
可被助忠實事肝要候、恐々謹言、

十一月三日

赤尾兵衛助殿

府蘭(在判)

六六九 田原觀家感狀案

○大友家文書錄
大友家文書錄三

今度尾兵居切奇勳番之事、福陣之刻、斷而申付候之趣、
預馳走之趣、神妙之毛候、殊去冬、至切奇、惡党等取
懸候之刻、城內各一段粉骨之故、敵即時引退之由候、息
懸之次第、大慶候、弥家中老有以一致、可被助懇志事、
可為祝賀候、恐々謹言、

十一月十二日

津崎兵衛助殿

親家(在判)

六七〇 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大友家文書錄三

前番、至高位岳安書、惡党行之間、在城之衆被申談、生
藥大野原迄付送、合戰之刻、息、右衛門尉被境之由候、
心懸忠儀之次第、乍案中感悅候、殊部從自手之由、令承
知候、旁以軍忠狀、加補判進之候、委細須軍令可申候、恐々
謹言、

十一月十六日

提安齋守殿

義統(在判)

六七一 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大友家文書錄三

「至高位岳安書、惡党行之刻、生藥大野原迄」
之刻、其方依被碎手、被疵之由候、忠志、
候、

雖無申志候、亦可被抽馳走事「——」志候、恐々謹言、

○一、内附ハ、

義統 在封

○一、内附ハ、
○二、内附ハ、
○三、内附ハ、

六七二 大友義統書狀

○河原氏藏問所文書
○長野源内太敷

前廿四、生要衣、行之儀、相催候處、統親別而馳走之由候、乍案中祝儀候、今度折々忠意之次第、空御難教育候、弥高位置城業以熟談、可被助粉行事、御要候、年内既無余日候矣、明春早々可加下知候間、每事無油断才其尋一、猶重々可申候、恐々謹言、
正月廿七日

問注所刑部大輔殿

義統 (花押)

六七三 大友家文書録綱文

○大友家文書録
○大友家文書録

義統幕日向境字口
一、緑城、是阿美、遠望川邊江入道紹安、居野「」、其向所以備佐州、

六七四 大友義統感狀

○氏野成八氏文書
○氏野成八氏文書

於今度安心院表、本庄中務少輔以同陣、別而軍勞之由、

感入候、弥可助馳走事肝要候、必追一段可買之候、恐々謹言、
正月十六日
長野源内太敷
義統 (花押)

六七五 大友義統感狀家

○大友家文書録
○氏野成八氏文書

於今度安心院表、本庄中務少輔以同陣、別而軍勞之由感入候、弥可助馳走事肝要候、必追一段可買之候、恐々謹言、
正月十六日
木付兵部少輔殿
義統 在封

六七六 大友義統書狀

○氏野成八氏文書
○氏野成八氏文書

「大正十一年癸未」
御書之等案
數度如申候、安心院表書、于今相支候事、方々聞、更不可然候、就中、至城内積口下義親人在之之由候、偏當陣衆油漸減不及是非候、右閉口之儀、至出原近江入道、本庄中務少輔及申遣候、彼衆被申談、諸口堅固差撥、急度一若之調儀願存候、委續齊實來中務少輔、上野掃部助申合候、恐々謹言、
正月廿八日
飯州但馬人 道敷
矢部 二郎殿
義統 (花押)

飯川三右衛門尉殿
佐田 死正 忠殿
其外御家中

六七七 大友府蘭書狀

○依日文書
○氏野成八氏文書

去廿 神樂要書一著之由、示給候、彼調略口冬已來、至磯珠、鎮綱令入飛候之処、相必被申談、以才覺、安心院十世松下城之段、堺口之覺難肝要候、今度御心懸、軍勞之次第、定而義統可申達之矣、不及口能候、弥每事被助馳走尋一候、猶重々可申候、恐々謹言、
正月廿四日
府蘭 (朱印)

佐田 死正 忠殿

六七八 田原紹忍書狀

○氏野成八氏文書
○氏野成八氏文書

為御業、著之祝儀書狀、殊河海到來、祝書候、恐々謹言、
正月廿九日
廣崎兵庫人 道敷
紹忍 (花押)

六七九 大友義統感狀

○氏野成八氏文書
○氏野成八氏文書

安心院中務入道事、依不能顯然、命譯候候、雖然神樂要

吉相支候之美、加下知候之短、不思軒以何障、別而被勸辛勞、彼城厲案中、祝者候、必迫向一様可成其感之趣、猶紹忍可申候、恐々謹言、

一月廿二日

義統(花押)

佐田彈正忠殿

六八〇 大友義統感狀

○大友義立先哲(花押)并所願

安心院中舊入道事、依不儀顯然、令誅伐候、雖然神妻要害相支候之条、加下知候之短、不思軒以何障別而被勸辛勞、彼城厲案中候、祝者候、必迫向一様可成其感之趣、猶紹忍可申候、恐々謹言、

一月廿二日

義統(花押)

中山彈正入道殿

六八一 上師種專書狀

○義統文書

飛用一書候、數山至兩切寄、往惠之人、其外地下人等、聊爾之子烟出來之時者、口一書、一途可被申付候、誰人邊亂之儀申訪候共、不可有前引候、為御存知候、恐々謹言、

五月七日

種專(花押)

○大友家文書

六八二 大友家文書録綱文

○大友家文書録

○二十四日、○我兵攻陣津泊部少輔力田君有、○藩之、雖所守其苦濠津式部少輔以下、而吉之義統、此戰森玄番允被勸、中島上殿助力戰、○小山民部少輔被旨秋吉左京亮、麻生仁介及野上民部少輔、野上、英後二與次郎被旨等負向、與次郎僕從得旨、各有軍功

六八三 大友義統書狀案

○大友家文書

在郡辛勞之儀、猶存候、方角立稱之儀、至坂本備中入道、財津殿殿入道申進條間、被逐入魂、無油斷才覺願存候、誓又從露西口如注進者、前引此到津泊部少輔控之方由切審取懸、即時打崩、為始城督陣津式部少輔、不殘一人討果少由候、先以大慶候勝利之儀候、為御存知候、猶重々可申候、恐々謹言、

九月廿六日

義統(在稱)

大榎常陸入道殿

志賀富陸入道殿

六八四 大友府蘭書狀

○坂手文書

從九条鎮定在其方之書狀、同番進之切紙、踏々加披見、極其意候、鎮定忠實珍重之段、雖不斷候、心懸之次第奇特存候、不諱夫不夫、聊不帶之子細候者、不移時日、入魂候様、切々被申通所要候、如水口名、無心元存候、當時慰前衣行手候之条、從取方者、可為種々之思略候、

能々被閉合、至成開讀々注進專一候、爰元處方(三)取御等、遺作之玉候、無余表節日者、從從阿可有到米候之間、被傳其書要候、勿論論入來々名、何時、或水、可申談候、為存知候、恐々謹言、

九月廿七日

府蘭(朱印)

坂本備中入道殿

追而昨今如注進者、去廿四口下毛郡悉免向、切寄一二ヶ所落去之約、敵數十人討捕之由、手始之勝利、珍重候、如此候者、余方々覺、可相性候、猶重々可申上候、

坂本備中入道殿

府蘭

六八五 大友義統感狀案

○大友家文書

至今度戰前表、從最前名代以出陣、飛身殊去月廿四日切高打崩候之約、親類与力被官分油高名、被統粉骨之由、軍忠狀速被感候、雖無申進候、信可被勵馳走事可為祝者候、恐々謹言、

十月八日

義統(在稱)

太田九郎殿

六八六 大友義統感狀

○坂手文書

至今度戰前表從最前以出陣、軍勞殊去月廿四日切高打崩候、惟久口身依被砕手、親類寄被官殺數十人被疵、粉骨之由、軍忠狀、踏々加披見候、定忠候無比類候、義

父惟思進々忠意之覺悟、令隕然亦謂賴教存候、雖無申迄候、向後修可預馳走事、可為祝賀候、必以候節可申候、恐々謹言、

義統 (花押)

北軍次郎左衛門尉殿

六八七 大友義統々合戦手白注文一見状案

大友家文書目録
增補訂正關東大友古書、六

神科

天正十一年十月八日、前關西字佐部佐野切寄達刻、一萬

田民部少輔統賢被官、被執着到、銘々加被見事、

廣瀨左近允、謹祝

衛藤主計允、謹祝

都甲市兵衛尉、謹祝

以上、

六八八 大友義統感状

大友家文書目録
大分縣史料三三

前八佐野切寄達去之刻、別而依被時手、被刀統之出、粉骨之次第感入候、必以時分可賀之候、恐々謹言、

義統

口次國吉允殿

六八九 大友義統感状

大友家文書目録
大分縣史料九

去月廿四、下毛部之内、聞出切寄打崩之刻、分抽高名、殊前々、字佐部佐野切寄押之刻、被疵粉骨之次第、旁以忠儀無比預候、必迫而一段、可賀之候、恐々謹言、

義統 (花押)

一萬田市進殿

大友家文書目録、大分縣史料三三、二七取六、

六九〇 大友義統感状案

大友家文書目録
大分縣史料三三

去八、佐野切寄打崩之刻、自身別而依被時手、家中之人等被疵着到、銘々加被見、以袖押申候、向後弥被申迄、可預馳走事肝要候、必至統賢一様可賀申候、恐々謹言、

義統 在判

一萬田民部少輔殿

六九一 大友義統感状写

竹田守輝夫文書
熊本市下五條町

今度原當隱合以同心、別而幸安、殊前八、字佐部之内佐野切寄打崩候、自身被時手之次第、被官罷々、軍旁次第、着到所披見、以袖押申候、連々其方心懸之故、如此勤勞、皆候事、感入候、向後弥可被加進申、專一候、猶觀察可申候、恐々謹言、

義統 (花押影)

十一月十一日

竹田津志摩守殿

六九四 大友義統感状案

大友家文書目録
大分縣史料三三

縦書、天短三寸、左右一尺五寸、天正八年日曆
右思加彌切寄時、數指及至佐部形之
感状案也

六九二 大友義統感状案

大友家文書目録
大分縣史料三三

〔免向之刻、被達出張、於所々軍旁、殊〕
〔那之内佐野切寄押候之刻、与力、被官、分〕
〔之由着到、加被見、以袖利申候、統尚〕
〔骨事、感候、向後弥可被加進事、〕
〔一段可賀申候、恐々謹言、〕
十一月十一日
林左京允殿
義統 在判

六九三 大友義統感状案

大友家文書目録
大分縣史料三三

〔豊岡同衆向之刻、被達出陣、於所々軍旁、就〕
〔字佐部之内佐野切寄押之刻、被官被疵、我〕
〔披見、粉骨之次第感候、向後弥可〕
〔着候、必取領一段可賀之候、〕
〔南門尉殿〕
〔候〕 在判

前八出郡之内、佐野切寄被打崩候之刻、被助粉骨之由、
感入候、弥向後馳走肝要候、猶田原近江入道可申候、恐々
謹言、

十月十五日
久保大藏少輔殿

六九五 大友義統感状案

○大友家文書録
大分縣史料二二

前八出郡之内、佐野切寄被打崩候刻、別面軍旁之次第
感入候、向後弥可助馳走事肝要候、必追而一段可賀之趣、
猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

十月十五日
上野左介殿

六九六 大友義統感状案

○大友家文書録
大分縣史料三三

今度宇佐郡之内、佐野切寄被打崩候之刻、娘官家中工藤
主膳止、助粉骨強死之由候、忠儀感心無極候、定不便之
儀候、彼下係在之者、能々可被賀之事肝要候、為御存
知候、恐々謹言、

十月十五日
朽網宮藤介殿

六九七 大友義統感状

○大友家文書録
埋輪山傳年大友史料二六

至今度豊前口出陣、殊野仲表、于今在陣旁勞感入候、向
後亦可助馳走事肝要候、恐々謹言、

十月十六日
八坂王馬允殿

六九八 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分縣史料二二

○十六日、義統在豊前、攻是則豐前之、古後玄蕃允自創、
獲首級、其被首一人、小田民部少輔儀從等亦被創、

六九九 大友義統合戦

打死頭手負注文・兄状

○平井曾爾大旨
大分縣史料二二

天正十一年十月十六日、豊前國下毛郡是則切寄様之刻、
平井宮内少輔領親親類被創、或分捕或戦死、被疵者到、
加被旨事、

頭一 平井 準人 佐治、

榎田 總助 儀從
新藤 玄 番允 大藏
御藤 五右衛門 尉高
七右衛門 四

藤十郎 刀使

又右衛門 五藏

北井 入彦 儀從

新右衛門 助光

半 介 右藏

以上

七〇〇 田原紹忍恩賞宛行状案

○中島文書
堀河引込傳年大友史料二六

昨日十八、於其表、時枝衆、西部津佐被懸合、敷刻速防戦、
父宮崎守戦死無比類候、何様忠賞之統、水々不可有忘却
候、先以五町地、令扶助候、当切寄之事、弥堅固相覺願入
候、恐々謹言、

十月十九日
中島千殿助殿

七〇一 大友義統感状

○別本孝之書
堀河津傳本實打本

今度豊前国亮向之刻、從最前在陣、殊下毛郡方田切寄打
崩候間、被宮被疵之由候、軍旁之次第、感入候、必追而
一段、至具方、可賀之候、恐々謹言、

十月廿八日
野上民部少輔殿

○大友家文書録
大分縣史料二二、二三、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

忠候之寛活、肝要候、猶重々可申候、恐々謹言、

十一月十一日 附圖(花押影)

津崎大和入道殿

七二 大友義統感状

大友家文書類
大分県史料三編

大正十一、九、廿四条探偵六二二探一

今度豊前同免向之刻、從最前在陣、殊下毛郡方田切寄打崩候間、被官被獲、并候從分捕高名之由、誠軍忠之次第感入候、必取領、至其方、一様可買之候、恐々謹言、

十一月廿八日 義統(花押)

野上与次郎殿

七二 山原紹忠感状

山原文書類
增補正徳系大友史料五

今朝時被無取出候哉、以魁別而粉骨之通案中候、仍郎從六郎次郎被刀被之由候、感入候、何様一様可買之候、亦可助忠實事肝要候、恐々謹言、

十一月二日 紹忠(花押)

元重安公守殿

七三 大友家文書録綱文

大友家文書類
大分県史料三三

十二月、先是宇佐社職等坂衣統、命田原紹忠、下妙見

城鎮之、久保大藏少輔、飯田麟清、都甲三河入道等、從紹忠、有功、義統作感状、

七四 大友義統感状

大友家文書類
大分県史料一

宇佐社中之者共、企一雅意之案、田原近江入道以下、城相聞日候、然者其方事、妙見忠治守番、被逐其節由候、辛勞之儀候、必追前、一様可買之候、恐々謹言、

十一月二日 義統(花押)

長野弥十郎殿

七五 大友義統感状案

大友家文書類
大分県史料三三

宇佐社中之者共、企一雅意之案、田原近江入道以下、城相聞日候、然者其方事妙見留守番被逐其節由候、辛勞之儀候、忠意之段、必追前、一様可買之候、恐々謹言、

十一月二日 義統(花押)

久保大藏少輔殿

七六 大友義統感状案

大友家文書類
大分県史料三三

中ノ者共、企一雅意候案、閉日之儀、近江入道以同陣、別而馳走之段、取領、一様可買之候、恐々

飯田但馬入道殿 義統(花押)

七七 大友義統感状案

大友家文書類
大分県史料三三

在社中之者共、企一雅意候案、閉日之儀中、田原近江入道以同陣、別而馳走之段、忠實之次第、感入候、必其境取領、一様可買之候、恐々謹言、

十二月三日 義統(花押)

都甲三河入道殿

七八 大友義統感状

山原文書類
大分県史料三三

於今度豊前表方所、是則肉切寄、被打崩候之刻、以刀打依勒粉骨、被觸號之由候、忠實之次第、感入候、必追前一段可買之候、恐々謹言、

十一月十二日 義統(花押)

平井弾正忠殿

七九 大友義統感状

山原文書類
增補正徳系大友史料五

於今度豊前表、佐野切寄被打崩候刻、分捕高名之由、忠實之次第感入候、必取領、一様可買之候、恐々謹言、

十二月廿日 義統(花押)

田原左近允殿

七二〇 大友義統感狀

○大友家文書錄
陸奥野田王廟元大友史目三

近年到新城殿在番之由、辛方之段感入候、弥紹運以一
致、別固可被助忠慕事肝要候、其罪於靜謐者、何様一段
可賈之候、恐々謹言、

正月廿九日

義統 (花押)

蒙瀬新介殿

七二一 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
大友家史料三三

二月、義統勞竹田津式部少輔、波多源七兵衛尉、久保統
益、上野領久妙見指果功、作感書、且賞波多之内九軍方、
莫領地、感鑑山保真軍功、亦書大姉忠死於山、加後前
地、共有書、朽瀬亦歷亦寄書于保真、且致謝感書、

七二二 大友義統合戰手負首到一見狀

○大友家文書錄
大友家史料三三

加後見狀、
天正十二年三月廿八朝、至大肥河内敵致統、今山・釘原
兩村逃引揚、針口威速追付、以防敵被遊者到、
坂本新次右衛門尉、千次英宣

以上

七二三 大友府蘭条數覽

○大友家文書
大友家史料三六

義統公御条數書 被先憲法節事

覽

- 一 被先憲法、每事以思惟被加知下、可為要要之事、
- 一 郡内諸藩庄公事沙汰令出來、以閉口之上、關地等於
有之者、方分并役所、被申付、裁判之人取任申付、緊
固可被加下知事、
- 一 就調方之儀、宿老被申談候題目相定候事、大以前之分
別、被申付候儀相定候事、殊當方之定法候、凡無其紛儀事、
- 一 近習其外日仕候人、於諸地自然公事以下出來之時、動
直被差遣候儀取沙汰、從前々稀之了細條之案、向侵尋
監可為專一事、
- 一 因中請待重縁等申詰候刻、為義統被加詞候事、自然若
可依人候歟、顧出人雖有之、輕々取取沙汰、從前々無
之候事、
- 一 就政道閉口等之儀、或因之來、或近習其外諸停中、号
召罷、徒被留置候事、本不可然事、
- 一 一部諸藩庄來之儀、運々以愛憐、奉公運統候様、有
度事之候、在險等儀度も馳走之車候之間、所々之人致、
- 一 一人も無難意様、可有分別事、
- 一 近辺奉公立候、時宜仕合、願、意等、恠之様体以外之候、
- 一 第一大御様談義和之儀、不及是非候之案、是又吸被申
付候八て、國家之人觸不可過之候事、
- 一 義統兄弟同好中、為義統別被添心、何處入魂不
及申候事、
- 一 願敷者請寄、折々無油斷被申付肝要候、殊石火矢・手

一 大矢常數・被申付、壬辰等港々其心懸等一存候事、
願等之事、是又自然之時、不被事關様、才覺尋要之事、

一 近習其外不斷半堪忍之儀、不庇其身公役、同衣裳等、
乍迄、分過之疑走、更不然候、被申不違召仕辛勞之人
八へ、先悲惡被加不便等一案、當因討之儀候之間、情
態之外不可然事、

一 盛岡之儀、是又可被探違事
一 撰入体、心持等ヲ能々被見切、近辺へ可被召仕事肝要
候、雖難為忠儀之節日、於不覺情之輩者、近辺へ可被
召置事、太不可然事、

一 右之条々、凡存出次第書付申候、近來老はれたる申
事に候へ共、余今世上矣止、見及候之案、大形書注候、
於無分別者、墨老罷出、揮筆之儀留、成申謝數候、此
謂被相心得候、義統へ可被申達候、以上、
天正十一年卯月三日
道輝
親家

道輝

(花押)

七二四 大友義統書扶案

○大友家文書錄
大友家史料三三

先書如申候、率津江山加勢之儀、不可有□□□□□□
中、無油斷以支度、馳走肝要之段、一一一、遠其節之由、
乍案中祝賀候、亦無懸意被申□□□、殊津江山城守書狀、
具令披見候、既如此申□□□□□□□□□□□□
猶軍々可申候、恐々謹言、
六月十六日
義統 (有例)

魚返伊以入道殿

小田式部少輔殿

七二五 田原親家書狀

○大友家書
○大友家書三五

折陳軍方神妙候、就中於佐野切寄、依膝手被疾、粉竹之趣、
聊雖非忘却候、當時別地等依無之、不顯其志候事、心外候、
然若來秋出張之儀、別而可動馳走事、忠一候、必追而可
買之條、能々可得其意候、恐々謹言

六月廿四日

森木上助殿

親家(花押)

七二六 田原親家書狀

○大友家書
○大分縣史料三五

敷度出張之刻、軍勞感入候、就中於佐野切寄膝下、被靴
之次第、無比頓候、殊去年[○]美[○]族俵表免向、打続粉骨之趣、非
忘却候、相応之期地依無之、不顯其志候事、心外候、然若
去伏御出勢之儀、細數被仰候候、誠辛勞難無尽期候、以
外過分馳走、別而可動馳走事、可為此節候、必追而可買
之條、可被得其意候、恐々謹言

六月廿四日

親家(花押)

七二七 田原親家書狀

○大友家書
○大分縣史料三五

敷度出張之刻、軍勞感入候、就中於時枝佐野、膝手次第、

無比頓候、殊去年[○]美[○]族俵表免向、打続粉骨之趣、非
忘却候、相応之期地依無之、不顯其志候事、心外候、然若
去伏御出勢之儀、細數被仰候候、誠辛勞難無尽期候、以
外過分馳走、別而可動馳走事、可為此節候、必追而可買
之條、可被得其意候、恐々謹言

六月廿四日
湯部右近允殿
親家(花押)

七二八 大友家文書録綱文

○大友家文書録
○大友家書三五

義統、賞柴田礼能[○]、從宗滿助忠功、准門軍、免著者
業較、以授置、又賞財津久右衛門尉戰死[○]、授感贈
於其子千松、又與善于四日市切寄上[○]、授感贈忠候命事、

七二九 大友義統書狀

○大友家文書録
○大友家書三五

別而、忠意之次第、度々申出候、
著、当切寄商元人請方往之刻、請[○]、
前々免許之趣、今以無相違候、為存[○]、
大正十二年
十一月廿八日
森統(花押)

七三〇 田原紹忠・田原親盛運寄奉書

○大友家文書
○大友家書三五

為折々軍方之御感、当切寄商元人方々往反之刻、諸公事
請点段等之儀、永代被成、御免許之由、以御書被仰出候、
无珍重候、於何方々、先立此旨可有沙汰事肝要候、恐々
謹言、
大正十二年
十一月三日
親盛(花押)
紹忠(花押)

四日市切寄業中

七三一 大友府蘭書狀

○大友家文書
○大友家書三五

追而申候、日田へ遣雪被差置之由候、弓筋方者勢劣覚
第一にて候間、あはれ、秋月向良山へ一行仕候へ
か、何さま日田より差合、悉討果、弓筋之明瞭候
するなと、境日へ聞えわたり候やうに、御武者専
一存候、無申送候へる、かやうなる才覚、遣雪并坂
本道州なとへハ、折々密通可然存候、猶々從日州此
同時來露婦之由候、彼申表も從方々到來同前之條、
定而仕持可被申候、傍御通断有間敷候、
急度以飛脚申候、夜前保戸又從余方も知到来矣、上持
事露州へ罷越候候、必定にて候、就夫海防道路等相留
候之條、及元元船之者、荷物以下少々日州へ檢置やう
下候て、俄罷傳之由候、諸州衆者悉陣立之儀、海陸共
不怠便之由候、子細者從秋月、龍造寺使を付置、申分
者、豊州衆皆々帰陣候、高良山へハ小人数にて在陣候
之條、以一行弓箭之根付を可仕との申事、付而、出勢
之由候、愚老存候ハ、今度宗運加入運者、肥州之儀も

多分当方へ心を寄る申中候、彼何と候ても露頭候する間、薩衆肥後表、ハ難取出候、又海上之行にて候ハ、肥前表でらひあたり、可為着津候、それハ昨日今日露頭計果候之間、薩摩衆も氣をゆるしかく候、衆々如申候、秋月合として、ハ、宇口村、佐伯又者諸々の行なつてハ仕聞數候、於今令、破口眼前迄にて候、

一 至宇口村、前日道御罷越、切寄所柄等被口合、雖而場庄候、是者自然之為を存申合候へ共、火忍之到来候之衆、油断候てハ以外之儀、半辛勞道陣事不口被差遣、於宇口越年候や二能々御入魂可然候、如存知道理事者、女房衆同心なつてハ、在村も成聞候儀之衆、此度者夫婦同前、被差越候て能候する哉、道陣與之儀を、從大慶中頼相留候様聞及候、それも可依事候、國家乃にて候間、義統に分別被申理肝要ニ候、道陣へハ從此方も、可令入魂かと存候、

一 京藤道陣事、新五郎同前、白竹留守ニ殿被差遣肝要之通、教度申談、被得其意之由候つる處、結句日田へ被差遣候歟、兼日之約諾も更不令旨尾候之間、笑止十万候、如今者口村其外東口之事者、可被差遣覺悟候哉、白竹へ子共難居候之事者、口村之者調成令存候之衆、不慮之行をも心懸候するかと存候、彼条付而者、愚老後慮之儀、始中終難者候、差同儀斗、被入性候、是も尤にてハ候へ共、前後之得失無思惟候事、無是非存斗候、愚老折々令申候儀、於今者可合宜候、相構而々々御油断候て、此表以外ニ成行候者、其表之行留而成立申申し候、大綱之御節かと存候、右ニ申候返候事、一題も早々可被差遣候、日田へ道守出郡之申候之衆、旁以被差遣思、候、かやうなる候なり共、留守へ被差遣可然存候、

一 折々如申候、佐伯表第一之事ニ候、是又高行在番ニ付向、

人数被差遣候、被擧げて候衆者、加勢をこそ可被申付候之儀、結句所之人數ニハ、如此候ハ、一人あやうく存候、何とか急ニ被差遣候てハ、笑止迄にて候、次柴田社農事、其元ハ、無余儀用等候者、不及申候、少々之儀候者、急度被差遣候へく候、一人なり共足腰立たる仁にて候間、申事ニ候、旁油断候てハ、悪事ほどちかく候する哉と存候、義統としても前後之才兇華成段令被差遣、かやうニ申候事も心存候へハ、爰元之儀從違方并位難有之候、他因よりハ吾國と申候之間、因茲輕重之思案も可人候哉、毎事賢察之前候、猶五々可申候、恐々謹言、

十二月廿四日 府内(花押) 一義統より 中給へ 府前

○大友松野文書(大分県史料 五七)ニ同文ノ文アリ。

七三二 大友家文書録綱文

○大友家文書録 大分県史料 三

乙酉正月二下日、義統遣日田郡士二千、[○]為檢使、攻秋月池并針日茶、佐藤山口、

七三三 佐藤孫左衛門口上書写

○備註史料 大分県史料 二〇三

一天正十二年、正月廿日、就後日田郡御針日城ニ免向之事、 御給者 白竹美濃守

佐藤山城守

都合人数三千、[○]書

右御拜被成候間、大方申上候、遣々の儀口上可申上候、之外二も罷御座候得共、御申分申上候、巴上、寛永八年十一月廿四日 佐藤孫左衛門口上書写

左京様

此書ハ大友左京殿御指出書ト見ゆ、鶴崎吉岡氏成書申写、右之古書御八込々集写せしものを一問となしめ、天保六年乙未二月 頼田

七三四 大友家文書録綱文

○大友家文書録 大分県史料 三

義統

開尊前州上羽田統秀有罪、召府内、使搦于萬中守藤貞及口井六左衛門尉、簡藤又右衛門尉統門討殺之、藤貞為之死、義統使鎌貞弟垣手淺江守鎮貞為之嗣、以守並石城、入府、

七三五 大友府前書状

○備註史料 大分県史料 二五

大分郡東穂田村

大友宗麟書状、[○]備註史料 大分県史料 二五

猶々「」用件毎日進取之山候、敵方之痛不可過之候、度々如申候、其表之儀、行之淺深、前後之心仕

為言信傳、并水鳥、折斷給候。御丁掌之儀祝若候、然者阿蘇日変化付而、前日之時分者、諸塚無差棟候、海陸打廻等申付、無油所加下知候之衆、近日者取相納候、縦於平日惡党羽形候共、引入切所可討果之段、至義統陣所申談、詞儀半候、都衆之儀、時枝境立在陣之由候、幸勞察存候、御馳走書一候、御重々可申候、恐々謹言、
九月十九日
佐田因幡守殿
府禮(花押)

七四〇 上井覚兼日記

一 十四日、地藏菩薩へ別所祈念仕候、明日於隱庄戰場、大施儀如御住例可被成ため、福昌寺東堂御越也、使者にて、御若口出申候也、其御住被成候所々之衆、礼義也、日待可、總持寺・高林寺・法化院等・妙谷寺、此外受儀之家僧達也、御茶・酒肴など被持來候也、路々三御酒参会申候、福昌寺東堂様も、御宿へ御礼とて來儀被成、御茶など被下候也、御合尺如常、此日、是再御宿にて談合也、福昌寺御宿へ秘書御前前參候、御酒進上申候也、良久御開談にて御酒也、此婦さ、秘書御宿へ可参由候て参儀、御振舞也、秋月・龍・筑使者、秘書へ御礼二被參候、先、武庫様へ進上物酒候、秋月より馬・太刀・籠上太刀、織物、筑紫より太刀、百疋、兼文野丸郎、高良山本之原主より使番形上も、秘書即見參被成候、御宿へも礼表之由承候、明日被來候へ、其次を以御酒寄合候する由、御宿にて申候也、何と様にも分別次第之返事也、此日、奈須彈正忠、計策を以死人のこつくやつれさせ、内之者を畏後へ指通

候、彼者佛來候とて、飯野之衆被相引被來候、愚者、義統當時、小園辨へ股被引、城誘其外此現行、用心之体之由也、阿蘇家へも被御組之由聞得候、然者甲斐大和守此方へ遷越候、此婦を待居候て、一行之中申儀に候、是非以後者之事、受元へ御留被成候ハ、何事有ましき由共也、

七四一 上井覚兼日記

一 十四日、忠儀へ可参之由候間、其分には、吉利殿、拙者也、奥にて寄合被成候、此日、於殿中御談合也、新納武州より昨日書狀到來候、豊後兩郡入田方卒々候て、五六ヶ年已前、又人友殿被召直候、併須知等如本に黒之候故、此度此方へ申入、可敷意務金候處、豊後より被取懸候故、ゆる木と云成取情、入田方一類六千程納儀之由、坂栗より計進仕由也、一定此儀にて候ハ、御免足も可有候、先々諸方、統之志可被強之旨候て、細文被認候也、南林寺東堂殿中へ御參候、客殿作之談合共也、此晚、御宿にて各々寄合申候、客居吉利殿・町出封守殿・上原長内守・本出刑部少輔・庄居忠棟・吉田美作守・拙者、伊知地越守也、此夜、珠長・可丹・木田信州被來、深行て開談也、一丁大夫來候て、小唄などにて酒宴也、

七四二 上井覚兼日記

一 十五日、隠居日儀之衆打立せ候、從所取被越中守、勝日但馬守申付違候、吉等守者、鳴海舍人助、梶山佐

藤兩人相付候也、從所肥前人被來候、上原長州伝言共候、季承候て、彼來へ御酒寄合、禮而、可被打立由申候也、從所加尾、甲斐長門入道宗規處より使寄遣候、即使他へ見參申候、山臥也、書面者、高森入道、心故、新武州を始として、各後給へ返向、即時討伐被成候、宗規も難出候由也、殊高森入道、高知尾來討取山也、敵ハ切捨にて候間、數不分明候、併一處三頭二口計見申る由、使物物語也、次二處後之志賀源孫、頃動氣にて、廻任城方へ隠住候、然者入田方同前にて、無異儀由共也、從受後、年頭之礼衆多々候、皆々酒肴持來也、

七四三 上井覚兼日記

一 十六日、鹿兒島へ參上之為打立、籠延下候刻、從高知尾使者到來之由候間、中村内藏助延二罷居、様体承候、入田宗和より使者、署名字之方被來候、其案内者、高知尾役人衆より、田那渡上水正親指添候、愚者、志賀源孫と申ハ、道輝之息にて候、彼人頃義統被召仕候一之対を盜取、指添被申儀、就夫、慮外之由候て助氣被問、背逆と云處三罷居之体候、然者、入田方と一味之由候、尚存申御行有之者、豊後之事可歸罪案汚事、程有間敷由也、不限石之仁、國衆儀々区々罷成、無正体之由也、即使者三見參申、御酒寄合候、開談共也、豊國中檢問寫被持來、愛後之為体など、委口能也、拙者背伏道益へ違候て可然之由、高儀被申候案、即認置候也、其趣、彌未申候候、令侍候、仍去年已來、入田宗和、到当拜被仰合下細共候、然、然、頃御一致之御家、肝心令存候、各名御存知、豊隆和平之事、京都御殿介故

候、然二旧冬以降、從大友殿討当家連日懸然候、殊更於旧衣度々鎧裝被成候、此上者、返答之防視不可有異候、其御入魂所仰候申中候也、高知尾役人衆之返答、相成申候、馬原右近大夫より、今春之慶書并替答預候、是も相成二返書仕候、入田方便編方へ、編助一遠候、田那邊方へ、喉痛 遠候也、從大、兩使者被脇候間、拙者も打立、田那にて長崎坊處へ留候、少少種々會尺共也、

七四四 大友家文書録綱文

大友家文書録 大分県史料三

二月、義統開秋月種美親後、進發日出郡、屯財津、先鋒安多人勝大夫領基・清田氏・坂本治烈・財津了簡・大塚徹秋月兵於大井河内、種美使大山源左衛門尉・勝木氏等留守於針江、高尾兩懸留候、而身口引兵候、而後直烈與其伯父坂本紹玄相謀、誘針江上石井修次郎、授銀一貫目、令之兼夜開其門鎖、而直烈・紹玄先登、我兵進支障壞、翌日高尾塚亦陥、既而義統凱旋、

七四五 田原紹忠感状

田原紹忠感状 厚禮訂三編平太左史料七

前大時枝懸候、當切寄口近相詰候間、最前懸合、別面被助申勞、利郎從座三敵一人仕臥之由、感況候、必一種可賀之趣、原況石衛門大夫可申候、恐々謹言、

二月廿一日 紹忠(花押) 元重兵部承胤

七四六 上井覚兼日記

廿三日、雨不降候間、大宮司處へ然と罷居候、從左後酒吞名と到米候、各寄合懸候也、終日暮にて候、此晚、從宮崎申來候、佐上原より、高知尾よりの書状御持せ被成候、人持來候、即披見候、先日迄進、去十八日、志賀、入田へ、豊衆同意以可取懸儀之候、然者、高知尾來、彼方へ即刻可罷候候、高知尾へ、此方より番衆可指諭之由也、

七四七 上井覚兼日記

四日、從鹿兒島則都米候間、平家語せ承候、二日正遠候也、此日、從鹿兒島、有川雅樂助殿書状來候、應、先刻高知尾よりの書進申上候、即鹿兒島・八城へ申渡候、二被仰感候、左右方之記書、披見申、分別可申由候、持せ也、鹿よりの書状ハ、他方へ番衆被指諭事ハ、不怪儀候、中書・忠輝・拙者へ、能々御談合候て可然候之由也、忠輝書状ハ、從彼方番衆懸候ハ、被指遣候て可然候、先々寄々之衆可然懸候、御行も枉有間敷候間、番衆被指遣候ハ、肝要之由也、有川殿へ拙者返事之趣、而方之書状、委員出得其心候、先日高知尾より被申候ハ、志賀、入田へ軍儀來取懸由候、左候ハ、高知尾來後見候として可懸候間、跡之番懸由候、然者、未嘗取懸たることハ不聞得候間、今少可承合候、若々替儀候ハ、中書、御談合申、分別可申候、可安御心之由申候也、

七四八 田原親盛感状

田原親盛感状 厚禮訂三編平太左史料七

時枝衣内徒等、節々現形之由候間、寄々之衆被相誅、別而被助申勞肝要之段、令申候キ、然延徳弘村中之仁、無被馳走之通感候、何様一様可賀之趣、先々從鎖道御心得事、候、恐々謹言、

六月八日 中山左近助殿御宿所 親盛(花押)

七四九 上井覚兼日記

廿四日、興神寺・柏原方早朝被打立候也、此日、鎌田源左衛門尉にて、鎌雲州へ内談申候趣、佐土原にて如出合、兩使御座元へ御進上候、日出候、吾々其後思業申候にも、入田御見欠無之候ハ、外聞安儀差止に候、殊中書公其御下・雲州・我々、旧冬已米申符候、自然被身体減却候てハ、迷惑之儀候、雲州猶得候ハ、中書へ御内談共候て、楚忽三当因來までにて、梅口へ被召懸候てハ如何候する哉、内談申由申候也、

七五〇 上井覚兼日記

十六日、鹿兒島談儀所之御座候、諒方之座へ御祝

言三御參成候として、拙指御尋被成候、酒肴・御米被下候、被着候上其承候也、此日、伊地知勘解由左衛門尉殿を以、上意之趣、昨日筑表御陳より、大口島雲寺を以、各御申被成候、岩屋・宝洞・属、御寮中候立花之事、于今相支候へ共、當時之懸引候、其上立花之城、朝二候、此内二罷居候物、所願さへ被下候ハ、統虎事を打果、御幕下二可參申候、然者、此意可然思召候ハ、典御御登可有候、其時御行可有出候、如此其候ハ、彼表御願忍二可明存候、左候ハ、忠長・忠隆其外諸軍、如境百真二可被參候、爰元ハ、御高殿様御談合次第、豊後人之御分別可日出候、日州來も此方へ罷居候する來者、由二此口より豊人たるへく候、日州へ居候衆ハ、中書被召烈、隈口たるへく候、由被申上候、就夫、昨日、爰元へ被罷居候談合衆被召寄、御談合候キ、拙者ハ気分差出候て、無其義候間、委被仰聞せ候、御進事之趣ハ、立花之事、計策之義共候談、併、其忠儀之者向人へ所願被下候するを、只統虎へ被遣候、降参さへ申候ハ、順路三御校並肝要三被思召候、其故ハ、日今違々之御引前二候衆、聊も逆義ハ可差由被仰候、又豊後人之事、爰元へ罷居候衆も、此節可然之中申候事ハ、同前候、併、能々御談合可入被思召候処、忠長・忠隆直三郎日へ可被指寄出、御得心無之候、是非共此方へ參上候て可然、被思召候、又日州來爰元へ居合候衆者、此口之由被申候、是も無御得心候、其故ハ、主人者別方、手之者ハ別方ニ下候、不可然候、地頭ハ別方、衆中ハ手之者も諸語之下等事成間敷候、然者、春己米知御談合、太守様ハ日州口へ可為、御進寄御地候、拙者其覚悟申候て可然、被思召候、御談合之時も、是非共、太守様者、日州口へ御參足可日出由申候て可然被、思召候、是者、

御内義之由也、然者、朝日口と説覽、梅口二候之歟、是を攻させられく被、思召候、足又拙者、入魂申候て肝要之由共也、昨日御談合二可罷出之由被つれ共、宛未だ然々候て、無其義候、已細被仰聞候、奉参存候、殊矣、日州口へ、御參足御所好之由、一段日出候、諸拙者人魂之儀、緩有間敷之通、中上候也、蒲池殿より、使書并袍衣一預候、今度參陣之刻、御行前にて無沙汰候、殊更致軍勞、就をかふり候、併不備之由日出通、承候也、遠方まで使書到来、祝至玉被候由、返事申候也、

七五二 上井覺兼日記

御内義之由也、然者、朝日口と説覽、梅口二候之歟、是を攻させられく被、思召候、足又拙者、入魂申候て肝要之由共也、昨日御談合二可罷出之由被つれ共、宛未だ然々候て、無其義候、已細被仰聞候、奉参存候、殊矣、日州口へ、御參足御所好之由、一段日出候、諸拙者人魂之儀、緩有間敷之通、中上候也、蒲池殿より、使書并袍衣一預候、今度參陣之刻、御行前にて無沙汰候、殊更致軍勞、就をかふり候、併不備之由日出通、承候也、遠方まで使書到来、祝至玉被候由、返事申候也、

九月廿一日之書候、今日三日、於京都被見候、一筑紫七、居城取返候由、由越候、尤之仕合候、右仕立懸敷様三相聞候、今度、被居城之手に人、忠節あるべき由、尤候、念を入、人数、兵旗、玉葉以下、安國寺與合談合可然様、可申付候事、

龍運寺、色を立候ハ、丈夫に、人質以下、於相と者、元春、隆景、渡海尤候、輝元者、門司之要害へ、有登城ちかき城を、手寄にまかせ、被取合、可然候、島津軍とせる儀、有間敷候と、思召候、其子細者、今度、島津相動候間、やせ城二三ヶ所、以調御百萬、星野を入置、其動を島津、存分の様相心得、遣候、從立花罷出、星野も候城、乘間、尾野初、不残別百候は、島津、筑紫九ヶ所を治る上りも、立花左近將監には、向日之至候か、又島津、ろくひ付なる動をいたし、泉野か別首させ候事は、島津、口矢面日候儀、又ハ、心中之程、相見互候間、武藏かなさせは、有間敷候、一毛利日身、被出見、一塵無之候ては、如何候衆、聞戸をこされ、手寄可然候、何之敵城成共、被取合越年候ても、可被相果候儀、尤候事、

一兵隊於有之者、初龍運寺、敵方何之城も、可託可、命察候、其子細者、敵者、出書成間敷候て、春へ成候ハ、

上方之諸勢、町下候者、何之敵、百姓以下にみたるまで、さけすみを可仕事。

城を取候儀ハ、長留我部、千石備兵衛尉、向人方へも、人を切々遣、能々、可相談候。権兵衛尉事、めうけんへ、可相移山、被御遣候。左様候得者、程近禁衛、諸事、無越度様、可逐相談事。

城を取候儀共敵者、後迄、有閑敷と、被思召候得共、敵發悉に可越道に、敵を可討候。四も五もかなわの、ことごと相拒、人数を入置、敵城を中に取こめ候ハ、敵五方と取こめて、二万五千有之共不苦候。日比、秀貞、城々を御取卷の千立、敵を講候。城を、不取卷さきに相拒、人数を入置、其うしろにて、取巻候事、得物にて候。大敵を相手にいたし、数度御本意有之事候間、其行等、向川、柳元へも、申候て、右之分、可然候事。

右馬頭、其表に、長陣候間、越年はあらは、島津事も、さすまへ引入儀無之、中途につりとめられ越年いたすへき儀者、案内候事。

敵味方、春に成候ハ、くたひれ候て、大あくび有之而、可合速次候延へ、段々に被遣人数、被出御馬候者、被悪逆人は、ひとりころひを、いたすべく候。手間不入に、一人も不相候、可御百儀儀、手にとらせらる、やう、被思召候。片時もはやく、年の暮にも成、春を待かね候者、被得其心、可然之由、可申談候事。

兵相玉葉、さしつ次第に、弥、ふねを被捕、重而、当年中に、追々、可被遣來年之ために候間、兵根く一應、可被仰届候。二万石も、三万石も、人候様、蔵以下、可申付儀、専用候。其蔵次第に、御兵根、可被遣候事。

小西彌九郎に、さき兵根を、被遣候ハ、兵根と申ハ、

家のばを取候物にて候之間、能々さけすみ、彌九郎船次第、追々、御兵根、可被遣候。其心儀、専用候事。

一、種元隆兵衛、元春、人数、長陣をいたし、兵根相さる、候儀ハ、可申越候。其すまきを、見、兵根を、各にも、可被遣候事。

石条數、何も、令得心、可申付事、専用候。諸事、無越度、分別无候也。

安、因、寺、黒田、期解由とのへ、宮木、石兵衛入道とのへ、

前、王子佐郡合著陣候之処、早、示給候。被添心候儀祝著候然者、千石秀久申談、此表之儀、過手、測運候。雖然能々可申付、覚悟候。馳遣在候、必可直陣候之矣。於方角者、可預馳走事肝要候、恐不謹言。

北里次郎左衛門尉殿、

七五四 上井寛兼日記

一、八日、弘慶御粥參候間、雖而、越二御立候、我々ハ沈静哉、御跡より參候。此朝も、越願御々候。乍去、七八留候也。従大、直三御粥之由候つれ共、川之木鳥など、御供申候て見申候。又京治之石塔など、懸御

日候、色々々々さき申候て、又大歳赤延にて、御公尺申候。御座來、大駒夕之衆也。衆中又地下來など、御酒進上候。未之刻計まで御酒宴共也。従夫、御掃被成候也。從其儀候にて候、大歳赤延にて承候。相立意趣被聞候。去四日、志賀道線前より、あかの村二龍居候矢野内藏助と申者まで被申越候ハ、一持取事、先年之遺恨深重ニ被らん。然共、今度ハ京都より加勢共候、左衛、八、天下之百前二龍居成候間、是非以分別入り候申候。今、被御頭儀、即掃者まで被御先也。通押より被申越候、且被御頭儀、肝要ニ候。由々、あなたより申旨ニ、何と様にも任られ、京都見次之休、又ハ、後國中様子等被聞被候て、可然申中候也。右記にも千船儀兵衛二百程にて來候、高崎辺三層申中候、長留我部、是も、二百計にて、にうの嶋ニ在申候。召烈候衆も、兵共等然々不密、商人など様之、無分者と聞得候由也。又去月合之比、本々、此之者にて候。此間候へ罷居、頭又落來候。其説にも同前候。愚下々ハ、加勢之休息候て、請句頼分存出申候也。此晚、越二御立候てより、城之様ニ罷候也。衆中十八計同心申候。

七五五 豊臣秀吉御内書

九月廿八日之書状、十月二日之書状、今日、同時到來被見候。婿元、隆兵衛、元春被越越戸付間、長野色を立、出人買候由申候候。並山田、廣津、中八屋、時快、宮成、出人買、城々へ入大敵候出可候候。於此上、何も辨察之者共、島津行之儀を被相尋、以其分別可候候。併儀後と肥後之圖被取候。宗満義統と有誤會、長留我部、石右

權兵衛尉、千二陣取已下、手解く被申付、敵後巻可越候道筋に城を損、其覚悟有之、其上三河何之城成共被取巻、仕寄已下可被申付義勇安候、於取巻ハ兵頼つめか、仕寄下之場をうめ候歟、水攻カ、水の手を留候カ、又可成城は被見試、長陣以退屈なく可致候に可相付定候、人数已下人候は、追々可運候、其上越年可有之候衆、春は被出御馬、島津、城ニ被取巻、可被別百儀衆の内と思召候衆、其心得有之、無慮度様諸事分別可有之由、御元ニも此旨申聞、豊後江も右之分可被申候、将又備參之者共見、別紙之儀如書付道候也、

十月十日

小早川左衛門佐とのへ
安 四 寺

黒田勘解由とのへ

七五六 大友義統感状案

○年郭文書
○年郭文書
○年郭文書
○年郭文書

今度尚岩城番之儀申候処、至遠方長々預馳走候、祝者候候、結局妙見岳在城之上里日在陣之中、乍中感候候、親盛若輩之儀候之衆、情當威壓臣才之責、別而頼入候、取鎮一様可買申之趣、猶河野肥前入道可申候、恐々謹言、

十月十一日
佐田因幡守殿

七五七 山北統周知行預ケ状

○年郭文書
○年郭文書
○年郭文書

其方事、速々以貞心之覚悟、夜白被抽幸方候、然者御弓筋成立付而、松平礼下城之御、無別無同心感入候之衆、為其實欲殊郡之内、引地村役繼并九ヶ所付付、以別紙預進之候、弥重頼本公專一候、為存加候、恐々謹言、

天正拾四年丙
十月廿八日

野原久内九段

被周 (花押)

七五八 大友義統感状案

○前田忠左衛門文書
○前田忠左衛門文書

至利光感前入道要害、登城之儀申候候、即差候之由候、殊前引人、悪克取懸候之刻、速一成分捕高名之段、岐部左近大夫申候、心懸之儀感入候、弥而役人被申論、可被勸忠儀事專一候、猶重々可申候、恐々謹言、

十月卅日

岡部佐渡守殿

義統 判

七五九 大友家文書録綱文

○大友家文書録
○大友家文書録

○萬津家久○日向向越梓山、入○御後向宇目○築出紹安板○帥手兵出朝日岳城、國家久、紹安願○野津院士等驚欲叩之、而不成、遂不獲申去城、携上り山要書、家久使紹安附兵、居井田・尼船里、於其子柴田左京亮所樂、足河塞、亦入兵守之、取朝日岳城、使上持三郎親信守之、親信故十持親成子也、親成爲宗滿被誅之時、親信逃、依

義久、及義久向日向、使親信復出領、今也爲家久之死讎、至此、家久進、至三章郡、陣松尾山、

七六〇 大友家文書録綱文

○大友家文書録
○大友家文書録

○野津院若部大七、及築田紹安板、分兵築王子山、岩瀬渡、宿野隊長白浪別防守、尾相伊勢守等守王子山、廣田大勝亮、彈正忠、内右衛門尉、新介、志右衛門尉、白井内記、掃部助、又兵衛尉、堀長部系、華人九、井上左馬助、兵介、吉良宗伯、伝右衛門尉、岩屋迫景、津守等、遊擊却之、既而廣山等、去王子山、屯陣戸、又白浪等、政宗瀬、中村左京進、與右衛門尉、善因部、築田大藏丞、利光宗玄、久土地刑部系、義殿助、奈須右馬助、土屋上親助、竹中飛騨守、荒瀬華人九、二樂氏陣守等請降、白浪等入其巢、又其後廣田等、擊降兵於留村、殺其隊長鎌田筑後守、又戰於吉岡原、殺丸坂刑部少輔、伊知地丹後守、又攻拔若輩、斬獲許多、

七六一 大友家文書録綱文

○大友家文書録
○大友家文書録

○部方在○有三十六人地土、○佐伯准定、親之、耳忍、地上交之、築巢於柏野、小教、高知地、各分兵挺之、薩摩隊長白浪式部少輔、伊知地民部少輔、川上大炊助及日向高知尾上三井井正利家十郎千余兵來、攻、九藏人、大勝亮守降、又丸田強兵衛尉、矢除彈正忠、小牧良、守兵降、棄兵人相野、小教景、

被遣候、其城へも相罷申出申候、鉄砲兼三百斤、鉛三百斤連之候、河之道にも米春二月比、設下可被進御馬之条、請事無感度候、覚悟可然候、今度其因へ島津令亂入候も、義統を初、別之因へ被相備候、依而、其因之者備謀叛、敵を引人候歟、先志三千石樵兵衛・長宗我部彌二郎被遣候も、其因候、無御心元、依而、為同心、右之依候、若者故他候へ可手懸ために、境口にて相備候、依而敢取出候と被思候、是以後者罷城之体にて、米春可被出御馬を被相付、可然候、当年有無余日候、早米春と申候も、五十日之間にて候条、少成みしきき働有之而、越度候者、其子と孫々まで不相届と可被思行候、可被得其意候也。

秀守、御料
十一月廿日
御料
御料

○大友家野文書、大分県史料、二二巻、二七同文ノ文書アリ。

○吉川家文書、
御料訂正編年大友史料、七

七六六 豊田秀吉書状

豊前守津城、去七月、貞福千余首を被刎、其外男女不残はた物二相かけられ候儀、心知よき次第候、手紙ノ段、無申計候、殊敵方味方中覚と云、御悦者之儀、體尺筆紙、被思召候、時分納、下々者、長陣之段、被備思召候条、當年も、御馬を可被出、被御出候、春迄可相思召、安国寺、渡邊石見守、黒田勘解由を以、言上候条、被任異見、当年者、不被出御馬候故、無心木、被思召候間、来春者、其方へ無御、早々可被出御馬候条、被得其意先候、其刻以御忠不被相立、高名以下きむ候儀、御妻美

可右之候之間、各、此旨申馳渡候へも、則條須賀阿波守、脇坂中務少輔、加藤左馬助、其外人數都合書方四五千差遣候也、

吉川治部少輔とのへ
吉川駿河守とのへ
十一月廿日
花押

七六八 大友義統書状案

今度平高崎、令登城、別而幸劣、殊者謂等之候、預馳元之田、祝者深重候、跡無御断、覺治肝要候、猶田原近江入道可申候、恐々謹可、
十一月廿一日
義統、直判

○大友家文書、
大分県史料三三

七六九 豊田秀吉書状

其表敵未最前所に、在陣候哉、様方切々可申越候、然者うすきへ兵糧加勢已下、丈夫に差罷、尤二候、当年之間も冊口被出御馬も、四五十日之事、殊に人数追々被遣之間、今迄所、其儘陣取有之候而、味方中無越度様、諸事手堅く可被申付候事、肝要候、自然不出御馬前、越度候は、可右曲事候之間、得其意、ト々迄可被申付候也、
十一月廿二日
仙石権兵衛とのへ
花押

○豊田家文書、
御料訂正編年大友史料、七

七七〇 大友家文書録綱文

○十五日、馬津家久、陣大塔築尾山、遣兵、〇視橋城、城主利光宗魚、逆撃、應九十六人、〇二十日、伊集院忠棟有軍事之用、白佐賢圓乘船、毎日向、志願在、〇〇日、州、御事、
大友家文書録、
大分県史料三三

七七二 大友家文書録綱文

〇十二月、親善道志督掃部助、後継遠江守、貞肥後守、佛一千五百兵、攻柏野、是門山崎兵衛浪城、原辺、親善使中尾伊豆守、國家中坂田、中津野、後原地土、擊部之、〇秀吉遣森兵衛、森八、論軍議於毛利、吉川、小早川、黒田等、且陽内書於宗、論人、其勢、大物方、吉川、

〇四日、佐伯惟定、
大友家文書録、
大分県史料三三

定清高朝新右衛門尉等、攻築田左京亮屋河家、守土音角大膳進、放火、塞閉、左京亮其弟太郎及其母為、從上柴田等意父子、田比彦三郎、赤峯玄番、尤、工部尾家守等皆戦死、築田相安在形頗憂、聞早河故、悲妻子死生、頗有反覆心、薩兵覺、擊殺相安及從士帆足吉次太等、其

〇十二月、親善道志督掃部助、後継遠江守、貞肥後守、佛一千五百兵、攻柏野、是門山崎兵衛浪城、原辺、親善使中尾伊豆守、國家中坂田、中津野、後原地土、擊部之、〇秀吉遣森兵衛、森八、論軍議於毛利、吉川、小早川、黒田等、且陽内書於宗、論人、其勢、大物方、吉川、

〇十二月、親善道志督掃部助、後継遠江守、貞肥後守、佛一千五百兵、攻柏野、是門山崎兵衛浪城、原辺、親善使中尾伊豆守、國家中坂田、中津野、後原地土、擊部之、〇秀吉遣森兵衛、森八、論軍議於毛利、吉川、小早川、黒田等、且陽内書於宗、論人、其勢、大物方、吉川、

〇十二月、親善道志督掃部助、後継遠江守、貞肥後守、佛一千五百兵、攻柏野、是門山崎兵衛浪城、原辺、親善使中尾伊豆守、國家中坂田、中津野、後原地土、擊部之、〇秀吉遣森兵衛、森八、論軍議於毛利、吉川、小早川、黒田等、且陽内書於宗、論人、其勢、大物方、吉川、

〇十二月、親善道志督掃部助、後継遠江守、貞肥後守、佛一千五百兵、攻柏野、是門山崎兵衛浪城、原辺、親善使中尾伊豆守、國家中坂田、中津野、後原地土、擊部之、〇秀吉遣森兵衛、森八、論軍議於毛利、吉川、小早川、黒田等、且陽内書於宗、論人、其勢、大物方、吉川、

〇十二月、親善道志督掃部助、後継遠江守、貞肥後守、佛一千五百兵、攻柏野、是門山崎兵衛浪城、原辺、親善使中尾伊豆守、國家中坂田、中津野、後原地土、擊部之、〇秀吉遣森兵衛、森八、論軍議於毛利、吉川、小早川、黒田等、且陽内書於宗、論人、其勢、大物方、吉川、

〇十二月、親善道志督掃部助、後継遠江守、貞肥後守、佛一千五百兵、攻柏野、是門山崎兵衛浪城、原辺、親善使中尾伊豆守、國家中坂田、中津野、後原地土、擊部之、〇秀吉遣森兵衛、森八、論軍議於毛利、吉川、小早川、黒田等、且陽内書於宗、論人、其勢、大物方、吉川、

〇十二月、親善道志督掃部助、後継遠江守、貞肥後守、佛一千五百兵、攻柏野、是門山崎兵衛浪城、原辺、親善使中尾伊豆守、國家中坂田、中津野、後原地土、擊部之、〇秀吉遣森兵衛、森八、論軍議於毛利、吉川、小早川、黒田等、且陽内書於宗、論人、其勢、大物方、吉川、

被廻討略候之者、一着不可有程候哉、猶已細之旨、年暮可達之候、恐々謹言、

十一月廿四日

義久(花押)

入田行俊(人込殿)

○了(内)文書(八)入(内)西(取)文書(一)及(合)。(一)内(六)同書。

七七一 大友義統感状

○藩方文書
大分県史料二

昨日廿二、至当城薩摩之悪党被逐候之処、鎮勝別面依被勸粉骨、各事我尽軍方、分捕高名之由、忠候之次第、感入候、弥可抽馳走事、可為喜悅候、必被鎮、至鎮勝一獲可賀之候、恐々謹言、

十一月廿四日

義統(花押)

帶刀玄内允殿

七七八 大友義統感状

○藩方文書
大分県史料二

昨日廿三、至当城薩摩之悪党被逐候之処、鎮勝別面依被勸粉骨、各事我尽軍身、分捕高名之由候、忠候之次第、感入候、弥可抽馳走事、可為喜悅候、必被鎮、至鎮勝一獲可賀候、恐々謹言、

十一月廿四日

義統(花押)

堀與次郎殿

七七九 豊臣秀吉書状案

○豊田文書
増訂正徳年大友史料七

去十二日津邊、昨日二十六日、於大阪筑末、披見候、野中家來情被感候、大丸城責崩、數口人討果、則首軍上候、尤無比被感感思行候、雖若輩候、入精候故、早速令誅、伐候儀、神妙候、為御褒美、御秘藏之御馬被下候案、可成其意候也、

十一月十七日

秀吉

黒田吉兵衛とのへ

七八〇 豊臣秀吉朱印状

○藩方文書
増訂正徳年大友史料三

去る廿一日之、一書、今日兩日到來披見候、其表つなきの城は丈火、守付候由、可然候、龍王妙見兩城、王業差籠通尤候、秋月軍免角見合候は、不可許容候、殿下出馬上は不可被免候、度々如申遣、正月十五日より諸勢差遣、期被出御馬候間、城々丈火に申付、御勤座可相付候、預人數出候共、此方より被出働候事無用候、聊無越度様可申付事切一候、此由罷差寺へ可申遣候、今少之間聊爾之働無之様察可申付候也、

十一月十五日

(朱印)

安 岡 寺
黒田勤解出殿

七八一 毛利輝元書状案

○井原縣長西文書
萩藩同文書一

質本語口丈火之由尤可然候、御方別面御心遣之由祝書候條内來被立用出候、心願之至候、弥不可有後候、恐々謹言、

十一月廿二日

有馬輝元 切符

非 四兵衛

七八二 大友義統感状案

○大友家文書
増訂正徳年大友史料七

前廿七、至角牟礼、薩摩之悪党取逐候處、淡防戦、分捕高名之由候、感入候、弥可抽馳走事、肝要候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

十一月廿四日

義統(花押)

森玄番允殿

七八三 大友家文書録綱文

○大友家文書
増訂正徳年大友史料七

古後撰津守元孫、森若狹人道文書、其子玄番允、森五郎左衛門尉、魚延伊入道、魚延内少輔、魚延民部丞、太田九郎守、中島主殿助等、提致珠露角半十城、坂本氏、勝津氏等、提目出郡城、古弘嘉兵衛尉統率、提國東郡原山城、各排戦不逞勝致○島津義弘隊長、坂瀬豊前守、攻駄原細雲、志賀親善子城、而朝會一玄所守也、一玄兼夜去城、提其並管治置跡、而燒駄原屋、坂瀬屯其城地、二、十二日、親善遣早速掃部助、後藤忠江守、大森彈正忠、帥十五百兵援一玄、而攻彼駄原通、後藤人学助、斬殺坂

漸及新獲許多○二十四日、義弘隊長、白坂石見守帥數百兵、攻藤原日暹、志實親善子城、而阿南二石衛尉惟秀所守也、惟秀偽降白坂、入其壘、惟秀守梯手、而密通謀於親善、二十七日、親善遣中尾伊豆守、大森彈正忠忠等、帥子七百兵攻桑原口、先降後藤兼光守、放砲矢口坂山裏、接戰惟秀放火於壘、原田伊賀守入與兼光、白坂遂收逃、至老戶口惟秀等追擊之、親善遣佐藤右京進為援、佐藤至老戶口、乃接白坂下斬之、其餘降兵悉殺死、於是親善告駭原暹、藤原日暹所戰攻、于秀吉。

七八四 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分縣史料三五

一〇三日、在次珠部降兵、攻角半札城、城兵○藤原秋入一〇春・其子玄蕃允・志津判治部丞・魚返伊豆入道・魚返民部丞・中嶋上殿助等擊却之、森玄蕃允戰死、兼春僕從清十郎被創○二十四日、魚返宮内少輔欲入角半札城、義統命之與森五郎左衛門尉・古後津津守・太田九郎等、該軍中、○義統授于大津御舍人允・荒木治右衛門尉・小佐井家委千世・手嶋石京光・梅月内右衛門尉・渡辺藤兵衛尉・片山越後守・魚返宮内少輔・森養春・堤新介人・道・若林八郎・若林越後入道等感頌、

七八五 豐臣秀吉書狀案

○寶文書
熊本縣史料中冊一

今度千石權兵衛尉依不屈動、不慮無是非次第候、然處其城堅固、相踏候旨、忠儀神妙候、先勢迫々被差遣候、

頓而救出御馬、嶋津事、可被別首之殺、不可移時日之案、
志實太郎とのへ
正月二日
御面拜

七八六 豐臣秀吉朱印狀案

○大友家文書録
大分縣史料一三

今度千石權兵衛尉不慮之仕合、無是非次第候、然處其城堅固相抱之由、尤神妙之至候、先勢迫々被差遣候、頓而救出、御馬、嶋津事可被別首殺、不可「」日候案、今少之間、丈夫之冠捨母一候也、
御朱印

七八七 豐臣秀吉書狀案

○大友家文書録
大分縣史料一三

今度仙石權兵衛尉於其衣失利候段、曲事候、別爾之働不可然、能々可示合出、重々中間候候、加斷之儀、單是非次第候、弟三郎討死、尤忠節無比類候、然者元親無異儀、白存相抱付而、可入城由宗満言子候、誠丈夫之勇悟、堪感情候、当春早々出馬、嶋津事悉可討果候、其間之儀、殊休庵令相談、堅固之行等一候、猶秀長可申候也、
御判

長曾我部宮内少輔とのへ
正月二日

七八八 大友義統感狀

○寶文書
大分縣史料三五

今度薩摩之惡党、至大神兵部太輔要寄、取懸候之処、其方別而軍勢之由、感候候、弥可助馳走事肝要候、必取領、一様可賀之候、恐々謹言、
義統 (花押)

正月二日
渡辺宮内少輔殿

七八九 大友義統感狀

○渡辺氏文書
大分縣史料三五

今度薩摩之惡党、至大神兵部太輔要寄、取懸候之処、其方別而軍勢之由、感候候、弥可助馳走事肝要候、必取領、一様可賀之候、恐々謹言、
義統 (花押)

七九〇 大友義統感狀

○寶文書
大分縣史料三五

今度薩摩之惡党、至大神兵部太輔要寄、取懸候之処、其方別而軍勢之由、感候候、弥可助馳走事肝要候、必取領、可賀之候、恐々謹言、
義統 (花押)

正月二日
渡辺藤千代殿

七九一 大友家文書録網文

○大友家文書録
大分縣史料三

十二日、我兵擊破兵子切切攻、故之、大津留舍人允、白
□内田主水・荒木治右衛門尉力戦、小佐井義表下、
宮亦得首級○長曾我部元親白目振嶋陣、人口□宗満
○秀吉賜内書於志賀親善、佐伯惟定、命□□

七九二 小早川隆景書状

○大友家文書録
大分縣史料三

尚々、於新庄平康石懸御日候由、要元にて物語候、
御様休等御類候候、何様白是可申込候、
追而御折紙披見候、誠其以來者無音、罷過心外、候、
元春不慮之儀不及言詰次第、於其等案内込候、御力落
之通、是又可為御畏実と察存候、中々於此段者無申込
候、無異儀於致漏聞者、新庄にて懸御日可申水候、
一此表之儀如仰所々傳太利手前如形候処、豊後日節故候
歟、大友方退散、無是非次第候、當時者、此因之端妙
見近辺備士と申帳、義統御共忍候、兵損人数等差籠
見百廿等申談副力申候、上勢下者次第、至彼因被出、
盛州衆と一儀之旨悟迄候、御力欠之ずは枚量難計候、
御察之前候、

一此方尚珍候海苔、込給候、還々御志之段難謝候、恐々
過可、
正月十四日 佐衛門休
隆景 (花押)

七九三 大友義統感状案

○大友家文書録
大分縣史料三

今度薩摩之患覺現付而、因中之者共、少々構未練候之
処、各申談、院内殿被差擲、從前順儀之心懸、聊無要
化候事、乍案中感悅候、殊去、切切寄挂候刻、別而粉
骨之次第、患儀悦入候、弥可助馳走事肝要候、必取頭一
様可買之趣、宗像掃部助可申付、
正月十五日 義統 真判

荒木治右衛門尉殿

七九四 大友義統感状

○大友家文書録
大分縣史料三

今度薩摩之患覺依乱入、因中之者共、少々構未練候処、
各申合、院内殿差擲、從前順儀之心懸、聊無要化候事、
乍案中神妙候、殊去、切切寄挂候之刻、内田主水討留
之山候、為無足、軍旁粉骨之次第、感入候、弥可助馳走事、
肝要候、必取頭、一様可買之趣、宗像掃部助可申候、
恐々謹言、
正月十九日 義統 (花押)

大津留舍人允殿

七九五 大友義統感状

○大友家文書録
大分縣史料三

今度薩摩之患覺依乱入、因中之者共、少々構未練候是、
各申合、院内殿被差擲、從前順儀之心懸、無要化候事、
乍案中神妙候、殊去、切切寄挂候刻、被擲塊之由、為
無足軍旁感入候、必取頭、一様可買之趣、宗像掃部
助可申候、恐々謹言、
正月十六日 義統 (花押)

大津府飛騨守殿

七九六 大友義統書状案

○大友家文書録
大分縣史料三

今度薩摩之患覺依乱入、因中之者共、少々構未練候、從前
前順儀之悟之山、乍案中感悅候、然者切切寄挂候之刻、被官
之者分抽尚名書到、令披見候、軍忠状加補判基之候間、
弥被申進、可助馳走事肝要候、必取頭、一様可買之趣、
宗像掃部助可申候、恐々謹言、
正月十八日 義統 真判

小佐井義安千世殿

七九七 豊臣秀吉朱印状案

○大友家文書録
大分縣史料三

熊家謀候、其城堅固相抱候段、尤以神妙思食候、今月廿
日、廿五日、羽柴八郎初為先發、追々被差遣御人数候、
殿下二月末、二月始、至于豊前衣可被成御勤事、八帶
大善藤井偽候、今廿日、卅日之、丈夫三可相抱候、此
刻無二之實情、誠思儀不淺候、彼逆徒等可被割百果、案

之内候、各可被成御夜候間、城中之者とも申聞、成男、弥堅因可相踏候、兵根次第に軍、被仰付候間、定可至罷候、猶追々可申聞候也、

二月十七日

志賀太郎とのへ

御朱印

七九八 大友義統知行預ケ状

○依正文書
陸奥町正藏年大友史料七

就安元在城之儀、最前以米以忠貞之心懸、折々彼是之馳走、誠頼敷、感悅無様候、仍於郡中捨財分御取之末、預罷候、可有知行候、必關地次第、重々可願其志候、倍可被抽忠節事肝要候、猶年寄共可申候、恐々謹言、

正月廿二日

佐田因幡守殿

義統(花押)

七九九 大友義統書状案

○大友義統書状
大分縣史料三三

到角率社登城之由、肝要候、雖無申送候、森五郎左衛門尉、古後撰守、大印九郎被申談、城内堅固に支候之様、才覚專一候、聊不可有油断之儀候、恐々謹言、

四月

宮内少輔殿

義統(花押)

八〇〇 大友義統感状案

○大友義統書状
大分縣史料三三

○三 陸奥之悪党、至当城取懸之刻、於此甚速防戦、息女幕尤戦死、忠儀之次第感心候、旧冬分捕高名之間、入不便儀候、必至子孫、可願其志懸、猶齋藤紀伊人近可申候、恐々謹言、

正月廿八日

森若狭人近殿

義統(花押)

○(一)西八八〇(一)文書二〇三

八〇一 大友義統感状案

○大友義統書状
大分縣史料三三

前日三 陸奥之悪党、至当城取懸候刻、於岸涯速防戦、自身辞手、小若清十郎被統之由、粉骨之次第感入候、亦可助馳走事、肝要候、必取頭、可賀之之懸、
○三 陸奥之悪党、至当城取懸候刻、於岸涯速防戦、自身辞手、小若清十郎被統之由、粉骨之次第感入候、亦可助馳走事、肝要候、必取頭、可賀之之懸、
○三 陸奥之悪党、至当城取懸候刻、於岸涯速防戦、自身辞手、小若清十郎被統之由、粉骨之次第感入候、亦可助馳走事、肝要候、必取頭、可賀之之懸、

正月廿八日

竹中宮内少輔殿

義統(花押)

八〇二 大友義統感状

○大友義統書状
大分縣史料三三

今度薩摩之悪党、因中へ令現形、既至庄内乱入候之処、遂罷城、用心方普請等、無様之由、乍案中感悅候、休庵任下知、亦可助馳走事、肝要候、必取頭、一棧可賀之候、恐々謹言、

正月廿八日

竹中宮内少輔殿

義統(花押)

八〇三 大友義統感状案

○大友義統書状
大分縣史料三三

今度薩摩之悪党因中へ令現形、至庄内乱入候之処、罷城用心方普請等、無様之由候、乍案中感悅候、休庵任下知、亦可助馳走事肝要候、必取頭、一棧可賀之候、恐々謹言、

正月廿八日

久保右近入道殿

義統(花押)

八〇四 大友義統感状

○大友義統書状
大分縣史料三三

今度薩摩之悪党因中へ令現形、即至庄内乱入候之処、遂罷城、用心方普請以下無様之由、乍案中感入候、休庵任下知、亦可助馳走事肝要候、必取頭可賀之候、恐々謹言、

正月廿八日

財津右衛門尉殿

義統(花押)

八〇五 大友義統感状案

○大友義統書状
大分縣史料三三

今度薩摩之悪党、因中へ令現形、既至庄内乱入候之処、遂罷城、用心方普請等、毎事無様之由、乍案中感入候、休庵任下知、亦可助馳走事肝要候、必取頭、一棧可賀之候、恐々謹言、

正月廿八日

義統(花押)

岡松布藏

八〇六 大友義統感狀案

○大友義統文書四
大分縣史料三三

今度薩摩之悪党、國中へ乱入候之処、吉岡彌二郎以同心、至丹生嶋、遂龍城、毎事馳走之由感入候、必追前可賀之候、恐々謹言。

正月廿八日

義統 判

吉岡實左殿

八〇七 大友義統感狀

○近江守文書
大分縣史料二

今度薩摩之悪党、國中へ現形之刻、於津久見要害、別而辛勞之由、感入候、然者依不慮之成立、至丹生嶋龍城之由、忠貞之心懸、神妙候、必取鎖、一棧可賀之候、恐々謹言。

正月廿八日

義統 (花押)

兼師寺兵衛助殿

八〇八 大友義統感狀

○平林文書
大分縣史料三五

今度薩摩之悪党、國中へ乱入候之処、吉岡彌二郎以同心、至丹生嶋遂龍城、用心方普請口下、無緩之由感入候、亦可助馳走事、肝要候、必追前可賀之候、恐々謹言。

正月廿八日

義統 (花押)

平林兵部左衛門

八〇九 大友義統感狀案

○大友義統文書四
大分縣史料三三

今度薩摩之悪党、國中へ令現形、既至庄内乱入候之処、遂龍城、用心方普請等、無緩之由、乍案中感入候、休庵任下知、弥可被助馳走事、肝要候、必取鎖、一棧可賀之候、恐々謹言。

正月廿八日

義統 在判

堤新介入退殿

八一〇 大友義統感狀

○文化庁藏書林文書
大分縣史料三五

今度薩摩之悪党、國中へ令現形、既至庄内乱入候之処、遂龍城、用心方普請等、無緩之由、乍案中感入候、休庵任下知、弥可被助馳走事、肝要候、必取鎖、一棧可賀之候、恐々謹言。

正月廿八日

義統 (花押)

若林越後入退殿

八一 大友義統感狀

○文化庁藏書林文書
大分縣史料三五

今度薩摩之悪党、國中へ令現形、既至庄内乱入候之処、遂龍城、用心方普請等、無緩之由、乍案中感入候、休庵

任下知、弥可被助馳走事、肝要候、必取鎖、一棧可賀申候、恐々謹言。

正月廿八日

義統 (花押)

若林八郎殿

八一二 大友義統感狀

○田部等集文書
大分縣史料一三

今度薩摩之悪党國中へ令現形、既至庄内乱入候之処、從前遂龍城、用心方普請等之儀、無緩之由、乍案中感入候、弥夜白以堪忍、毎事無油断奉公肝要候、必追前一段可賀之候、恐々謹言。

正月廿八日

義統 (花押)

萬田筑前守殿

八一二 大友義統感狀

○万口邊城文書
大分縣史料九

今度薩摩之悪党國中へ令現形、既至庄内乱入候之処、從前遂龍城、用心方普請等之儀、無緩之由候、乍案中感入候、弥夜白以堪忍、毎事無油断奉公肝要候、必追前一段可賀之候、恐々謹言。

正月廿八日

義統 (花押)

一 萬田新介殿

八一四 大友宗滴感狀案

○大友宗滴文書
大分縣史料三三

其方事、乃使使至佐伯、被差遣候之処、今度薩摩之逆徒、
乱入已來、誰定以同城、別而粉骨、次第、度々上様申候、
猶以令感心候、右之悪党于今御在之条、惟定被申談、弥
忠儀之心懸肝要候、至義統遠被露、何様一被被成、御感
候様、取合不可有練意候、恐々謹言、
二月一日
北宮内少輔殿
大分縣史料三

八一五 長宗我部元親書状案

御札拜披本望之至候、連々承及候条、從是可申口廻合御
去年以來被盡粉骨、御忠儀之段、都鄙無其口付、洩上
聞候哉、御感被成、御朱印旨、御名益口面日候、拙者儀、
旧冬所内成行已後、日振島合唐口、去十三日卒出城能渡
候、休庵様傳尊意、可助德口儀、無私曲候、御進充弥火急
被仰出候間、御本口不可有變程候、猶以可被整武威段、
肝要候、旁迫、可申達候、恐々謹言、
二月六日
佐伯大田殿 御惠報
長宗我部元親 五拜
元親 謹言

八一六 大友義統感状案

今度薩摩之悪党依現形、当部之者共、少々構未練之処、
以順路之覚悟、魚返伊豆入道同心、至角半礼遠罷城、
折々軍旁之次第、感入候、必可賀之之趣、猶齋藤紀伊入
道可申候、恐々謹言、
二月十六日
中嶋士殿助殿
義統 五拜

二月十四日
北宮内少輔殿

八一七 大友家文書録綱文

親善右田佐渡守、大森大炊助、後藤龜江守、
美作守、原田伊賀守、真肥前守、千五百兵、攻拔小牧
堡、真氏斬丸出強兵衛尉、志賀部助斬矢崎正忠、及
薩長悉戰死、緒方羽耳上復親善、黒田官兵衛尉、邊根
未、鉄砲上栗於珠角半礼城守士善氏、古後氏、魚返
氏、太田氏等、有書、且義統授感願於其城兵森養春、志
津羽治部丞、中嶋士殿助、魚返氏部少輔、
大友家文書録
大分縣史料三

八一八 大友義統感状案

今度薩摩之悪党依現形、当部之者共、少々構未練之処、
以順路之覚悟、魚返伊豆入道同心、至角半礼遠罷城、
折々軍旁之次第、感入候、必可賀之之趣、猶齋藤紀伊入
道可申候、恐々謹言、
二月十六日
中嶋士殿助殿
義統 五拜

今度薩摩之悪党依現形、当部之者共、少々構未練之処、
以順路之覚悟、魚返伊豆入道同心、至角半礼遠罷城、折々
軍旁之次第、感入候、必可賀之之趣、猶齋藤紀伊入道可
申候、恐々謹言、
二月十六日
魚返氏部丞殿
義統 (花押)

八二〇 大友義統感状

今度薩摩之悪党依現形、当部之者共、少々構未練之処、
以順路之覚悟、至角半礼遠罷城、折々軍旁之次第、感入候、
必可賀之之趣、猶齋藤紀伊入道可申候、恐々謹言、
二月十六日
義統 (花押)

八二一 大友義統感状案

今度薩摩之悪党依現形、当部之者共、少々構未練之処、
以順路之覚悟、至角半礼遠罷城、折々軍旁之次第、感入候、
必可賀之之趣、猶齋藤紀伊入道可申候、恐々謹言、
二月十六日
義統 五拜

八一九 大友義統感状

今度薩摩之悪党依現形、当部之者共、少々構未練之処、
以順路之覚悟、魚返伊豆入道同心、至角半礼遠罷城、
折々軍旁之次第、感入候、必可賀之之趣、猶齋藤紀伊入
道可申候、恐々謹言、
二月十六日
中嶋士殿助殿
義統 五拜

八二二 大友義統感状案

今度薩摩之悪党依現形、当部之者共、少々構未練之処、
以順路之覚悟、魚返伊豆入道同心、至角半礼遠罷城、
折々軍旁之次第、感入候、必可賀之之趣、猶齋藤紀伊入
道可申候、恐々謹言、
二月十六日
義統 五拜

今度薩摩之悪党依現形、当郡之者共、少々構木練候之趣、以順路之貫通、至角牟礼遠龍城、折々軍勢之次第、感入候、必可賀之趣、猶齋藤紀伊人道可申候、恐々謹言、
二月十六日
義統
〔津利治部承殿 義統 在符〕

八二三 大友義統感状

○大友家文書
大分県史料二二

今度薩摩之悪党依現形、当郡之者共、少々構木練候之趣、以順路之貫通、至角牟礼遠龍城、折々軍勢之次第、感入候、必可賀之趣、猶齋藤紀伊人道可申候、恐々謹言、
二月十六日
義統 (花押)

占後刑部承殿

八二四 大友義統感状

○大友家文書
大分県史料二二

今度薩摩之悪党依現形、当郡之者共、少々構木練候之趣、以順路之貫通、至角牟礼遠龍城、折々軍勢之次第、感入候、必可賀之趣、猶齋藤紀伊人道可申候、恐々謹言、
二月十六日
義統 (花押)

占後勘二郎殿

八二五 大友義統感状

○大友家文書
大分県史料二二

今度薩摩之悪党依現形、当郡之者共、少々構木練候之趣、以順路之貫通、至角牟礼遠龍城、折々軍勢之次第、感入候、必可賀之趣、猶齋藤紀伊人道可申候、恐々謹言、
二月十六日
義統 (花押)

占後八郎殿

八二六 大友家文書録綱文

○大友家文書
大分県史料二二

二月十七日、鶴津家久、森州二赴ケテ、佐伯惟定口ラ朝日、
謀三陣之、佐伯氏、高畑氏、高畑氏、山田氏、石橋氏、
比矢功氏、高畑氏、高畑氏、河野氏、須氏、
須氏、杉谷、
薩兵ノ至、
此時薩兵拾、
幕府義兵、賜フ、義兵口若、賜フ、然ルモ高津
家久乱入スル時、コレヲ取テ受テ、梓山ニテ推定カ手ニ
入、其後幾後落去ノ時、惟定モ平人メ懸堂高虎ニ寄宿ス、
此其時コレヲ高虎ニ贈ル、高虎其愛メ其高、二佐フ、
寛文二年、月高致仕ノ日、コレヲ幕府ニ獻シ奉ル、佐伯
阿衡トハ、

在ル薩村口坂氏、
志賀親次、後藤氏、
コレヲ送ラシム、

二月二十八日、森高岡城ヲ獲ヒ、其追手庵灯岩屋ニ至ル、
志賀親次、石田氏、
レニ討セシム、
レニ由ナシ、故ニ薩兵安ヲ去ル、二十九日、其薩兵
一千余、彼川上小波牟礼ニ至ツテ、鬼城ニ討ス、鬼城兵
岡ノ子城也、
千余兵ヲシテ、鬼城ヲ守ラシム、
城ヲ出テ散兵ヲ木野ニ撃シテ欲ス、伊集院氏肥後ヨリ来
ツテ木野ノ兵ニ会ス、而シテ岡ノ兵ヲ圍ム、岡ノ兵衆寡
敵シ難キヲ以テノ故ニ、
年十月、今年二月ニ至ルマテ、拔擧ル所ノ城壁十五丈
所謂、結方普方、寺本湯要書、白谷尊、島所、初瀬城、
榎牟礼、駄原、篠原目、高城、日迫、鎧嶽、小牧、
水五合、島屋、神角也、

八二八 大友家文書録綱文

○大友家文書
大分県史料二二

二月朔日、秀吉進発大坂〇三日、
到岡、欲領、
發見城、
府内、而陣

八二七 大友家文書録綱文

○大友家文書
大分県史料二二

に日向國にて、爲美(一城)とらせ、其際にて知行
出候儀儀、休庵も可然可致談合候、知行に大小も
可有候か、夫ハ休庵次第能謀可仕事、
[一]幕後同にて、去年以來衣要を仕候者之儀ハ、城を請取
可致談却、其中にも城を置候ハて不叶城ハ、大友左兵
衛身に成候者に相付、可然候哉、夫ハ左兵衛督と致
談合、可爲分別次第之事、

[二]日向國者、大友休庵が隠居出候間、日向にて取
行ノ役者、休庵當儀次第たるべき事、

[三]天谷兵衛督に一職に出候間、請事
様にいした候て、可然談、
[四]園内にハ、城を築、城主せれ、
多之近所に、御座所普請、
[五]方ノ備前少将・宮
部中務法印・蜂須賀[一]・尾藤左衛門・黒田勘解
出、右之若共として、日向・大隅・豊後城普請可申付
候、并不入城ハわらせ可然事、

[六]豊前國之儀、是も不入城者わり、豊後と豊前之間に城
一ツ、馬かたけと右岸口之城と遠候ハ、其間に一城
豊前之内に可置、城普請可有候、因々之若共、出不忠
を相求、知行可置候間、其分心得、請事、
[七]清成申付、細々
に少之儀も、以、豊御本陣へ、毎日成共、不及思案事
於有之儀、可申上候、請御逃乎、
[八]情可然候事、
[九]儀者、不御置候へとも、
[一〇]爲には外間可爲迷惑候間、
[一一]重面ハ成敗可申付
候、

[一二]之条々、猶同人可申候、
以上、
天正十五年五月十二日
羽柴中納言殿
御朱印

○大友義統が、二若、送り被り候事ヲシテ全ク取收ス、之書紙
所収ノ文字ヲ、
[一]「交シテ控置、向、
[二]「本定ニ
以テ、
[三]「
[四]「
天正十五年五月廿二日に大友休庵に御奉行に付、竹之嶺駐營も、東
て御見成なる様に見逢、
也、

八四〇 豊臣秀吉朱印状

今度爲御恩地、於豊前國京東、築城、中津、上毛、下毛、
宇佐六都之事、被宛行訖、但宇佐郡之内妙見籠手南城、
当知行分相除之、其外全令領知、弥可抽奉公忠勤之由候
也、
五月二十日
黒田勘解出とのへ
朱印

八四一 豊臣秀吉朱印状

豊前國宇佐郡内妙見・籠手南城、当知行分四百八拾九町
三段之由、其方所へ中總旨候、任其帳而相改致候地、右
田島之口數彼向城・相付、大友左兵衛督、
七月廿七日
黒田勘解出殿へ
朱印

八四二 大友義統感状

大友義統
大分県史料 五

今度、
之段感入候、必道而、一段可買之候、恐々謹言、
八月廿四日
頼田宮内少輔殿
義統(花押)

八四三 大友義統感状

今度薩摩之悪党、現形之刻、幸由布城、馳逐在城、軍勞
之段、感入候、必道而、一段可買候、恐々謹言、
八月廿四日
久保治部少輔殿
義統(花押)

八四四 田原親賢旗下妙見城番籠勢人数

田原親賢旗下妙見城番籠勢人数
有河水内入道 岡部下郷入道 市丸長門入道
頼田因幡守 清成山城守 稲光次郎右衛門
清成式部少輔 糸水野左衛門 糸水河内守
藤田大膳亮 右出権右衛門尉 清成軍兵衛尉
都留右近允 有水宮内少輔 右田津右衛門尉
敦小四郎 有水又七郎 市丸六郎
竹田津作之進 黒田兵衛助 竹田津羽部少輔
被日右馬允 被日玄蕃允 竹田津左近允
林治部少輔 郷河右京入道 成吉十郎
竹上六郎 清成惣二郎 市丸式部少輔

市丸左京亮 黒田輝正忠
林勘助 市丸七郎
松成左馬助 松成弥兵衛尉
波多所分允 市丸宮内少輔
竹田津市進 市丸監物丞
市丸鐵部助 清水強正忠
郷司九郎 波多藤水亮
稲田藤次 都留喜太郎
倉成刑部人道 有木勘解由允
市丸左馬助 深町主水亮
是藤左大学助 波多大学
田北權内 小野市郎
林民部少輔 波多真介
後日宮内丞 竹田津藤内
原口與三左衛門 内田新介
福光土馬允 波部内藏丞
清成八郎 波部内藏丞
波多伊勢人道 波多伊勢人道
眞主三之丞 出原左近大夫
田原勘解由丞 出原左近大夫

待數合 九十九人

八四五 岐部宮壽合戰戰死

分捕頭注文披見狀写

大友家文書 中四四

岐部中務人道宗閉居城近万迄、薩摩憲交取出候刻、岐部

官存人数并同城衆懸合、或分捕或戦死者到、銘々加披見
茲、

- 頭一 井手口淡路守尉
- 頭一 時松大盛丞尉尉
- 頭一 惠兵衛八郎尉尉
- 頭一 小田弥十郎尉尉
- 頭一 英田紀伊人道披見

八四六 黒田孝高書狀案

大友家文書 三

鉄砲之王栗進候、午御報具預示、本望存候、殊恨、下
菜之儀、可指罷候之御、可御心易候、追々上「□」候間、
是又可御心安候、近々取出可及、

森水亮

黒田孝高

太田九郎殿

魚尾伊豆人道殿

古後旗津守殿 御宿所

八四七 豊臣秀吉書狀

小田原文書 二八

去十一月廿一日之書狀、於京都到来、披見候、

一 肥後之様子、安国寺一書之通、被開召候、属平均講城

へ人数丈^二指儀之由^一候、誠奉天^一之類、長々在陣、
別兩番人候、

有勤事、先書、委細被仰達候間、可成其意候、則為
御上使、四国衆淺野彈正少頭、加藤正計、小西撰津守、
其外萬方余、明日廿日二被立遠候、於様子、被仰合
候間、遂相談可被申付候事、
阿蘇之儀も、探探衆人可在之候間、有御礼申、可被
加御謀討と思召候、以大夫御化可申之由、沙汰之
限候、是又彈正御上使、被仰付候事、
一 豊前之御形等、悉令謀討、旨到来候、定而其方へも可
相問候、

九州儀者、度々如被仰達候、何万迄も於惡逆之輩者、

不残此度可被加御成敗と思召候、殊無續可被申付候
事等一候也、

正月十九日

小早川左衛門佐とのへ

(花押)

八四八 大友占統知行預ケ状案

大友家文書 三四

連々奉公幸矣、殊先年至龍王園登城之刻、越山忠儀心想
之次第、感愧無添候、仍為其員、次珠都之内野上鬼千世
一跡之事、預置候、可有知行候、恐々謹言、
六月十日

小田原左京亮殿

義統

八四九 占統知行預ケ状案

大友家文書 三三

於日州、息連石衛門事、宗仰同場之戰死、感悅候、其已後田原親實出行之朝、統御事、如御理所合參上、數月深忍之折節、依功雅進不存東西候、其方事、專以供奉種々勤辛勞、就中至蒙元君、為人質、表上等檢懸籠迄差存、始中終、以斗略相補候故、代々忠儀之節節目、毛頭無替候、被成御殿、其後豐・筑・日向、其外所々在陣、殊處山岳無城之刻、方被却故、南北之親類中、悉同城之朝、似等無解宮被相統、其故、何處無難被逐本意、祝賀候、仍為其實、兩子山之内聖王丸名、長行屋之内面之原敷、諸方庄之内口小山百貫分役職之事、預進之候、全知行肝要候、恐々謹言。

天正十七年正月五日 統御 在拜 諸田土佐守殿

八五〇 大友吉統書狀

先年龍土岳在城之刻、由原親實深可有再興之段、立願故、無程逐本竟焚余、誠權無別儀候、彼一字、雖造宮奉行役所候、此度之事者、右為成就、兼榮、分遣畢之山、感祝無差候、亦可被勸慰祈事并要候、恐々謹言。

正月廿八日 吉統(花押) 白原宮 宮師御坊

八五一 田原親家書狀

○大友家文書類
埋藏品正藏年大友史料 五

就使宜一筆令申候、其衣動亂之次第、不及足并候、然者其方事、從被前無別儀以心懸、今更懇切奇寄、被差差籠候旨、案中候、爰元御評議、相調候間、御出勢火急候、可御心安候、殊感清、今度之事其無比類儀と申、親家殿在府之儀と申、何様、後取合不可有差儀候、通而以拜付、可小給候、其元通路次第何と申、如妙見位、御登等一候、猶重々可申候、恐々謹言。

二月八日 飯川内記允殿 御宿所 親家 在拜

八五二 阿蘇惟前書狀

追而、中紙一十帖價候、祝賀候、如小預候、一因今年申旨候処、城親冬以上通斷無為候、本望候、此等之儀只是可令申折返、雖御音札祝著候、仍多年津江在月刻、別被添御心候、于今聊無忘却候、雖遠方、亦可申通候、御前可為快然候、細羅々神照寺可被達候、恐々謹言。

二月廿二日 惟前(花押) 五条殿

八五三 田原紹忍書狀

○萩原文書
埋藏品正藏年大友史料 五

一致、別而、御忠貞肝要候、於同後、御同様無忘却、可申談、殊□□、切寄一人放指加候奈、被印合、御馳走惡人候、委細從置□□□、恐々謹言。

明月十三日 萩原山城守殿 紹忍(花押)

八五四 田原紹忍書狀

○百可成氏文書
埋藏品正藏年大友史料 五

今度親類中一致、至阿波甲申入迫切奇、若能忠貞之覚悟、無比類候、然若為被賞、其方均、部名之平、清物如前々定進之候、聊不可有別儀候、恐々謹言。

卯月廿八日 吉村氏部丞殿 紹忍(花押)

八五五 田原紹忍書狀

○大友家文書類
埋藏品正藏年大友史料 五

今度敵潛已來罷城、無比類之段、依速注進、一様可被成御感之由、被 仰出候、尤珍重候、然若先以積久當知行分之事、諸点役并檢斷不入之段、被酒御番候、可得其意候、永々不可有他妨候、為御仔細候、恐々謹言。

五月十四日 上野介殿 紹忍 在拜

八五六 田原紹忍書狀

○百可成氏文書
埋藏品正藏年大友史料 五

實所迄、通、具令被見候、源三郎在城之儀候間、實以

一被御進退之儀、從前前、御向殿様御前申上候、入
紙之事、

一彼一儀於被成、御分別者、一被御與然、可有在任事、侍
出陣之事、

一妙見信御城并御職等之事、

一所々方分之事、付力來事、

一右之申事、御向殿様、不相叶御氣色者、重々御叱言、
可致停止事、
以上、

八六五 某書状案

○森文書
大分府史料三五

畏而申上候、仍而我等若輩事、教陳勵軍勞、就中此一兩
年之事、疑御城誘、彼是夜口無油断、遂堪忍候、若蓋居屋
敷分能代名之事、近年弟候市介・久保平兵衛尉・山下七
弥太彼二人、江被宛行候、其上■年大水以來、并手大破被
成、出代河成過分候、此時小事入候御公役等、所勤建候
候矣、山下七右衛門給ノ二反地之事、我等本領申、次
作半申談作仕候矣、此刻■為御加恩と二反地事、可然之
様以御取合、可被仰付事可否候、方、

一れいし合
一御としの神御まつり
一やまやく、右之形所聽御済之候矣、
一谷やく、能々以御分別御取合奉頼候、
御公役

八六六 乃美宗勝一代感状陣所合戰場付立

○清原文書
京遠國回書一

乃美兵部丞宗勝一代方々二而輪二付而元就公・隆元
公・隆景公并秀吉公ヨリ之御感状陣所合戰場付立
御得士之御書有之

一出雲國尼子御取詰之時陣根之御陣二而之儀之儀所算
御感状有之

一能見船人之相二而之儀之事
御感状有之

一十州口坂方案二而之儀之事
御感状有之

一豊前國門司二而之儀之事、鹿所公た長刀二而右之うて
御感状有之

一筑前國立花護城之事
御感状有之

一摂州水津渡船被燒候、大坂門跡江兵衛兵衛入候事
御感状有之

一攝州高砂辺行の町放火之事
御感状有之

一豊後今井元長二而之手柄之事
御感状有之

一予州麻嶋二而之儀之事
御感状有之

一嵯峨御取詰之時之儀之事
御感状有之

一備前國白山合戦之事
御感状有之

一摂津國花園証候之事
御感状有之

一予州たかふ西工守城賣之時儀之事
御感状有之

一備前見嶋録二而之合戦之事
付、田坂秀慶御成敗御付事

右之通御感状御本書写共二展紙仕候得共、如是算書所
持仕候、

付、書付差出申候事

八六七 細川忠興自筆書状

○松井文書

日出度晴見参候、以上、急度申候、
石治部・輝元中談、色立候山、上方合内府へ道々御注
進候、加此可申之と、かねて申たる事候、其外、残念
ことく一味同心之出候、定、内府早進御上洛可
在之候、然ハ、胡時ニ可為御勝手候、此状参書次第、松井
と山正ハ番子まで不残召進、并後へ可被越候、自然之
時ハ、松くらをもすて、女子をつれ、宮津へ被越、可
然様ニすまざるべく候、頼入候、因良石・具外之否と
もの儀ハ、具因のていを見合、可成はと木付二候て、
其上ハ如水居城へうつるべく候、如水とかねて申合て
をき候、此状ハ并後ヨリひめち辺へ嵐、舟にて届候へ
と申付候、
内府ハ江戸を今日廿、御立候由候、我等ハ昨日うつの
宮まで越在之事候、さためてひつくり返し、上方へ歸
はたらきたるへきと在候、恐々謹言、
七月廿二日
忠(花理)

松井殿
四良殿
市正殿

八六八 加藤清正書状

○松井文書

以上

去、日之御状、昨日五日、令拜見候、然、其元正丈、可有御在城之旨、尤存候、就夫、与介被留置候出、得其意候、隨、玉葉取合、九千放持せ命進之候、其許不出、候名、重、可進之候、上方之様子、具、被仰越、其上各令之書状并写已下、被入御之被差候候、別、令満足候、我等も所出意出来次第、舟を廻り申候間、上落程有間敷候、弥、上方之様子、到来候者、可被仰知候、從此方も可申人候、猶、立木可申候、恐々謹言、

清正(花押)

八月六日 松井渡殿

有四良右殿

御返報

八六九 太山一成書状案

○松井文書

以上

其以來久不懸御口、無音、音木立存候、上方之様子、定而可被及閉食候、就其、其御城、拙子請取申候にと御奉行衆被申付、前後不存候へ共、昨日罷下候、則、御奉行衆御折紙持進之候、從御返事、重、可被御意候、此時候間、別、御馳走申度、二候、奏曲、小倉兵衛、申合候間不具候、恐々謹言、

八月十二日

松井州殿

有四良右殿

人々御中

一成、料

八七〇 松井康之・有古立行連書状案

○松井文書

一、兩首樓への書状留一

去、日、輪船へ伝へ、橋本札候、相、可相連候、

一、先書二如申上、当城之義、如水へ相渡、海陸共成次第、

各一同二可罷上談合相極申候へ共、加子無御座候、何程成共質可達申候へ共、落武者と見申候、不聽出候、

其内二人放出、御誑城之趣相聞へ、申候、不及足非候、然時八、当城堅固二相抱、於此地、御用可仕三

相極、普請等無申、晝夜申付、下々是丈、二致覚借候事、

安否不卒相般・偏中納言殿・三奉行・右治、大刑少各使

令被付作渡守折紙共候、大園様御懇御知行等、各別

にも被下候間、秀頼様へ致急御候へ、然名、当城ハ相渡、

可罷上之旨、申中候、業作方ハ向人への折紙にて、

何とぞ談合有差者申中候、於此地、各取可仕二相強

候間、別、二御返事無之候、重、飛脚も給候者、討請可

申中使二申渡、折紙共許交け返し申候事、

其御城堅固二被仰付、度々被及、戦、審察取案之山中來

候、御鉄金不及是御鉄、各千、高名可有之と被申候事、

一、内府様、去、日、江口御鉄、高野守・美濃へ可被打出候、

謀叛之一揆ハラ、敗軍眼前上存候事、

北園之義、肥前殿小松之城へ被取候、二ノ丸迄押破、本城へ懸進入、實手ノ人数残、大性寺へ被脅、即時二貴崩、山口父子被討果由候、九回・北庄肥州へテ、人申出候、府中八郎帯名共堅固二相踏置候、然者數費へ早速可被打出首候、御本意不可有程候、当城之者共ハ、今之分二御座候者、アハウ勝二可為不意候と、各若者共無念かり申候、可被成御推量候事、

如水先書二如申人、女房衆申中御内義忠盗出、一途二内府様御味方にて御座候、当城へ万事御心付にて御座候事、

上階殿、是又同前にて御座候、当城へ兵糧・玉葉御人、主御懇候事、

一、右御向人之外ハ、皆敵ニテ御座候、併内府様御上之うへハ、何も草のなひきたるへく候事、

一、悪人を遣上申度候へ共、隠成者ハ、人も手前大切二御座候、除侍・中間・小者などハ其程へも不相届、直二

尤可申と存候案、此書状も又權磨へ上せ、其令相届候様二申越候、日出度御返事奉待候、此宜直御披露候、恐々謹言、

八月十八日 松井佐渡守 康之

有古四吉良右衛門 立行

麻吉右 甲夕

八七一 松井康之列書状案

○松井文書

謀叛之一揆ハラ、敗軍眼前上存候事、

事、

一竹伊豆母義・玄房業・息右衛門・良ぬすミ出し○父子共如水と被相候事、

一去十七日、木付迄陣かへ候て、昨日十八、熊谷城被取参候、[○]城中少懸望申候、頼正相済可申候、各在陣仕、文口もふんさい程請取申候事、

一主計殿へ吉統下着之と有之に付、先加勢として鉄炮五上丁百九十ノ着到にて被指過候、[○]百統中津へ被遣候口、被着候間返し申候事、

一[○]熊木へ大伴下着之注進十四日参着、十五日二被打立、久次郎定御着陣之庭へ、立石[○]落居候注進有之に付、御届陣候事、

一如水之御事ハ不及中、主計殿御情入候段、中[○]難申尽候、惣宜次第御礼様々被遣候て可被参候、御向所御心付、面二ならてハ[○]不被申尺候事、

一田辺御堅固之山、日出度奉存候事、
一澁州表御手柄共之山、珍重存候、
御吉左右追々奉待候、[○]宜可御披露候、
九月十九日 康之 立行

米田助右衛門殿
加、山少右衛門殿

八七七 黒田如水覚書案

○松井文庫

一上方乱之刻、九州衆心持之事、
一加七言我等間之事、

覚

一手切備之事、

一吉統取上候節之事、

一 中川修理、初中後邊之事、

一 府内留守居、前後無相違事、

一 民太郎留守居之事、

一 竹伊之事、

一 柳川相勤、付城申付、編嶋人数人置、森摩へ可能出事、

一 熊谷・辰見城之事、

一 太田飛騨父子之事、

一 同上

一 十月七日

松佐州参

如水

八七八 細川忠興書状案

○松井文庫

以上

一 急度申候、我々事嘉前、同ニ急後にて、因幡郡、速見郡、粗相拜候候、

一 木下右衛門大夫ニも、急後にて、[○]早土庫押領之郡可被遣由候、左候へハ、我々押領之郡へ并候、無残所忝候候、此

一 状参着次第、玄番・松井・辛藤兵・平上合々急前へ被罷越、城々可被請取候、其、吉左ニ申候、可被得其意候、次、

一 丹後之儀、当年所寄被下候、是又忝候候、納所候、急度可申付候、恐々謹言、

十一月、日

越 忠興

玄 香殿

松 井殿

勝 兵衛殿

五右衛門殿

曲 斎

新 太郎殿

新 五殿

平左衛門殿

八七九 加藤清正覚書

○松井文庫

覚

一 府内兵衆之事、

一 松佐御上洛候て、右四御残候始末之事、

一 其御城、如水御うけおい候て、いつれも、同二御上洛之時之事、

一 如水御うけおいなく、其御城二御入候時の事、

一 此方へ御越候て、北湖、松佐御、人にて、又は有同前二御上候共、御談合之上にて、御報二承へき事、御向人此方今御上候共、御家中來、其下々ハ、舟放二

一 てハ、結句路次第何如敷候ま、とても主計可罷上候案、其時御同船可被候、其間ハ、此方二御逗留あるへき事、

一 各、同二御上候、此方今人数違候時ハ、たれ[○]にてても、侍衆御、人被遣候事、

一 此内、いつれニなりとも相極

一 候者、我々飛脚にて、与介にて、も燃候候、御向人之御使、人可被下候、其も、それ令すく、御上候へハ、

一 いらす候、如水と御談合不相済、此方今被申分、於御同心、一人可被下候事、

一 御兵根入候て、草与介付内へ被遣候者、尚以、我等も

一 の二御一人可被下候、其迄もなく、惣松佐此方へ御越

候か、又、各一同二御越候はんならハ、可随其候、其御城御あけ候てハ、いか、二候間、右之分二御さた候て、一同二此方分御上あ^上ま^上まつく松任まで御越无候、さやう二候ハ、此方今人数可違ため二候、以上

八八〇 黒田如水書状

○日向伊東文書
日向文書集成

今度伊東我等方へ申越候々々

一 七月廿日之日付にて申越候は、対内府様へ、御元奉行共進心之条、伊東義者内府様へ御届仕度候、如何仕候而能候はん哉、伏見へ人数等をも遣回敷候条、拙者申次第に可致覚悟と申越候、
一 拙者遊事には、少身に候条、上方へ居候而御届成間敷候条、福因仕可然之通申上せ候、就然八月十日比之日付にて又申越候は、私事は以外煩候条、今留置下候事不慮成候間、於日向留守居之者共、申次第、奉行方へ手切之勅をさせ、息元亮を下可申由申越候条、左京亮福因之儀者尤可然候、勅之儀者時分により左右を可申由、遊事仕候事、
一 拙者者、九月九日に居城を罷出、十一日未明に垣見城を取巻候所に、大友木付を取上候を、注進石之に付て、十二日未付へ懸付候へは、早大友も引進立石と申所へ取置有之候を、翌日十三日拙者先于之者押寄、及一戰に、勝利を得早候、十四日大雨降候に付て、少遅候内に、大友致候、十五日早朝拙者陣所へ懸入申候、然而十六日伊東留守居之方へ使者遣、加計計も手切之勅被仕候条、其元見合次第に、何方へ成共致手切候へと申遣

候、拙者か使者、九月廿八日参拜候、則留守居之者共相相談、拙者使者を留置、高橋右近相拘候、宮崎と申城へ取懸、夜せめに仕、十月朔日切取、城主を始、首數二百余討取申候故、兼日より拙者を誑人今在中越候条、如此候、被逐御分別候者、御耳に被立候而可被遣、奉候候、
如^如水

御奉行中

八八一 松井康之、有吉立行覚書

○松井文書

一 草与被差越、善吉拜見、彼口上承届、悉奉存候事、
一 各一同二可罷上談合相克次第之事、
一 南浦可罷上二福申様子之事、
一 丹後へ備之様子、母本太兵衛被申、其上、小磯の竹伊豆へ申見申候て、南浦へ打詰申候事、
一 北浦可御留申候へとも、加計撫之ニ付、打詰申候事、
一 越中守へ書状賜寄被見三人候事、
一 瓶地合中村神左衛門書状参候、此書中二候間、当城文府内へ草与差越候事、
一 府内へ草与差越候事、
一 玉葉八丈夫二在之事、
一 付人数之事、
以上

八八二 松井康之、有吉立行覚書

○松井文書

一 松井佐渡守殿 越中

一 守計殿へ違候一書得八月四日草与へ申渡候覚一
一 寛
一 安元様子弥、途二致覚悟、普請已下無山断申行候事、
一 御兵遣事、
一 玉葉之事、
一 当郡所務早付様之事、
一 上方昨日迄之取さたの事、
以上

八八三 魚住右衛門兵衛書状

○取内文書
太分能文書 二

一 細川二齋公御書出
以上
今度義統亂人被仕三付、郡中百姓心替を仕候處、其方木付之威にこもり、忠節ひるいなく候、其しるしとして、日出浦之山おね、人ふね、其外之と、之儀申付候条、如前々、可申付事并要候、
以上

魚住右衛門兵衛 (花押)

日出浦
惣左衛門まいる

八八四 細川忠興書状

○松井文書

一 松井佐渡守殿 越中

尚々彦山之事も得御意、無残所らちを明候、可心安候、以上、

急度申候、

一先書二内々申候木付之儀、此中、色々申上、弥相濟押領仕運候、於其通知行宅万石余拜領候、其様子、大方、采女・少一良二申付下候、口上可被聞候、誠外聞実儀満足此事候、則、木付城其方二預候間、早々相越、若請等似合二可被申付候、大方、木付此方之知行二なりさうなる在所書付違候間、被得其意、百姓二心付肝要候、乍去、五六口中二所切之御可相濟候、其次策、其書付可下候条、指米以下之儀、牧新立・源八謀合候て、今から取直、在所之御符下次第二被借付候様二用意候て可被得候、但、借米二不及、毛も付可申候哉、才宜肝用に候事、

一先納之儀、其外人返之儀、占米進之儀、何も如存分被

仰出候、乍去、黒甲近口上候由候間、とても儀二

相付、弥、らちを明候て可下と存候事、

一中納^御殿、明日江戸へ御下向事候、景游候名何共知不

申候事、

一梅高嶺、弥すきと御本復之事候、可心易候事、

一猶、吉事追々可申候、恐々謹言、

卯月十日 忠 (花押)

松井佐渡守殿

八八五 木付・立石合戦、高名者回状

○松井文庫

尚々、米六日、參津相濟候、以上、

急度申候、去年木付之夜打并立石表合戦ニ一角手柄を仕

候者、米七日可被御覽候条、可召寄附被仰出候、成其兼六口ニ此地へ着津相待候、為其如此候、恐々謹言、

七月四日

佐 康之 (花押)

井口六兵衛殿

中川下野殿

下津平左衛門殿

坂本二良右衛門殿

杉崎作左衛門殿

井想兵衛殿

中川五兵衛殿

松井加兵衛殿

近藤弥十良殿

田中清三殿

上原長三良殿

進之候

八八六 立石へ動之時

木付留守番之台文石名案

○松井文庫

〔松井新介扣書〕

立石へ動之時木付留守番之者

矢成番者

早藤源右衛門

八田長介

山内与左衛門

小嶋弥右衛門

明田惣右衛門

矢野満介

萩野彦介

関 吉右衛門

やなせ其介

上村小介

井口九介

人しち番

上川源左衛門

桜井又兵衛

萩野三介

嶋田平七

楠田勘右衛門

門番

北村弥兵衛

和山小介

回 与右衛門

森出弥兵衛

七月六日

右分、辛御在事二候間、御取成本願候、

松井新介様

(虎尾島傳史料日記雜錄 後編一)

一 高津義弘請

天正十三年九月四日、阿蘇氏寄使書、進太刀・馬、其他者、村山美濃守者也、其書無異付、以故執事等不受也、使者曰、先見所贈大友氏之書不為英付、類其書如此乎、即遣使部書英付、再可獻之也、

天正十三年九月五日、新納右衛門佐・福富新介充・价於合志曰、合志藏人親重無異供為下城、寄中宿於小山村云云、

同日、秋月氏、龍造寺氏、筑紫氏以徒器器祝詞、進太刀・織物等、又白費馬、太守賜而便伊集院淡路守・平田豐前守也、

天正十三年九月六日、為犯三池封鎖、伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守等、率宇土・隈本・大津山・和仁・辺春・小代之軍衆、進入宇津・久我、放火山下里口之邊、則江之浦、堀切之敵、難勸忍乎、然則遇秋月米豐後敵軍亦難舉、而無程可退陣乎、

天正十三年九月七日、自肥後至豊後之通路、未知其難易、由此今日進新納武藏守赴其封鎖、副以平田豐前守・柏原岡分也、

同日、使野村兵部少輔・駿馬備後守持十有一箇之桑白土、建敷屬、是亦令伊集院淡路守・平田豐前守・所命之旨返答也、

天正十三年九月八日、前日阿蘇氏寄無異付之書、執事等不受、是以今日為英付以持參也、仍受之誦駕、使者村山美濃守請改名、不許、然而強請不止、故任丹後守、不舉其說持中曹來、以為謝禮也、

同日、內空閣下野守頼房為祝札所參進、送封面也、

天正十三年九月十日、使福富新介進請將曰、相良其陽於堅志田之辺等之原遠戰死者與乎也也、以故立其後於赤麻突、今也稱靈地、可充行營田於柄良氏、諸將其以善焉、

同日、出田助九郎有為訟訴之事曰、小子稱于土地、當時為公領、請許之於君、諸將聞此言曰、今也城入迫一嬰抽無式之忠節、助九郎者、要之受于、雖曰許之於衆、何助之有乎、所以充焉也、

同日、高津中務大輔家久使吉田右衛門佐・高崎越前守通進口、高知尾已以出所留屬麾下、不血刃矣靜謐也、且復伊集院下野守・比志島式部少輔・上原長門守・鎌田出雲守・吉村下總守等共在為知尾、各許讓有百口、豊後免向之佳則宜有此時云、請其可迴歸於帷帳之中也、

同日十一日、使福富新介報家久之使名曰、既高知尾所屬手裏、家久謀計之所致也、有執取此之名乎、且復豊後免向諸將軍心、無一人之有異議歟、如此則請可否於天神地祇、而後京定進免之期也、

同日、備島飛騨守奇提書曰、針口之戰後陣敗北、夜中悉以退散、於細村者、再令、价有報也、

天正十三年九月十二日、伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守・白筑後法蓮曰、昨日十二、發掘切城、忽以陷之、獲敵首三百余員云云、

天正十三年九月十五日、有馬氏難曰渡海米給、使同忠科、冠參之故、而未送封面也、

同日、裁數之之奏曰、使平田豐前守・山代刑部少輔、上進奏馬也、

天正十三年九月十六日、上蒲池某、恐新納武藏守有言曰、去歲以降、欲願膝下之情、無少變遷、然而無口付難散之問、所以不得一封之獻惡書也、又豊後州南部之士五六輩惡阿蘇氏、有謂佩旗下者也、

同日、有有馬氏進參之頭、招旅宿進業、太刀・段子・酒合持參也、

天正十三年九月十八日、使莊莊寺面阿蘇山、拜進露跡、以其大曰、成滿坊與福滿坊、有島津氏爭坊之風、吾能不知出請、決定為何有滿山眾口、

同日、伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守注進口、江之浦城上得令身命、尚去屠城、其約既成之後、及領地之多少、而要其約矣、自心有節乎、依他人而進謀乎、未知其失也、

天正十三年九月廿日、出田助九郎來、而過前口稱名之地安堵札詞、且復為官堂所望、仍任宮內大輔、謝兩事以太刀・刀・織物矣、今夕招有馬氏、再進參也、

同日廿一日、甲斐天和守徒失部妻參向、先使一价忠福富新介告其進所望矣、忠平報曰、必其求其輕任、又有馬氏請不可有後米違變之德、誓紙者素矣、然而犯者、尊南妻美秋宗實、亡日本神祇靈妙、何累當紙於屬乎、裁盟約書以附與之、安徳上野守亦對其家抽忠節、故與發買給也、市來入口寺為國祭民安之修想祈、從忠平抽精誠、今度得勝稱名想祈故乎、賞之以御船六町之內五町之寺矣、

天正十三年九月、肥前後州軍務既成矣、故廿二日、忠平從御船檢頭、所以為慰也、

同日、島津國吉領・上井伊勢守使日州財部之大平寺到矣、部司請曰、曾奈須氏覺族安堵本領、信條、失部士卒、為違亂於其地、若為事實者甚以不正也、再止問之、

天正十三年九月廿四日、奈須彈正忠以計使使臣似商人、去豊後州郡之頭細繩大、其人來野口、大友表就當時在小園界、高深深陸、堅弱地設城、封鎖警衛小取息、且復阿蘇氏大田中妻大和守親英從八代米備備、備備則對詳議、可致一行云尔、使大和守留八代、不許稱宅者可乎、

副飯野之士、遣八代之地、謀之於威者也、

崎左近上陸

崎左近上陸 崎左近上陸 崎左近上陸

十八日、赤城海助城城あり、城守は、

十七日、客人掃部助久親、

左近將監政次、伊集院宮内左衛門忠連、

門久兼保、伊集院左衛門重兼、

浪田弥四郎八代、矢上忠五郎、

浪田弥四郎八代、矢上忠五郎、

越中守政次、宮原信守、

崎中佐兵衛、鎌田源次郎、

長山佐次郎、野村土佐、

七兵衛右衛門、野村土佐、

江萬介、丸田山、

辰野四郎、子孫川野茂、

作州内、逸矢軍兵衛、

大、加藤大学助、

南郷道部少輔忠水、

川島縫殿助忠重、

野下、伊集院久、

荒田英金、馬場四郎左衛門、

阿下久布施三助、

強八氏、

此日前出兵部左衛門尉東政、

止一日、津曲玄蕃頭兼、

四郎因実忠、

十一月五日、浪田大伏、

十二月、逸矢行遣守長時、

十二月六日、寺師孫後守宗、

七日、新納助解由次官忠家、

八月、木田治部左衛門、

十二日、橋口弥市郎兼元、

十二日、鬼塚殿之介秀俊

此年六月、志和地治部少輔忠義、

里良善助自行、

二十一人、

此年冬、古市典三、

治部少輔、

此年冬、古市典三、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五郎左衛門、

五 筑前岩屋城合戦従軍者父名

天正十四年六月十三日、筑紫上野介殿門を攻せらる時、

八代迄打入、

大守義久、

中務大輔兼久、

左衛門尉成久、

伊集院左衛門大夫忠棟、

伊集院下野守久信、

吉川山城守、

鎌田少外記、

山田越前守、

上原長門守、

宮原左近将監、

遠左衛門守、

川上左京亮、

梅北宮内左衛門尉、

久留根津介、

上井伊勢守、

新納石衛門佐久親、

長谷場兵部少輔兼、

中島右衛門尉兼、

御大將兵部頭、

肝付彈正忠兼寛、

同年七月廿七日、岩屋城攻二重攻

久留根津介、

山田越前守、

上井伊勢守、

新納石衛門佐久親、

長谷場兵部少輔兼、

新納越前助久時、

向江右左衛門純綱、

新納越前助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

新納藤助久時、

秋津衣 打入衆ハ、新野郡臣等西門外入衆を誅す。

川上上野守 志茂

新野武藏守 定之

○十五夜、御引神ノ御後殿、且殿前ノ御打取候時、先登いたし給へり。

六 大口士清川西市承覚書

天正十四年七月七日、筑紫岩屋之城を賁落、人休しうわん様、城内來八万余騎打取被成候由成、其外九ヶ國之分の大名・小名皆々降摩御旗下ニ罷成候故、大勢共中々無申取之由也、御家記ニ有之、あらく書写置也。

一、天正十四年春之比、大友宗宗林上落して、間白へ木々ハ日向已來も鶴津殿合ほそめられ無念也、肥後・肥前・筑後・筑前も降摩合押とられ、無念之主と存候、間白様を奉顔面、大友之家を残し被下候様ニと訴訟被申上候ニ付、御宗被成候、其折節薩摩合御使、鎌田刑部左殿部へ仰上せ被成、九州之御任被成、間白様も薩摩大隅其外、肥後半國・筑後半國・日向半國鶴津殿へ御給之由也、日向半國ハ伊東殿、豊後・肥前半國ハ大友殿、肥後半國ハ毛利殿へ遣したまふへし、筑前・大國は間白様御領地たるへしと被仰下ける折節、筑前之岩屋江打出かけたまふ、此岩屋の儀いまだ都に不聞得内に黒田殿・千石殿九州回わけとして下たまふ、千石殿ハ豊後へ押渡、大友殿同心にて豊後へ越給ふ、黒田殿ハ中国之毛州殿同心にて、豊前へ着給ふて、岡わり

の喉などをし給わんと相談被成候、薩摩合ハ岩屋の陣を引城井・長野・秋井・高橋など薩摩方にて可被成、いまた君御下ニ參たるニ付、其ま、御陳めされ、薩

摩衆ハ肥後口、右之衆ハ日向口、両方分はや両郡へ打入、豊後半國打破之由申けられ、其時千石殿・大友殿ハ豊後之こと引返しけり、其外軍衆も幾、早馬三而皆々引せたまひけれ共、黒田殿ハ原廣へおわします、大友・吉宗、千石殿ハ南西之上之原ニ陳取かまへ、薩摩衆よせ來るを被待ける、然処二十一月十三日、家久としみやへ陳取御座す、千石殿ハけちらかし給わんとよせ來りたり、家久を始として、薩摩衆かけ合軍のされ、千石殿はいほく、長宗我部殿兩人衆之内、千

余衆打取被成、千石殿御命計をたすかり給ふ、此山部へ開陣、間白様殘念に被思召、鶴津殿ハ岡わけをそむき、筑前へ打出、岩屋などをせめ崩、豊後と一和之由被仰越もそむき、刺千石が軍衆も数多討果し、遠謀の後ニハ都へあたまをなす事治定也、只自身發足にてせめんと候定ましまして、追付都を立給ふ、無智開の口に着給ふ、薩摩衆ハ十二月十三日、野神を立被成也、肥後・豊後旗下の衆も皆々心替候とも、皆々切崩て肥後口・日向口を退給ふ、間白様御弟中納言殿ハ廿万騎引つれ、豊後へ打人給ふ、薩摩衆者日向の様に引退之由被開召、追付日向之高城、討部へ五十一の大陣を付させ給ふ、義久様・義弘様ハ都の城へ籠、大隅・薩摩の軍衆の參事を待給ふ、京師ハ取かため、京かた弥の増重なり、長業など用意しけれハ限じ給ふ事ならず、然其一陳崩候てあり、種業せしやう坊か陳に打寄被成候へは、敵陣つよく成故、薩摩の軍衆ハ退給ひかうさんし給ふ也、此事天正十五年の圓月なり、

七 島津義久訴

天正十四年九月廿八日、上將氏貞自京至百城、爾爾着於上井伊勢守曰、千船権兵衛尉日四國渡邊後來、又豊後士卒少々発出、当口在于字目村舎、又日高尾尾佐士原有注進、豊後士卒有欲攻入田氏府城之詞矣、

義久欲退治豊後之金有其故、曰、大友氏所懸念於我國之嶺無所欲止、夫陳隔日三州者、正二位右大臣賴朝卿以降所無之也、以故無懼備固、安撫西民、遐邇蕃饒無不來附、庶乎不夫以大事小之礼、然固日向州伊東氏背我為敵、屢狂我之土地、學所教亂謀暴之義兵討之、渠之軍衆已敗來死之際、僅逃出奔于豊後州矣、於茲乎、大友氏欲投伊東氏運之於故郷也、先先天正六年戊寅之冬、率太軍來圍我之日州新納院高城、然而失利於一戰、悉以敗北大半亡其軍矣、今也不止其憤、反爾廢退治之免於有請、間白勇吉公矣、吾惡思之、先將之計策、不洩洩之者、豈異坐而待亡乎哉、遂欲備免軍來之際、肥後八代之士資田原守・高橋駿河守懸、价曰、豊後州入田宗和・志賀道益背大友氏願薩摩方欲致忠功、其故何故、道益者宗顯之婿、而背宗顯之心特急切哉、仍一門中為評議者免、而不許我、不得已而去居城、恐志賀播磨守入督迫城、入田宗果亦不奈宗顯之心、殆半虛度切哉、因茲萬薩摩之旗下有欲謀我之深念々、義久聞此之宜、以為所天之弃我之指而也、乃乃新納武藏守忠元元之、宜相發退治計哉、忠元忠告、即使仙鶴房往入田宗果之城問所背大友氏之故、而後復御射之幸海丞及忠元之陪臣中馬源丞者彼城之武美事相大、又使濱田氏部左衛門尉・山口大藏助往寄道城、問道易所背宗顯之故、此時道易・播磨守相共謀、以見岡之處於兩傍、而令赴歸路也、於茲乎、入田氏亮吉良甲斐守・阿南勘解由次官於八代、見兵難須我也、其後義珍遣船木石京亮・中馬源丞往志賀氏之城問與島源實否、于時伴大夫有馬助・新野新介者薩摩降之故、因茲選野村

与三右衛門尉及忠元之陪臣尾崎彦兵衛尉、中尾源丞等於志賀氏之城、納兵迫逼法之針於其城矣。

天正十四年十月八日、上持氏自隈乘使僧於宮崎、謂上井伊勢守曰、我之領內有失矢野內藏助者、去四日志賀道輝通于内藏助曰、十持較九年進恨有所難止之否乎、不問可知、然而今度有京師之加勢、而為天下之亂賊、則則思慮止憤、

然而今度有京師之加勢、而為天下之亂賊、則則思慮止憤、

天正十四年十月、兵庫頭義珍為大將軍軍業、發於肥後州向於豊後州、相從將等弟左衛門督成久、阿二部次郎忠滿、島津右馬頭征久、同姓國書頭忠長、川上上野介久信、新納武藏守忠元、同姓種殿助久時、北郷謙助守忠虎、樺山兵部大輔康久、伊集院右衛門大太忠輝、同姓肥前守久春、同姓筑前守、鎌田尾張守政年、後發朝、同姓田

安守政近、川上左近將監久辰、平出新右衛門尉、大寺大秋助、白濱周防守、宮原義珍守、町田出羽守久信、肝付

強正忠兼寬、數根藤左衛門尉、大野七郎久高、伊勢勢九郎貞昌以下騎步二萬七千餘騎討入鹿郡、同十月廿一日、到乎阿蘇郡野尻平陣備、同廿二日、臨高城之時、獲數

十之敵首也、其中強敵一人伊勢勢九郎得之、安於十七也、義珍感感不鮮矣、入田宗和、志賀道益表台心於薩家、而待軍業之到來、如大旱之望雲霓、丁此之時、宗和、道益引率從卒一千有餘來為指南、是以來夜入宗和之城、松尾

進登其城、敵兵何不知乎、當迫來時起壁、而欲遁去不能、

忽落于城陷死矣、遺輝者入田宗和、赤足備中守之親戚也、是以義珍誘出質為和平、道益依其言、所以相諭語也、

弟中務大輔家久為日向口大將、天正十四年十月十四日、進登於佐十原、自隈對面向豊後州、所相隨輩上井伊勢守

寬兼、吉利下總守忠澄、十持左馬頭、山田越前守有信、伊集院下野守久尚、同姓美作守、木田下野守親實、樺山安藝守忠助已下、万余騎、踰越梓山討入二重、敦吉利親殿助為矢谷、架木國、木吉、而後近藤諸將村會悉放火去、

而後伊集院下野守、同姓美作守、木田下野守、上井伊勢守酒米兼武藏、而臨約方城、則家久屯陣於盤東寺、使前鋒掃退進來強敵、豐後半國已攻乎也、

其夜占、宿於臨木、而赴日州之封疆三城、日見城、日見川、在於遠見矣、

同十四年十月十日、白府內至豊前境警衛之符、於此忠虎拔於壯、矢越兩城、從軍賊死者許多也、

八 北郷忠虎譚

同月十一日、忠虎、久為、兵庫頭義珍公之從軍攻入

南郡、丁臨島嶼城之時、先陣瑞瑠之兵其次兒弟、率軍登城內屋上壓軍、指揮新獲夥、此時忠虎家臣津曲女番家許、

九 北郷三久譚

天正十四年丙戌、豊後危向之時、與見忠虎俱十日日發

於北內到於肥後、兵庫頭義珍公之為從軍攻入南郡、丁臨島嶼城之時、先陣瑞瑠之兵其兒弟、率軍登城內屋上壓軍、而指揮新獲夥、

一〇 島津義久譚

先是使文之和尙、鎌田州部左衛門尉新九州於、渡下秀吉公、公報曰、可為大隅薩摩日向及肥後半國、筑後半國、豊前半國島津氏細知、豊前、筑後、肥後各半國加豐後界

大友氏、肥前、國賜中國毛利氏、筑前一國可為、公領也、其令已定、則兩使未辭京師之際、違規書於薩摩矣、聞此

之旨深憤曰、九州悉以為島津氏土地則可乎、不然兵革不可取止、乃增益軍威修練丁戈、丁此之時、小寺右兵衛

和郎、仙石權兵衛尉、中國毛利氏等所以分割國郡之奉重任、而日向鎮西也、仙石氏漢書後來赴豐前矣、小寺氏與

毛利氏同被豐前、各欲分國之命、而筑前城并氏、長野氏、秋月氏、高橋氏等深謀斷斷方不可也、此則薩摩方之大軍動數如雷電逼過後、殆乎已破却乎國矣、於此乎、大友左衛門尉義珍入退赤崎、同左兵衛尉義統聞此變事、

一 島津義久譚

漸而發一陳於府內原、俟敵兵進來而已、

稱利滿者去府內不遑遠、家久率軍乘攻彼城、即日城下悉以破却、而唯本城未陷、然而所聞堅密不進文不進去、

徒使京勢之所以發來為後責矣、於此之時、十二月十三日、大友左兵衛尉義統、仙石權兵衛尉與十佐之長宗我部勢三

部、秦信親、讀候之十川年人佐政泰、尾藤其右衛門尉等
李太軍來、欲侵家久之利、津障、吾軍潛越城隍林間、而待
敵兵澆川流進來接兵刃之有佳期、漸已悉清川將通城中、
以此之時為得佳期、發出我之軍來討之合敵散火、初也京
勢乃氣似擊鐵、終也陣當不知津障先敗走、不測
川流澆深、澆所所以死之者固未幾多、豈果落葉之浮山
川隨下流乎、丁時新數臺言親、政榮、大友左兵衛尉、仙
石樵兵衛尉、尾藤其右衛門尉、津障、伊藤其右衛門尉、
於此時、伊藤其右衛門尉、伊藤其右衛門尉、伊藤其右衛門尉、
高川守限於甲門、府內守限於武同川原、追亡逐北而伏阮
矣、就中京兵之敗窺如湯丁書、其非平古之所待而伸、吾
軍乘勝、其復以稱延同之地構、陣、燒舞火乘岡告也、雷
月乘交為、曰戎衣、手足共以冰矣、然而唯有勝軍之勇、
無一人之屈乘氣者、我統德薩摩軍來之隨居城也、翌夜突
府內退高崎、即日家久入府內、則我統此地亦不得支、而
又去高崎奔走平島前脫干也、未知仙石氏之保露命、在何
地也、

天正十四年十二月廿二日、義珍入志賀追迫居城、則曰仁
之志賀追迫亦降參矣、一万田、滑、瀧田城皆以隨焉、同
廿四日、換捕於所制城、而越年於此地也、

志賀捕總守風聲震天下、因慈意勇左馬助兄弟將賣出焉、
預敵之於松木石室亮矣、大友左兵衛督義統命于同之城市、
天正十五年丁亥正月七日夜中、發追迫勢於阿蘇、則左馬
助之居是石室亮之宅、石室之上守二百二人對之防禦、筋
力之際、石室之同姓二九郎左馬助之被官田代藤左衛門尉
遂戰死、且被傷者多矣、不得以無勢解有勢、退于坂無之
近關、而後石室亮使斷懸左衛門者告件事於皆迫城也、
播摩守聞此事、則與出城守將伊集院三河守、大童休意俱
誠、而彼伏兵於敵軍帶路、忽得勝利斬敵首者七十三員、
此外虜者牛馬共二百有餘、於此戰湯球母之十大童又上郎

敵討對戶高兵右衛門尉死、被俘者不遠記之也、

一、烏津義弘請

伊東氏在日向州御家人中而匪首宇濂之督教令、曰志軍唐、
島津氏之為敵者尚矣、丁、太守修理大夫義久公之匪、
欲逼我有上、由此運策漸漸犯敵地、天正五年丁丑季冬、
率軍來迫我軍、一早已陷、則諸營共不得支、義精速去
豊後矣、豊後太守大友氏流逐於伊東氏之旧地、謂冉入伊
東氏於故郡、天正六年戊寅冬、率勇肥後兼六州之大
軍來、開我日州高城、未嘗有勝利、反合敗北失騎去大半
之凶矣、島津氏雖得大勝、惡感之不止其憤未敢止之際、
依、織田上總介信長卿之命、縱其情止鋒鏑既和平矣、
雖然大友氏勤役為津氏所領肥後、日向封疆者我不知之
乎、此歲天正十四年丙戌冬冬之、義珍為大將曰肥後向豐
後、相從副將、騎將、島津左衛門督義久、同二部次郎忠
隣、同姓右馬頭征久、同姓圖書頭忠長、川上上野介久
信、新納武藏守忠元、同姓統助久時、北郷讚岐守忠
虎、樺山兵部大輔規久、伊集院右衛門大夫忠棟、同姓肥
前守久春、同姓尾張守政久、同姓尾張守政久、同姓出雲
守政近、川上左近將監久辰、平田田出守久信、府侍
助、白濱周防守、宮原廣前守、町田田出守久信、府侍
正忠兼寬、數根藤左衛門尉、大野權左衛門尉久高、伊勢
赤九郎貞昌都合其勢三万七千餘騎、自肥後之道路入豊後
之南部、十月廿一日、到于阿蘇郡野尻段諸備也、同廿一日、
攻城而獲敵首者數十、城亦乃陷矣、于時貞昌斬敵敵一
人、今也丁七歲而有此勇、請將無不感者矣、入出宗和、
志賀追迫者精心於策、而待是向之宗中、宛如大子之望
雲霓、以故宗和、追益引卒一千有餘從其進來途中、而為

指南矣、是以兼敵諸人宗和之居城、則松尾及島津之城皆
放火而退去矣、翌日迫于片加世田城無程人千、柏瀬
城人觀守兵也、一万田、鶴城兩城共降參矣、久多見城亦
入千、故人其城留帶之際、滑、瀧田兩城陷焉、津障軍
札城守、丁次根津守執員人迫瀧津者未陷下也、
天正十四年十月廿四日、諸將津障而平札城也、道益歸
子迫、其子小左衛門親次獲阿城稱病病死矣、其地險
峻、且有入河之不可從者、是以未法其城陷與否計議之
際、義珍統軍之士乘夜暗密進其城、則敵兵益以迫欲
殺之、退去極遠逸不能、而忽落于城陷死焉、道者入
山宗和、赤原守守之親戚也、故道價使曰、早可出質
幕障下焉、道歸稱其言相和矣、
島津中務大輔家久為大將、山田越前守有信、吉利下總
守、十持左馬權頭、伊集院下野守久治、同姓美作守、本
田下野守親貞、上井伊勢守兼兼為副將、酒、一万餘騎自日
向封疆陣山入二、近諸諸軍村舍悉放火去、而臨強方
城以設陣備於難東、使前鋒弘除港向敵兵、道價使於南
都決許、而後家久之隨兵營因三軍、年滿、義珍之從軍
領遠歸營於城矣、
先是、太守義久公使文之和向、鎌田刑部左衛門尉九州
於、殿下秀吉公、公曰、聞九州過半入島津氏手矣、今也
可去與我、豐前各半國、城後一因於大友氏、又去肥前
一因於毛利氏、可為旗前一因於公、此外可寄高津氏、
宜答此言速為和平、然則去歲七月以朝、刑部左衛門尉再
可參濟、否則秀吉將得七月可免同、薩摩諸將聞此言、
有言曰、九州之地不瀆于上焉我太守可乎、不然則兵革啟
可停乎、增益軍威修練下、所以破却豊後半國也、丁此
之時、小寺官兵衛尉督督也、仙石樵兵衛尉、中國之毛利
氏、奉分割國部之旨下向瀧田、仙石氏被逐後而起焉、

小寺氏、毛利氏河渡邊前欲分國之令。而筑前州之土城井氏、長野氏、秋月氏、高橋氏等心服於薩摩，而不贊於小寺氏。仙石氏之言，薩摩請將彌增勇氣矣。大友左衛門尉義珍逃亂飛散，身休驚蹙不知所防禦之道。而與仙石氏俱未於豐前，而讓權於府內上原之旭矣。

十二月十二日，大友義珍、仙石權兵衛尉、上佐州之長宗我部彌三郎、奈信親、讚岐州之河平人佐政宗、尾藤善右衛門尉等半太早到年滿，侵中務大輔家久之陣，當其友已接之時，屋敷奈信親、攻奈，則敵軍敗，而仙石氏、尾藤氏等幾保微命分散不知其所之，而況於半平乎。逃亡遠北伏屍者不知幾百千也。義珍退去雖入府內城，家久乘勝利猛進，義珍懼其勇氣也，不為一戰去府內城道高崎城，以故家久不血刃入府內城，亦陣軍成。義珍不轉臂又，又去高崎城出奔豐前州備上矣。

義珍在津備半札城之際，三五軍衆得勝利，聞入府內之幸事，則我之諸將半日，達到于府內。半日，往于府內，則南部如之舊手，且復秋月三郎轉奏有暫假使廳以為警備日，所露早免向次球部，故大遠近悉以破却，則既許秋月氏幸事，高橋氏亦不去酒地，可謂軍家於孫云尔。義珍則家議二棟，而米得先後之定方所，又招諸將欲決可否，而群議區區而不能也。於茲乎，實所疑于神策，而依善策十一月廿二日，人道益之居城，則白仁之志實迫連亦降參也。一乃而、滑、瀧山之城共以陷焉。岡城主志賀氏祿虛刑不出頭，然而先以播之。十二月廿四日，換降於朽瀨也。

一三 島津中務大輔家久請

豐後州之太守大友左衛門尉義珍懇於我國者多矣。我之太守橋本景慎無所敬欲，由是天正十四年丙戌十月，他日

向大隈薩摩肥後其後已下所領之軍衆，赴于豐後。兵庫頭義珍主領三万七千餘騎，自肥後對薩摩向南甯。家久領一万余騎，險梓山之險路，其山下佐伯之內有古泉，攻之忽以陷焉，而入三重城。陷松尾城，云三重市人有將紹把者，子孫一族繁茂，滿金銀珠上於倉庫，輸米錢財蓄於宅中，齊聞四郡貴賤士卒大半喧譁之言，是以先是家久率將他長田播磨、田中筑前為白浪往三重虎島崎，于此時也，既望時々入紹把之宅酒為知音，而後密語曰，若我太守遠道同之謀有免軍來，則幸一族家臣呼播磨、筑前而連理來，

作款因榜木以界之，堅盟約納餉後來，而兩軍掃去矣。今度欲攻松尾城，則紹把卒一族子孫家臣已下，軍食盡聚以迎我帥，故不勞而入手權也。其後陷小牧、野津兩城，爰月牛島者大友左兵衛尉義珍居城，而藤田入道レイ能在于此，岡之城主志賀小左衛門尉親次，父子人道近雖其未降旗下，而為逆路之障，是以遣中妻右京亮及高知足十宗，予之旨等守小牧城也。府內近所有杉利瀨之城欲陷之，而卒多勢進城下外郭已以破却，此時家臣出中筑前逐戰先矣。我軍不去城下者一向日，城衆宛知難為，故敵兵窮困，而無兵衛請和出買，移時刻之際，十一月十二日，大友左衛門尉義珍、仙石權兵衛尉、上州長宗我部彌三郎、奈信親、讚岐州十川軍人佐政宗及尾藤善右衛門尉已下欲為我軍陣之後次，引卒大軍鳴鼓鎗末矣。我陣不免一信遊于林間宛以無人，故敵兵爭先以渡大河入城中，悉掃所積用之存期，

指我之軍衆免於林間，對太軍以鏡戰，初也上方之兵有不可奪之勢，終也無一人之操十軍者，不願河滿任足取者，或瀧光川流，或脫甲冑槍兵器躍去，追亡逐北，高田者限里門，府內者限祇園川，伏屍者不知幾百千也。此時討殺奈信親、政宗、則仙石、尾藤兩輩幾保微命逃散不知其所之，其後府內近所有杉庭岡占領，入其堡燒著火，終夜叶氣，兼空海濤，蔽甲冑棄身休，而乘勝不厚勇氣有奈義

領開關，徑捷威也。其夜將府內退高崎矣。家久不血刃，而回十二日入府內，則義珍去高崎，而向豐前龍上以奔走也。如此聞彼此之勝虜，則朽瀨奈亦降于義珍士之旗下，故義珍主將降於球珠日田，家久越年於府內，進來舉於異鄉播磨觀我萬矣。

四 樺山忠助請

天正十四年丙戌十月十五日，薩摩率大隈肥後軍衆向于豐後也。肥後口之大符者，兵庫頭義弘主，率二万七百余騎攻入南郡。日川口大符者中務大輔家久主，率一万余騎討入十二軍也。忠助者為家久之從軍矣。南部者岡之城，三重者丹生之島城，唯依地利所以鞏固者亦不嚴，故不得陷耳。夫豐後軍已敗矣，是以大友不可敵于我兵，蔽隱知之乎，請救於將軍兼秀吉公、秀吉公応諾，而仙石權兵衛尉、上在岡守長宗我部右衛門三郎、十川軍人佐政宗為大將，右者于豐後府內之間，府內近所有杉利瀨之城，家

久主為大將會作城，已破下梯，只上威擊固不嚴，吾軍取求退，俟擊勢之到而為後援，于時大友左衛門尉義珍、仙石權兵衛尉、長宗我部右衛門三郎、十川軍人佐政宗來，而欲利瀨之為名，吾軍馳城壁之數戰，漸欲勢疲川以造城要之時為佳期，而各軍向畿內文戰，京勢初也欲穿鐵壁，終也散走，而不願河滿而府內者多矣。且亦討捕於長宗我部、十川，限於高田是門，府內者限於祇園之川原，進已逐北，就中京勢之敗走，雖吾之欲捕，而本吾有可比類之事，

味方以袿庭園之古城精一陣，燒燬火燭同言，十一月妻交之海濱口或武，手足足以死冰寒，雖是勝軍之攻，無一人之留氣者，地下者亦與京軍俱退移府內逢去軍，故味方即入府內者也。南部亦朽瀨其屈下，是以折配丑所

所入千裏也。家久主於府内爲越年也。

一五 樺山紹銀日記

天正十四年丙戌、藤原日肥侵備數千騎後後押懸懸、先日州口之者中御大将、肥後口には武座榊御大将、義久様八日州迄御出陣候。然者南部には岡と申候城、三重口ニハにうの駒と云城こたへたり、其上こたへたる城も有し、從軍者、大岡様大友、御加勢也、然者爲大智千船権兵衛・上佐之回に住人長曾我共以同心合渡海、府内と云城ニ勢備して有由聞得けるに、彼府内近き利濟之城を、中書大将にて責成成けしに、下城仕法、上城計三而敵こつへける、其施しかと責成、定而京衆後委仕候下、其時、戦可有とて一兩日待処、城今又入質を出し、時刻を延引する処、見次之衆如某段のおそむる、先大友殿・千石・長曾我部三手之衆、川之向を跡方までとりつむ、雖然城壁之敷之藁に壓まり居る、川を渡し城衆江取合、京勢竹々川渡取時分、能此とて打出及合戦、京勢初之儀勢にも不似跡立て、運瀬共不云道はめられ、高田と云城之城門口迄寄付、府内者都之御同之川原まで追責、中(一)京衆北軍之爲体難紙面、一日侵候而次之夜、京衆・地下之者跡先三府内を去る、其間身方八延回とて城今声懸る占城に取籠て、善を焼吐氣を作り、此八十二日、ミそれまじりの薄雪に手足水ニ難被閉籠、勝軍成故いさみの、しる、次夜敵府内を捨て逃行之間、府内江打入也、此等之出村枿方申入ける間、武座榊御知行三箇、總御助すひ田安と云所へ御座を直されける。

一六 島津世録記

太守思征伐後日、大友種我我國甚難忘、昔越上勾踐不忘会稽恥辱、臥薪嘗膽十年教訓、終雪券於吳、燕昭王遺思子会昭人所歎、之之、卓犖以智以招賢知、乃執仇於齊、白古男子如有讎敵、不共戴天者衆矣、夫陳尸大陣日向三國日右大行朝朝之時我家領帶之地、故撫運國安堵治民、遠近貴賤無不來附、庶乎不失以大平小之礼法、而日州伊東背我爲敵軍我地、故以救乱誅暴之其討之、彼勢御運之際敗走豐州、及天正六年戊寅冬、大友欲投伊東還之於故郷、率兵來襲我日州新納院高城、而反侮敗北半失其軍、而今固有新設、征伐之謀於前岡白秀吉公矣、先彼策不伐之異坐而待之乎、遂欲催榮兵之時、肥後八代之資田信忠守、高橋駿河守馳价曰、豈後岡入田宗和・志質道益背大友、因、太守、有報我怨之志、於是、義久主以爲幸也、乃召武座守忠元曰、可致魯後征伐之志計、忠元承其命、遣仙籠坊於人田城、聞背大友之志、而遣御船之兵助承及忠元之陪臣中馬源承者於其城試武矣、故吉良甲斐守、阿南助解出次官兼見兵陣頭義弘主、其後遣橋本右亮亮、中馬源丞於志質城、而志質之兵以大塚右馬助、新野介、仲降降之、因茲野村與三右衛門尉者忠元之信臣屋崎彦兵衛尉、中馬源丞納兵直進法之針於志質城、而及天正十四年丙戌十月、義弘主爲大將向豐後、相運運來者、弟左衛門尉忠久、川上三郎次郎忠勝、從弟右馬頭征久・岡田縫殿助久時・川上野分守忠久・信納武藏守忠元・岡姓越後助久時・北郷謙吉忠虎、樺山兵衛尉太輔規久・伊集院右衛門大夫忠棟、岡姓肥前守久春・岡姓筑前守・鎌田尾張守、岡姓山雲守政近、川上左近

經殿久辰、平巳新右衛門尉、大寺大炊助、白濱周防守、宮原就廣守、町田出羽守久倍、肝付強正忠兼寛、數損藤左衛門尉、大野権左衛門尉久高、伊勢守久郎貞四、都合共約二百七十百餘騎、向肥後之境討入于豊後之州南部、同十月廿一日、到阿蘇郡野尻波陣、同廿二日、臨高城之時、得敵百數十、貞高年十七而斬得強敵一人、義弘主感其不淺、入田宗和・志質道益赤心降座、而待之如大朝臣之禮矣、於是宗和・道益引率強兵千有餘衆爲指南、乘夜入宗和城、松尾親及島嶽城皆陷走矣、厥後連津簡幸礼、城主戸次源三、守城、同廿四日開其城、宗和・道益以策、源三下城、同其城頭義弘主入津簡幸礼城、道益頼子道理、而高岡兵車頭義弘主、共地險後、日有大河之不可徒渡者、故評議未決之際、義弘主執鞭之士率夜乘登其城、乃當敵兵追來而欲懸壁去、而不傳忽陷于城四死、道雄者宗和・赤星衛中守親成也、故誦遣使出質、道輝成其言相隨突、太宗義久王亦在軍中、先自赴日州之境二城、暫駐於垣下、以中務太輔家久爲大將、山田越前守有信・吉利下總守・上野左馬頭、上井伊勢守覺兼、其外人數一万余騎、除伴山世三五五等之謀放火、而後下野守・秀作守、本山下野守、伊勢守平兵衛藩方城、則家久精陳於懸東寺、使前鋒掃其運來強敵、誤於南部之大智、義弘主、而家久之隨兵營圍二重、年滿、義弘主之兵鎮護御嶽營城、先是、太守義久主使文之節尚、錄田刑部左衛門尉許九州於秀吉公曰、大岡降、并肥後半園、豐後半園、日向半園爲島津之十地、日向半園許伊東、豊後前後肥後半園又添後後賜大友、肥前一岡岡田宅利、筑前一岡爲秀吉公之公領今已定、而將楊文之和尚、刑部左衛門尉之際、此事已聞於薩、薩將有云、九

引計り也、扱こそ可なり細と御方の軍兵を稱て、御願所上意を請、人質を所望して、翌日御陣に打廻ら、其後八坂次が参上も事ならず、世上を捕ふ計也、事を左右三指延て、九思一語此時と雖兵送も才覺す、其頃八天正十四年^{丙辰}十二月廿二日、御太将武庫様を遣易之居城へ奉申請、無別御備仕合間一日之御兵儀にて、同廿四日ニハ、御陣易を被成宛九多細か居城を繰おろし、御大將軍本申請、御供の軍勢も一回三被陳取云々、

一八 勝部兵右衛門勘吉

一去程に同年十月十四日に、太守佐佐藤虎島を打立、日向口へ発向し玉ふ、大將ニハ中務大輔家久・岡野頭忠長・豊後守久親、其外一家他家の大名都司諸外城地頭職の人々、物見兵糧用意しておもひく打立、其勢一万五千騎、美久ハ千騎計にて二庄のことと赴、遠見三暫く相控居へハ、龍軍ハ皆々縣・阿津佐越して三庄に打入、日太諸方の城をも攻落し、頓由成満へ押寄着陣をそ被成ける、去れハ大友義棟・千石権兵衛尉八府内の上原ニ陳取備へ、薩^{サツ}勢を相待れける、家久成満へ陳取御軍を蹴散んとて、同十一月十二日押寄らる、薩軍勢、家久を始諸軍兵跡しき部人ニ相合帥せん事、今日そ軍のはれ成へしと坊唄り合、誠ニはけしき師也、千石敗北となれハ、四国の長宗我部を如一千余騎を滅けり、其備府内へ乱入とす、宗麟入道も府内を出、高崎をとり、豊前の鹿^カ如く行玉ふ、丹生の船即押寄相載ふ、柴田入道義翁直前ニ進て相働ける程ニ、慈胤尼三成、伊能加月後・阿子新三郎合戦す、義翁入道深人しける処を、濱田民部左衛門尉此間預して不知、肥

後口大將ニハ兵糧類志願、前吉松陳の折節を義久の御執子と定り玉へハ、忠平を改て義隆と名義玉ひける、左衛門尉義久、薩^{サツ}守義茂、其外一家他家諸外城地頭職の人々、其勢一万余騎、南部さして打て入、右馬頭幸久ハ、肥後ハ諸國の中成間、可然人御座ますへレトて、八代ニ御在番とぞ聞えける、庄部の入田返町、志賀の道喜ハ兼て薩軍へ申合たり、内々符得て慰たりけれハ、先入田の領に入らせ給、同廿一日、高城を攻落し、又入田のことく立かへり、其後即松尾の城高嶽をも打捨落行けり、やかて津賀牟礼の城へ押寄玉へハ、口概源^{ミナモト}にも下城して、薩^{サツ}方へそわたりける、岡ノ志賀根^{シゲネ}並ハ代官を差出し、我身ハ虚勢して未參陣不申、口概の志賀入道ハ早急そ参ける、一岡山も下橋を攻破られ、薩^{サツ}参して城を薩^{サツ}へ渡けり、那女利、灘田も攻落て薩^{サツ}軍勢打入ける、久田も薩^{サツ}参とて参られたり、玖珠衣も頼^{タカ}三郎^{三郎}番を申請られけるほどに、川上上野守・町田出雲守、新納武藏守など如玖珠打人らる、野上・喜江・江良、切頭も早部下に参ける、小田の北の思も参らる、

一九 日向記

一四年十月ヨリ亦豊後入卜定、美久ハ日向口ヨリ南部打人シントテ、五百余人ヲテ三城ノ如被越、美久ハ遠見ヨリ控テ、嶽山ヲ至テ打入大將ハ家久也、兵糧頭ハ吉松陣ノ時ヨリ義久ヲ養子と爲シ、忠平ヲ改義弘ト申ケル、肥後ヨリ打入大將ハ兼て、都合七万余人ト上ケル、南部ノ入田殿、土賀直道兼兼テ薩^{サツ}方へ被申合事ナレハ、内々符モウケテ御在ケル、十月廿一日ニ高城ヲ攻

落し、頓て其後入田領ニ打人玉テ、同後此城も唐退、島嶽モ如其也、津賀牟礼ハ押寄玉へハ、已ニ口次ノ深見ニ下城ス、雄原ノ志賀ハ名代ヲ差出し、吾身ハ作シテ參陣セス、シカ子ノ志賀ノウシモ早味方ト成テ、一万田モ下城薩^{サツ}参也、ナメシ田はモ攻落陣ノ番衆人、朽網モ薩^{サツ}参、家久ハ無程三重知行、諸方ノ城ヲモ詰落ス、其後復光へ押寄、向陣ヲソ付ラレケル、

二〇 日向記

一夫及宗麟天正十四年内茂上落シテ、日向高城敗北以來島津家ヨリセハメラレ、肥後肥前兩家モ薩^{サツ}方ヨリ被押取事無念ノ至極、依秀吉卿ノ猛威ヲ仰、大友家残ル様ニ佐玉ケリ、依其御領津有ケル時勢、薩^{サツ}方ハモ鎌田刑部左衛門尉ヲ部ニ登^{ノボ}シ、戦功ノ佐言ヲ被申ケル、然間秀吉公被仰出ハ、大隅薩^{サツ}ハ元ヨリノ儀、肥後半因・日向半因編津知行タルヘシ、亦日向半因ハ伊東民部太夫祐兵三遺前一ハ、豊前・豊後・肥後半因ハ大友知行タルヘシ、肥後ニ一國ハ日向毛利方へ還玉シ、榮前一國ハ都ヨリ御公領タルヘシト被仰下ける、然間使者トシ、九月十二日、千石権兵衛尉ヲ先發後迄差遣さる、土佐岡長督我部第三部・齋藤、讃岐國十河軍人佐政泰・尾藤長右衛門尉以下取衆來、其沙汰ニ及ト云トモ同意ナシ、豊州口へハ黒田官兵衛・小早川左衛門尉降原八千余騎ニテ、同十月下旬、豊前岡崎ナトケレントシ玉へハ、薩^{サツ}方衆ハ筑前岩屋打出懸ケレトモ引入ケルニシ玉へハ、水野・秋所ハ高橋一宮ニ嶋津方ヲナシ、一揆特起シ、宇高津ノ云所へ差出雲ヲ降、灘路ヲ取切タリ、向人相議在、十一月五日、遠寄三切テ掛り要

イキヨ休メントヤ思ヒケル、五ニア三引退キケル、
鴨津中務少輔家久ハ利子屋ト云九山ニ陣取テ啓ラレ
ケルカ、軍頭者シトノシテ諸勢モ而任セハタラキ
ケルハ、番頭者ノヤヲ召寄せ謀メ申サレケルハ、阿津
山ヲ若越テ當国中迄発向セシ事ニ、酒三向フ者、人モ
アラサレハ、軍勢キホヒカ、リ、門軍ノハタラキ令度
向度ノ不覚ニテ、敗軍以外ノ事共也、軍法ノ據ラソ
ムクマシキ由、諸軍勢カタク下知セラレルヘシ、軍ノ
評定シテ七日ノ早朝ニ城攻トフレ渡サレヘシ、軍法ヲ
破ハ驚ハ何程ノ高名共、身ノ助氣ハ申ニ不及、子々
孫々迄大事タルヘシ、軍ノ不覚有之者ナラハ、國家
大事是ニ不可過、軍ノ手初ニ是程ノ小城ヲ攻カネテハ、
世間ノ人口モ恥カ、リ、先年日向國共々由ニテ
豊後勢ノ不覚ハ、時ニノソシハ、大將ワロカナリ故ニ、
旗頭之輔キ我カ體ニシテ敗軍シタル事眼前ナリ、殊威
ハ戸次伯耆守カ在城也シカ、筑前國へ、越中国西國ノ
押ヘトシテ、大友代官ニ立花ノ城ニ在城ナレハ、サシ
テノ強敵ハ龍城スヘカラス、由、ノ大友家頼二小身
ノ旗コモリキヲト聞エシ、大將ノナキ軍ハ思ヒ〱
ノハタラキナリト、

去程ニ大友義統ハ豊州ノ由津久湊ニ塞過セラル、義統
ハ同國府中ヲ城ヲ落テ豊前國云走、評定マラサリ事ナ
レハ、味方ノ軍兵ヲ能キハモ一モミニセメヤリ、其
イキヨイニ府内へ発向、大友・仙石・長曾我部ト
一軍連ント、聚評ツカカテ一旗ノ番頭アララタメ、
一番備ハ伊集院美作守ヲ大將ニテ、与力ヲ軍勢五千余
キ、二番備ハ新納大膳正、其勢三千余キ、三番備ハ木
庭主税助、其勢一千余キ、
鴨津中務少輔家久ハ都合八千余キニテ、番子ヲ四番
二組テ、物見ノ夜ハ酒漣川豊前兵衛、相良民部左衛門、

兩人ニ足輕六十余人サシソヘテ、家久ヨリ下知ヲ請テ
躑躅ケケリ、口火利光務カ城ヲ籠籠ニ軍勢七百余キ、男
女老若共ニ都合三千余人ヲ聞エシ、薩方ノ來ノ手草
評定ノ沙汰ヲ城中ニ内通ノ者有レハ、七日ノ路ハ一
日ニ討死ト思ヒ定メ、女ウラハ歩者共ニ一命ヲ賭スリ
ホト云不慣、薩方勢ト合戦シテ討死ト相定メ、兵具ハ
申ニ不及、竹ヤリヲコロシテハ、木ノキレ、千コロノ石
ナト取集メテ、夜ノ明ルヲ待被テソキタリケリ、薩方
富手備ノ声ヲ相聞ニテ、物ノ具ヒシクトサシカメテ、
テンテニタイマツヲトホシツレテ、先陣ニ伊集院美作
守五十余キニテ城下ニ押ヨセ、マタ夜モ不明ニ時ノ声
ヲ上ケルハ、番備新納大膳正、千余キカラメテミナ
ワリ、是モ時ノ番備合ケル、天地モヒ、クハカリナ
リ、城中ヨリモ七百余キノ軍兵時ノ声ヲ合セケリ、寄
手ノ軍兵共大勢ノ事ナレハ、此城即時ニ攻取ルヘキト
オモヒ、我モ〱高名分トリセントテ、イサミサケン
テ取上ル、城ノ内ヨリ徳丸伝八ノ加藤兵庫介向入、陣
ニ懸出、其勢五千余キ、討テ一面ニ向テ鉄炮ヲハナシ、
弓ヲ射サセ、矢口ロハ近シク欠エナク、寄手ノ兵共
十四五キ矢定ニ討死スルヲフミコエ、是ヲ舉共者
一、騎打ノ上レバ、殊ニサカモキヤラ大石大木
キリカケテ上レハ、輾重垂キ墜落ヲ高先ト上リ
カ、リ、ヒルム所ヲ講長刀ニテツキ通シキリ伏ル、視
面ニ伊集院方手ノ軍兵六十余人討シケル、城中者共備
手ウスハ負ケル共、討死ノ者八十餘キ、ツメキ叫
テ戦ケル共、薩所ナレハ富手ノ討死計ニテ、頼ク可攻
共共不足ケルカ、引也ニ見テ上リ兼テ有ケル所ニ、伊
集院美作守サイハイマカシ、ツ、ケテ下知スレハ、後
陣ノ兵者面モ不振取ル、要害カシコトイヘトモ、
城中小勢ヲ散ケレハ堀溝ニ攻近クサ、鉄炮ニ弓ヲ放チ

アタ矢ニナク討ヲタス、寄手ハソレニモ不覺近ク、
アマリ無謀攻迫ルハ、弓、鉄炮ニテ可防様モ不有ハ、
薩、騎手ニテ外カハノ堀ヲ破ラントスル、既ニアヤ
ウク見エケレハ、男女老若ヲ不憚、竹ヤリハ下石小石大
木小木ヲナカケテ、落シケレハ、寄手ハ下打ヨリ上打
ヨリ上打ナリ、大石ヲ、先陣後陣ヲ去テ打コ
口サル、者モアリ、騎手薄手ヲ負テ半死半生ノ者數ヲ
不知、寄手ノ兵者心ハ猛ク思ヘトモ、木石ヲ打テ大死
スルヲ、心ウシトテ攻アクミテソ歡キケル、只、時一
時ノ間ニ寄手ノ軍兵手負人数ヲ不知、寄手ノ兵者叶
ハシトヤ思ヒケルニヤ、大干擲手ノ軍兵八千余キ、大
將ノ下知ニ任セテ五町計、度三引退キ、人馬ノ息ヲ休
メケル、其後伊集院・新納・本庄・大將 家久ノ
軍勢アラ手人替々攻ケルカ、七日ノ早朝ヨリ十二日
迄、意モ不絶攻戰ケレ共、城中ノ小勢一度モ不覺ヲ口
ス、キホヒイサミテ、^破破ケリ、城中ヨリ八木石ヲ投
シ、茶臼石磨ヲ投尽シ、已ニ攻破レント見エケルカ、
アマリセンカテ無テ草履ヲトリコホシ、タイマツノコ
トクニタハネテ、テンノ二火ヲ付テ諷花ノ如ク投カ
クル、イク千方共不知レ投カケルハ、ホノムセヒ當時
ニ死スル者ハナケレトモ、攻ワツラヒキテタリトモ、
城中ノ軍勢毎日數重レハ、小勢ニテハアリ、戰ツカレ
テ懸價ハ愛ニ完マレリ、薩方ノ軍勢共、五日ニ番備
シテ、七日ノ日ヨリ軍シテ一度モ勝利ナカリケレハ、
寄手モ味ノ手自死人大勢ニテ、氣ツクレテソ見エン、
長曾我部止佐守戰ノ事、
去程ニ口大斷カ城ノ合戦難儀ニ極リ、頼テ落スヘキノ
由、大友義統閉玉ヒテ、加勢ノ人数ヲ指遣ハサレ度思
召ケレトモ、數代ノ御家頼大勢小身ノ中ニ一心ヲサシ
ハサミタル仁有ケレハ、此大將ヲ見ナカラ、ヨソ聞シ

タル有様ニテソ居タリケル、而上使仙石・長曾我部ハ大岡様工嶋津方ヨリ注意ノ趣ヲ奏請ニ上セラレケルトモ、口次ノ城ノ東邊ニ及ビタル由ヲ聞玉ヒテ、大友味方ノ軍勢ヲ案内者トシテ、兩人大将ニ都合其勢六十余ニテ、戸次川へト馳向ヒ玉ヒケリ、十二月十二日ノ早朝、戸次川トテ大河ノ有ケルヲワタシ、山崎ト云所ニ出張シテ、一因ニ嶋津家久公ノ陳所ニ攻入ント來許シ玉ヒケリ、中務少輔家久公ハ爰社政所ヨト思モ、軍勢ニ下知セラレケルカ、今日ノ合戦ニ家久ニツキテハ、上使ニ托向ヒ仙石・長曾我部、是非共ニ戦死ト相定タル也、一万八千余キノ軍兵共、一人モ生テ本國ニ帰ラント思フヘカラス、其敵ハ只今、義久公ハモ其趣ヲ云道ス也トテ背札ヲ認メ、河上半蔵ヲ使トシテ、刻モハヤウ陣内へ參着スヘキトテ、家久公ハ今日ヲ最後ト思ヒ定ラレケレハ、ハナヤカニ出立テ諸軍勢ニ下知ヲセラレテ、相定メシ軍法ヲ破ルヘカラストテ、元ヨリ番帳ヲ前々ノコトク三段ニシテ、十二月十二日ノ明ホノ、ワキノ津留ト云所ニテ、五ニ時ツクリ失合シテ合戦初リシカ、イカ、シタル事ニヤ、一番備ノ伊集院方軍勢、シハシ打入テ防戦シケルカ、上使ノ軍勢ヲラキナレハ、攻立ラレテ利光ノ村中ニ引退ク、上使ノ軍勢キホヒ懸テ、逃ル軍法共ヲ進テ分進高名ヲソシタリケル、嶋津家久公ハ味方敗軍ヲ見テ、手ニアセヨニキリ、ハカミヲシテ、ハヤカケ出ントシタマヒケル所ニ、一番備ノ新納大膳正都合其勢三千余キ、サカノ口ト云所ヨリ東山ノ高キ所ニ馳上リテ、敵味方ノ備旗色ヲ見ケルカ、ヨキ時分トヤ思ヒケル、仙石・長曾我部ノ本陣ノ境シキ所ニ只一向ニ攻カ、リ、千死カ一生ヲカヘリミス、今ヲ最後ト攻戦、大将軍 嶋津家久公ハ津留川原ヨリ一面ニ責カケル、

二番ノ木庄カ軍勢モ一ツニ成テ戦ケリ、敵味方ノ軍勢都合二万四千余キカ人乱レテ、火花ヲ散シテウメキ陣テ度シハ、天地討死ス、ク計也、只一時ノ時計ノ合戦ニ、敵味方二千余人死スル、長曾我部ニ佐守信親心ハヤク大將ニテ、アマリ深入シ玉ヒテ、命モ不惜而モ不振、手捕カ責戦ケルカ、袖手奪取致所ヲ玉ヒテ討レサセ玉ヒケリ、而上使ノ軍兵都合六十余キ、而ニ德向ノ命モ不惜而モ不振責戦ケルカ、多勢ニ無勢ニテ、カケ合ノ合戦ニ、レテ力ニ不及引退ク、仙石權兵衛秀久心ハ猛ク思ハシ、味方大勢討死シ敗軍ノ川ヲ渡シ、府内ヲ指テ引退レ、五六十計ニテ四ノ中務少輔家久公ハ其勢ヒニテ、府内ヲ指テ攻込ク、大友左衛門督統ヲ御内ニ吉弘加兵衛尉統行ハ、此山ヲ開テ手勢三百余キニテ、物具ヒシノ下カタメキ、シ河原へ出張シテ、高敵ヲ待カケシカ、麓方ノ軍勢類ヲ津留川原迄寄來リケルカ、吉弘力出張ヲ見テイカ、思ヒケルニヤ取テカヘシ守、岡ノ古城ニ取上リ、其夜ハ野陣トリツ居タリケリ、上使大友兼相突向ノ事、仙石權兵衛秀久ハ長曾我部正佐守ノ子息ニ部兵衛尉元親、是モ父信親、所ニ陳ニシ、玉ヒシカ、敵カ所ノ手ヲ白玉ヒシカ、父ト、所ニ討死シ玉ウヘキトテスマレケレトモ、大友家頼薩門兵衛介ト云物、今度長曾我部信親ニ子ト同陣ニテ戦ケルカ、三郎兵衛尉元親ノ間近ク懸寄申ケルハ、軍ノ勝利ハ時ノ仕合ニテ候、大勢ノ中へ只脚、一人カケ入セ玉ヒテ、何ノ勝利カワリシマスヘシ、大死サセ玉ヒテ、何ノ益モ御座有間シキ事也、是引連カセ玉ヒテ、重テ御勝白ヲトケサセ玉ウヘシトテ諺メ申ケレハ、元親モケニモト思召

レケルニヤ、仙石秀久ト打ツレ玉ヒテ、府内へ帰陣シ玉ヒケリ、夜ニ入ケレハ、吉弘加兵衛尉統行ヲ宗像掃部助・大津留河内守方ヨリツカハシ、ヨニ番子内談シケルハ、中務少輔家久公ノ事イキヨイ懸テ、夜ノ明ルヲ待兼テ夜中ニ改來ルヘシ、當時御旗下ニテ御人數三千余キニハヨモスキシ、吾々手勢ヲカリ加へ申共、五千余キニハヨモスキシ、嶋津力大軍ニ懸テ軍、危事也、今端当城ヲ退カセ玉ヒテ、高崎ノ城ニ御座ヲウツシマシマシ、幕前演後前ノ御勢ヲ僅シ玉ヒテ、重ネテ大軍ヲコシ、嶋津ヲ師退治報スカルルニ、其直人郡ト大野郡ニテ、志賀・朽網・万田ナト數代ノ御内ヲシテ志レテ嶋津ニ相隨テ、御当家ニ至テ逆意ヲ企テ、弓ヲ引矢ヲハナツ上ハ、其外両郡少クノ上卒迄モ、志賀・一万田・朽網等カ下知ニ隨テ、嶋津方ニ身スヘキ眼前ナリ、若又攻城ニテ、御旗本ニモ逆意ノ者ニ心ヲ台テ、嶋津ニ心サシ有者、彼矢ナト仕ニおキテハ以ノ外ノ大事、是ニスクヘカラスト評定シテ、大友義統公ハ委ク言上シタリシカハ、実ニト思召シケレ、大友義統公山田兵部・田比六郎ヲ寄留セテ、此出ヲ上使へ仰合サレテ、其夜ヒソカニ府内ノ城ヲ退セ玉ヒテ、上使ハ別府ニ懸、カナ越ト山ヲ越サセ玉ヒテ、山番ノ口ヲサシテ豊前國妙見岳ノ城ニ着シ玉ヒケリ、此城ハ田原紹忍力代權、原守兵衛尉親盛トテ、大友義統公ハ弟ノ在城也、大友義統公高崎ニ登城シ玉ヒケルカ、又宗像・大津留・吉弘内談シケルハ、此城ハ大友先佐判部大輔氏時ハ若地肥前守ト合戦ノ時罷ラセ玉ヒテ、師進ヲ上ラカセ玉ヒ

運送不自由加ヘシ、豊前國上田原船念カ居城ナレハ、
遠路ナカラモ御越境有ヘシト云里テ云上シタリ、勢ニ
テ龍王ハ開カセ玉フ、御方ハ白仁弥助・石合武助・敷
戸九兵衛尉聯合テ持奉行ニテ、御近所へ御供仕リケリ、
大津留河内守ヲ勢百拾キ、其内五拾キハ引分テ、己リ
居城ノ松カ尾 番三指遣ス、我身ハ勢百拾キ、仕リ
ケリ、宗像掃部平介五十百キ、吉弘加兵衛尉手勢ニ
百餘キ、同第三川比平介手勢百五十拾キ、其外參府仕、
夕、軍勢御本都合其勢五千餘ニテ、ノ城置陣ナサレ
ケリ、 嶋津家久公翌日相良民部左衛門尉兩人ニ
歩行武者 百二十キ指遣、府内ノ有様ワウカ、ハセ
テ、其後天台寺ニ 奉寺トテ六坊有ケルヲ本陣ニカコ
ノセ、府内ニ在陣セラレケル、
医政攻ノ事、

天正十四年十一月十五日、豊後安向ノ御大將軍、露州
太守嶋津修理大夫義久公ノ御令弟 兵庫頭忠平公ハ、
新納武藏守子息右衛門佐ヲ先トシテ、其勢二万五千餘
騎ニテ陣ヲ打立テ、肥後通ニ同十二月十二日ニ肥
後國 志部ニ着シカハ、嶋津氏重頭忠平公・新納武
藏守・同右衛門佐、其外ノ人々ニ中サレシハ、阿蘇山
ノ社人城中ハ多勢ニテ、前マハ、ヨリ大友方ニ力ヲシテ、
五三他事ナキ心指トウエシカ、阿蘇郡ニ着陣ノ折遣
シ、ハレテハ然ヘカラス、謀略ノ為ニ備使ヲ指遣
シ高嶽山ニ下キテ、今度ノ出陣先勝ノ折持ヲ頼ノ山、
衆徒坊中押下社人ニ頼遣シ、一山ノ坊中社家ノ所存ヲ
窺見テハ、如何有ヘシトイハレケレハ、皆、同ニ此義
至極、シツハカラヒ哉トテ、日逗留シテ、昔川彈止、
加藤兵部左衛門ト云者兩人ヲ使者トシテ、色々ノ遺物
カタノ如ク拵テ取持セ、阿蘇山字頭ノ坊・宮野地神主
問所へ、嶋津陣廣大隅ノ大守修理大夫義久御方ヨリノ

音信也トテ、今度出陣ニテ豊後遺治ノタメ、同經兵部
頭忠平登臺向仕ラセ候、幸ニ大明神ノ御門前ヲ通過ノ
出、其義ニオキテハ、先勝武運長久御折持ヲ頼奉ル由
ニテ、兵庫頭ヨリ我々兩人ノ名ヲ進シ遣シ派出ニテ、
進物ヲサ、ケ、其外坊中社方ヘモ懸ニ進物ヲ音信シ
ケレハ、少ノ異義ニ及、坊中社人連衆是石七餘人ハ
嶋津使者ニ対面シ、一山ノ坊中社人連衆是石七餘人ハ
由請負、使名ヲ取持テ心及ニ馳走シテ帰シケル、佐
川・加藤ハ急キ帰テ、嶋津兵庫頭忠平公ニ云ケレハ、
大キニ悦ビ、 同十一月二十四日ニ阿蘇郡ニ着陣シ
テ一日逗留シ、嶋津兵庫頭公・新納父子ハ、神主ニ対顔
シテ、金五百兩ツマセテ、大明神へ御祈禱ヲ御初尾ト
テ參ラセケル、學頭ノ坊ヘモ山上ノ三池大明神へ御祈
持ノ初尾ニトテ、金五百兩遺シケル、相伴一軍勢一万
五千餘キモ思々ニ初尾ヲ捧ケ、武運長久ノ御祈持
頼山ニテ、社人ノ人々ニ送ケレハ、社家ノ人々ハ
前角ノ沙汰ニハ、儀ノ軍勢此所ニ參着、ハ、徒衆衆
雜ノ族多カルヘシト無心无思ヒシニ、思ノ外ニ引替テ
社家方ヘ音信多カリケレハ、悦ビ勇ム事限リナシ、
同十一月二十七日ニ、豊後國杵築ニ着陣シテ、杵築三
河入道ヲ陣ハ、頭領ニテ、薩ノ謀略ノ由通シテ嶋
津ニ一味ノ事ナレハ、少モ異義ニ及、嶋津兵庫頭公・
新納武藏守・同右衛門佐ニ對面シテ軍計定メケルカ、
同ノ城ニ志賀洞左衛門尉在陣シ居、ケルカ、
多勢ノ者ナレハ、府内へ出陣ノ後矢ニ射ヘキナレハ、
手初ニ攻亡サントテ、嶋津力勢二万五千キヲ二千ニ
分、一万五千キニテ、嶋津兵庫頭ヲ大將軍ニテ、十
二月六日ニ同ノ城ニ指回、新納武藏守六千餘キニテ攻
珠郡ニ登向スル、新納右衛門佐四千餘キニテ分都へ
向ヒケル、比ハ

天正十四年十一月二日、
嶋津兵庫頭同ノ城ニ押寄テ散々ニ攻戰ケル共、懸所ノ
山城ナレハ寄子討死ハ散々ノ知、サレトモ此城ヲ攻マ
クミテハ、マシキ事也トテ、覽手ヲ入替、 同五
日ノ日迄攻ケレトモ、寄子討死日々散々ノ知、高レケ
レトモ、城中ニハ手負モサシキ無リケリ、運ノ尽タル者
ハ自然鉄砲玉ヲ打リ死ル者計也トテ、寄子ノ勝利一度モ
無リケレハ、遠急シテ攻也トテ、軍兵少ハ残、テ、嶋
津兵庫頭公杵築ニ引退キ在陣シテノモタリ、新納
武藏守其外六千餘キニテ珠郡廻向、津ノ無礼ノ城ニ
賀茂・芝・小田・長野ナト云者共多勢ニテ籠城シタリ
ケルヲ、新納武藏守押寄テ、此城ヲ要寄ヲ見テ、人
間ノサシニテハ攻落シ難ク思ヒシ、サレモ時ヲウクリ
矢合シテ責敵ケレトモ、岩尾 三津テ立ノホリタルケ
リナンノ城ナレハ、寄子ノ討ル計ニテ城中ハ少モ痛事
ナシ、武藏守モ重テ智略モ有ヘシトテ、遠陣取テサ
リケル、新納右衛門佐久持ハ其勢四千餘キニテ分都
へ馳向ヒ、田比ニハ当所ヲ知行シケル、田比平介経員
ハ多勢者加ケル共、府内大友義統ノ旗下一ニ取トカタ
メテサリシカ、薩主義統ノ供ツテ指越ケルカ、
其アトニ田比平介経員カ養母家頼ノ老若共、松無礼ニ
籠城シテ居タリケル、城中難所ナレハ概攻落シカ
ク有テ、杵築ニ伝聞ニ上候イ可放ヘキ事ノナシト聞
テ、杵築三河守人道方力ノ者共ヲ分都内寄トシテ、夜
中十一月七日ニ分都河津内 内サシ越、夜ノ明方ニ
松カ尾ノ城ニ押寄、時ヲトツト作リケリ、城中ニ齋藤
將監 彼矢向轉ト云者ヲ先トシテ四百餘人計有ケル
カ、同時ノ声ヲ合セケリ、齋藤將監ハ鉄砲ノ遠寄ナリ
ケレハ、大手ノ木戸ヲヒラカセテ、大石ノ影ヲ頼ニシ
テ拍ヲ敵ヲ待キタリシカ、寄子ノ足懸頭ト見エテ、小

川邊部兵衛ト名乗テ歩武者二十キ計クシ、一陳ニ進テ
ルヲ得。テ坂ヲ登ラントスル所ヲ、矢比ハヨシ、
タメ付テ放シケレハ、日付ヲ追ヘス矢陣ヲ指テ、胸ノ
加ヨリ、通サシテ、タラス、馬ヨリ額ニ落ニケリ、是
ヲ軍ノ手初ニテ、城中ヨリ小野丸兵衛・東家平介・土
師弥七ナト云者七八十キ、面モ不振命モ不惜、爰ヲセ
ント、戦ケルカ、寄手ノ軍兵、ラレテニ、計引退ク、
寄手ハ大勢ナレハ、荒手ヲ入替ク、攻戦ケルカ、城ヨ
リ是ヲ見テ、味方勝矣、テキホイセリ、五十キ計ヲ見
出、新納右衛門佐久得カ勢五十余キノ勢共馳向テサシ
、三ツ戦ケレハ、寄手ノ軍モ責立ラレテ引退ニ見エ
ケルトコロシ、加波波大回轉ト云木ハ前方ヲ割シ三河入
道ヨリ内略ニテ、薩、へ祖テ後矢ヲ射ヨカシト云合タ
リケレハ、能納トヤ思ヒケル、城中ニ火ヲ、テ燒立タ
リ、黒煙天ニ充、北平ノ河風四方ノ山々ヨリ嵐ハケシ
ク吹ワロシテ、城中既に燒立タリ、寄手ノ軍兵共是
ヲ見テ勢カ、リテ攻メ来ル、籠城ノ老若男女老幼同聲
ヲケメキ行方モ弁ス、取モ
リケレハ、通ントスレ共川キシハ高シ、漲ル水ハ岩カ
ト大石ニ礙リテ激ナリ、瀬マクリ落テハヤシ、女軍部
老若ハ河ニ溺レテ死者甚敷ヲ不知、船カ尾ノ城落テ
火々天ニモエリ、爰ヤ彼ニ各城シタル大友方ノ者共、
是ヲ見テテヲツカテ氣ヲクレニ成テ城ヲ明テ落行ケ
ル、武蔵辻百ノ城・橋爪島鼻ノ城罷リシ軍兵ハ、船カ
尾ニ敵寄カケテ、岡鉄砲ノ首ヲ聞付テ、加勢ノ後矢射
ントテ我モノトハせ進ミケルカ、黒引ノ引立ニホルヲ
見テ、ハヤ落陣ト見エタリトテ、是ヨリ取テ引退シ、
老若輩部ヲ扶ツレテ、大津宿河内守領益カ在陣ノ松カ
尾ノ城ニ取籠ル、新納右衛門佐久持、武者ニテ有ケレ
ハ、船カ尾ノ城ヲ頼テ攻落シタルイキホヒニ、大津留

松カ尾ノ城ヲ攻落サントテ、同月ニ松カ尾ノ城ニ押寄
テ見レハ、四方難所ニテ、岩岸崎テ谷ハ幾干丈ノ深サ
共不知、船ナラテハカケリ難ク思ハレケレハ、矢人ヲ
モセテ取テ掃シ、其日ハ人馬ノ息ヲ休ントテ、松カ尾
ノ城ニ野陣取テソキタリケリ、明レハ狹間山城守頼秀
カ籠リ居タリ權現山ノ城ヲ攻メ破ラントテ押寄ケル
カ、是モ難所ノ高山ニテ、鳥モ難ク翔、人間ノワサ
ニテ力攻ニナリカタク、殊其身ヲ多勢取籠リ、
城中ニ人数居アマリキ、山ノ下ニ、キニフメカ城ト
テ有ケルカ、楯ヲ力ノ軍勢ヲ入道テハ攻カホキテ、數
日、過ケルカ、新納右衛門佐久持若武者ナカラ高智
ノ賢キ仁ナレハ、色々方便探聞山城・松カ尾ノ城高
所ノ城ニ大勢ノ敵ヲ居タリケレハ、無心元思ハレケ
ル、提能干芝義統公、供仕リシ宗徒ノ人数、宗像掃部
介頼繼・吉弘加兵衛尉頼行、其弟出比平介経口・大津
宿河内守領益、出比六郎経辰、白袴陣正統光・寒田六
之丞統政、斎藤助介・賀永半衛、秋岡式談、其外宗徒
ノ人々罷下治ヲ守護シ、敵ヨ同シテキタリケル間、
大野郡・直入郡ハ、鶴津ニ隨身シテ、志賀、左衛門カ
大友ニ無一ノ心指ニテ、岡ノ城ニ籠城ニテ居タリケレ
ハ、鶴津兵庫源モ朽網ニ籠ト在陣シ居ラレケリ、
大友左衛門義統前部主計引退キトヒ、シカモ其後岡
ニハ白袴丹鶴、三宗頼公御在城ニテ、薩、ノ軍勢攻
兼テ引退ク、佐伯権正カ城、岡ノ城・松カ尾ノ城・秋
津津無礼此城ニ籠リシ者共ハ、大友方ニフリハモノナ
心指、ナレハ、薩、ノ軍兵共無覺東思ヒケレハ、日
四郡・遠見郡・岡東郡是ハ引入カタクシテ、守ハ
朽網ニ在陣、鶴津家久ハ府内ニ在陣、伊集院兼作守・
白濱岡防守、新納右衛門佐久、佐藤ノ河内ニ在陣シ

テソ居ラレケル、由ニテ権現ノ城ヲ引退キ
ケル、船カ尾ノ、松計コレ加、佐波久力後矢ニテ頼
ク責破リケレ共、松カ尾ノ城・権現城、
一一 島津義久書状
讀到此境邊足候之処、兩口之諸城等任利邊候、為如斯
之祝意、使吉^ヲ致到采、懇志之段候候、然者從前
以御入魂之旨、府内表進報所聞、判下解・長宗我部
敗北之儀、自他國之旨大驚不遇之候、弥^ヲ殘党へ被討計
略候之旨、一差不可有程候哉、猶^ヲ細之旨百々寄可^レ達之候、
恐々謹言、
拾二月廿日 義久(花押)
入田後入道殿
一三 島津中務大輔家久書
家久在干府内感讀、後後半回已入干^ノ手、雖然諸將爭雄、
而不知所治敵國之思大矣、或雖進百尾手、然則絕根源記
前後進退無如之何、予不可無其謀、由是使樺山兵部太輔
忠助退三重守松尾城、乃天正十五年丁亥正月十八日、忠
助免於府内到於三重、表加新納經助・平田待野介之守
其城、所以通進之速因徒也、
二四 樺山紹銀日記
一中書は府内にして年を越候而、日出度奇の始也、忠助

八岩や城攻之時石打二合、從則涯崖底ニ打落されければ、此城直取らずして藤州衆圍運手難成、然ハ敵に打合戦死仕より外無別儀と思切つる間、起りりし心を々候ハね、又扉ニ付て貞親程ニ城手ニ參候、就夫兵候而、彼豊州人御当家の御一人名と存候間能立候、利滿此度之運をも見申候、めてたく候、先くいと申上編り候すと申て、正月五日六日比中書へ申候へハ、御用之子細有、今卒渡御居候へとも、十日比は御仰けるハ、豊州を鶴津殿御敷可有事不取覚候、其故ハ諸人物はしかりに打成候、分限を望心計にて、更子をたく事な、当又武庫様御手花無然々ニ付、あらそう様儀御気分、惣大將之御振舞ニ不成合候、是是事共候、伊十院石筋門太輔も感意地不可然候、我々も兎角申延候而城中度与中書被仰候、定而此分見及候半、午去忠助へ談合申候する事候、以一人可申候間、被仰候而平出伊賀守を御使にて、中書御意起ニ忠助を頼存ニ而候、三重口ニ御半候而彼所之番被入御念候得、其故ハ必間中へ押入候人衆長番不届候而打掃候する、其時彼三重を敢取切候ハ、無行方爲体美止之候ニ候へ共、今敢入此等之底意不知候間、日出助三重へ御坐候間、可然候する由承候、我等御返事ニ申候ハ、承候通一々合点申候、午去今日迄ハ万事日出度事計候之間、御昭と申候如し御意立御坐候而御被仰候、追而御返事申上候すると申候へハ彼候又彈込し米候而、早々敢御立立候得、一五ニ相思召由承候、又忠助此國之様子何と見申候哉、御談合と被仰候、其時御談合と候へハ、申事二名、御意之様ニ我々も存候、御油断右間候候身申候、其後高鳴越清使二て具足、茶番と給候而、又御内談共候、

三重へ番直し候間、彼所頼思召之由也、左様ニ候ハ、御意次第と申候間、正月十八日判滿迄能候而、次之日二重へ罷居候へ十九日ハ在郷へ御申候間、次之日松尾の城へ上り見申候、城ハ岸切通し候間、番や一ツ作候而、平川野見介殿に被居候、新納経殿助も罷立候、大丸之様成もの老人ヲ番上七候、城之傍又向て原ニハ、高屋衆とて地下衆七百人の衆と申候而罷居候、是を見申候、當こそ中務被仰候ける、今分二候へハ遠慮不入事と存候、経殿助殿野介中候、乍推參我かの上城へ移可申与申候得者、我々も左様ニ存候とて、家作並而轉而罷上候、如此候間合候へハ、城合近きハ六里、遠きハ八式上り、人数、百三、六七十、千三十三宛にて解たる在郷衆初皆撰ける、礼儀迄にて有ける人衆拾二テ所敵と成候、其中三小致といふ城、鍋田と申城二ツハ此方今人衆少々差懸被置ける、敢仕候や、さい木にうの島より野伏日々打廻候、松尾麗之人衆計未其色不見得候、日夜用心仕候而人質を取下ニ付候へハ、地下思付出也、如此候而日州之遊路絶々成をおきのひ、中務御座候へ度々注進申候間、この在所江中務待付候而打廻を被指候、然然二三城衆市郡ニ番とて被參候を、先々此地へ留置申候之間、あたり五六里へ間無敵通候、如此候而思ひ連る体ニ候、然然二京郡今木食上人被下候山ハ、大友方天下を頼存之候ハ、就夫御指とて彼木食上人被差事ニ候也、左様之祝とも下輩之者則及、從京可然開得候とて、味方ハ勝二乘、又緩々子細も日々まじり候、如此之期、美濃守と申候を大将二て豊前へ着之由出間、去ハ地下等の者心替して、武庫様も伊集院御供ニ而補飛田今府内江御坐候、木食參会也、又府内を奪方ニ御出候而足被成候、御門前分矢を射、応地下之旗も候へ共、少もさわかすして

御圍ニ、清田と申城合出合取切候へ共、御前ふさがる人衆多々有之間、事共せず打通候而、日差出る北松尾の城立御入候、今こそ中書之御遠慮も我々前辛勞仕當つる儀もあらハれ候也、去ハ前之夜半計ニ備馬衆高田と云城ニ候けるが、松山陣跡ニ乘候而罷申候、昨日高田之地下衆心替仕候而、伊集院下野守・白濱周防助父子を始として打死にて、伊集院下野守ハ不有、因中談合とて、三日先より被參候、府内之庄ハ存、因中皆々如此之中申候、安元御油断ニ而候身被申候、彼人河三人候候、又雨二ぬれ候や、寢候而散々散休ニ候、忠助委敷承候、此段最前分存候事ニ候、先々悠々と候得とて、火を焼小袖共着替、ぬれたをあふらせ候而、食酒など遊候ハ、御身之事ハ中書告知候事、忠節の儀ニ候と申、則侍者共ニ申聞せ候山ハ、今更ざりくへからすあてかいの前也と申て、弥落着候とて静ニ罷居候を彼人被見候而、いやく御油断ニ而者不可然候、此國を打掃本國へ引揚候する御談合之由候、罷令御存命候共如此候、いわんや跡之中も不知候申候間、鳥の鳴声を聞て中書へ參候得者、彼にも聞ゆる子細候けるが、此方へと仰候、先刻備馬衆來候間、如此之様子申候、実事ニ而ハ候ハしと存不申上候とて其由申候へハ、愛計も聞得候候、于今不及沙汰とて中々常之御様談也、きこそ爲此段計番類候、因中人來々此國のき入候ハ、何程なりとて此元ニ罷城之用意と被仰候、然ハ日指出候比早打茶て、夕都ハ武庫様府内御間にて候、夜入候而清田衆通路を取切候、跡之事委敷不存候申、当ハ何所迄も御返參候とて、中書も又七段も參候候、規久最近ニ懸付候へハ、武庫様御二御出候、御供中皆々城へ御馳二面候、其後御談合候而、又松尾を御間之由候、いかなる者の言渡候けるや、

夜中三人乘取候而、夜明け候見候へハ城之衆計也、日指出て、武庫様城を御下候而、程経て中藩分松山江御礼被成、早速御掃へきよし承り候折節、忠助莞尔として越ノ王具ニ事ノ如く、人々有腹心之病如ハ亦御と申候、大友身之建儀ニ及候として、天下を頼事候共を無思慮故と雜話なと申、まして早々中書先ニと申候へ共、又御使有、猶も同藩ニ御返事申候間、左有者御坐候とて、三度之御使也、遙ニ御坐候而、忠助・規久今ハはや孟之反か心ちせよと互ニ語り、心静ニ松尾城を罷下り候、地下等至若共立并候而、是を見物仕候、其中ニ地下之者忠門を仕たるを一人人打せ候而罷出候へハ、敵味方之境見分申候、如此候而心静ニ千葉師堂江参見物いたし候而、緩々と坂之向上る處ニ、從路鉄炮を打懸候へとも物共せず上りけるに、坂より上を奥畑と云所之人衆未明より可助切首格ニ面、手火矢衆ニなりけるを跡ニ者不知、各鉄砲衆を指合せ射のけてハ通る程ニわつらひなし、跡ニ者三城衆吉利殿其先ニ松山參候処ニ、皆々之き上る處を見而、一方より敵押懸候而、ひとと者、其時任無了簡ニ城衆立荷候、然處を後之向之尾吉利殿相注、木下、立留候處ニ、巾有けに候大音にて申人有り、忠助開付候而、規久右右也見つろひ候へと申候、規久閉付手方へ馬を有り直し、道土を矢たり計り懸待し時、初より取切候奥畑之方之敵に取合、太刀下ニ敵を打首差上たり、是を見て追懸り、三城・佐土原・窪住衆之手柄百數百に及ぬ、如是三面心安し、次之山山々々鉄炮射候へ共のきとり、

一五 高津義珍書状

返々御聞之事、於 霧崎村御城中之儀も勿論有之、又被敵詰訪、從何方被伺、御神慮事も先例多々候之條、余仕塞ま、如此候、自然談合家之内、表裏共候て気任之由、言上之方もや候之儀と、寔に邪推ケ様にも首計候、右々々、實所爲得心出候間、相續而書体他見有まし候、候、

改年之御吉兆千載方悦、多幸々々、仍如存知至御辛辛礼滯在候歟、於三江口依勝利、境内へ罷越候て可然之由、被中衆ニ有之、又沓部ノ堅め候て可然之段、被有候方ニ有之、又從秋月若玖珠郡ニ火色を立候ハ、秋月事者不及也、高懸迄家連練之儀不可有別儀之由、使節被指越、猶ニ懸望候之條、何共難點止故、談合衆ニ預尋候へ者、一二方之儀百懸候之段歟、當者可爲御神慮之山、各被申候衆、任其旨、霧崎へ御聞申候へ者、玖珠郡之可爲行出之由、御神慮事成候間、朽調致陳敷、玖珠郡へ先勢指越候歟、先々松木与中城令落去、其外、三ヶ所所國利運候、御神慮寄特候歟、然處從府内可參之山被申候候間、既正月廿八日ニ如府内立候歟、白刃之内候之故、相賀籠^一一兩所岡より致被拒候、就夫道折、出入在馬助を始各地下來、府内へ罷通候ハ、南部事告々可相易候、左様ニ候ハ、府内事道路可爲不通之由申候、捕者令納得、自然府内へ罷越候て南部打替候、此候之方可爲從事在、其日ハ罷留、年頭ニ又府内之様打立候處、野上よりハ類越山之儀被申候、又地下衆ハ如旧冬折候へ滯留と申候間、毎事礼^二てのごとく仕懸候て可爲如何之由、談合衆へ尋候へ者、又々御聞申御神慮次第可然之由、皆同被申候間、又 霧崎へ伺、御神慮候へ者、陣易之儀野上へとあり申候、ケ様ニ兩度まで御神慮事成候ま、中書を杓酌へ相頼候て此方へ罷越候、然處以気任令陳敷候之由、大守様被思召候談承候て、心遣千方候、曾以私之非分別候、

種々致談合、其ノ御神慮至く存知候、其百尾候之故、御足之事故落城、打被致ケ所存分候、乍重言無私能之段、山合之時者執台所希儀、余者夫侍守可被申候衆、省略候、然々謹言、
二月七日
書入振守取
霧崎(花押)

一六 殉国名數

天正十五年丁亥
正月、大倉又十郎改稱、
二月十八日、甲斐石京亮重高前年より豊後小倉改稱にて、同日の陣城を陥す時、歿して死之、甲斐加賀守重武、甲斐肥前重朝百八十八人殺之、甲斐前守重利、甲斐其七重房、甲斐長助、甲斐重正、甲斐弥太郎重次、坂本飛騨、福水四郎三郎二百十人、丸田郷兵衛久火上彈正助、富之原波路四郎湘之尾二助上、志和地治部太輔三郎前年にて歿す、四人五人、志賀掃部介前年にて歿す、
二月十一日、長井親藏北里を幸際して、豊後公移を幸上り、黒田日經、山内備後守上、
三月十一日、伊賀守、松山公、
十五日、佐多常陸介久政肥前縣松山守、同藩を回るとの詞、、
八、其時、伊賀院美作守久直前年、、池山掃部兵衛尉久直と、、白濱周防介重政池田、、瀧辺平左衛門元秋十四、、平田新左衛門尉宗張十四、、長谷場出雲守純貞上、
磯崎松平下越中守成實、池上掃部兵衛尉進山、福水藤五郎、枝次左兵衛、志和地外記、伊佐敏左近將監入道久政年、
二十四、長門赤崎神祇神祇作とも、山口平内左衛門上の

りける、

二三一 長谷場越前白記

山口表より、御大將軍修理太夫業久保御足元被成苑
垣見の城にて御過年ましませは、先手の御大將軍ハ中
務太輔家久を被遣、峠山を打越て、其中道二年寄、
の城將を被却して、村々を放火させ、三重の城に被討
入、近辺の城主共残り少く出出し御領有りけるに、尾
方云へる悪党等之障り申是を、伊樂院下野守・同名
美作守・木田下野守・上井伊勢守ニ承り、多勢を以て
被攻、城内の武者共が手を許といへ共、四方より火を
照け吐氣作り責けるに、大地も動く如く也、なしかハ
以て可助へ、唯ゆみく、と貞嗣し、物ニ能辨ふれハ、
尾方等が存外ハ、卵を以て石を討異ならず、諸軍兵
の勢ひニ知るもしらんも押なへて進む計の気色也、其
後ニ寄せ懸て藤束寺江陣取て、先勢を打出し寄する敵
を待因ら、去程ニ内郡表の御大將軍武庫様、上二重
表之御大將中務太輔と申者、御兄弟御中ハ水魚の様ニ
まし、て、互の使節ひまをなし、御獄と蒼の台の城
ニハ兩郡より御千勢を御指託、又利満と三重ニハ日向
口之御人数を被遣廻、彼の城主ハ是を見て内にて兵
儀を致し短、府内江注進仕り、則御敵ニ罷成る、現懸
しきさなしと云、軍兵を被指回、我もく、と攻成り、
上城計りニ成る處ニ、内子の猛勢統合ひ、跡を遮る謀
略をなし、用捨の兵もきつと見て、御方の勢ニ下知
をも払脱ニ成りしかば、各々度し打出て、大川の渡り夜
見合せて戦罷を加る時刻也、京勢と指見得て大益り馬

騾もこ、やかしこに備へつ、左も花やかに出立て、
城近く成る儘ニ打入らんとせしか共、薩摩の兵ものが
手なみの程を見せんとて、太刀を取てとま作り、而も
不散切りのを、京勢も懸り合ひ一合戦仕る、薩地方の
兵物ハ馬ニ離て早き事、猿猴の指を依ひ、新ら鷹が鳥
屋を出て連子ニあふごとく、此方丈彼方々と散々ニ切
る程ニ、花の様成京人ハ、馬を乗捨て無力散々ニ落
行く、是を彼を聞よりも我先と打程ニ、切捨てハ敵
不知、せんごく返せと言葉をか、権兵衛尉と八名乗
つ、口と心ハ相違て、をく馬の一物ニ控鞭打て逃
をのける、名ニのミ聞得し豊州の上の原ニ走罷る、
懸りける處ニ、御大將中務太輔家久を始め、諸軍兵、
一回ニ遊て甲の緒をしめて、出奔馬とハ申せ共、走る
馬ニつきしよりいさめる事ハ無限り、上野原の見向へ
の森岡ニ懸付て、御着陣をわします家久の御心中、味
方も敵も諸共ニ懸せぬ人ハなかりけり、懸り染る處ニ、
中務太輔令諸軍兵へ御礼をこそハ被成けれ、將又今之
御下知ニハ、時刻を不移今宵府内入りと被仰、軍兵
是を受給へ、我先にと逃げける、彼を見る敵方ハ、被物
を取あへず、友義宗を引立て登壇を指て落て行、被打
洩し京衆ハ千石権兵衛押立、跡ニ九二と逃て行く、
薩門衆を見ゆるよりも上の原ニ懸上て、分捕り高名達
ニけり、於此節ハ尾軽や山野郎、かゝる奇特ニ逢事ハ
宝の山と覺得たり、金玉可得と云ま、に、義宗の重宝
や千石の掬物を拾ひ取り、町家百姓手ニ付て日ニ
余たる土蔵を、三ツ五ツ宛各々拾渡せぬハ無りけり、
同十二月十二日、我を贈りてし間、年月キ日次は押移
倉間一藏納メ我を贈りてし間、年月キ日次は押移
り、山野郎者堪忍もことならず、皆本國ニ打廻る、跡
ト者無人ニ成事を慶後衆者喜びて、本意を遂んと友義

宗ニ注進す、亦京衆ニ見白す、深者京衆、義宗の額
ミ被成足一ツ、千石権兵衛尉指トし置足ニ敗北したる
一、筑前内之助威助被討某足一ツ、彼是を云馳騁西
ニ捨合可るを驅籠、太閤様之御心も榮葉方ニ御榮
足と之聞得る、先手來國者、タ手に分業方之口を
押渡り、筑前筑後肥前肥後の海陸を関白様之御討下り
ましませは、御陣間と号し死、東西南北兵隊諸軍兵被
指下、亦榮葉前様後ニ四國衆送り卒て、御合弟の中
納言美濃守権御太將軍を被成苑、如雲被打下、先勢
ハ豊後の内二重之城ニ打罷ル、太閤の御先鋒石川
治部少輔敵方騎を卒て筑前前ニ被討下出、其勢ハ石川
かハ、御兵儀之為ごとて、御大將軍車頭各備の部より
府内表ニ御勤進ヲ被成苑、中務太輔家久、四書郎久長
ニ御書事終る處也、又肥後表ニ被指て、御大將軍
左衛門督年久・右馬頭・薩戸守、此陣兵者町田羽
守・新納武藏守・阿右衛門佐・伊樂院肥前守・同源
介・寺山四郎左衛門尉・町田左京亮・同名新左衛門
尉・梅北宮内左衛門尉・二階堂安房介・猿渡越中守、
此外之人々も我先と進出て肥後表ハ被打向也、阿蘇
家の内北坂など云へる苦心營りを仕り、跡分介を始と
なり、か、りける處ニ、伊樂院肥前守・同源介を始と
して、右之兵もの手を許て合戦し、げきしんを退治
して御舟表に被打出けり、然れニ宮原筑前守隊の庄ニ
在番して居たりしが、駈出て御方の軍衆ニ取り合とせ
しか共、地下の悪党落合て敵か度の太刀討いたせ共、
老武者の再期とて高き所ニ打上て、寄手之敵を見し
て、少シのひまにおもひて涼して、逃るまし是を、兼てお
もみきれとに至りて涼しかるへと、日新様の御
詠歌を存念も吟味して、亦切り入て構儀儀高名仕り、
其場ニ而戦死也、柿原名字も討死す、於此與二郎と云

へる者宮城州の小姓にて拾六歳ニ罷成る、合戦場を切り通り二町計り過ぎけるが、返シ合せて名乗る様、此程八朝ニ罷て戦死之供を不致者、末世の恥辱と覺へたり、数ならん身なから人も余一人名は未代、早駒取れや、各と呼ぶ声の内より、金仏を唱つ、服一文字をかき切て穿く成し心し、哀と問ぬ人ぞなき、角て時刻も移り行、肥後の国衆ハ叛とぞ聞得ける、速々可致開陣と下知を加ふる処ニ、たに山党之族其後切を仕る、にくき者の舞舞哉とて、新納武州ハ乗りたる馬を引返し、心有ん兵ものハ我を見次げと云捨て、谷山ニ切て入る、是を見る兵者ハ我先にと駆け付、手柄を砕き責果す、敵強きと見得しかと、合戦ニ打負て敵軍頭をそ被取ける、各高名を被逐て、八代之内ニ有る切之域にそ被着かせ、次之日者とふ朝ニ打出て八代を切り通り、あざち山ニ打向ひ、亦求麻山の難處をも静くと被開せ、諸軍兵の有様ハ如何成る天慮鬼神と云へる共、是ニハいかで地るへきとほめぬ人はなかりけり、相良方ハ承り、此時ニ多年之御恩を報んとして、萬幸越後の上野佐原因ニ送り奉る志ニ神妙なれ、去る間、豊後の国府内表の御仕立、其ハ八代正拾五年二月十五日酉の刻のとりニハ御退出を被成ける、跡若放火ニ成りけらし、地下旅之人々も身を助んと入り乱る、此時に地下衆共宗頼の奉公ニ後切を仕る、佐多常陸介を始として、伊集院美作守・白濁園防介父子式人・平田新左衛門尉・長谷場出雲守・松下越中守・池上掃部兵衛尉・福水藤九郎・枝次左京亮・志和知外記各致粉骨死、無余儀戦死を被逐、其後ハ殊更雨降りて、黒案内者の旅の道、くらきよりくらきに人ることにて、手取くて行く路を、地下者共、やかしこを横入りして切り崩さんとせしか共、御方兵物落合に向ふ者打

果し、逃物者遺散し、手を持き高名す、

三四 長谷場越前白記

一 同十六日三三重之城ニ御光若を被成けり、終夜御評定最上也、御坐中の御人衆者、御太將軍兵庫頭兼弘様、御令弟ニハ中務太輔家久、川上上野守・伊集院右衛門大夫・吉田美作守・鎌田出雲守、此外之其物も、我もくど連つ、同十七日ニハ、

三五 日向記

京勢下向有ケレハ、豊後國中ノ者共亦降リ、方ヲ背、年頃ノ味方ナレハ大友方ニ属シ、色替セヌ人ソ無リケル、三月十一日野上ヲ立テ、其夜建宮(宿陣)翌十二日建宮ヲ立テ、其日府内へ引人ケレハ、アトカヨリ頼ヲ敵ト成、陽城ト取合ケリ、擁現坊ノ狭間殿モ心儀、鶴津へ矢ヲ射懸、同日ニ高野ノ木食興山上人、一色駿河守府内ニ着テ和陸有シカ共、鶴津気色ニ不合取喰成相談不調、豊後因乱入ス、鶴津方ニハ鶴津中務大夫家久ヲ大將トシ、二万余騎府内ノ城ヲ楯支トシケル、秀吉公蜂須賀ナト召列ラレ、城ノ南北ヲト懸光遠義ニシ、貞貞ナト用意シ、桶狭竹草如クニ陣ミヒシカハ、難抱ヤ思ケン、洗手ヨリ雨風ノ紛ニ取乘退ニケリ、然ラ速船ニテ追懸、一獲追留首トモ致多討捕ラセマフ、同十五日夜半ニ薩戸衆カシコノ人数ヲトメ退シ

ヲ、追掛々々伊集院美作守・平田新左衛門尉・田沼因防守其外有名武士数百人討取也、夫ヨリ彼方此方ニテ

道筋ヲ取切シカハ、漸ク敵命ヲ遊テ日州ノ如ク遺散ス、府内城番トシテ大友宗麟・義統父子入道王ヲ、亦相瀬ナト有ケル薩戸番衆、色々道口ヲ乞請テ引退ケル、朽網ノ城ニハ字十番代タリシカ、鬼ヶ角調テ引取、根白ハ鶴津左衛門尉成久野上リシカ、尾モ肥後ノ如ク引、入田モ薩戸ノ如退、野上ヨリノ一手分テ鶴津右馬頭征入大將ニテ、町田・新納武藏守ナトハ日向口ヲ通、秋月へ取合シトテ、上筑後へ打越ヘキ儘ヲナシ、北ノ里迄打立シニ、豊後ノ城ニヨリ薩戸衆日向ノ如退人山告果ケレハ、筑前ノ如越ヘキコトモ不叶、其儘肥後ノ如ク引ケリカソ、伊集院肥前衆ノ衆ナト織居ケルヲ迎取、漸面白ク調テ引退、此里モ同心ニテ阿蘇ノ如引取、岡ノ志賀ハヤ坂衆ニ付テ陣ヲ取、新納武藏守・伊集院肥前守ナト懸入漸切崩シ、肥後へ打出テ入道ヲ統、右馬頭征入ハ三船ハ罷ル、

三六 島津義弘誦

天正十九年之春、丁豊後州福原之時、使赤塚源太左衛門尉重臣御歩卒五十人、往筑之追境尋、携志賀浦介弁到陣、日復昇甲冑一領・鉄炮一挺於陣傍置、播磨介報曰、非特得加参衆、且賜甲冑・鉄炮、謀所以津領也、於加勞上來者即志賀進者也、當時豐前之將伊集院三河守・大童休盛皆引赴豊後、右之旨懸源太左衛門尉反命者也、後日聞之曰、源太左衛門尉歸參、豐後與豐後守共、播磨介欲直進於吾道之際、称人森彈正者乃大將、第一下四百餘於岡城、逼來於吾之退、與守將為同意指揮津馬、白辰時至未中時防戰、筋力、遂戦死被傷者雖其数多、漸攻退取、委兼勇員甲冑等、與妻子共行逃脱肥後州

佐来也。

天正十五年三月十一日、去野上赴府内、今夜陣地重矣、
同日十二日、欲發於備前、則 殿下之御前已來、湯湯之御前、
與小寺氏及權現殿遊御某安心族共運籌策欲侵備前之陣、
我軍相討敵、而忍殺者十有六人、是以凶徒遂退散也、
揚揚相、而到若府内矣、

同月十四日、被追委心者若沼兵頼、且復放火沖之州救原、
則我之兵衆走遁漸獲敵兵數十者也、

天正十五年三月十九日、高野木食栗山上人、一色隆河守
昭秀持、義昭朝臣冬十二月四日、又去月廿六日御教書、
來于府内勅和陸矣、

〔此上九條教書、一、西平十一月、數次、重臣スシ、
然而不合于諸將心、而益云、不如早歸我國以保壽陽日二
州中要害之地而待其時、由是各相疑、俾弟昌津左衛門督
飛久・同姓石馬頭征久為將、町山出守久倍・新納武藏
守忠元・同姓石衛門佐・伊集院肥前守久春・同姓新左衛
門尉・梅北宮内左衛門尉兼一、際幸河波介秀行・猿渡
越中守等為從軍、經肥後路退去、義珍・家久率大軍、經
二重路謀到日向如斯決定、而後待夜半以遂亮於府内之路、
欲過清田郷險難、敵兵遲路悉以欲屠殺、整騎步不亂先
後、使前鋒追退凶徒之際、伊勢弥九郎貞昌・久富木根津
介各斬獲強敵一人、此時我之軍中戰死者甚多常陸守忠
常・長谷場出雲守・松下越中守・池田掃部兵衛尉・福永
藤五郎・枝次左京亮・志相池外記等也、且兼彼此雙備之
士卒追突、爰轉崎城警衛上伊集院美作守・半田新左衛門
尉・白濱岡防守・大寺大炊助戰死、其外少卒戰死不知口
數也、其翌十六日、致三重入松尾城之路、使用上野介
久信・伊集院右衛門大夫忠雄・吉田美作守清信・鎌田出
雲守政近已下、追退前敵凶徒也、

同月十七日、待朝日出而去松尾城、過千葉師堂莊梅之嶮

嶮、凶徒等雖發銃炮於後、不用而口口口坂上、則有標馬畑
之地、彼地凶徒委棄前部、發銃炮以進來、俾我之軍中持
銃砲者討之、以射退而無陣是也、少乃凶徒從三方進來、
而敵居發後陣衆、義珍・家久指揮軍中、各勵氣奮威逼凶
徒接兵鬪、敵軍忽潰、由此獲敵首者及百矣、今夜宿于
長谷川内也、

同月十八日、免於長谷川内凶徒等進來、則指揮以追退之、
丁此之時阿多筑後守戰死焉、敵兵漸以退散、則越過洋山、
于時兼備日三州中在圍軍衆迎來、今夜入景城、山田越前
守有信亦半多努米、今又兼備此也同十九日、入高城也、
同廿日、免於高城到於都於郡、參會、義久公、公諸軍勞
感顯馳之勳功者不少者也、

三七 肥後口・日向口合戰從軍者交名

天正十五年三月、肥後御引陣之節、野上より、平三、別れ
日向口へ引退く人数、
町山出守 久倍
新納武藏守 忠元
大岡先勢執前次へ被討下出相聞、肥後去ニ被指回人数
〔一〕左衛門督年久
石馬頭 貞昌
薩守 義忠
町山出守 久倍
新納武藏守 忠元
伊集院源介 久春
寺山四郎左衛門尉 久春
町山左京亮
町山新左衛門尉
〔二〕隆堂安房介
〔三〕渡邊越中守 貞昌
〔四〕渡邊越中守 貞昌
〔五〕渡邊越中守 貞昌
〔六〕渡邊越中守 貞昌
〔七〕渡邊越中守 貞昌
〔八〕渡邊越中守 貞昌
〔九〕渡邊越中守 貞昌
〔十〕渡邊越中守 貞昌
〔十一〕渡邊越中守 貞昌
〔十二〕渡邊越中守 貞昌
〔十三〕渡邊越中守 貞昌
〔十四〕渡邊越中守 貞昌
〔十五〕渡邊越中守 貞昌
〔十六〕渡邊越中守 貞昌
〔十七〕渡邊越中守 貞昌
〔十八〕渡邊越中守 貞昌
〔十九〕渡邊越中守 貞昌
〔二十〕渡邊越中守 貞昌
〔二十一〕渡邊越中守 貞昌
〔二十二〕渡邊越中守 貞昌
〔二十三〕渡邊越中守 貞昌
〔二十四〕渡邊越中守 貞昌
〔二十五〕渡邊越中守 貞昌
〔二十六〕渡邊越中守 貞昌
〔二十七〕渡邊越中守 貞昌
〔二十八〕渡邊越中守 貞昌
〔二十九〕渡邊越中守 貞昌
〔三十〕渡邊越中守 貞昌
〔三十一〕渡邊越中守 貞昌
〔三十二〕渡邊越中守 貞昌
〔三十三〕渡邊越中守 貞昌
〔三十四〕渡邊越中守 貞昌
〔三十五〕渡邊越中守 貞昌
〔三十六〕渡邊越中守 貞昌
〔三十七〕渡邊越中守 貞昌
〔三十八〕渡邊越中守 貞昌
〔三十九〕渡邊越中守 貞昌
〔四十〕渡邊越中守 貞昌
〔四十一〕渡邊越中守 貞昌
〔四十二〕渡邊越中守 貞昌
〔四十三〕渡邊越中守 貞昌
〔四十四〕渡邊越中守 貞昌
〔四十五〕渡邊越中守 貞昌
〔四十六〕渡邊越中守 貞昌
〔四十七〕渡邊越中守 貞昌
〔四十八〕渡邊越中守 貞昌
〔四十九〕渡邊越中守 貞昌
〔五十〕渡邊越中守 貞昌
〔五十一〕渡邊越中守 貞昌
〔五十二〕渡邊越中守 貞昌
〔五十三〕渡邊越中守 貞昌
〔五十四〕渡邊越中守 貞昌
〔五十五〕渡邊越中守 貞昌
〔五十六〕渡邊越中守 貞昌
〔五十七〕渡邊越中守 貞昌
〔五十八〕渡邊越中守 貞昌
〔五十九〕渡邊越中守 貞昌
〔六十〕渡邊越中守 貞昌
〔六十一〕渡邊越中守 貞昌
〔六十二〕渡邊越中守 貞昌
〔六十三〕渡邊越中守 貞昌
〔六十四〕渡邊越中守 貞昌
〔六十五〕渡邊越中守 貞昌
〔六十六〕渡邊越中守 貞昌
〔六十七〕渡邊越中守 貞昌
〔六十八〕渡邊越中守 貞昌
〔六十九〕渡邊越中守 貞昌
〔七十〕渡邊越中守 貞昌
〔七十一〕渡邊越中守 貞昌
〔七十二〕渡邊越中守 貞昌
〔七十三〕渡邊越中守 貞昌
〔七十四〕渡邊越中守 貞昌
〔七十五〕渡邊越中守 貞昌
〔七十六〕渡邊越中守 貞昌
〔七十七〕渡邊越中守 貞昌
〔七十八〕渡邊越中守 貞昌
〔七十九〕渡邊越中守 貞昌
〔八十〕渡邊越中守 貞昌
〔八十一〕渡邊越中守 貞昌
〔八十二〕渡邊越中守 貞昌
〔八十三〕渡邊越中守 貞昌
〔八十四〕渡邊越中守 貞昌
〔八十五〕渡邊越中守 貞昌
〔八十六〕渡邊越中守 貞昌
〔八十七〕渡邊越中守 貞昌
〔八十八〕渡邊越中守 貞昌
〔八十九〕渡邊越中守 貞昌
〔九十〕渡邊越中守 貞昌
〔九十一〕渡邊越中守 貞昌
〔九十二〕渡邊越中守 貞昌
〔九十三〕渡邊越中守 貞昌
〔九十四〕渡邊越中守 貞昌
〔九十五〕渡邊越中守 貞昌
〔九十六〕渡邊越中守 貞昌
〔九十七〕渡邊越中守 貞昌
〔九十八〕渡邊越中守 貞昌
〔九十九〕渡邊越中守 貞昌
〔一百〕渡邊越中守 貞昌

中務太輔家久
上野介 忠元
伊集院右衛門大夫 忠雄
吉田美作守 清信
鎌田出雲守 政近
同年三月廿五日、阿蘇の内坂城にて合戦し時康芳、
新納武藏守 忠元
伊集院肥前守 久春
大置業作守 貞昌
桂井頼正
押山太郎二郎
隈元在番
新納武藏守 忠元
介子在番
新納右衛門尉
津守在番
伊集院肥前守 久春
同年四月六日、京勢日州新納院高城、若陣、我兵防禦の
陣二八、
山田越前守 久春
本出治右衛門尉
三原右京亮
野村野野介
宅間與八左衛門
肥後野内少輔
同狩野介
同年四月十七日、是常房か際陣二切掛り致手柄並二八、
御大將義久公・義弘公
北郷 一
喜人頼津守 季久
本山下野守 貞昌
同左馬介
伊集院下野守 久倍

日向口合戰從軍者交名

同月十七日、待朝日出而去松尾城、過千葉師堂莊梅之嶮

同月十七日、待朝日出而去松尾城、過千葉師堂莊梅之嶮

上原長門守尚近

圖書頭久良

村野直忠 兼兼

稻留新介

鎌田刑部左衛門尉政廣

市采美作守

新納經助久時

新納野介

京勢平佐之城ニ押寄候時、裨將与力之十防禦して抽戰功

谷山紀伊守 紀伊守

宇都伊豆介

同弟七郎

春田主水正

高木帶刀長

之御御供、

本出下野人遣 親良

渡邊傳介

橋岡君御上洛之御供衆、

伊地知駿河守 新納代官後、大國 伊地知丹波守 一

長谷場眞後守 新納代官後、大國 川東善左衛門 志保

田尻仲左衛門 下司也 岡本主計允 下司

原田伊豆守 親監也 山口早左衛門 有安前無事

田尻才允 親中司、庶 長尾源五 一

曲田吉六 親小使役 大羽吉次 全

鎌田出雲守政近

河田駿河守義朝

頭姓左馬助

比志高紀伊守國貞

比志島式部少輔

吉田若狭守

新納越後守忠包 精山出陣

平田左近將監兼兼

同子別部之丞

同子八兵衛

谷山次郎右衛門

阿久根權介

野村將野介

持明君為人質大關御陣へ御差出

声、天正十五年二月十一日、義珍率降衆奔來、去野上陣

彼城、当地近辺有稱湯之城之風、小寺官兵衛尉爲前將人

健城、與地勢俱遠深澤侵蝕因方、我軍討之相闘、而斬首

十有五六、兼務遺衆散於四方、其翌十二日、湯勝吐氣

而去此地府内、同十四日、敵船進來放火沖湖與泉城之兩

村、而欲退去之際、我之騎歩馳到其地討之獲戰、獲數多

敵首矣、

天正十五年二月十五日、高野山木食興山上人、一色康河

守昭秀米府内勅和陸、然而不合諸將之心、由是發譚、不

如早據我固以保薩摩三州中要害之地、得人相和其時、

同島相識分歸於兩道、使島津左衛門督康久、同姓右馬

頭征久爲將、町田出羽守久幸、新納武藏守忠元、同姓右

衛門佐、伊集院肥前守久春、同源介久洪、寺山四郎左衛

門尉、町田右京亮、同姓新左衛門尉、梅北宮内左衛門尉

同兼、二階堂阿波介秀行、猿渡越中守等徒之、向肥後路

退歸、又義珍、家久將向口向路退去、得三月十五日夜半、

義珍遂去府内之路過清田之郷、敵兵逆前路悉以欲屠殺、

義珍整詰上卒、暫陣前鋒進退討敵之際、伊勢弥九郎貞昌

于時少轉也、久富本撰津介進退討敵、各斬敵一人也、于時

佐多常陸守久政、伊集院美作守忠常、白濱國助守、平田

新左衛門尉、長谷場出雲守、松下越中守久孝、池山掃部

兵衛尉、福水藤五郎、木次左京亮、志和知外記遂戰死

矣、同十六日入三重城、同十八日、超梓山入泉城也、此

之時表久在郡於部矣、

亮百勢、百余人、高知尾之七甲斐肥前、同姓赤太郎、坂

本成將、福水四郎三郎等上從百卅余人、家久之臣丸田將

兵衛、矢上輝正、宮之原淡路、重之尾、助阿遠戰死也

而後忠助擊赤谷使、而招古於三郷、故免府内入於松尾

丁此之時、二城上兵之勢、之十卒爲南部之援守兵進來、

使夫上卒留于此地而爲營衛、故四面五六里之間、進退因

從而安靜也、三月十三日、義珍主於野上入於府内、同

十五日、高野山木食興山上人、一色信少輔來于府内、

勸于和陸、而不合于諸將之心、而命云、在了他國徒勞軍

務、不如早歸國保薩摩三州要害之地而待天時、同十

五日夜半、義珍去府内欲赴日向之路、過清田之郷、敵

兵追其道路、雖然擊於上卒前遂意以追退、同十六日、來

入于松尾城、是以終夜爲評議、決定于帰陣、同十七日、

松松尾城過下藥師堂、論悔之論蓋于高野野之際、與烟

十卒逆前進、二重上卒退後路、日逐弓手徒三方戰卒矣、

三城、佐十原、穆佐之銳兵共討之得勝利、斬獲數百、殘

黨悉以追退、其夜宿于水谷川内、同十八日、先於水谷川

内之路頭、凶徒壓進來、指押而追退四方、論梓山之際、

寇隔日之軍衆爲加勢進來矣、其夜入泉城、同十九日、

義珍主於泉城城入於高城、家久之臣後而燔佐十原也、

四〇 佐多久久政請

久政從軍、太守公、屢抽勦功、

天正十五年丁亥二月十四日、久政守備豐州藏田城、時敵

兵大通、久政被戰死、年四十二、法名春岩迫迫上庫、

三八 島津義久譜

羽柴美濃守秀長爲大將、領數十萬騎、有到若于豐前州之

三九 島津中務大輔家久譜

天正十五年二月十八日、岡之城主美師旅密襲來、臨小牧、

四一 勝部兵右衛門聞書

「下ノ庄ハ不參候程、明十五年二月上旬若陣（長）ハ、降参の由訴へける間、陣を聞かれけれども未下城ハなかり候。豊後の諸城御旗下に悉く参ければとも、國の志質・津賀平札・湯ノ庄・杵築の城此等未参といへ共、先差放し置て、養久ハ野上城へ御人御越年あれハ、家久ハ府内へ御座す。義廣ハ村綱に打人御越年候成ける。去程二十石備兵衛對取北して、軍勢多く減ひたるよし都へ書上せければ、関白天下開食、御氣色不好、彼駒津ハ四分をもそむき筑前二打出、岩屋の城なともを攻果し、又豊後二和のよし被仰下けるをも違言して、豊後回二乱人、刺へ下石か勢とも打果せし事又二異恨の卒也、殊如此成共ハ因國・中國迄も攻隨へ、終ニハ都の怨と可成者なれば、急速ニ追伐を加へて迷閉白下向ふへしとて、天正十五年丁酉二月初二御島出下らせ給ひける、日向口の大將御弟の大和太納言美濃守秀信卿大將にて、西國・中國の勢十二万騎引卒し、豊後をさして攻下り給ふ、東海邊・北陸邊・京都畿内の諸勢ハ御旗元ニしたかひ、坂東ニハ長門京都畿内之若せ給ふ由相聞得ければ、薩ノ大將宗徒の人々評儀せられ奉る。無案内の國ニ美濃守殿の大軍引受御せん事も成たかたからん、其上豊後國中の城々降参しける者共、予今心委せん事有まじ、所許唯我國に引入勢を催し師せんハしかしとて、同二月十一日、大守養久野上を御立、其夜ハ嶽宮三着上じ、明る日ハ府内の如く退給へハ、豊後ハ大友家來年の因なれば、國中皆大友方と成、心委せぬ者ぞなし、惟現勢の迫も過の庄とくり合、早心變りして薩ノ勢ニ矢を射なしたりけり。

四二 勝部兵右衛門聞書

「同十二日ニ府内ニ善士給ふなり、其時都より木食上人・一色兵部少輔無事の暇なし給ふとて下向ある、義久即參會し玉ひけるに色々御見聞の事有ければとも、御承引なきなれば彼商人にも不及月、即立せ玉ふ也、然ハ急き御引陳有へし、國の留主に敵入替る事あらハ、後悔するとも叶まし、其上此國の者共皆心替りと思へ引かれハ、早々御引有へしとて、同十九日の夜半許ニ打立せ給ふ程に、在々所々に人番して、方々に馳驚たる者共を漸々に相集退れける、遮る敵二隔られ佐多参陸守・伊集院美作守・平田新左衛門尉・白濱周防守など打死せられけり、路次伝大勢往々に相擊つ前々を取ふさく、されとも薩ノ勢退合へ一切崩散給ふ程、大將巴下無難日向へ引人せ給ふ也、又肥後口も義廣退給へハ、各々おもひ／＼に退れける、白根の城ニハ左衛門尉藏久御座か、肥後の如く退き玉ひけるを、路次そ／＼をとり切れども打破りて通り玉ひける、朽網の城ニハ伯耆頭隆・城久基とせられるが、某角としてありしらひ、此等も難なく退れける、槻又野上より二手に別れ、町田出羽守、新納武藏守林ハ日向口を通、秋月へ取合ふ其為ニ、上筑後ハ打越んとて二打立れける折衝ニ、薩ノ勢日向のことに悉く退せ給ふ由聞えければ、筑後表を通ん事何かななる、まきて肥後のことく退れける程、切頭城・伊集院殿前守、相良か老名大藏美作守・同ノ重七郎の勢を相集して記居れけるを、退取りて中途まで打寄れる處ニ、案のここと切頭の者共早心替りて、薩ノ者共一人も進しと善來ル、返合て合戦し追退け、同廿日ニ各北里ま

て退れける、同廿五日に北里をも同心にて肥後のことく退ける處ニ、阿蘇の内坂ニ柱神新正・大野治部太輔・根田吾郎一郎、右々各々籠り居を相取罷たりし、岡の志質見聞し遠來り居を相取罷たりし、武藏守・肥前守・同恩の源左衛門大將とて返合て、同廿六日其隙をも切崩し、敵七百余人打とり、肥後の國へぞ出られる、限本ニハ新納武藏守、合子ニハ新納右衛門尉、津守ニハ伊集院肥前守在番せられける、八代ニ右馬頭藤座す、去程ニ秀信公大軍を卒て豊後國へ打下り玉ふ處ニ、薩ノ勢疾如日向引入たる由聞給ひ、又日向を差てそ攻下り、追付高城・肥前二近寄、各々陣をそ料られたり、先陣ハ因國因之入宮部法印是常助、小寺歎兵衛尉諸軍皆人番動て居る、從夫打破き毛利安守輝元・小早川左衛門尉・吉川十郎・浮田八郎秀家、其外益田右衛門尉・木下右衛門大夫・羽柴伊賀守・羽柴美作・毛利右近大夫・生駒雅樂助・小川上佐・東堂七郎左衛門・連右衛門尉・加藤左馬允・大田源六・早川上馬允・桶栗兵庫・奥山樂善・山崎左馬允・赤松上総守・市橋下總守・谷出羽守・出方勤兵衛・小野木松隆助・福原右衛門・山口右京進・別所豊後・中山修理亮・木下原右衛門・山崎右馬助・石川備後・寺田下野・田備中・中江民部・堀尾常月長・山内村島・松下右兵衛尉・有馬玄蕃・福野下野守・中村式部・浅野輝正・齋藤左兵衛・宮部兵部・本下備中・亀井世前・増尾隠岐・細川与一郎・池田備中・竹中源介・長谷川右兵衛尉・山崎右京亮・藤田権介・大友義輝豊後の勢を相推して、三十余ヶ所の陣を取曉け来らんをまたと給ふ、然ハ去年の十月令釋の陣旅ニ被れ、引足ニハ物具欠乏其等をも打掃ける程ニ、是等の物を取調んとしける其まじ、時

刻こそ移りける。

四二 阿蘇玄與人道田原吉出

天正十五年、豊後國浦の郡野上と申城二面、兵庫頭
緑玄を名寄御旗懸候、御老中名四書頭、御使者吉
田美作守二而候。被仰聞候者、九州無残所御手した
かひ候。然延二京勢下向候、豊前國龍王の城五八黒田
官兵衛尉殿、浅野とのを前手として藩陣の出候。府内
表五、因中間の兵船相着候。豊後國二面一戦と思召
され候得共、先々薩州江御旗懸候、御川二面防戦之
兵儀二定候。日向表五、兵庫頭様・中書様、其外諸大
將可被成御旗懸、肥後衣堀陣之軍衆八右馬頭殿・町田
殿・塚山殿、其外新納武藏守・伊集院肥前守其外諸軍
兵歸陣二相定候。當時九州侍共皆々豊後江在陣中、
兵庫頭様御下知二随ひ申候。然共肥後上共を初め九州
皆々御敵二なるべく被思召候。薩州の軍衆肥後表を無
異儀引取候ハ、御川之軍別儀有間遊被思召候。就夫
玄異事進々無別心御覺せ被及候。此節薩摩軍勢つ、か
なく御川江引取へき才宜御旗被成候之由、愚老申上
候ハ、上意のこくり、肥後を始として九州御敵なるへ
く候。雖然玄与御味方仕候儀、御旗懸之儀御心遣有間
敷候。小國と申神領合八代之界を阿と申所までハ、神
領四日路程他人の知行まじらす候。諸耳目をかため、
何さま此筋身命をすて可抽思心之由申上候。兵庫頭
様被聞召御被成候。愚老五被仰聞候者、右之軍勢無
事二薩州江打入候者御勝利たるへき由候て、御喪失之
儀共候。現者火急之時分候。明日堀陣仕候て、諸甲兵を
かため可相預之由候。玄子伯父阿蘇宮内少輔と申者江

軍兵下程相送、兵庫頭様御本江相残置、則肥後江
堀陣申、諸耳目下知申候。豊後御旗懸、され
ハ諸國皆々御敵二能成候。然延堀山推左衛門殿其外軍
勢、阿蘇之門坂親左近大夫と申者之城江被引建候。彼
坂梨ハ玄子一門之者候。されハ彼女親が城大勢二而取
巻候。被城ハ、樺山殿御大将二而方々の人衆籠り被申
候。二日之間防戦、火出る程の軍候。その様子弟子丸
越後守家粉付存知申候。玄子被居候所ハ、久部と申所
而候。高知足より美濃守殿先手之兵、其外日向山つ、
きの者共案内者仕候て、矢部山之内被同と申城立取か
け申候。玄子おとろき申候て、矢部、南郷、大野、大
河など、申在所之人衆を去遣候て、防かせ申候。矢部ハ
阿蘇ハ大山を越二口路二而候故、玄子分別成り兼候是
二、阿蘇之任人久我大藏太輔・恵良左衛門二之官彈
正左衛門三人謂代之者、而候得共、俄敵心をさしハさ
ミ、同の城志賀左近大夫江申合、敢て成候出阿蘇より
中來候。則村山丹波守と申者を阿蘇へ差遣候て、右之
三人堀打懸候。以其故阿蘇境無異儀候。去れとも坂梨
か城ハ敵大勢二而取巻候。然延二右馬頭殿・町田殿
其外新納武藏守・伊集院肥前守諸大将將後より患痛を
國と申在所江引取候。彼のを同は豊後江其後の境二
一面候。を因より阿蘇より者一道路二而候。中途を敵取切
り候ま、阿蘇御引取被成かぬ候。玄與飛脚、而小國
江申渡候ハ、阿蘇江敵心之者共候し、皆々打果候。さ
れとも坂梨か城を敵取巻候て無油断防申候。いそぎ阿
蘇江御引取肝要之由申渡候。小國の地頭申候。北里大
藏太輔江足尾急召列。薩州江御人致御案内者仕候得
与申付候。北里大藏御案内者仕候て、阿蘇の宮のちと
申候て、阿蘇下宮の社頭からく、薩州諸大將を因より
御引取へ。追付敵大勢にて阿蘇宮のち御陣所江取懸

申候。然るを薩州諸大将兵儀被成、敵陣へ御取掛候。
阿蘇宮内少輔下知申、阿蘇の者共一番三押寄候。軍き
ひしく候て、玄與人の者阿蘇阿波守され仕候。其後
敵陣破申候。數百人の御討利被成。薩州御軍勢ふたへ
と申大政を御送候て、肥州園中江引取被成候。肥州の
者共上二、城・隈部・赤屋・小代・二池江御敵と成り
候。されとも患痛相候儀、薩州御勢八代御打入
候。其百士より隈庄城二取懸。城主宮原前守打果
申候。町田出羽守段合承候ハ、玄與薩州江引取候へと
承候。愚老申候ハ、三ノ城かたこしらへ人放も五六
十も有へ候。一防戦仕候て其後御國ハ八參へ候。い
そぎ御旗懸候へと申候。さらハてを諸軍勢八代江堀
陣候。谷山の城御敵と成り候。声北とほりハ肥前
兵船取切り候。川堀甲斐と打死仕候。八代よりあせ
ちをなされ東江御着。深水二河入瀧宿を仕候
て馳走不申。武州・肥州など深水入道か宿所江御出候
て、深水入道を上りこのことくにして、薩州の軍勢無
恙二大口江御着候。然ハ肥後園中二京勢素直のことく
打入候。愚老五浅野殿合以使承候ハ、薩州江白川様御
下向候。九州皆々たかひ候。玄與御言可致參候儀、
いそぎ人致を差遣し馳走不申。然ハ神領前代之ことく
被上候御本印御持せ候。愚老御事ハ、全御意候。然
共神領を薩州今内信仰て候し、其思深候。鹿兒島
江此段申入、其後馳走可仕候段逸事申候得共、分別次
第と候て薩州江御とほり候。玄與夜白城郭を拵へ人衆
を集中候。たかちを山をく、り上、以飛脚郡の部江、肥
州表ハ御心安からへきよし申上。御老中より承候ハ、
弥鹿表表御頼之、侍家之年壽共申候者、前代より天
子江申上表候。た、し京方仕候て浄家仕度申候。

愚老中策ハ、各中散尤候、去ながら野上ニ面 兵庫頭様へ申上候旨尾相違候て、玄與事人ならず候、忤家滅亡迄ニ候、薩州方ニ可相米之中申候、左候へハ無是非山中也、諸代之者共ニ一味同心候、されハ 關白様御帰陣ハ八代今矢部へ京勢十人ノ大将ニ而、阿蘇宮御追伐として着陣候、愚老城を逐攻ニ而候し、浅野殿より承候ハ、 関白様ハ箱崎江御留被成候、阿蘇守城を渡し候ハ、 身上事仕可被成候、神領八前ニ御入印返し申候ま、 少も右ましき出承候、愚老存候ハ薩州御無事之上ハ、 身上全候て肝要之由存候て、城を渡し可申段約束中下城仕候、玄與葉子六才ニ成候を浅野殿同心して、箱崎御除陣ニ而身上無別儀相候、其ノ明年御回江參候時分、諸代之者共其取暇を遣候て大口江參着候、教十年申上度心中ながら斟酌放心中ニこめ置候、折ふしも候ハ、被備上覽候ハ、越中守ためまで候、以上、

御老中

黒崎 玄與印

一石巻五八、杉原のよふなを二面合勢也

四四 新納忠元勲功記

一天永十五亥正月廿六日、 貫明様野神城江御陣を被為移、其比城主計降服にて、志岐之党類不相隨者打込罷在忠元ニ被仰付、阿蘇之入衆と攻寄せ、敵余多取御番為仕出、阿三月、大隅秀吉公大軍にて被接口より、番羽羽染秀良ハ譽候より被攻入事相聞得、同上二日、松輪御引陣之御相談として府内城ニ被為人、 松輪

護ハ日回路より、金吾殿久様ハ肥後路より被為支ニ相決、忠元も其子ニ相付、同十五日野村久高、同廿日北里三到着、然候桂神祇忠助、大野尉久高、樺田太郎二郎、玖麻來大魚兼作守休堂并子祐留將監等致在背候坂無城ニ、則之志賀氏等豊後衆と押寄せ、致後切事承付、忠元并町田出守久信・伊集院肥前守久春、其子源左衛門等申談、忠元家臣田中藏之丞等を関合として忍三滝、同廿五日北里出立、夜中ニ押寄、同廿六日晚於宮之路逐合戦、敵七百餘人討取、同四月五日、忠元右之衆と坂中出立、肥後之様に立遣、忠元ハ隈本城新納右衛門久總ハ合子候、伊集院久春ハ津守城、右馬頭延久ハ八代城ニ打入、大より二船城等見廻引取折柄、松浦筑前守守志田兼と谷山城より付テ逐候間、忠元為乗馬を引返し、久春等と入衆ニ加下切、谷山城ニ切人、何れも辞手、松浦八山中ニ逃隠、又尾幸田にて肥前衆とも合戦、是又討破、八代之内閣之城ニ到着、同十七日、忠元桂神祇と花見ニ事着、八代地下之了共入人質ニ取付、同十八日、月之出ニ八代出立、阿世知山より右之質人共ハ兼走、同十九日、忠元等之立跡ニ哀勢為討入山、左候兼走、同廿日、無事ニ取麻江到着、爰ニ而深水某心替と承、忠元即入衆三百人を召列、人言城ニ逐越及直談候候、衣裏無之取麻川逐取因ニ道米別れ為中由、同廿一日、忠元ハ大口城ニ到着、同廿三日、桂神祇も平佐城に到着、各親城之手当仕居候處、 太閤者秀長於日向口為被得勝利事最早被為副、出水口より被為人、出水領主又太郎忠貞、言も無御方江不奉伺、存外川内迄致案内、同廿五日、泰平寺ニ御着陣、則西撰津守守長・九鬼大隅守嘉隆・臨被被攻取、神祇忠將として、同廿八日、平佐城ニ城守ニ被攻取、神祇忠助ニ百餘人、同廿ニ加下拒之、城中ニ被内応者三三人

亂行逐致謀伐、志を皆一致して致防戦候儀、日向之御陣所より致下城候様被仰付、同廿九日、忠助小姓海老原市郎・太田治部左衛門入質として、九果・脇坂之陣所ニ差出、 太閤今忠助を泰平寺に被召御目見、且聽悉、腰津津為被仰付由、左候儀、日向路之方ハ四月六日、秀長式拾万騎にて高城・高窪之陣ニ被討入、高城地頭山田新助有信等堅固ニ城守いたし能仁、然短京勢之先陣宮部再拜坊等、万五千騎にて、根白坂ニ陣相立、同十七日、 貫明様、松輪様式万餘騎にて都於都志彌より御出陣、根白坂御合戦利あらず、二部次郎忠勝等三百余人戦死ニ付、都於都志彌引陣候處、高勢木實上興山、色色御守昭秀等御陣江京調、和平被勸勤ニ付、御許容被為代、同廿一日、伊集院右衛門大夫忠徳と平野六郎左衛門政友を入質として、木食上人江被付違、其時山田新助も高城致下城、則人質として山田千代太郎後長兵衛等、喜人部式少輔久造・平出太郎左衛門用事、木田内蔵元親孝等を桑山修理亮陣所ニ被遣、留御安堵之思存ニ候處、同五月二日比、太閤川内江為被討入事初而被開台止、俄ニ北郷一義・喜入撰津守季久、伊集院下野守久治、木田下野守親貞・鎌田出雲守政近等を御前へ被召寄せ、一本子之御旨味にて、一雲ハ是非在所庄内へ御越、被逐、戰御開運可然と違而被申上、季久・政近・親貞等ハ、太閤川内迄於被致下向者、城上大勢罷罵為込為討入旨、今夜中必御出立、太閤之前ニ御差出御御服可然、秀長之和平も心中ハ難計と為知候方も有之、智略ニ被為兼候者殘念至至と申上、其時御出立、 貫明様若鹿尾江、松輪様若鹿野江被為相、北郷一雲も御見込者御供にて、返々庄内江御光輝被相願候得共、御陣人不被為在、瑞嶋越にて地見江御御備城、即川内江御出立と聞得候得

共、御供之軍衆も在所く、三罷越、御供衆頓々無之、御老中喜入季久、町田久倍、伊集院久治等諸士纒七拾人計被召列、同六日、伊集院迄御越、御母章御寺吉意院にて御制齋、罷伯棟比磨野、と御改名、左候而御出被遊も夫九等迄失せ、御興可拜人も不能、伊集院榮安藤左近、春口十左守、中馬十郎左衛門、市米豊前守、大迫佐渡守、上村宮内左衛門、河添千助、小田原但馬守等御興を奉拜、同八日、泰平寺江御參詣、佐々陸奥守成政、堀左衛門佐秀政等取成にて、墨呂之外被為通被、仰出、御船被為召、一主門被為人候、番人御供を為差留出、然其御大刀持川上左近將監久辰是非と申建理こ為通出、然者季久、久倍、久治等ハ可罷通旨被仰出、皆罷通、貫御様白洲三御差出御拝伏候、太閤よりは江く、と御意、縁組迄被為進候時、義久惣勤之主、腰之廻淋敷池、御自身被為帝候御腰物入小三御差、手口御波被為賜之、且御小袖も御掛領、左候御御蓋相立、其時此酒可被召上哉、御賢之心被浮候、太閤様三其儀を被為察、蓋事何之酒を不

及盛と御意有之、別而、貫御様も御感服を被遊御事之由、其上要九日、陣座一圓之御朱印度御頂戴、其能御供罷任候客人季久等も御前へ被召出、何れも御小袖一重と、拝領、且御子口御茶迄被、故等者此度久於致列者様三可切服を存、義久後等三日を能可被懸、我者左様之節可切服者、一人も無之と、殊之外御感為被成由、尤此時分御老中伊集院右衛門太夫忠棟、平田真澄守光宗、本田下野守親貞、鳩澤園書頭忠長等も迫々御日見為被仰付由、又兵衛役者野村兵部少輔良綱、御陣備長寿院源淳、御右筆八木越後守昌信等も被召列由、左候而右治部少輔二成鹿兒島三差入、龜舟様三人質御差出候様被為差候、直三京來佐々孫十郎、平塚三

郎兵衛を御連三被遣、依之同十九日、本田下野入迫、平野丹後入迫等御供三て御出立、伊集院江御一宿、同十七日、泰平寺三御參詣、御拝領物等有之、直三、太閤より伊地知右京亮忠重、原田伊予守、森輪丹後守重

長谷場筑後守神尾等江御拜一宛拜領にて、大坂迄之御供被仰出、同日御興船、輪取安泊船奉行として川内御出船、本田、平野等者御取にて奉別、不及落渡者無御申由、左候而翌十八日、太閤泰平寺より平佐城に御陣を被為移、夫より山崎城三被為入、又鶴田城三御陣を被移、三日程御滞留、是より以前、松輪様八五月初方日向路より飯野三御城被為在、金右様御方と籠城之手配等被御通、人來院衆之城候間、典禮征久被差籠度、真幸、菱刈若日州筋衆之任置も候間、一人手強可被相防御手出可為肝要、那答院者金吾察間三可持對と之事ハ乍承、所計三圓ハ少勢候平、伊集院肥前守等被差送可然、飯野ハ隨分手強御守申、乍然軍容杯にて於攻寄者、城懸候間可及大甲、庄内方江重畳被為頼事可為第一、今迄ハ味方と相聞得候、彼は御賢慮可日出度、忠棟ハ從日州出船之由、何方三謀必候成、預不度認察候様三使罷懸、関白様江御差出之等と承、是ハ誠二一人者、孰而者福智三河守剛石出治部少輔之間一人置二被為留置、御指出候様御御石可為肝要、返々も大事三候条、御指出不被為在內、能々御立御可為肝要、尤此度日州於御安堵者、宮崎又者高原迄も崎崎江可有御拝進御折念可被為在儀肝要思召趣之御被密致、同七日、松輪様飯野より本田下野守迄被遣置、其後右次第御相平被為語察事御聞及、同十九日、松輪様三茂野原城三御差出、秀長三御面談、即人質として赤塚三石前門、佐谷田寛右衛門を桑山修亮陸奥江被遣置、左候間、太閤鶴田城三御補當之時

分、同廿六日此、一唯様と御同三て御參上、太閤御日見相濟、此日大隅國御掛領、其内肝付一郡ハ忠棟無親疎被思召、最前より為被下置陸之御朱印御頂戴、一唯様、名諸縣郡御掛領之御朱印被為賜之、白其御陣を曾木城、被為移、此時等之城關土金吾殿久藤津内を被為入、大隅之軍を九尾之嶺嶺、人目野陣浦陣、二尋參被政、乍漸宮木三御寄城、五ヶ日程御滞留、然

知忠元候者此より以前大口三城滅にて、菱刈表伊知知、備後守軍康、同子民部少輔重賢、本脇三石衛門祐吉等、其外大軍之軍衆ハ不及甲、庄内表又ハ忠有忠義間越後守宗清、土持大膳亮禰家、二階守阿波守、等有志衆三申渡、大口二楯能可運防戰手配等概三指置、大軍之京來數月之連陣、兵損尽果候事を能取、忠元使者を以、一儀を細川幽齋陣屋三差懸、京勢根迫及困難と承及、必是を被負せ、我大口三御寄被助忠職、隨分御会尺可仕と為申遣由、然者兩所を初京勢一誠感激仕、太閤三志被申上、太閤も忠元之大膽三者別而為被為器事之由、左候伊集院忠棟、石田三成を致業内裏刈三弄間、木城より大口三致拜參間、忠元加下知鉄砲打掛を防候、故等忠棟を不見知哉、暫相止候様中參候故、出陣及面談、然者、貫御様、松輪様最前御和禮被致、自分を入質三初考より被差遣置、龜舟様上之、一郎様も歸質とて歸差出被遊然間、必忠元も下城可仕召為承候被得共、忠元合点不仕、此中、前も相防者懸之者懸男子も同然、夫故京勢統然及難儀事聞取候間、城下三寄せ付、戰計聯事胸中三有之儀、必々此御賢見可被申と、防戦、因三相定中、承引不仕、忠棟、三成も難及力三先引去候、同廿四日、太閤も御馬を被為出、先勢宮木之天京か足迄着陣、洪水之故川若未渡候、貫御様よりハ新納右衛門佐

宇日梓山覚書

○中川郡宇日山史蹟考
神戶大学文学部日本史研究會

梓山之覚書

- 一梓山東西へ長し、園見峠より豊後杉日向杉八丁ノ方也、
- 豊後杉日向杉八丁より八戸へおり飯尾筋二有、
- 豊後杉日向杉ノ間、式拾四町程也、
- 豊後杉日向ノ峠迄拾二町程也、同所二足ノ馬場八大杉
- 六七町町見ノ方、
- 石合わり二谷迄拾町計、

- 一わり二谷長谷のあかり立くる上峠まで拾七町程也、
- 長谷にミそ川有、すがが谷へなれ出る也、
- 一黒十峠合城之越ノ二辻迄拾町計、
- 一城ノ越合井ノ川がたをノ芭里橋迄八町程、
- 一梓山日向ノ内八口村ハ巴ノ方、梓山ノ下着ノ在所也、
- 一此道芭里下計、

- 一梓山日向之内ト赤村牛木ノ方也、此道芭里下計、
- 一梓山日向之内志いや村木ノ方也、此道芭里合分計、
- 一梓山日向之内上赤村甲ノ方也、此道式里計、
- 一梓山日向之内桑原嶽甲ノ方也、桑原村ハ西ノ方也、
- 一此道三里計、

- 一梓山日向ノ内藤河内村西ノ方也、此道五里計、藤河内嶽ハ甲西ノ方也、
- 一梓山日向之内木浦も西山も成ノ方也、梓山木浦迄五里也、
- 一梓山日向之内原なせ村ハ成ノ方也、此道四里下計、原なせノとや山ハ西ノ方也、

- 一梓山日向ノ内田代村ハ成ノ方也、此道三里計、
- 一梓山日向ノ内蔵小野村ハ成ノ方也、梓山日向へ下着ノ在所也、此道二里計、
- 一梓山日向ノ内田野村ハ北ノ方也、梓山さかり村へ行下着ノ在所也、此道三里半計、
- 一梓山日向之内すがが谷ハ成ノ方、梓山すがが谷之古屋敷迄式拾七八町計、上赤村へくすの木峠を越しすがが谷を通り長谷へ出る道有、
- 一梓山日向之内きり島村ノ内山田成ノ方也、此道芭里半計也、

- 一梓山日向之内城ノ越ノ古城ハ子ノ方也、梓山田野村蔵小野村へ下申候二辻也、
- 一梓山日向之内駒なき峠ノ方也、宇日之内中津留村合蔵小野村へ越え峠也、峠さきふねと云城山あり、山のいたきせばし、薩摩もの打入二年巳前ニ岡ノ城合はり番を置候所也、此道三里、
- 一梓山日向之内ふくが嶽ハ卯ノ方也、此間式里下計、梓山合道なき在所なし、
- 一梓山日向之内惣太郎村東ノ方此間式里計、是も梓山合道なし、
- 一梓山日向之内屋が嶽ハ寅ノ方也、此山ハ東八口河内嶺也、西ハ豊後ノ内御領分也、此間二里計、是も梓山合道なし、
- 一梓山日向之内大原村ハ丑ノ方也、尾か嶺をこす道ノ下着也、此間四里半計、
- 一梓山日向之内内田村、朝日嶽ニ云城山止ノ方也、薩摩もの打入ノ年持山也、山ノ頭せばし、
- 一梓山日向ノ内千束村ノとび山ノ古城ハ子ノ方也、薩摩もの打入ノ前合はり番を置候所也、此道四里計、

梓山近辺日向合豊後へ越えつゝ道

- 一日向之上赤村合宇日ノ内桑原越ニ道有、荷馬ノ通る道也、此道合梓山へも山原村ハ大杉迄式里半計、
- 一同上赤村合梓山之内長谷へ出る道有、舟わたりノ川有、長谷合上赤村迄道芭里半、荷馬ノ通る道なり、上赤村合此方御領分峠へ出、すがが谷を通り長谷へ出る也、
- 一同くづわ村合此方御領分惣太郎村へ出る道有、但から道也、
- 一同原か内原が嶺越ニ道有、宇日ノ内大原村へ出る道也、荷馬ノ通る道也、此屋が嶽ハ有馬嶽領分とこの方御領分と領分三界也、森市ニ三郎坂領分も少山ノ尾筋ニてさかふ也、宇日ノ内大原村合日向之内原か内村迄三里計、此原か内合あかたへ出る道筋竹のくし越木道也、
- 一又川内通りくづわ村へ出てせ口村に而竹のくし越と出合申也、荷馬も通る道也、日向ノ八口村式里行て野嶺と云村にてこの原か内通りノ道梓こしノ木道ニ出合也、
- 一日向ノ佐伯と境ノ山ノ出さき海はた迄続也、此でさき梓山那原ノ方之由也、日向ノ佐伯へ越え道三筋有之由也、此道筋、
- 一日向ノ加ち地村合さきノ内赤木村仁田原村へ出るから道也、
- 一日向ノ内三河内村合さきノ内かた、村へ出るから道也、
- 一日向ノ内宮ノ浦合さきノ内まるいちび浦へ出る道有、寸馬ノ通る道也、
- 一右口向合豊後へ越え道筋共梓越ニ増たる道ハ無之由也、
- 一同ノ御城合梓山ハ辰巳ノ方也、梓山ハ八御城成ヌノ方

也、岡ノ御城分あづき山ノ豊後杉定拾四里也、此宅里
枕立所、

壹里 草深野村

式里 諸方ノ下白在村

二里 川子庄村ノ内
あざりかせ

四里 ころしの村

五里 松が平

六里 奥高村

七里 松原ノ坂下
あざりかせ

八里 寺口ノ村

九里 小野村ノ内
松原

拾里 さかり村

拾一里 重岡村

拾一里 梅木山之内

拾二里 わりこ谷

拾四里 井之川がたを

拾三里 ありこ谷

拾四里 梓山豊後杉

一梓分あがた有馬殿居城ハ巳午ノ方也、豊後杉分あかた
ノ城迄七里也、あかたさ、野迄七里也、此さ、野村
ハ有馬殿と秋ノ月殿との界也、耳川令宅里余あかたノ方
也、右梓ノ大杉分あがたノばくろう町まで七里ノ宅里
枕立所、

大杉令宅里 八里ノ内
八戸ノ内

二里 八戸ノ内

三里 抄ふぶ村

四里 中角ノ内

五里 すさ村

六里 むしか村

七里 あがたノばくろう町

一梓分あがたの森市三郎殿居城ハ丑寅ノ方也、此道拾七
里、

一梓分あがたの森市三郎殿居城ハ子丑ノ方也、此道拾七
里、

一梓分府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七
里、

一梓分府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七
里、

一梓分府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七
里、

一梓分府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七
里、

一梓分府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七
里、

一梓分府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七
里、

一梓分府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七
里、

一梓分府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七
里、

一梓分府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七
里、

一梓分府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七
里、

一梓分府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七
里、

一梓分府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七
里、

一梓分府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七
里、

豊後国古城嶺并海陸路程

○ 大分縣志十志料集成 系誌

稲葉能登守領分

(大野郡野津院古城)

一野津院之内、垣河内村令東ニ當りて、道志甲廳ニ、ほ
しがうと云山有。高さ坂之内二町、上二而場之広さ、
三拾間余、横八九間有。此山、岩立ハへ山也、東西
三二口有。山上ニ水なし。谷ニ水有。四方ニ高さハへ
山有。此山、古シハ百姓等取上り申候場の跡也。白村
城下今五里、本道筋、野津院市村令ほしがう山ハ、辰
巳ニ當りて式里下。谷逼せつしよ。但、麓迄ハ牛馬の
通道。

(大野郡二重松尾古城)

一三重之郷之内、松尾村古城之跡、山上へ之坂之内、壹
町半。北口ハ丑寅之方ニ有。南の方ニ庚口有。此山小
松山也。上二而、場之広さ、長さ東西二三拾間、南北
へ拾四間、山上ニ水無し。谷ニ水有。東西山かさ有。
本道筋、三重市場村ヨリ平地式拾町有。白井城下今ハ
六里。但、牛馬之通道。

(戸次利光城)

戸次之庄之内、利光村古城之跡、松山也。麓今山上迄、
坂之内式町半。上二而場之広、長さ拾五間、は、拾宅間、
北二本口有。南の山尾続きニ、裏口有。左右山縁也。
麓今二町半、西の方ニ川有。此河下へ八町さかり船渡
り也。川のハマ六拾間。但、細川肥後守領分、竹長村

へ越。利光古城迄、白井城下今四里。

毛利市三郎重分

(古市、田市村古城)

一古市郷之内、田市村ニ古城跡の山有。坂之内二町式拾
間。木川口理の方ニ有。小柴山上之場の広さ、北南三
拾間、西東式拾宅間有。南北尾縁也。山之上ニ水なし。
谷ニ水有。城下より陸路二拾町。但、田市村令未之方ハ、
中川内懸正領分みあかり村界め迄五里。牛馬の通ひ也。
此間、二ばんざう川の瀬、広さ四拾間、深さ式尺、其外
溝川之瀬五瀬有。

中川内懸正領分 大迫筋

(緒方、柏野城)

一右邊筋二緒方之内、柏野切寄山有。岡城分那方法卷
里式拾五町。麓今山之高さ六拾間、内ニ石立も有。西
北ハ大川を渡りもなし。上二而場之広さ、南北ハ百拾
間。東西ニ百拾五間。在案ハ軒有。少ハへ山也。山上
ニ水なし。戌の方、山のこしニ水有。又、午ノ方ノ谷
ニ水あり。南ニ入口有。牛馬かよひあり。南ニ高さ山有。
切寄山よりさし渡り至町有。大屋迄式拾五町。能登守領。
岩口川境迄式里式拾七町有。

(小牧城)

一岡所迫筋之内、小牧切寄山有。岡城分那ノ方法法三
里半。山之高さ麓今西の方五拾五間。北ハ川より七拾

式間、東南八六拾間、上二て場の広さ、南北五拾間、東西四拾半。又、三間之所も有。南二入口有。牛馬の通ひ有。東西北八六拾間、南東七拾五間。西ノ方二高き山有、さし渡し三町、卯辰ノ方二も高き山有。さしわたし志町八尺。小牧山合大迫迄、八町有。稲葉能登守領。岩戸川地迄巻里二町。

(大野城)

石之通筋二、御嶽と申、神山有。岡城合辰ノ方道法五甲。南ノ方谷ノ山之上迄三町、石立也。西北高さ五町。又、七八町之処も有。上二而場の広さ、東西志町拾間。南北六間。内二少堀切有。東西二入口有。牛馬かよひあり。山上二水なし。北の方、山の高し二少たまり水有。谷二水有。と、ろ村道筋迄式拾町有。

(大野、城)

石之通筋、一万印村之内二、小無礼と申切寄有。岡城合寅ノ方道法式里半。高さ二拾五間、此内二岩立拾間程有。上二而場の広、南北へ七拾五間。東西拾二間。腰二長さ七拾間、横四間の跡有。北の方地続入口有。西南川也。広七間、深さ尺五寸。又東の方、川広六間、深さ志尺諸々渡り多し。牛馬の通ひ有。南の方二高き山有。其間七拾間ほど有。山上ハ水なし。谷二水有。い二しへ百姓等取あかり中場の跡也。

(大野城)

石之通筋、田原村之内、鎌田と申、平山有。岡城合寅ノ方道法七里。東西北八六拾間、渡りなし。川合山の上迄、高さ四拾式間之内、拾間岩立也。上二而場の広さ、東西五町式拾六間、南北式町二拾間。西の方二入口有。は、

拾五間、入口の左右ハ谷。北ノ方ノ谷拾四間、南ノ方ノ谷拾式間。山上に水なし。北の高しに水有。細川肥後守領分。柿ヶ迫村境、大迫迄廿八町拾八間。稲葉能登守領。城ハ籠の川半分わけ也。

(大野、城)

石之通筋、北村之内、鐵嶽と申山有。岡城合丑の方道法四里二拾宅町、山之高さ籠合九町拾間、上二而場の広南北六拾間、東西式間、東の方二入口有。牛馬の通ひなし。鐵嶽南の方二熊のかくらと申山有。高さ鐵嶽と同高。山上二水なし。西の方の腰二、三町下り。水少有。標所合田中村大迫迄、式拾町。細川肥後守領分。矢野原村迄式里有。い二しへ百姓等取あかり中場の跡也。

(直入、城)

石之通筋二木無礼と申古城有。岡城合酉ノ方、道法志里二町。山之高さ北ノ方拾式間、岩立也。是合トノ谷深さ志町式反有。市の方道法高さ拾五間、上之場の広さ、東西三町四拾三間、南北式拾七間。又八拾八間、拾五間之所も有。東の方二入口有。牛馬の通有。山上二水なし。北の方籠六拾九間下二少し水有。籠ハ大迫也。古しへ百姓等取あかり申出申仁候也。

(直入、城)

石之通筋、朽網郷之内、山之城と申切寄山、岡城合戌ノ方道法四里半。高さ二拾間、東西の方ハ岩立也。北ノ方ハ谷小川也。広さ志町間程。又、式間、二間の処も有。深さ五寸、又ハ九寸の処も有。谷之深さ志町四反有。

木山也。南ノ方谷也。深さ志町三反。上二而場の広さ、東西三町四拾間、南北四拾五間。西ノ方二入口有。牛馬の通ひも有。山上水なし。谷二水有。東ノ方ハ尾続堀切有。深さ二間、広拾四間。西ノ方二今なり山と云、高山有。切寄山との間、三町有。い二しへ百姓等取あかり中場の跡也。

小道筋

(直入、城)

石之通筋、門田村之内、つかむれと申切寄。古城有。岡城合未ノ方道法志里二町、高さ南ノ方七拾間、北ノ方八拾間。但、なれ山也。東西石立七間。入口西ノ方二有。上二而場の広、東西三拾間、南北拾九間。山上二水なし。谷二水有。南の方二式二間下り、尾越有。広、東西六拾五間、南北拾間。是二も山上二水なし。

(直入、城)

石之通筋、神原村之内、小松尾切寄有。岡城合南ノ方道法四里拾町四間の高さ南東七町。木山西北ハ、なれ山。其内二岩立四間有。上二而、場の既と東西へ二間半。南北四間半。入口未二有。山上二水なし。谷二水有。南二祖母嶽と云高山有。

細川肥後守領分

(直入、城)

一回所町村ノ牛末之方二古城有。籠合山之高さ式百間。

又ハ百八拾間、又ハ式百四拾間之幾も有。上二而場の
広さ惣百三拾壹間、横拾八間有。入口三方二有。一口
ハ巳ノ方、一口ハ戌ノ方。此二口人馬の通ひ有。一口
ハ寅ノ方、一口ハ辰ノ方。此所人馬の通なし。山上ニ水式ケ所
有但少ク之出水也。大道今八町脇、百姓等茶屋六軒有。
二口之外ハ漣輪立岩なり。

(大分、城)

一野津原村今西戌ノ方ニ野々台と申所有。之山の高さ麓
合瀧迄町式拾間、長さ四百間、横の広さ、広き所百間、
迫き所式拾間。一口有。戌ノ方午ノ方ニ向、四方岩
立也。但牛馬の通ハ有之。家屠八軒有。大道今拾五町
式拾間脇也。

(大分、城)

一阿所今坤ノ方ニ榊野山古城有。松山麓より山の高さ
三拾間。上二而場の広さ、壑式口四拾間、横八拾六間。
四方岩立也。西ノ方ニ向ひ人口有。山上ニ水なし。牛
馬の通ひ有。大道今四拾五間脇也。古、百姓等取あか
り申出申伝候。

(大分、城)

一阿所今巳下之方ニ鬱ヶ台と云山有。高さ麓合式拾八間、
上二而場広さ壑百四拾間、横拾九間。四方岩立也。入
口北ノ方ニ有。山上ニ水なし。岩四間下ニ水少有之。
大道より四町脇也。いニシへ百姓等とり上り申場の跡
也。

(大分、城)

一補葉能登守領分、口次庄利光古城より志里西の方ニ

一阿所と申山有。山の高さ、麓合拾四町四拾六間。上二
而場広さ壑反五畝、十手築廻し申跡有之。上ノ惣曲輪
百四拾間。口式方有。惣ツハ坤ノ方ニあり。一ツハ
卯辰ノ方ニ有。峯々東ノ方式町下ニ式間、二間之小池
在。之深さ五尺。但出水也。いニへ百姓等、取あか
り申出申伝也。

(海部、城)

一佐賀間今申西之方ニ扇帽子城山有。高さ麓合東西口
八拾間。同北方より四拾四間。俱、山麓同南ノ方式百
間上ニ面、長さ壑町式拾間、横広さ壑七間、六間、惣
曲輪百八拾式間。人口一ツ有。内壑ツ寅卯ニ向。壑ツ
ハ申西ニ向。山上ニ水なし。谷ニ水あり。本道今拾町四
拾間。山上へハ牛馬のかよひなして、麓迄ハ牛馬のかよひ
あり。昔、乱之候、百姓等とりあかり申出申伝候也。

一伯殿酒

(大分、城)

一阿所敷合木ノ方曲村迄七町。此村之度夜之脇ニ守岡と
云古城有之。高さ坂之内五拾五間。上の広さ東西へ式
町、南北へ壑町五拾間。作場也。山のひら所々ニも作
場有。北ニ道有。東南北ハ牛馬の通よし。山の上ニ水
なし。北の方谷ニ水少有。此山南のひら少ハ松平持監
領分。

松平持監領分

一阿所今申西之方ニ扇帽子城山有。高さ麓合東西口
八拾間。同北方より四拾四間。俱、山麓同南ノ方式百
間上ニ面、長さ壑町式拾間、横広さ壑七間、六間、惣
曲輪百八拾式間。人口一ツ有。内壑ツ寅卯ニ向。壑ツ
ハ申西ニ向。山上ニ水なし。谷ニ水あり。本道今拾町四
拾間。山上へハ牛馬のかよひなして、麓迄ハ牛馬のかよひ
あり。昔、乱之候、百姓等とりあかり申出申伝候也。

(遠見、城)

一同郡志門庄小浦村、東ニ當り海門寺山跡出崎有。小路
一層敷下より船路五里、陸路六里也。町、内四里山坂谷
道難所也。寺山跡の麓ニ豊前への道有。寺山の高さ海
際より山上迄、坂の式拾間、上の場の広さ、南北
へ式拾間、東西へ式拾間。山上ニ水なし。谷ニ水有。
南壑方口山の尾ツき、人馬逆有。東北海手岸高く、
巖石ハへなり。西ニ人江有。入江の長さ式百間、横ハ、
八拾間。但ひかた也。満汐ニハ、から船入申候。入江
山岸岩立ハへなり。寺山より坤ニ當り、四町五反際高
山有。丑寅の方ニも式町計間、久留橋丹波守領。頭成
山岸高山有。寺山いニシへ百姓等とりあかり申候場の
跡也。

(玖珠、城)

一玖珠郡山田郷之内、野上村みつむれ城山跡ハ小路白翠
敷下今拾三里。内拾志里山坂谷道難所也。冬大雪ニハ
牛馬かよひなし。城山、南の麓ニ日田道有。山の高さ
麓合山上迄坂の内六町。上の場の広さ、東西へ式拾間、
南北へ拾八間。山上ニ水なし。中段の谷ニ水あり。城
口原口より口中西ニ向。山の中段迄牛馬かよひ有。城
山より南東の出ひきし麓ニ入居有。西北ニ七八町ほど
つ、隔、高山有。みつむれ山より丑寅ニあたり拾八町
へだて、右田村共谷山有。

(玖珠、城)

一同郡山田郷之内、野上村小倉ヶ嶽中段の尾崎ニ城跡有。
小路口原敷下今拾四里三拾町、内拾式里三拾町山坂道
難所也。冬大雪ニハ牛馬通ひなし。此山西の麓ニ、肥
後の道有。山の高さ、麓より山上迄坂の内、八拾間。

上の場の広さ、東西へ七拾八間、南北へ拾八間、山上
二水なし。谷二水有。東一方一、牛馬かよひなし。南
北岩立ハへ也。西二川有。川ハ、七八間切岸高く、人
馬渡りなし。川むかひ志町五反隔、高山有。北二人所有。
田地有。小倉餘分坤二町三反隔、田野村屋敷城跡有。

(同郡、城)

一 同郡飯田郷之内、田野村乾二当り、屋敷城跡有。小路
口屋敷下より拾五里。内拾三里山坂谷道轉所也。冬大
雪ニハ牛馬かよひなし。屋敷城より坤二当り、志平隔
田道有。城跡高き、谷そこより上迄志町。切岸也。
上の場の広さ、東西へ式拾四間、南北へ拾二間。上二
水なし。谷式拾間ト二水有。東地つゝき。一方口。但
牛馬かよひなし。此道ハ、志岡、長式町五反、両脇
切岸岩立ハへなり。南北西巖石ハへなり。西より北へ
廻り、谷そこ二小川有。両岸岩立人馬渡りなし。城跡
四方二式三町程つゝ、へたて山かさ有。

(政入、城)

一 政入郡田北村之内、橋木村分拾九町隔、西成二当り、
松むれ城山跡有。小路口屋敷下今七里三拾町、松むれ
山東二志平九可ハ反隔で、石合村二肥後大連有。但難
所也。此道筋之内、溝川二ヶ所有。松むれ山の高さ谷
そこ今山上迄、坂の内四町式反。上の場の広さ、東西
式拾八間、南北へ六間。山上二水なし。谷五拾間下二
水有。東の尾続、六七町隔で山有。南北西谷々岩立ハ
へ也。西の麓二小川有。川ハ、式三間。但岩川なり。
川むかひ六七町隔で、日根野織部止領山有。松むれ
山い二へ百姓等とりあかり中候場の跡也。

(大分、城)

一 大分郡之内、阿南之庄藤原村乾二当り、城山跡有。小
路口屋敷下より五里程。内式里ハ山坂谷道轉所也。城
山跡今辰巳三当り志原隔で、肥後大道有。山の高さ
麓今山上迄、坂之内志町、上の場の広さ、東西へ式拾間。
南北へ拾間、山上二水なし。南を方口、但巖石堆積なり。
牛馬かよひなし。三町ほどへたて、高山有西東北三方
岩立ハへ也。東北の麓二川有。川ハ、拾町拾五間下二
面、人馬渡り有。川むかひ八細川肥後守酒大藏村也。
城山跡より五里二当り半隔、雄城村城跡あり。

(同郡、城)

一 同郡藤田庄、雄城村城山跡有。小路口屋敷下より式里
有。城山南の麓ニ肥後大道有。山の高さ麓より山上迄
坂之内志町、上の場の広さ東西へ式町五反。南北へ式
町四反。山上二水なし。谷へ拾八間下り水有。木口坤
へ向ふ。志方人馬道有。南五町隔、津留へ落る川有。
川ハ、拾五間、人馬渡り有。川むかひ中川内厩止領中
村也。北八福妻能守領、拾式町へたて津留へ落る川
有。川ハ、志町、人馬渡り有。東西二八町づつ、隔。
福妻能守領有。八輪田村、宗方村、殖田、市村なり。
東南の麓二人原田地有。拾町半の内二山なし。

木下藤殿助領分

(遠見、城)

一 山口村之内、古城山之跡、山之上へ麓谷坂之内式町、
三方ハ尾続、山之上迄牛馬道有。北の方ハ瀧迄、牛馬
道なし。但藤竹山也。山ノ上二水なし。麓二水有。上

二面、場の広さ長さ、東西へ式拾式間、南北へは、十
三間。中小倉有。本道筋今古城の麓、平地の間志町。
和山口居所より式町半。麓之北二川有。竈さ四反之内
外、深さ式尺斗。石口出筋一筋川也。

(山口城)

一 古野渡より山口古城の麓、日出道迄、同川筋也。此川
名も無之。

筑紫右近将領

(遠見、浜脇城)

一 同村今米ノ方ハ、浜脇村之内、湯山占き要害有。先年
之大地震ニ嶺残存、南北二式拾間、東西五間。但表口
ハ南、裏口ハ北也。山上二水なし。北の谷二水有。水
の有所迄式町坂也。但日照ニハ水なし。此山より未申
二当り、かさ山有。此間五拾四間、西方二もかさ山有。
此間式町。但深さ谷有。人馬の通ひハあり。東の方ハ
谷田地也。人馬の通ハ白出也。別府村迄九町。此間、
道ニ通有。何も坂道也。

久留嶋丹波守領分

(玖珠、城)

一 玖珠郡之内、久留嶋丹波守在座、森村分戌亥之方二、
角牟礼山古城有。東西北ハ石立、高さ百八拾間。又ハ
百間程南ノ方切岸石垣、丹波守屋敷今山上迄、高さ
坂之内六町六間、南二口有。内三町三拾六間ハ牛馬の

通ひなし。本丸広き東西六拾間、南北五拾五間、二ノ丸東西八拾間、南北四拾四間、三ノ丸東西式拾五間、南北式拾七間、山上二水有。東の方鏡二小川有り、向方二壘前園へ出る大道筋有。

大道筋

(玖珠、城)

一右之道筋、内匠村今式町西ノ方二多賀山と云柴山有。岩立高き東西南ハ五拾間余。此ノ方二山のかき尾続有。東二口有。坂之内宅町、牛馬かよひなし。上二面場の広き長さ南北へ三拾間、東西へ七八間、山上二水なし、麓二水有。此山いこしへ百姓等取上り中場の跡也。

(玖珠、城)

一右之道筋、日出牛村二山野上と云ハ山有。四方岩立。辰じノ方二口有。坂ノ内宅町半。牛馬かよひなし。高さ八拾間程、又ハ五拾間の所も有。山上二而南北へ式百四拾間程。東面へ谷柄指渡し九拾間程、谷の方二谷有。上二面場広き八間、又ハ三間程つ、谷の深を四拾間余。此谷二水有。麓二西今北へ流山川有。広き五間、深き一尺五寸。東ノ方二山のかさあり。いこしへ百姓等取あかり中場の跡也。

御城納分

(日田、城)

一 日田郡之内、夜間郷城内村之内、長山古城、前者、石

川土殿類居城。高さ拾四間。上二面場の広、東西三拾二間、南北拾七間之場有。此場より三間下、北二東西九間。南北式拾四間の場有。此所二水有之、此麓二東西七拾間、南北式拾間之場有。城の廻り三百七拾式間。同四方二堀有。広拾式間、深式間、南二邊有。此山の麓今八拾間。南二小川有。井渡り多。此川二添て町有。此城より東二町り、高城と申山あり。道法六間、又北西二山有。此間七八町程御座候。

(日田、城)

一 日田郡石井郷之内、庄手村之内、隈山古城高さ拾式間。上の場、東西二拾式間、南北九間。此場今三間下、馬場有。東西五拾間、南北八間。此場今四間下二東西七拾間。南北五間の場有。城の廻廻り三間也。此山の辰巳より大川流出、城の麓二間、山を中二西。南北二別城今拾五町下二而落相申候。此城今北川は、かち渡り多く、南川ハ、かち渡りなし。城より北川を隔、道法五拾間有て町有。此城初より、筋牛馬の通有。長山と隈山との間、道法拾八町御座候。

一 日田郡大肥之庄、中嶋村之内、ハリめと申山有。高さ町、山九分口程あり、丸式ツ有。志ツハ筑前領、志ツハ御城入之内、両山の間五拾間御座候。上の場、南北式拾四間、東西式拾間之場有。筑前領之山ハ、御城入の山今少し広見え申候。東西二道式筋有。牛馬の通よし。城の上二水少も無御座候。上今志町下茂蒸ニツて谷水少御座候。日てりニハ無芝山中候。山麓ハ東南二次第下り二有。此山より隈山・長山両城へハ式里ほど御座候。

大分県文化財調査報告書 第148輯

大分の中世城館

第一集 文献史料編1

2002年3月29日

発行 大分県教育委員会
〒870-8503
大分市府内町3丁目10-1
097-536-1111 (内5498)
